

徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡

(TOKUMITHU—MEZAKO—YOUTOKUJI)

——一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12—



1996年9月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡

(TOKUMITHU—MEZAKO—YOUTOKUJI)

—一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12—

1996年9月

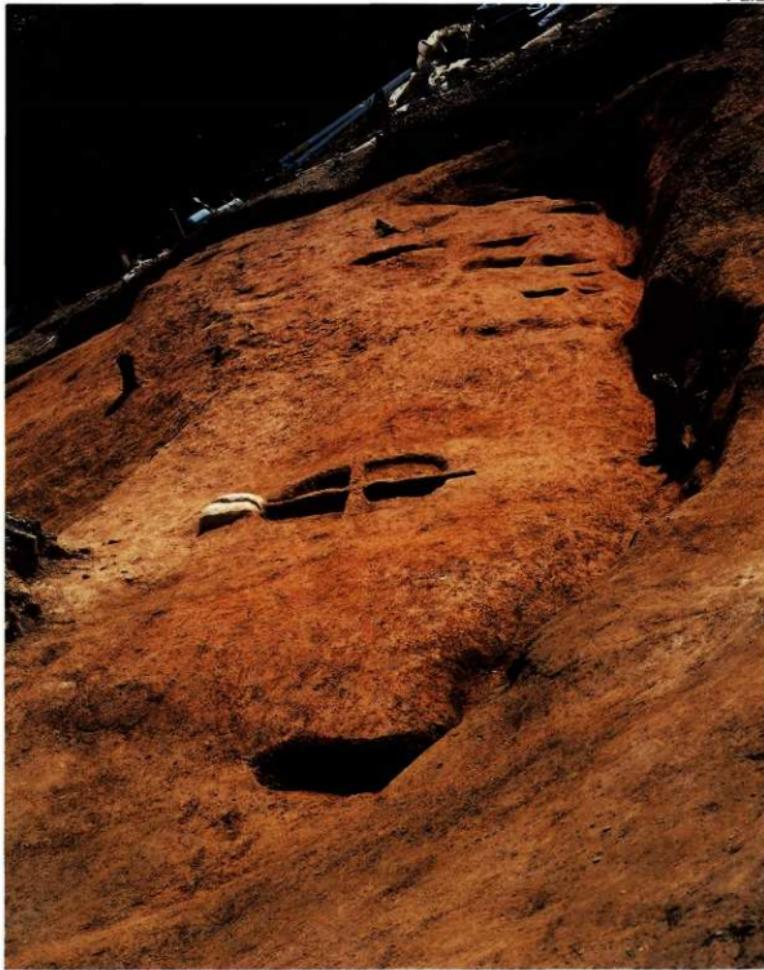
建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会



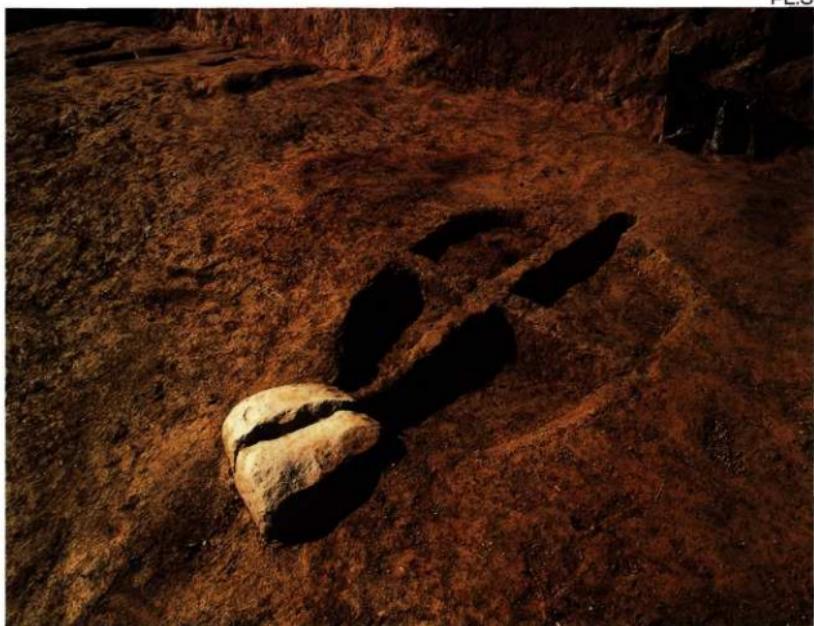
上・・・Ⅲ区全景（東から）

下・・・Ⅳ区全景（西から）

PL.2



III区第1加工段鍛冶遺構全景



上 ··· III区鍛冶遺構

下 ··· III区第1加工段遺物出土狀況



陽德寺遺跡出土軒丸瓦

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行なっています。

当安来道路においても道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行なっています。

本報告書は、平成6年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ進められることへの理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力頂いた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成8年9月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 水上幹之

序

島根県教育委員会では、中国地方建設局の委託を受けて、平成元年度から一般国道9号（安来道路）建設予定地内遺跡の発掘調査を行なっています。平成5年度からは安来市島田町～吉佐町（1～1区間）の調査に入りました。この報告書は平成6年度に調査を実施した徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡の調査結果をとりまとめたものです。

安来道路の建設が進められる安来平野一帯は、古来より文化の栄えた地域であり、数多くの遺跡が確認されています。今回調査を実施した徳見津遺跡では古墳時代後期から平安時代初めにかけての鉄の道具を生産する鍛冶を伴う集落が見つかりました。また、目廻遺跡からは弥生時代の墳墓が発見され、当時の人々の生活様式や古代の安来地方における鉄器生産の様子を探る貴重な資料となりました。

そして、陽徳寺遺跡からは中近世の寺院跡が見つかり、文献の記述を発掘により立証するという成果をあげたほか、平安時代の堤の遺構を確認することができました。

本報告書が多少なりとも安来平野周辺の歴史を解明する契機となり、また、広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高める上で役立てば幸いです。

本書を刊行するにあたり、調査にご協力いただいた地域住民の方々や建設省中国地方建設局をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成8年9月

島根県教育委員会

教育長 清原茂治

例 言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が1993年度（平成5年度）、1994年度（平成6年度）に実施した、一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
2. 本書で扱う遺跡は安来市吉佐町に所在する徳見津遺跡、目廻遺跡及び、同市門生町に所在する陽徳寺遺跡である。
3. 調査組織は次の通りである。

調査主体	島根県教育委員会
事務局	文化課 幸沢卓嗣（課長）、山根成二（5年度課長補佐）、野村純一（6年度課長補佐）、中島 哲（文化係長）、丸 宏治（主事） 埋蔵文化財調査センター 勝部 昭（センター長）、久家儀夫（5年度課長補佐） 佐伯善治（6年度課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、田辺利夫（島根県教育文化財団嘱託）
調査員	埋蔵文化財調査センター 調査第2係
総括	ト部吉博（埋蔵文化財調査センター主幹）
徳見津遺跡	渡部 裕（教諭兼主事）、岩橋孝典（主事）
日廻遺跡	福島 浩（教諭兼文化財保護主事）、椿 真治（主事）、山代 徹（臨時職員）
陽徳寺遺跡	斎藤 勉（教諭兼文化財保護主事）、大本公良（教諭兼文化財保護主事） 丹羽野 裕（文化財保護主事）、深田 浩（主事）
調査指導	山本 清（島根県文化財保護審議会会長）、池田満雄（同委員）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、河瀬正利（広島大学文学部教授）
遺物整理	青戸房子、石川真由美、加藤往子、門脇卓子、熊谷妙子、米海順子、佐伯明子 佐々木孝子、佐々木順子、砂口光枝、陶山佳代、高橋啓子、田中路子、野坂栄子、 原 英知子、東森 薫、三奈木康江、三輪スミ子、守屋かおる、山根由利子
4. 発掘作業（発掘作業員雇用等）について	は、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、社団法人中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。
社団法人 中国建設弘済会島根支部	布村幹夫（現場事務所長）、中村弘己（技術員） 吉岡勇治（技術員）、勝部達也（技術員）、原 博明（技術員）、与倉明子（事務員） 松本佳子（事務員）
5. 大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、川上 稔（出雲市教育委員会）、北野 重（柏原市教育委員会）、寺村光晴（和洋学園校地埋蔵文化財調査室）、二本牧宗（陽徳山常福寺）、村上恭通（愛媛大学）の各氏には報告書作成に有益な助言を頂いた。また、角矢永嗣氏には現地調査において協力を頂いた。	

6. 採図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。
7. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。
8. 本書で使用した遺構記号は次の通りである。
- P・・ピット S I・・堅穴住居跡 S B・・掘立柱建物跡 S K・・土坑 S D・・溝状遺構 S X・・その他
9. 本書に掲載した遺物の実測、遺構・遺物実測図の浄写、版下類の作成、遺構・遺物の写真撮影は以下の者が行なった。
- 徳見津遺跡
- 実測・・岩橋 浄写・・陶山、岩橋
版下類作成・・石川、岩橋、熊谷、佐々木順子、佐々木孝子、陶山、高橋、田中
写真撮影・・福島、渡部、岩橋、稻田和久（埋蔵文化財調査センター臨時職員）
- 目廻遺跡
- 実測・・土器類・・岩橋 石器類・・丹羽野 浄写・・陶山、岩橋
版下類作成・・石川、岩橋、熊谷、佐々木順子、佐々木孝子、陶山、高橋、田中、福島
写真撮影・・福島、椿、岩橋、角矢、
- 陽徳寺遺跡
- 実測・・土器類・・大本、北尾浩之（同教諭兼文化財保護主事）、深田、東森 晋（同主事）、
上河淳浩（同臨時職員）、稻田
木器類・・椿、深田 石器類・・北尾、深田 瓦類・・林 健亮（同主事）
浄写・・砂口、陶山、山根
版下類作成・・砂口、陶山、深田、山根
写真撮影・・大本、林、錦田剛志（同主事）、深田、東森 晋、田中史夫（同主事）、沙魚川聰子
(同臨時職員)
10. 本書の編集執筆は上記調査指導の諸先生及び文化財課職員の指導・協力を受け、卜部、福島、深田、岩橋が行なった。文責は次欄に明記している。
11. 本遺跡出土資料及び実測図、写真等の記録資料は、島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。ご活用を願いたい。

挿図目次

第1図	徳見津遺跡・日廻遺跡・陽徳寺遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第2図	徳見津遺跡・日廻遺跡周辺地形図	5
第3図	徳見津遺跡I区出土遺物実測図	8
第4図	徳見津遺跡I区全体図	9
第5図	徳見津遺跡II区SK01実測図	10
第6図	徳見津遺跡II区遺構配置図	11
第7図	徳見津遺跡II区SD01・02実測図	12
第8図	徳見津遺跡II区SD03・SK02実測図	13
第9図	徳見津遺跡II区SD03・SK02遺物出土状況図	14
第10図	徳見津遺跡II区SD03出土遺物実測図	15
第11図	徳見津遺跡II区包含層出土遺物実測図1	17
第12図	徳見津遺跡II区包含層出土遺物実測図2	20
第13図	徳見津遺跡II区包含層出土遺物実測図3	21
第14図	徳見津遺跡III・IV区調査区配置図	24
第15図	徳見津遺跡III区遺構配置図	25
第16図	徳見津遺跡III区上段土器溜まり1出土遺物実測図1	26
第17図	徳見津遺跡III区上段土器溜まり1出土遺物実測図2	27
第18図	徳見津遺跡III区SI01・SD04実測図	29
第19図	徳見津遺跡III区SI01・SD04遺物出土状況図	30
第20図	徳見津遺跡III区SK03実測図	30
第21図	徳見津遺跡III区SI01床面・SK05出土遺物実測図	32
第22図	徳見津遺跡III区SI01埋土中出土遺物実測図	34
第23図	徳見津遺跡III区SI02・SD06実測図	37
第24図	徳見津遺跡III区SI02・SD06遺物出土状況図	38
第25図	徳見津遺跡III区SI02床面出土遺物実測図	40
第26図	徳見津遺跡III区SI02埋土中・SD06出土遺物実測図	42
第27図	徳見津遺跡III区第1加工段実測図	45
第28図	徳見津遺跡III区第1加工段遺物出土状況図	46
第29図	徳見津遺跡III区第1加工段鍛冶遺構実測図	47
第30図	徳見津遺跡III区第1加工段鍛冶遺構金床石実測図	48
第31図	徳見津遺跡III区第1加工段出土遺物実測図	49
第32図	徳見津遺跡III区中・下段包含層出土遺物実測図	52
第33図	徳見津遺跡IV区遺構配置図	56
第34図	徳見津遺跡IV区第2加工段北半部実測図	57

第35図	徳見津遺跡IV区第2加工段S B 0 3出土遺物実測図	59
第36図	徳見津遺跡IV区第2加工段S B 0 2出土遺物実測図	59
第37図	徳見津遺跡IV区第2加工段S B 0 4出土遺物実測図	59
第38図	徳見津遺跡IV区第2加工段南半部実測図	60
第39図	徳見津遺跡IV区第2加工段S B 0 5出土遺物実測図	61
第40図	徳見津遺跡IV区第2加工段S K 0 6実測図	61
第41図	徳見津遺跡IV区S K 0 7実測図	62
第42図	徳見津遺跡IV区S K 0 7出土遺物実測図	62
第43図	徳見津遺跡IV区第3加工段第1平坦面出土遺物実測図	64
第44図	徳見津遺跡IV区第3加工段第2平坦面実測図	65
第45図	徳見津遺跡IV区第3加工段第2平坦面出土遺物実測図	66
第46図	徳見津遺跡IV区第3加工段S B 0 8実測図	67
第47図	徳見津遺跡IV区第3加工段S B 0 8出土遺物実測図	68
第48図	徳見津遺跡IV区第4加工段第3・5平坦面実測図	69
第49図	徳見津遺跡IV区第4加工段第3平坦面埋土上層中出土遺物実測図	70
第50図	徳見津遺跡IV区第4加工段第3平坦面埋土下層中出土遺物実測図	71
第51図	徳見津遺跡IV区第4加工段第4平坦面実測図	73
第52図	徳見津遺跡IV区第4加工段第4平坦面出土遺物実測図	74
第53図	徳見津遺跡IV区第4加工段第3平坦面下方出土遺物実測図	74
第54図	徳見津遺跡IV区第4加工段第5平坦面出土遺物実測図1	75
第55図	徳見津遺跡IV区第4加工段第5平坦面出土遺物実測図2	76
第56図	徳見津遺跡IV区第4加工段S B 0 9付近実測図	78
第57図	徳見津遺跡IV区第4加工段S B 0 9付近出土遺物実測図1	80
第58図	徳見津遺跡IV区第4加工段S B 0 9付近出土遺物実測図2	83
第59図	徳見津遺跡IV区第4加工段S B 0 9付近出土遺物実測図3	85
第60図	徳見津遺跡IV区第4加工段S B 0 9付近出土遺物実測図4	85
第61図	徳見津遺跡IV区第4加工段S K 0 9実測図	87
第62図	徳見津遺跡IV区第4加工段S K 0 9出土遺物実測図1	88
第63図	徳見津遺跡IV区第4加工段S K 0 9出土遺物実測図2	88
第64図	徳見津遺跡III・IV区出土鉄滓実測図	90
第65図	徳見津遺跡III・IV区出土鉄滓分布図	90
第66図	徳見津遺跡III・IV区遺構変遷図1	91
第67図	徳見津遺跡III・IV区遺構変遷図2	92
第68図	目廻遺跡調査区配置図	96
第69図	目廻遺跡I区遺構配置図	97
第70図	日廻遺跡I区S K 0 1実測図	98
第71図	日廻遺跡I区S K 0 2実測図	98

第72図	日廻遺跡 I 区 S K 0 3 実測図	99
第73図	日廻遺跡 I 区 S K 0 4 実測図	100
第74図	日廻遺跡 II 区包含層出土遺物実測図 1	101
第75図	日廻遺跡 II 区包含層出土遺物実測図 2	102
第76図	陽徳寺遺跡調査前測量図・調査区配置図	106
第77図	陽徳寺遺跡調査後測量図及び遺構配置図	107
第78図	陽徳寺遺跡 1 区基壇部土層堆積図	108
第79図	陽徳寺遺跡 1 区 S D 0 1 実測図	110
第80図	陽徳寺遺跡 1 区 S D 0 2 実測図	111
第81図	陽徳寺遺跡 1 区基壇部遺構配置図	112
第82図	陽徳寺遺跡 1 区 S D 0 1 内及び第 1 ピット群周辺出土遺物実測図	113
第83図	陽徳寺遺跡 1 区第 1 ピット群周辺出土瓦質土器実測図	113
第84図	陽徳寺遺跡 1 区第 1 ピット群周辺出土青磁器実測図	113
第85図	陽徳寺遺跡 1 区第 1 ピット群周辺出土陶磁器	114
第86図	陽徳寺遺跡 1 区 S D 0 3 実測図	114
第87図	陽徳寺遺跡 1 区第 2 ピット群実測図	115
第88図	陽徳寺遺跡 1 区第 2 ピット群周辺出土遺物実測図	116
第89図	陽徳寺遺跡 1 区第 2 ピット群周辺出土磁器	116
第90図	陽徳寺遺跡 1・2 区堤壆後堆積土出土遺物	117
第91図	陽徳寺遺跡 1・2 区堤壆後堆積土出土陶磁器	118
第92図	陽徳寺遺跡 1・2 区堤壆後堆積土出土瓦実測図	118
第93図	陽徳寺遺跡 1・2 区堤壆後堆積土出土木製品実測図	119
第94図	陽徳寺遺跡 1・2 区堤部土層堆積図及び堤底地形図	120
第95図	陽徳寺遺跡・堤の範囲復元推定図	121
第96図	陽徳寺遺跡 2 区堤上層部出土遺物実測図	122
第97図	陽徳寺遺跡 2 区堤下層部出土遺物実測図（1）	124
第98図	陽徳寺遺跡 2 区堤下層部出土遺物実測図（2）	125
第99図	陽徳寺遺跡 2 区堤下層部出土遺物実測図（3）	126
第100図	陽徳寺遺跡 2 区堤底部出土遺物実測図（1）	127
第101図	陽徳寺遺跡 2 区堤底部出土遺物実測図（2）	128
第102図	陽徳寺遺跡 2 区堤部出土黒色土器実測図	129
第103図	陽徳寺遺跡 2 区堤部出土石器実測図	130
第104図	陽徳寺遺跡 2 区堤部出土軒丸瓦・平瓦実測図	131
第105図	陽徳寺遺跡 2 区堤部出土丸瓦実測図	132
第106図	陽徳寺遺跡 2 区堤部出土漆器椀実測図	133
第107図	陽徳寺遺跡 2 区堤部出土木製品実測図	134
第108図	陽徳寺遺跡 3 区出土円筒埴輪実測図	135

図版目次

- 巻頭P.L. 1上 德見津遺跡Ⅲ区全景（東から）
巻頭P.L. 1下 德見津遺跡Ⅳ区全景（西から）
巻頭P.L. 2 德見津遺跡Ⅲ区第1加工段鍛冶遺構全景
巻頭P.L. 3上 德見津遺跡Ⅲ区鍛冶遺構
巻頭P.L. 3下 德見津遺跡Ⅲ区第1加工段遺物出土状況
巻頭P.L. 4 陽徳寺遺跡出土軒丸瓦
図版1 1・徳見津遺跡Ⅲ・Ⅳ区全景 2・同 Ⅲ区全景 3・同 Ⅳ区全景
図版2 4・同 Ⅰ区全景 5・同 Ⅱ区SK01 6・同 Ⅱ区SD01・02
図版3 7・同 Ⅱ区SK02・SD03断面 8・同 完掘後 9・同 SD03遺物出土状況
図版4 10・同 Ⅲ区全景 11・同 Ⅲ区SI01 12・同 Ⅲ区SI01床面置石
図版5 13・同 Ⅲ区SI01土層断面 14・同 SI01遺物出土状況
15・同 Ⅲ区SK03遺物出土状況
図版6 16・同 Ⅲ区SI02 17・同 Ⅲ区SI02土層断面1 18・同 Ⅲ区SI02土層断面2
図版7 19・同 Ⅲ区SD06N全景 20・同 Ⅲ区SD06N土層断面
図版8 21・同 Ⅲ区第1加工段鍛冶炉上遺物出土状況 22・同 第1加工段遺物出土状況
23・同 Ⅲ区第1加工段鍛冶遺構
図版9 24・同 Ⅳ区全景 25・同 Ⅳ区第2加工段
26・同 Ⅳ区第2加工段SB02柱穴断面
図版10 27・同 Ⅳ区第2加工段 28・同 Ⅳ区第2加工段
図版11 29・同 Ⅳ区第2加工段SBO6土層断面 30・同 Ⅳ区第2加工段SB03土層断面
31・同 Ⅳ区第2加工段SBO5遺物出土状況
図版12 32・同 Ⅳ区SK07遺物出土状況 33・同 Ⅳ区第3加工段第2平坦面
34・同 土層断面
図版13 35・同 Ⅳ区第3加工段SB08 36・同 Ⅳ区第4加工段第3平坦面土層断面
37・同 Ⅳ区第4加工段第5平坦面土層
図版14 38・同 Ⅳ区第4加工段SB09 39・同 Ⅳ区第4加工段SK09
40・同 遺物出土状況
図版15 41・同 SK09遺物出土状況 42・徳見津遺跡全景
43・調査参加者（復元住居の前にて）
図版16 I区包含層出土遺物・II区SD03出土遺物・II区包含層出土遺物
図版17・18 II区包含層出土遺物
図版19 Ⅲ区上段土器滴まり出土遺物・IV区SB03出土遺物
図版20・21 Ⅲ区SI01・SD04出土遺物
図版22・23 Ⅲ区SI02・SD06出土遺物

- 図版54 陽徳寺遺跡堤下層部出土遺物
- 図版55 陽徳寺遺跡堤下層部出土遺物
- 図版56 陽徳寺遺跡堤下層部・底部出土遺物
- 図版57 陽徳寺遺跡堤底部出土遺物
- 図版58 陽徳寺遺跡堤底部出土遺物
- 図版59 陽徳寺遺跡堤出土黒色土器
- 図版60 陽徳寺遺跡堤出土石器・瓦
- 図版61 陽徳寺遺跡堤出土瓦
- 図版62 陽徳寺遺跡堤出土瓦・木製品
- 図版63 陽徳寺遺跡堤出土木製品・漆器椀
- 図版64 陽徳寺遺跡堤出土漆器椀・3区出土円筒埴輪

本文目次

第1章 調査に至る経緯	（ト部）	1
第2章 遺跡の位置と環境	（岩橋）	2
第3章 調査の概要と経緯	（福島・岩橋）	6
第4章 徳見津遺跡の調査	（岩橋）	8
第1節 I区の調査概要		8
第2節 II区の調査概要		10
第3節 III区の調査概要		23
第4節 IV区の調査概要		55
第5節 鉄滓の出土状況について		89
第6節 小結		91
第5章 目廻遺跡の調査	（福島）	96
第1節 I区の調査概要		96
第2節 II区の調査概要		100
第3節 小結		103
第6章 陽徳寺遺跡の調査	（深田）	105
第1節 調査の経緯と概要		105
第2節 I区の調査概要		106
第3節 II区の調査概要		119
第4節 III区の調査概要		135
第5節 総括		136

- 図版24 III区第1加工段出土遺物
- 図版25 III区出土遺物
- 図版26 III区第1加工段金床石
- 図版27 III区包含層出土遺物
- 図版28 IV区SB02・03・04・05出土遺物
- 図版29 IV区SK07・第1平坦面・第2平坦面出土遺物
- 図版30 IV区SB08・第3平坦面出土遺物
- 図版31 IV区第3平坦面・第4平坦面・第5平坦面出土遺物
- 図版32 IV区SB09周辺出土遺物
- 図版33 IV区出土土師器
- 図版34 IV区SK09出土遺物・第5平坦面及びSB09周辺出土鉄製品
- 図版35 III・IV区出土鉄鋤 IV区出土鉄製品及び石製品
- 図版36 1・目廻遺跡調査前状況 2・日廻遺跡SK01木棺痕跡 3・同 SK01土層断面
- 図版37 4・同 SK01全景 5・同 SK04全景
- 図版38 6・同 SK03全景 7・同 SK02全景 8・同 II区から徳見津遺跡を望む
- 図版39 II区包含層出土遺物
- 図版40 上・陽徳寺遺跡全景（南より） 下・陽徳寺遺跡全景（北より）
- 図版41 上・陽徳寺遺跡遠景（西より） 中・陽徳寺遺跡遠景（東より）
下・陽徳寺遺跡遠景（西より）
- 図版42 上・陽徳寺遺跡1区掘削前 中・陽徳寺遺跡1区完掘状況
下・陽徳寺遺跡基壇部全景（南より）
- 図版43 上・陽徳寺遺跡基壇部全景（真上より） 下・陽徳寺遺跡基壇部上層堆積状況
- 図版44 上・陽徳寺遺跡1区SD01 中・陽徳寺遺跡1区SD02
下・陽徳寺遺跡1区-2第2ピット群
- 図版45 上・陽徳寺遺跡1区基壇部陶磁器出土状況 中・陽徳寺遺跡1区杭列
下・陽徳寺遺跡1区-2第2ピット群
- 図版46 上・陽徳寺遺跡2区堤部作業風景 中・陽徳寺遺跡2区堤部遠景
下・陽徳寺遺跡2区堤部
- 図版47 上・陽徳寺遺跡2区堤部上層堆積状況 中・陽徳寺遺跡2区堤部須恵器出土状況
下・陽徳寺遺跡2区堤部軒丸瓦出土状況
- 図版48 上・陽徳寺遺跡2区堤部漆器椀出土状況 中・陽徳寺遺跡2区堤部木製品出土状況
下・陽徳寺遺跡3区埴輪片出土状況
- 図版49 陽徳寺遺跡1区基壇部出土遺物
- 図版50 陽徳寺遺跡1区第2ピット群・堤堰後堆積土出土遺物
- 図版51 陽徳寺遺跡堤理後堆積土・堤上層出土遺物
- 図版52 陽徳寺遺跡堤上層部出土遺物
- 図版53 陽徳寺遺跡堤上層部・下層部出土遺物

第1章 調査に至る経緯

昭和47年5月26日付けで、建設省松江国道工事事務所から鳥根県教育委員会に「国道9号バイパス」建設の基本設計資料として、島根県境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無について照会があった。そこで、県教育委員会では、地元教育委員会の協力を得て、昭和47年、48年に遺跡の分布調査を実施した。これらの調査結果を踏まえ、建設省からルート案が提示され、昭和48年7月には松江市東地区の予定ルートにかかる遺跡の取扱いについて協議があった。

昭和49年7月には安来地区的折坂～月坂間のルート案について協議があった。つづいて昭和50年1月22日付けで県教育委員会あて松江東地区と安来地区的うち清水～月坂間の一部について発掘調査の依頼があった。これを受けて、昭和50年7月には建設省と契約を取り交わし、昭和50年度、松江市竹矢町才ノ峠古墳群、同矢田町平所遺跡、安来市早田町大坪古墳群の発掘調査を、昭和51年度には松江市平所遺跡の関連再調査、宍出雲町出雲郷夫敷遺跡の試掘調査を実施した。平所遺跡では、埴輪廻跡から馬、鹿、家、人物などの形象埴輪が出土し、昭和52年6月には国の重要文化財に指定された。

昭和55・56年度には、昭和57年に開催が決定していた「くにびき」国体の主要幹線道路となる「松江東バイパス」（以前は「米松バイパス」と呼ばれていた。）宍出雲町出雲郷から松江市吉志原町に至る5.4km間の7遺跡（宍出雲町の春日遺跡、夫敷遺跡、松江市の布田遺跡、中竹矢遺跡、才ノ峠遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）のうち2車線分を緊急に調査した。

その後「松江バイパス」は高規格道路に設計変更され「松江道路」となり、昭和60年に建設省から前回調査した7遺跡の残り2車線分の調査依頼があった。調査は昭和61年度から平成3年度まで、順次行なった。

昭和61年度には安来市島田町から同赤江町に至る延長6.9kmが「安来バイパス」として事業化されたが、昭和63年度には高規格道路に計画変更され、「松江道路」につなぐ宍出雲町出雲郷から安来市吉佐町間の18.7kmの「安来道路」として実施されることになった。この計画変更で、予定ルートにも変更が生じたため、昭和62・63年度に再度分布調査を実施した。発掘調査はまず、安来市赤江町から島田町に至る6.9km（インターチェンジ部を含む）で平成元年から同4年度まで7遺跡（安来市宮内町宮内遺跡、佐久保町大原遺跡、同白コクリ遺跡、同岩屋口遺跡、黒井町越峰遺跡、同才ノ神遺跡、島田町島田南遺跡）で実施した。

さらに平成5年度からは安来市荒島町から宍出雲町出雲郷間を「安来道路西地区」として、さらに平成5年度からは安来市吉佐町から島田町間の3.9kmを「安来道路東地区」として引き続き調査を行なった。そのうち安来道路東地区では、平成5年度は吉佐町の石田遺跡、カンボウ遺跡、国吉遺跡、平ラⅠ遺跡、平ラⅡ遺跡と島田町の島田黒谷Ⅰ遺跡、島田黒谷Ⅱ遺跡、島田黒谷Ⅲ遺跡、普請場遺跡、明子谷遺跡の調査を行ない、平成6年度には吉佐町の石田遺跡、五反田遺跡、徳見津遺跡、日廻遺跡、山ノ神遺跡、門生町の門牛黒谷Ⅰ遺跡、門牛黒谷Ⅱ遺跡、門生黒谷Ⅲ遺跡、陽徳遺跡、陽徳寺遺跡、岩屋口北遺跡の調査を行なった。

第2章 遺跡の位置と環境

徳見津遺跡、日廻遺跡は島根県安来市吉佐町に所在する。当地は鳥取県との県境であり、律令制施行による出雲国・伯耆国設置以前から安来・米子平野間の重要な回廊として機能していたことが考えられる。

ここでは、安来市東部の島田・吉佐地区周辺の遺跡を整理し、徳見津・日廻・陽徳寺遺跡の地理的、歴史的背景を紹介したい。

当遺跡が立地する場所は中国山地から北に派生してくる低丘陵の斜面及び谷部にある。これらの低丘陵は中海の湖岸まで張り出すものもあり、丘陵間の谷間や湖岸にわずかに平坦地が存在する。そのため古くから丘陵の斜面や尾根を開発して耕地や居住地に利用されており、現在でもかなりの丘陵が果樹園などに利用されている。

歴史的な背景として、当地域の遺跡を概観していくと、島田町の島田黒谷I遺跡や明子谷遺跡で2次堆積ながら多量の縄文前期～後期の土器が出土している。また、黒曜石製の石鎌や石核などはカンボウ遺跡、石田遺跡、平ラI遺跡、平ラII遺跡などからも出土しており、縄文時代から人々の活動が盛んであったことがうかがわれる。

弥生時代になると前期の遺跡はいまだ明確ではないが、中期後半になると山の神遺跡、高広遺跡などで集落が営まれ、谷水田などの開発が行われたと考えられる。

後期には吉佐、島田地区にも人々が定着したと考えられ、カンボウ遺跡、石田遺跡、平ラI遺跡、陽徳遺跡、門生黒谷III遺跡、門生黒谷II遺跡、島田黒谷III遺跡、猫ノ谷遺跡、普請場遺跡、明子谷遺跡などで遺構・遺物が出土している。また、陽徳遺跡などで高地性集落が出現しており、当時の地域社会の動向を考えるうえで特筆される。

このように、弥生時代後期には人口の増加などの原因によって平野面積の少ない島田・吉佐地区にも広範囲に渡って集落が展開したものと考えられる。

古墳時代前期には島田黒谷I遺跡、石田遺跡、五反田遺跡などで遺構・遺物が確認されているが、弥生後期に比較して遺跡数はやや減少している。前期古墳としては吉佐山根1号墳や八幡山古墳、陽徳II区1号墳が造られ、箱形石棺や土器棺を主体部に採用している。

古墳時代中期にはカンボウ遺跡、平ラII遺跡、島田黒谷I遺跡、長首遺跡などでTK23～47に併行する須恵器が出土している。また、同時期の須恵器窯として高畠古窯跡群があり、安来道路建設に伴う調査でその一角の門生山根1号窯が調査されている。そして平ラII遺跡などで卡作を行なっており東部出雲の玉作の画期と連動していることがうかがわれる。

墳墓では門生町に堅穴式石室を持つ五反田1号墳（墳長25m）が造られ、石室内からは仿製鏡、硬玉製勾玉、碧玉製管玉、鉄劍などが出土している。

そして、舟形石棺を内部主体にもつ全長50mの前方後円墳の毘売塚古墳が造られるなど、安来市東部でも比較的大形の古墳の築造が盛んになってくる。これは宍道湖・中海沿岸各地で大形古墳が築造される現象と連動していると考えられる。

古墳時代後期には集落が増加し、遺跡数も増えてくる。現在ではカンボウ遺跡、石田遺跡、平ラII遺跡、徳見津遺跡、山の神遺跡、五反田遺跡、高広遺跡などで住居跡が確認されている。

また、徳見津遺跡では鍛冶遺構、遺物が見つかっており、隣接する米子市陰田遺跡群との関連が注目される。

墳墓としてはカンボウ北1・2号墳のように埴輪を樹立する小古墳や客さん古墳、十神山頂古墳のように長持形石棺や家形石棺を内部主体に持つ古墳がある一方、穴神横穴墓群や高広横穴墓群など横穴墓が数多く存在し、6世紀末以降は横穴墓に比重が移って行くようである。

墓制としては横穴墓が主流であるが、吉佐町の神代塚古墳、吉佐貝姫塚古墳では米子市に類例の多い横穴式石室を築いており、穴神横穴墓築造以前の墓制を探る上で重要なものである。

飛鳥・奈良時代では島田南遺跡、平ラⅡ遺跡、カンボウ遺跡、石田遺跡、五反田遺跡、徳見津遺跡などに集落が営まれている。これらの集落でも鍛冶が営まれているため、集落単位での鉄生産が確立していたことがうかがわれる。

そして、平安時代には陽徳遺跡の山頂に山岳寺院的な建物が建立され、オノ神遺跡では峰に関わる祭祀が行われている。この時代に清水寺など影響下で山岳仏教が隆盛を迎えたと考えられ、陽徳寺遺跡、平ラⅠ・Ⅱ遺跡でも布目瓦が出土している。

生産遺跡としては門生古窯跡群山根支群で小規模な窯によって須恵器生産が行われている。

墳墓としては門生黒谷Ⅱ遺跡で京都產綠釉陶器を副葬する木棺墓が営まれているため、地域の有力者や僧などが葬られたと考えられる。

このように、出雲と伯耆の境界に位置するこの地は、農業基盤としては隣接する安来平野や米子平野のように広大な土地を有するわけではない。しかし、山陰でも最古級の須恵器窯の成立や米子市陰田遺跡群などと共に6世紀～8世紀に鍛冶集団が集中するなど先進的な工業地帯としての性格も持っている。

島田・吉佐地区は安来平野と米子平野の緩衝帶として、中海の水上交通や陸上交通路に関わる回廊的な性格を持っている。さらに、安来道路建設に伴う発掘調査によって、それぞれの時代毎に異なる様相を見せつつ、農業生産・工業生産・祭祀など特筆できる文化を保持していることが明らかになった。大穀倉地帯とは異なった特有の文化を持った「クニ境」の地として、地域の歴史像の解明が期待される地域である。

参考文献

山本 清 1971「山陰古墳文化の研究」

山本 清 1989「出雲の古代文化」六興出版

東森市良 1995「安来平野の古墳文化」

足立克己・丹羽野裕ほか 1984「高広遺跡発掘調査報告書」鳥取県教育委員会

今岡一三ほか 1992「島田南遺跡」鳥取県教育委員会

池瀬俊一・大庭俊次ほか 1994「明子谷遺跡・島田黒谷Ⅱ遺跡・島田黒谷Ⅲ遺跡・猪ノ谷遺跡」鳥取県教育委員会

丹羽野裕・岩橋孝典・深山浩ほか 1994「右山遺跡・カンボウ遺跡・阿古遺跡」鳥取県教育委員会

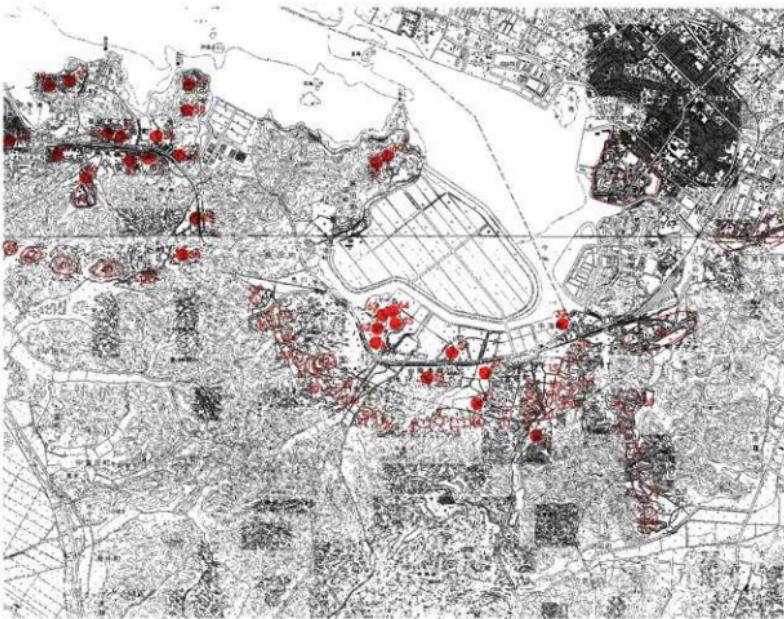
岩橋孝典ほか 1994「石田遺跡」鳥取県教育委員会

大庭俊次ほか 1995「オノ神遺跡・昔鍋場遺跡・島田黒谷Ⅰ遺跡」鳥取県教育委員会

錦田剛志ほか 1995「平ラⅡ遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群」鳥取県教育委員会

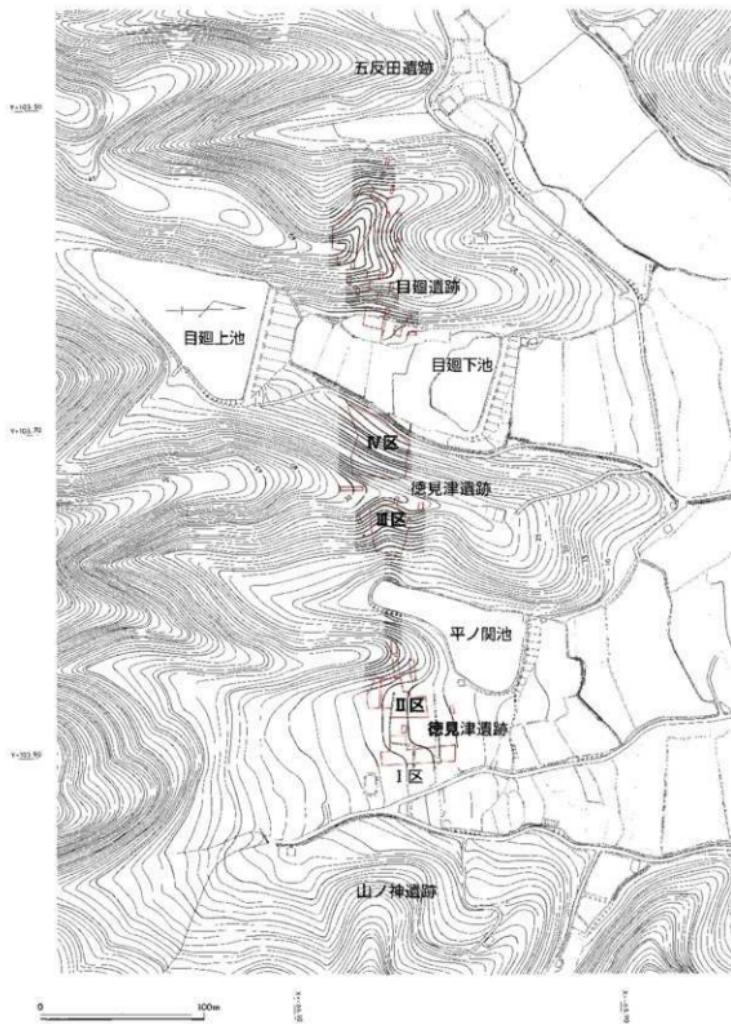
深山浩・丹羽野裕ほか 1995「陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡」鳥取県教育委員会

鳥取県教育委員会 1994・1995「鳥取県埋蔵文化財調査センターニュース」8～11号



1 徳見津遺跡	26 陽徳遺跡	51 宮ノ山古墳
2 目廻遺跡	27 陽徳寺遺跡	52 和田横穴
3 五反田遺跡	28 門生黒谷Ⅲ遺跡	53 長曾七塚墓群
4 山ノ神遺跡	29 門生黒谷Ⅱ遺跡	54 佐久保山遺跡
5 国吉遺跡	30 門生黒谷Ⅰ遺跡	55 黒鳥横穴墓群
6 カンボウ遺跡	31 烏田黒谷Ⅲ遺跡	56 大日さん古墳
7 石田遺跡	32 門生吉窓跡群高畑支群	57 高留古墳
8 穴神横穴墓群	33 烏田黒谷Ⅱ遺跡	58 小馬木古墳
9 吉佐山根1号墳	34 明子谷遺跡	59 赤崎山横穴
10 平ラⅡ遺跡	35 烏田黒谷Ⅰ遺跡	60 岩崎宅横穴
11 平ラⅠ遺跡	36 普訥場遺跡	61 山根古墳
12 八幡山古墳	37 烏田南遺跡	62 常福寺山土塙墓
13 国吉山古墳群	38 猫ノ谷遺跡	63 和田古墳群
14 吉佐古墳	39 オノ神道遺跡	64 小崎遺跡
15 六ノ坪古墳	40 越跡遺跡	65 下口古墳群
16 神宝古墳群	41 岩屋口遺跡	66 米子城跡
17 吉佐貝塚塚古墳	42 口コクリ遺跡	67 口久美遺跡
18 神代塚古墳	43 大原遺跡	68 陰田遺跡群
19 四方神古墳群	44 高広遺跡	69 陰田1号墳
20 油田・平古墳群	45 大納言山古墳	70 陰田・広畠遺跡
21 山ノ神古墳	46 客さん古墳	71 陰田・隠れが谷遺跡
22 茶屋畑摩尼寺	47 見壳塚古墳	72 陰田夜坂谷遺跡
23 松木古墳	48 愛宕山古墳	73 新山・研石山遺跡
24 八坂古墳	49 十神川山頂古墳	74 新山・山田遺跡
25 八坂経塚	50 小十神山古墳群	75 池ノ内遺跡

第1図 徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 徳見津遺跡・目廻遺跡周辺地形図 ($S=1/3,000$)

第3章 調査の概要と経過

◎・徳見津遺跡

現地調査は1994年4月11日に開始し、当日に調査前写真を撮影して半ノ閑池の東側に試掘トレンチを9ヶ所設定した。トレンチの掘削は4月18日に開始し、22日にはⅠ・Ⅱ区を設定して本調査を開始した。なお、Ⅰ・Ⅱ区の調査は全て手振りで行なっている。

Ⅰ区は丘陵間の谷間にあたり、顯著な遺構・遺物が存在しなかったので6月22日までに、測量を終え調査終了した。

Ⅱ区は比較的の遺物を含む包含層が存在したが、北側及び東側の標高の低い部分は遺構が残存していなかった。南側及び西側の山裾には6世紀中頃～後半の土坑や溝が残存しており、調査区を拡張して遺構の全体を確認した。

Ⅲ区の調査は7月15日に終えたが、その間5月10日～6月15日まで、岩橋・山代が穴神1号横穴墓の補足調査を兼任した。

Ⅳ区は4月当初には樹木の伐採が行われておらず、遺構などの存在が判然としていなかったが、6月始めに伐採が行なわれ、遺構と考えられる地形の不自然な落ち込みが見られた。そのため、6月6日に8ヶ所のトレンチを設定して試掘を開始した。その結果、2ヶ所で堅穴住居跡の存在が判明し、遺物も多量に遺存していることが明らかになった。

試掘の結果を受けて本調査を開始することになったが、Ⅲ区は下方に農業用水の半ノ閑池があるため上砂の搬出が困難であることから、半ノ閑池に仮設の橋を架橋し、Ⅱ区までベルトコンベアで搬出して、そこから運搬車に積み替えて堆土を搬出することになった。

Ⅲ区の本調査は堆上処理の問題が解決した7月20日から開始した。Ⅲ区では6世紀後半の集落の一部を良好な状態で検出することができ、10月4日に調査を終了した。

Ⅳ区は6月の樹木伐採の後、肉眼でも明瞭に斜面が3段に加工されていることが確認できたが、加工された時期が特定できていなかった。そのため6月28日から5ヶ所にトレンチを設定し試掘を行なった。その結果、それらの加工段が7～8世紀の集落に関わるものであることが判明した。

Ⅳ区の本調査は9月26日に西側の日廻遺跡側から重機を入れ、表土掘削を開始した。調査では7～8世紀に至る集落が3段に削られた加工段という形で検出できた。

11月24日にⅢ・Ⅳ区でラジコンヘリによる空撮を行ない、12月27日に全ての現地調査を終了し、撤収した。

その間、11月17日には島根県文化財保護審議会会長・山本清、同委員・池田満雄、島根大学教授・田中義昭、広島大学教授・河瀬正利の各先生を調査現場に招き調査指導を受けた。

現地説明会は12月10日に五反田遺跡と合わせて行ない、天候が悪いにもかかわらず約80名の参加を得た。現地説明会のため、五反田遺跡では鍛冶炉や輪を復元し、実際に鉄（釘）を加熱し鍛打の実験を公開した。徳見津遺跡では調査の終了していた堅穴住居跡S101をそのまま利用して、堅穴住居を实物大で復元し、住居内では参加者に中海産のシジミや、かつて中海が産地であった赤貝（当時は岡山産を使用）を使った古代食の試食コーナーを設けた。

いずれの企画も盛況で、一般の方々にはわかりにくい遺跡・遺物について、いくらかは理解を助け

ることができたと考えている。³⁾

◎・目廻遺跡

日廻遺跡は徳見津遺跡の西側に位置しており、目廻下池がある谷部分とその西側にある標高37mを最高所とする丘陵上に展開する遺跡である。

昭和62・63年に実施した分布調査において、横穴墓の閉塞石と考えられる石材が発見されたため、谷部分から丘陵の尾根部分にかけての斜面に横穴墓群が存在すると予測された。このため、今回の発掘調査は「日廻横穴群」の名称で開始した。しかし、試掘調査の結果、谷から丘陵にかけての斜面に横穴墓群は存在せず、丘陵の尾根部には落し穴状土坑、谷部分には遺物の包含層が検出された。そこで遺跡の名称を「日廻遺跡」と改称し、尾根部分をⅠ区、谷部分をⅡ区として本調査を開始した。

調査前はⅠ区の北側は果樹園、南側は雑木林であった。Ⅱ区は斜面の果樹園造成のために削られており、下方の緩斜面にその堆土が盛られ、調査前は畑地として利用されていた。

Ⅰ区の調査は9月1日より、重機で表土の一部を掘削し、続いて人力による荒掘り・精査を行なった。Ⅰ区においては木棺墓1基（SK01）、落し穴状土坑2基（SK03・SK04）、性格不明の皿状土坑（SK02）を1基検出した。

Ⅱ区の調査は11月9日に開始したが、果樹園や水田などの耕作に伴う削平が激しく遺構は検出できなかったが、7世紀前半の土器類を中心にコンテナ2箱分の遺物を得て、12月27日までに全ての現地調査を終了した。

調査の終了した竪穴住居跡を使って建物の復元に取りかかる▶



◀柱などの構造を見やすくするために屋根を半分だけ葺いて完成！



現地説明会で初公開。
建物の中で古代食を試食

第4章 徳見津遺跡の調査

第1節 I区の調査概要

I区の層序・遺構（第4図）

I区は標高13~16mの緩く北側に傾斜する丘陵間の斜面に位置し、農道をはさんで山ノ神遺跡と隣接している。当区の調査は全て手掘りで行なったが、調査区が谷筋にあたり、砂礫などの河川堆積物が厚く、作業は難航した。地表下約1mまで掘り下げた段階で、現代の果樹園や畑などに伴う溝やピットを確認した以外には遺構・遺物の存在がほとんど認められず、湧水の増加などもあり、先行トレントで硬質の地山（灰白色粘質土層）を確認した時点で調査を打ち切った。

I区の遺物（第3図）

砂礫層中から古墳時代～中世にかけての遺物が僅かながら出土していおり、1~3・6・7は須恵器、4は土師皿、5は弥生土器である。

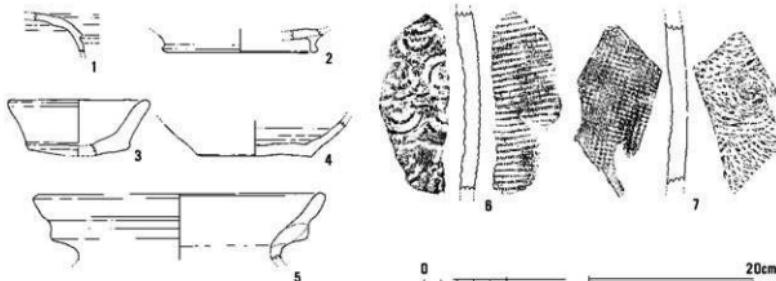
1は杯蓋で稜部の一部が残存している。回転ヘラケズリは稜の近くまで迫り、稜の突出も比較的鋭い。2は高台付きの碗で、基底部しか残存していないが、やや外反して底部に平坦面を持つ。

3は口径8.3cm、器高3.4cmの小型の皿で、内外面とも回転ヨコナデ調整を施す。底部はヘラ起こしの後に軽いナデを施している。

4は底径6.8cmの土師皿で内外面を回転ヨコナデ調整した後、底部を回転糸切りにより切り離している。

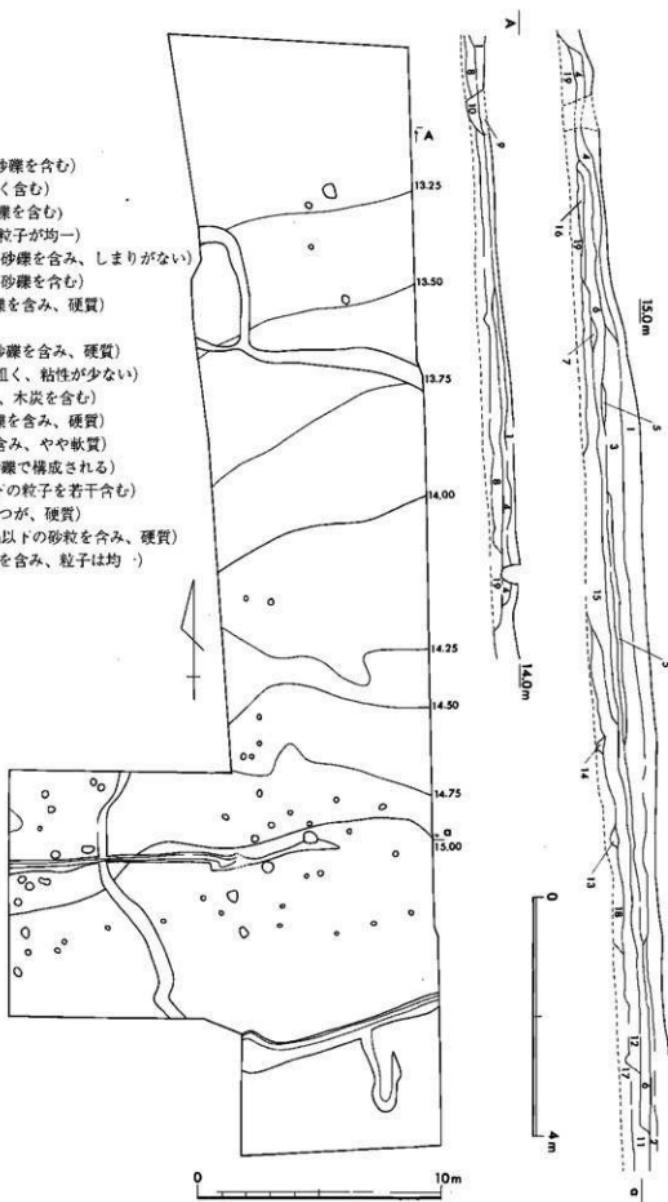
5は復元口径17.2cmの弥生後期の壺である。口縁部外面は稜を持っており、複合口縁状の形態をとっているが、内面には浅いくぼみしか認められない。残存部分は全てヨコナデ調整で、胎土に石英・長石・黒雲母などを含んでいる。

6・7は須恵器大甕の破片である。供に内側は同心円タタキを、外面には平行タタキを施して調整を行なっている。



第3図 徳見津遺跡I区出土遺物実測図 (S=1/3)

- 耕作土
- 暗褐色土層A（しまりがよく砂礫を含む）
- 暗褐色砂礫層（拳大の砂を多く含む）
- 暗褐色土層B（1cm以下の砂礫を含む）
- 暗褐色細砂層（粘性はなく、粒子が均一）
- 黒褐色膠泥土層（1cm以下の砂礫を含み、しまりがない）
- 暗褐色膠泥土層（4cm程度の砂礫を含む）
- 淡褐色土層（5mm以下の砂礫を含み、硬質）
- 表土
- 淡灰褐色土層（5mm以下の砂礫を含み、硬質）
- 淡褐灰色土層A（やや粒子が粗く、粘性が少ない）
- 淡紫灰色土層（しまりがよく、木炭を含む）
- 褐灰色土層（5mm以下の砂礫を含み、硬質）
- 淡褐灰色土層B（木炭などを含み、やや軟質）
- 暗灰色砂礫層（3cm以下の砂礫で構成される）
- 淡褐灰色粘質土層（1mm以下の粒子を若干含む）
- 淡茶褐色土層（やや粘性を持つが、硬質）
- 淡褐灰色土層C（木炭や5mm以下の砂粒を含み、硬質）
- 灰白色粘質土層（マンガン粒を含み、粒子は均一）



第4図 德見津遺跡I区全体図（平面S=1/200・断面S=1/80）

第2節 II区の調査概要

II区の層序・遺構（第5図）

II区はI区と同様に北側に向かって緩やかに傾斜する緩斜面に位置する。調査区の西端は丘陵の東裾にかかるており、調査区内の標高は約15~19mである。

土層の堆積状況は南半部と北半部で様相が異なり、南半部では層位的に3面の遺構面が確認できるが、北半分では遺構の存在する暗褐色土層下に、厚く河川堆積物が存在するため明確な地山は確認できなかった。

標高の高い南半部では地表下1m前後で淡黄褐色系シルト質土の地表面が現れる。地表面の直上に黒褐色土層Bが堆積している。そして、その上層には土器片などを含む淡褐色シルト質土が存在し、溝状遺構SD03古がその上面から掘削されているため、この淡褐色シルト質土は整地土の可能性が考えられる。

SD03古が機能している時期に14層上に再び黒褐色土層Aが堆積している。その後、木炭などを含む暗黃褐色土で整地を行ないSD03新を再掘削している状況が確認できた。

土坑SK01（第5図）

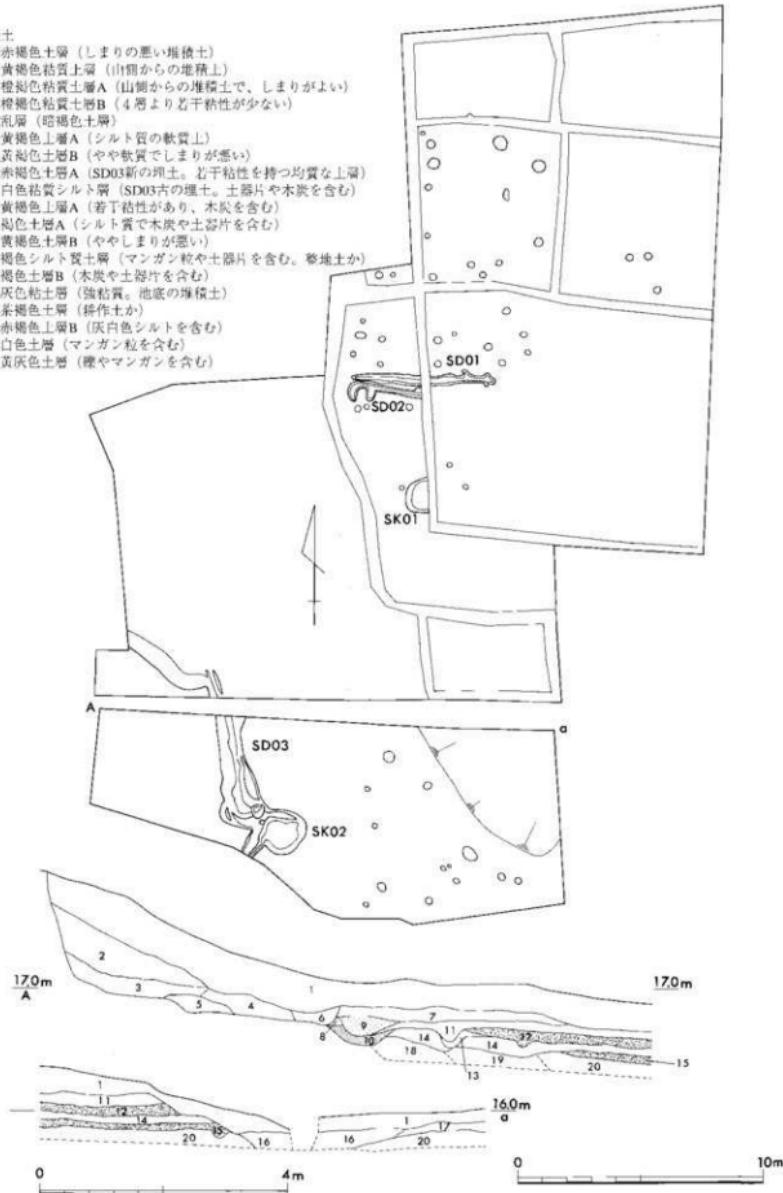


遺構 II区のはば中央に存在し、東側の一部は先行トレンチにより破壊している。南北1.4m、東西は現状で約95cm、深さ16cmの規模をもつ不整形円形の土坑である。埋土は暗褐色土で須恵器杯身47などを包含していた。

遺物（第11図）須恵器が数点出土しているが、固化できたものは47のみである。杯身47は復元口径11.7cm、器高4.9cmで、立ち上がりがやや内傾し、長く伸びるものである。

第5図 德見津遺跡II区土坑SK01実測図 (S=1/20)

- 表土
- 暗赤褐色土層（しまりの悪い堆積土）
- 暗黄褐色粘質土層（山側からの堆積土）
- 黃褐色粘質土層A（山側からの堆積土で、しまりがよい）
- 黃褐色粘質土層B（4層より若干粘性が少ない）
- 擾乱層（暗褐色土層）
- 淡黃褐色土層A（シルト質の軟質土）
- 淡黃褐色土層B（やや軟質でしまりが悪い）
- 淡赤褐色土層A（SD03新の埋土。若干粘性を持つ均質な土層）
- 灰白色粘質シルト層（SD03古の埋土。土器片や木炭を含む）
- 暗褐色土層A（若干粘性があり、木炭を含む）
- 黒褐色土層A（シルト質で木炭や土器片を含む）
- 暗褐色土層B（ややしまりが悪い）
- 暗褐色シルト質土層（マンガン粒や土器片を含む。墓地土か）
- 黒褐色土層B（木炭や土器片を含む）
- 黑灰色粘土層（強粘質。池底の堆積土）
- 黑茶褐色土層（耕作土か）
- 淡赤褐色土層B（灰白色シルトを含む）
- 灰白色土層（マンガン粒を含む）
- 淡灰褐色土層（隕やマンガンを含む）



第6図 德見津遺跡II区全体図（平面S=1/200・断面S=1/80）



第7図 德見津遺跡II区SD01・02実測図 (S=1/40)

溝状遺構SD01・02 (第7図)

遺構 共にSK01の北側に位置し、ほぼ東西方向に伸びるものである。SD01は全長5.8m、幅40cm、深さ6cmである。

SD02は東端が先行トレンチにより破壊されているが、残存長3.0m、幅20cm、深さ4cmの規模を持つ。SD02は西端と1mほど東に行ったところで南に向かって曲がっているが、その性格は不明である。

両溝とも遺物は出土していない。

溝状遺構SD03 (第8・9図)

遺構 II区の南半部で検出した溝で、丘陵の縁辺に沿って北流している。調査区内で検出した長さは約7.8mで、幅64~180cm、深さ26~70cmの規模を持っている。そして、この溝は同一地点で数回掘り直されて使用されていることが、部分的な断面で確認できる。溝の堆積土は灰白色シルト質土や淡茶褐色土などで保水性に乏しく、粘性もあまりなかった。

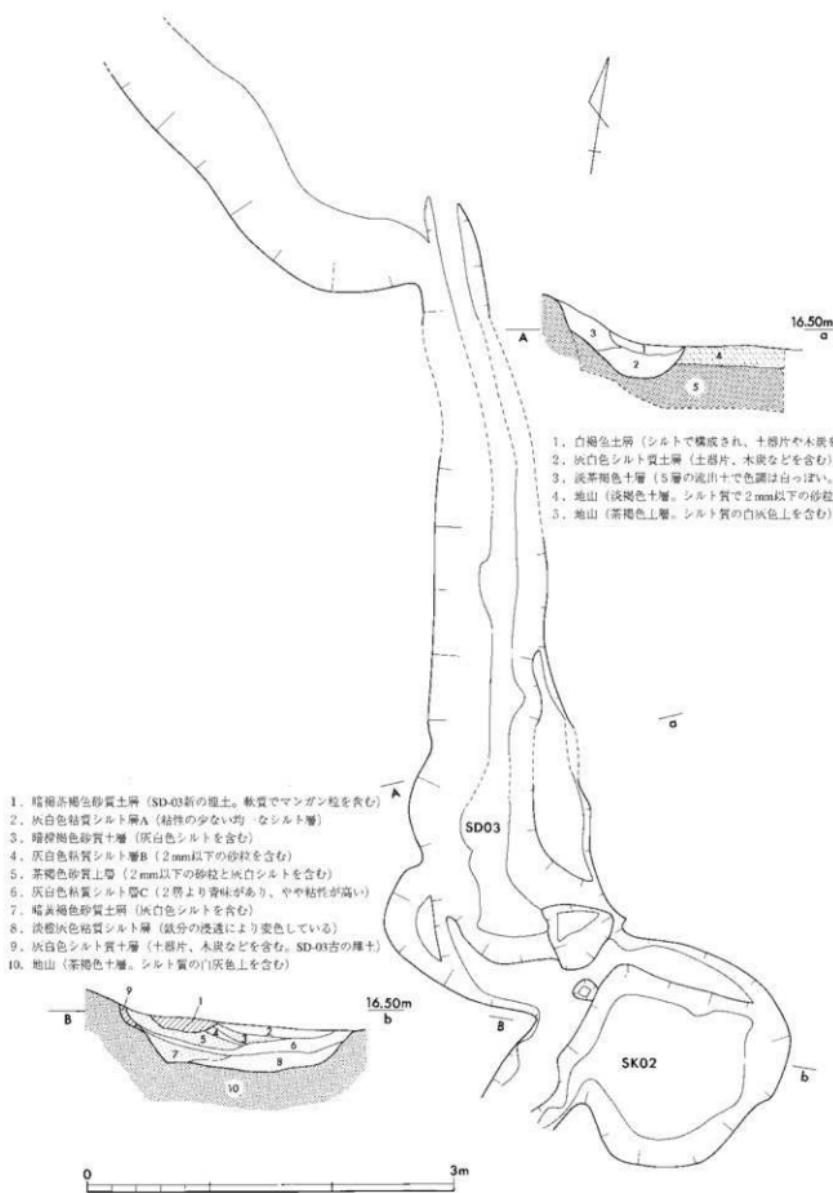
SD03の水の流れは、北流する水が土坑SK02に一時的に貯水され、オーバーフローした水がSK02の北西側の肩を越えて再びSD03に流入し、その後直線的に北流する様子が復元できる。溝内の堆積土からは土師器・須恵器などが比較的まとまって出土している。

土坑SK02 (第8図)

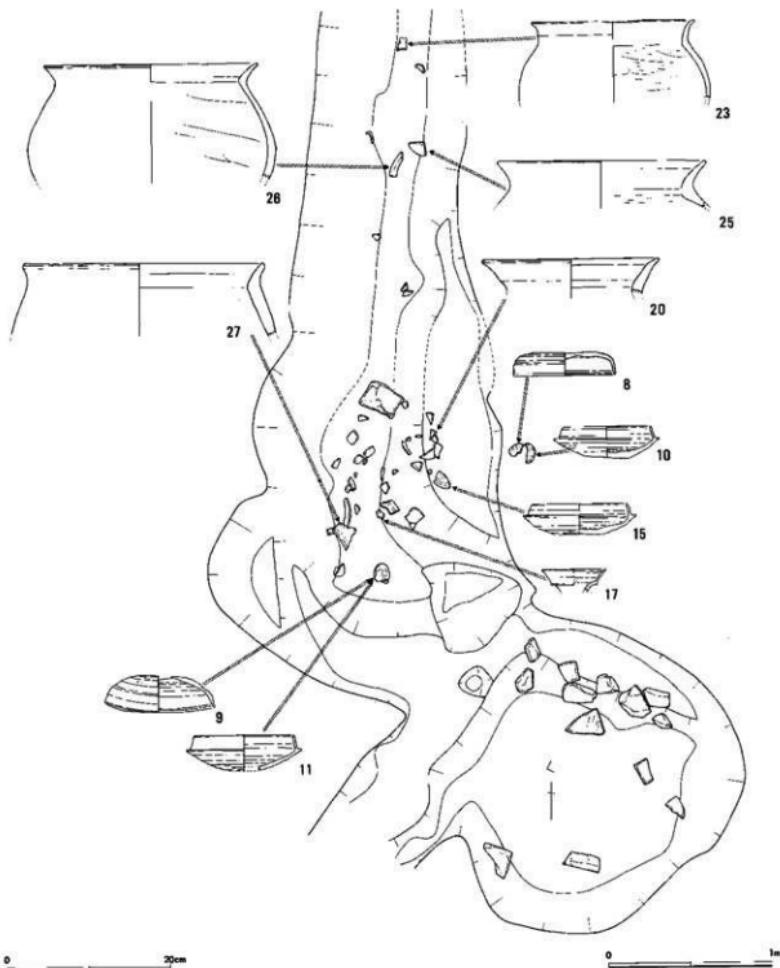
遺構 II区の南端に位置し、SD03と接続している。規模は南北185×東西210cm、深さ36cmで平面形態は不整円形を呈している。

層位的にはSD03古を切ってSK02の掘削が行われているが、その後の堆積状況はSD03側から砂質土が、東側から粘質シルトが相互に堆積し、互層状になっており、溝と土坑が有機的に関連していたものと考えられる。最終的にSK02が埋没した後にSD03新は掘削されており、土坑SK02はSD03の貯水地として一時に使用されたものと考えられる。

遺物は土師器の甕片や移動式竈片が出土しているが細片のため図化しえなかった。



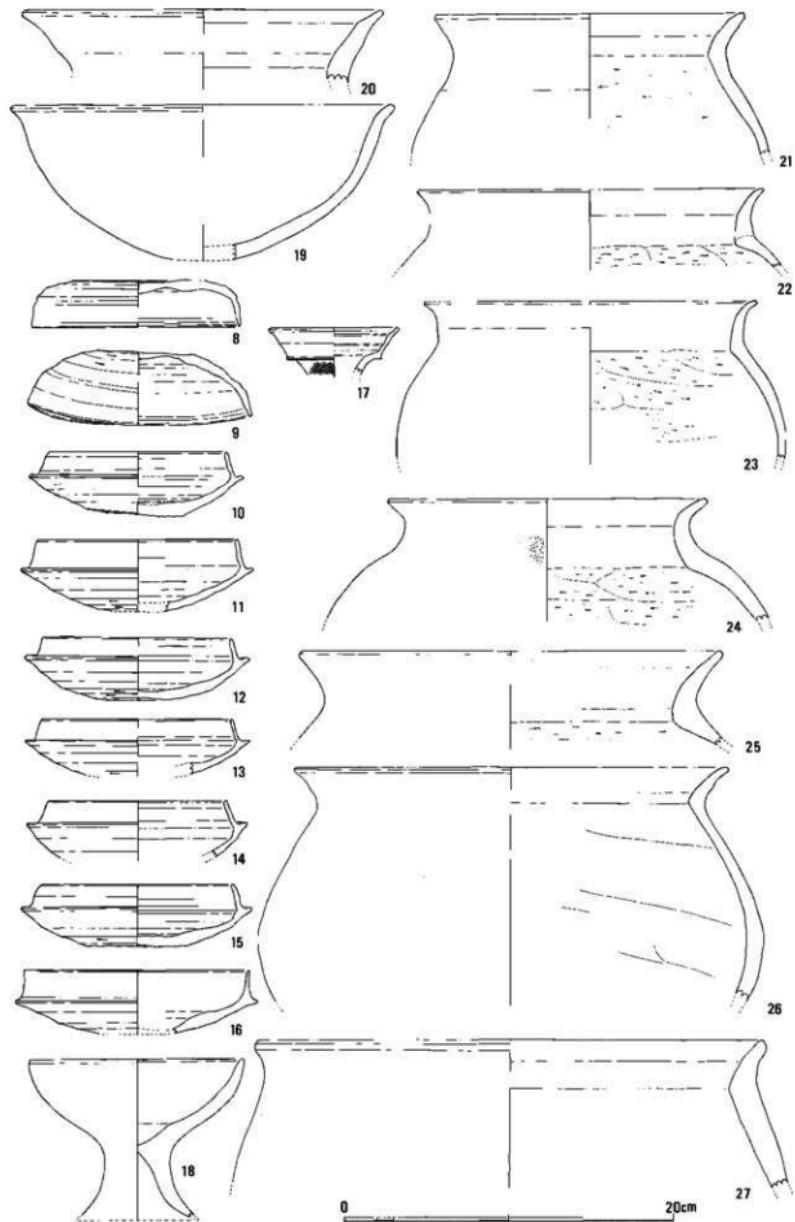
第8図 德見津遺跡II区SD03・SK02実測図 ($S=1/40$)



第9図 德見津遺跡II区SD03・SK02遺物出土状況図(遺構S=1/30・遺物S=1/6)

遺物(第10図)SD03および肩部からは6世紀代の須恵器・土師器が出土している。8・9は須恵器杯蓋、10~16は杯身、17は巻の口縁部である。土師器では19が鉢、20~27は甌、18が高杯である。

杯蓋8は口径12.6cm、器高3cmで、天井部などを削り残す粗雑なヘラ削りを施し、肩部と口縁端部内面に浅い沈線を施している。9は焼き歪んでいるが口径11.2~13.5cm、器高4.6cmで、回転ヘラ削りは丁寧に施しているが、肩部と口縁端部内面の沈線は浅いものになっている。



第10図 德見津遺跡II区SD03出土遺物実測図 (S=1/3)

杯身10は口径10.3、器高4.0cmで、天井部の1/3程度を回転ヘラ削りしている。11は復元口径12.2cm、器高約4.4cmで、焼成はやや不良で天井部の1/2を回転ヘラ削りしている。12は復元口径11.5cm、器高3.8cmで、焼成は堅緻であり、天井部の1/2以上を浅いナデ気味の回転ヘラ削りをしている。また、天井部外面には「×」状のヘラ記号がある。13は復元口径11.6cm、で天井部の約1/2を回転ヘラ削りしている。14は復元口径10.9cmである。15は復元口径11.7cm、器高3.8cmで天井部の約1/2を回転ヘラ削りしている。16は復元口径13.7cm、復元器高4.0cmである。これらの杯身の立ち上がりは10～14は内傾直立、15は内傾内湾、16は外傾直立という形態を取っているが長く立ち上がるという点で共通している。

龜17は口縁部のみ残存しているが、口径7.7cmで頸部には波状文をめぐらせている。全体的に器壁が薄く、斜め下方にシャープに突出する稜を持つ。口縁端部内面には強いヨコナデによる屈曲が確認できる。

土師器高杯18は脚端部が欠損しているが、口径12.9cm、推定器高9.9cm、推定底径7.4cmである。杯部は内湾して立ち上がり全体的に丸みがあり、脚部はあまり大きく広がらない。

土師器鉢19は復元口径22.9cm、推定器高9.6cmで、胴部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は外方に引き出して終わっている。

土師器甕20は口径21.6cmで口縁部は外傾し、端部は緩やかに外反している。21は復元口径18.7cmで肩は張らず、口縁部は外傾し全体的に緩やかに外反している。22は復元口径20.9cmで口縁部は直立気味に立ち上がった後、途中から外反させて終わっている。胴部内面は頸部直下より左から右方向へヘラ削りを行なっている。23は復元口径20.0cmで口縁部は直立気味に立ち上がった後、途中から外反させて終わっている。胴部内面は頸部直下より左から右方向へヘラ削りを行なっている。24は復元口径19.2cmで口縁部は一端内傾した後、途中から大きく外反して終わっている。胴部内面は右から左方向へ浅いヘラ削りを施している。25は復元口径25.3cmで胴部内面は左から右方向へのヘラ削りを施している。口縁部は全体的に外傾している。26は復元口径26.1cmで肩はあまり張らず球胴化している。胴部内面は磨滅により判然としないが横方向のヘラ削りを施していると考えられる。27は復元口径29.6cmで肩は張らずに緩やかに下がっている。口縁端部は短く外傾して終わっている。

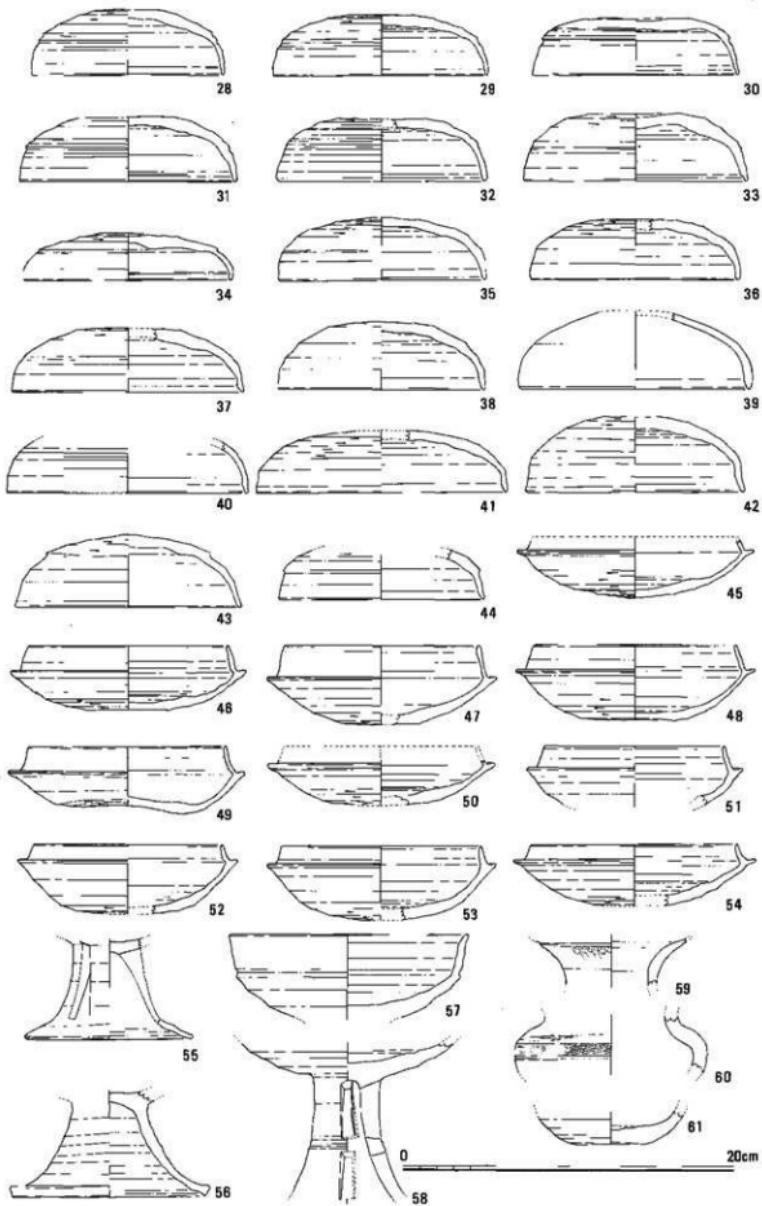
II区包含層の出土遺物（第11～13図）

II区からは須恵器・土師器・水晶製匂玉・土錐などが遺構に伴わない包含層から出土している。主要なものとして28～44は須恵器杯蓋、45～46は須恵器杯身、55～58は須恵器高杯、59～61は龜、62～64は土師器複合口縁甕、65～77は土師器器くの字口縁甕、78～83は土錐、89は水晶製匂玉、94・95は瓶の把手、96～98は移動式竈である。

杯蓋28は復元口径11.6cm、器高4.0cmで天井中心部は回転ヘラ削りの後、軽いナデを施している。肩部に2条の沈線を、口縁端部内面にはわずかに段を施している。

29は口径12.9cm、器高3.7cmで天井中心部は2cmほど削り残している。肩部には強いヨコナデにより、なだらかな2条の沈線状の凹みが見られ、口縁端部内面にも沈線状の凹みが認められる。

30は復元口径12.4cm、器高3.5cmで、天井中心部は約3.5cmに渡って回転ヘラ削り後、軽いナデを施



第11図 德見津遺跡II区包含層出土遺物実測図1

している。肩部には2条の沈線が施されるが下方のものは比較的シャープで明確な稜を作り出している。

31は口径13.1cm、器高4.1cmで、天井部は回転ヘラ削りを施すが、その後軽いナデ調整を行なっている。肩部には2条の、口縁端内面には1条の沈線を施している。外面の焼成は不良である。

32は復元口径12.5cm、器高3.9cmで、天井部の約1/2程度回転ヘラ削りを行ない、肩部には3条の沈線を施している。

33は復元口径13.5cm、器高4.2cmで、天井部の2/3程度を回転ヘラ削りしている。肩部には2条の沈線を持ち、口縁端部内面には明瞭な段を作り出している。

34は復元口径12.5cm、器高2.9cmのやや扁平な個体で、天井部の2/3程度は回転ヘラ削りを施し、「×」状のヘラ記号をつけている。肩部は1条深い沈線を施し明瞭な稜を表現している。

35は復元口径12.5cm、器高3.9cmで、天井部の3/4近くを回転ヘラ削りしている。肩部の沈線は極めて形式的で1条の浅いものが半周めぐるだけである。

36は復元口径12.6cm、器高3.7cmで、天井部の3/4程度に渡って丁寧な回転ヘラ削りをしている。

37は復元口径14.0cm、器高3.9で、天井部の1/2程度まで回転ヘラ削りを行なっている。肩部には非常に浅い1条の凹線を施し、口縁端部内面は内傾する平坦面をもっている。

38は復元口径12.5cm、器高4.2cmで、天井部は高く丸みを持っている。回転ヘラ削りは2/3程度まで達しているが、ほとんどを軽いナデ調整でナデ消しており、肩部や口縁端部にもアクセントは見られない。

39は復元口径13.8cm、器高4.7cmで、天井が高く丸みを持っているが全体的に磨滅が激しく調整は判然としない。

40は復元口径14.5cmで、肩部には緩やかな沈線が3条施され、口縁端部内面には平坦面を作り出している。

41は復元口径15.1cm、推定器高3.8cmで、天井部中心8cmは回転ヘラ削りが及ばず、その外周を回転ヘラ削りしている。肩部にはアクセントが無く、口縁端部内面には平坦面が作り出されている。

42は口径13.2cm、器高4.6cmで、天井部は高く丸みを持っている。回転ヘラ削りは天井部の1/2程度まで達している。肩部には稜表現が無く、口縁部は外側に開いて終わっている。

43は復元口径13.7cm、器高4.4cmで、天井部と肩部の境に粘土の付着した段状の落ち込みが見られる。天井中心部の径5cmの範囲には回転ヘラ削りは及んでいない。44は復元口径12.4cmで、緩やかな稜が横方向に突出している。

杯身45は復元最大径14.4cmで、底部外面の3/4程度を回転ヘラ削りしている。46は復元口径12.0cm、器高4.0cmで、底部外面の2/3程度を回転ヘラ削りしている。焼成は極めて良く、断面は濃紫灰色を呈し、器壁も薄い。

47は復元口径11.7cm、器高4.9cmで、底部中心の径5cmはヘラ切りの後、軽いナデを施している。立ち上がり部分の器壁は薄く、内傾しながら直線的に立ち上がっている。

48は復元口径12.2cm、器高4.7cmの大型品で器壁は薄く作られている。底部の回転ヘラ削りは3/4程度まで及んでいる。

49は口径11.9cm、器高4.2cmで、一部焼き歪みが見られるが焼成も良く、器壁は薄く仕上がってい

る。立ち上がりは最初は内傾しながら次第に外反して高く伸びている。

50は復元最大径13.4cmで、底部の2/3程度に丁寧な回転ヘラ削りを施している。51は復元口径10.9cmで、立ち上がりは内傾して直線的に伸びている。

52は復元口径11.4cm、推定器高4.2cmで、立ち上がりは内傾し、やや短くなっている。底部の回転ヘラ削りは1/2程度まで施されている。

53は復元口径12.5cm、推定器高3.7cmのやや浅いもので、立ち上がりは内傾して短い。底部の回転ヘラ削りは2/3程度の範囲に施されている。

高杯55は杯部を欠損するが、3方向1段長方形透かしを持つ脚部が残存し、底径は10.1cmである。脚端部外面には強いヨコナデにより、弱い段を作り出している。

56は脚部に透かしを持たない高杯で、底径は11.6cmである。脚端部には強いナデによる平坦面があり、両側に肥厚して終わっている。

57は脚部を欠損した高杯で、復元口径は14.4cmである。稜は沈線を施すことによって表現し、口縁端部内面には平坦面を作り出している。

58は長脚2段2方向透かしを持つ高杯だが、口縁部と脚端部は欠損している。

竜59～61は同一個体の可能性があるので、頭部にはヘラ状工具による雑な波状文を施し、胴部中央にも下方を沈線で画したスペースにやや粗雑な、4条単位の横擗波状文を施している。

土師器複合口縁壺62は復元口径16.1cmで、口縁部は非常に退化しており、稜も明確には作り出していないが複合口縁状を呈している。

63は復元口径15.2cmで、口縁部内面の段は強いナデが施され、口縁端部はやや内傾する平坦面を持っている。稜は明確には表現されず、丸くなだらかに仕上げられている。胴部内面は頭部からやや下がった所から時計周りのヘラ削りが施されている。

64は復元口径16.8cmで、口縁部は一端外反した後、わずかに直立して、その後つまみ出しによって再び外傾し端部を丸く仕上げている。胴部内面は頭部からやや下がった所から時計周りのヘラ削りを施し、器壁を薄く仕上げている。

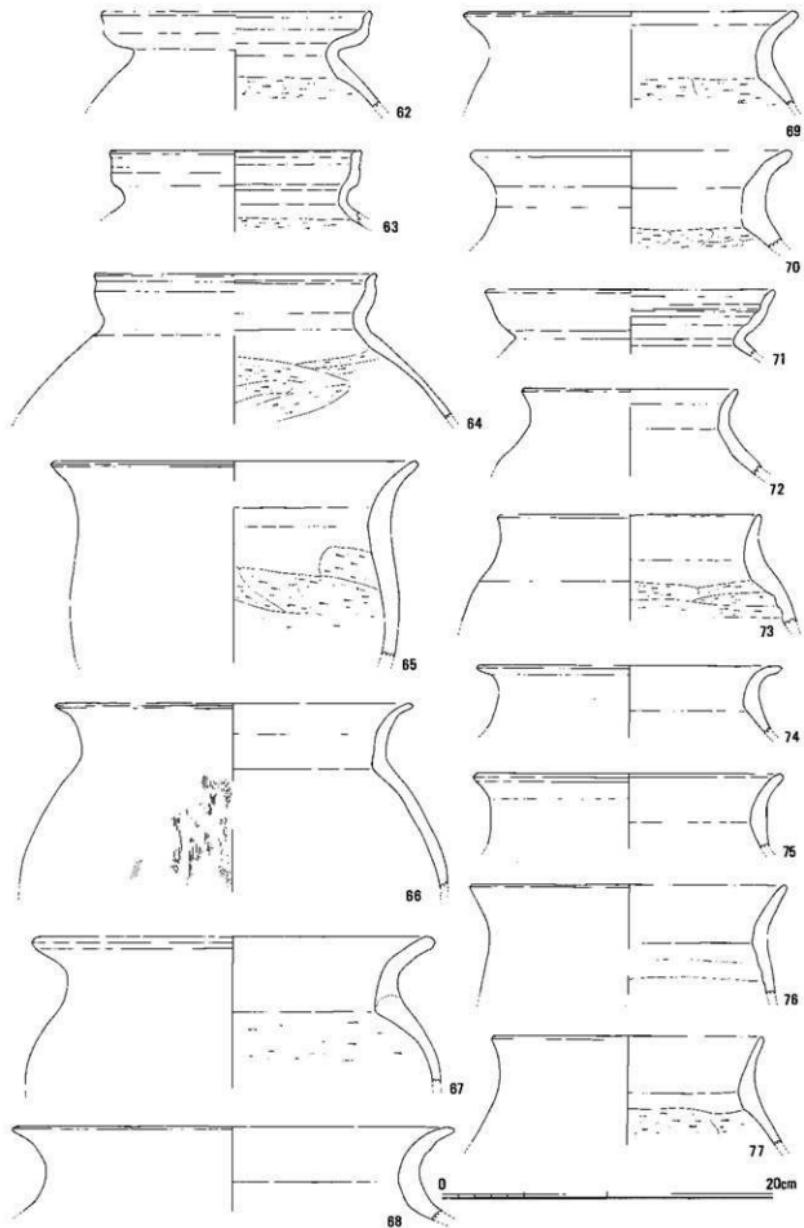
土師器壺65は復元口径21.8cm、胸部最大径20.0cmで、頭部はほとんど締まっておらず、そのまま口縁は外反している。胴部内面は頭部からやや下がった位置から右から左方向にヘラ削りを行なっているが、胴部外面は磨滅が激しく調整は不明である。

66は復元口径21.3cmで、口縁は直立気味に立ち上がった後、途中から大きく外反している。肩部はあまり張らずなだらかに下りて行くようである。胴部外面にはタテ方向の細かいハケメが施されるが、胴部内面は磨滅により判然としない。

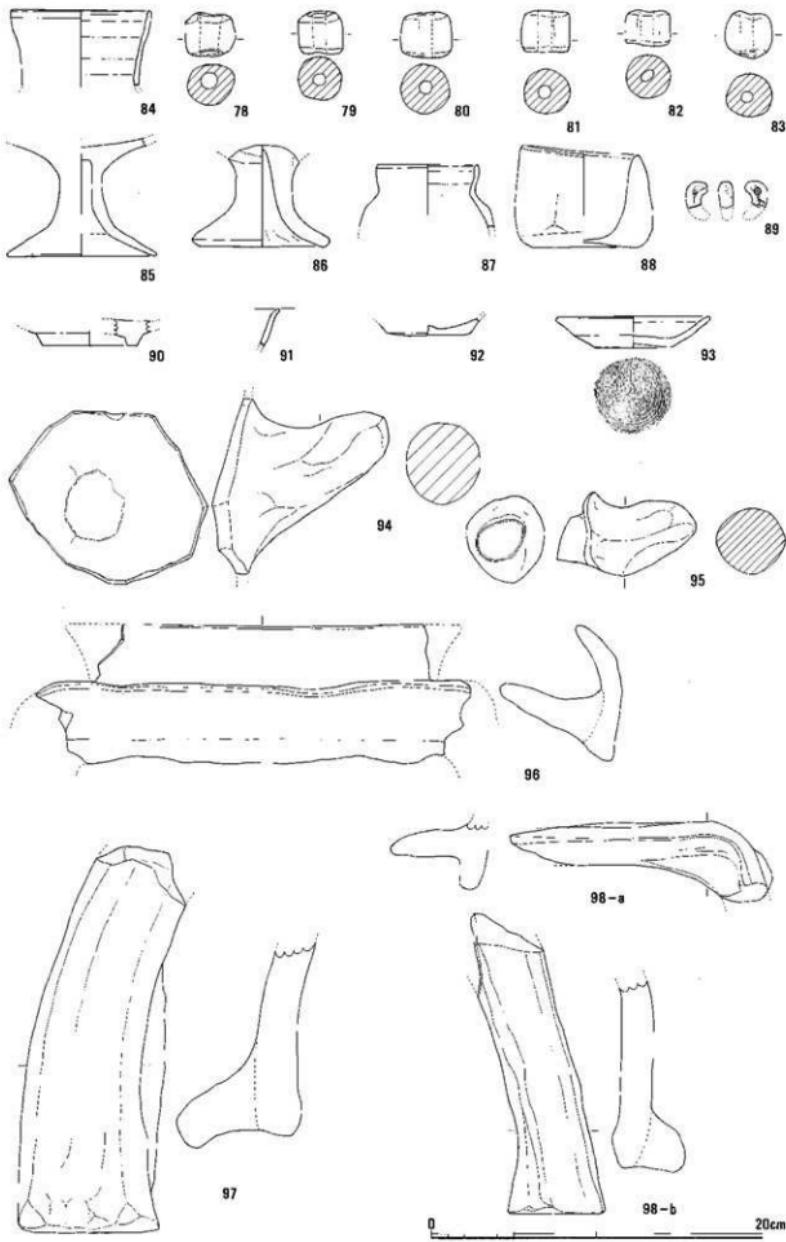
67は復元口径23.3cmで、口縁部は直立気味に立ち上がった後、大きく外反して端部は丸く収めている。内面は頭部直下より横方向のヘラ削りを施しているが、外面は磨滅が激しく調整は不明である。

68は復元口径26.2cmで、口縁部はカーブを描きながら大きく外反して端部は丸く収めている。内面は頭部直下より横方向のヘラ削りを施しているが、外面は磨滅が激しく調整は不明である。

70は復元口径19.1cmで、口縁部は一端直立して頭部を形成した後、大きく外反している。71は復元口径17.2cmで、口縁部は大きく外傾するが途中から内湾している。布留式壺の退化形態らしく口縁端部内面には平坦面を作り出し、その下端は沈線により区画している。



第12図 德見津遺跡II区包含層出土遺物実測図2



第13図 德見津遺跡II区包含層出土遺物実測図3

72は復元口径12.9cmで、口縁端部は緩やかに外反してあまり広がらずに終わっている。73は復元口径15.7cmで、口縁部は直立気味に立ち上がり、わずかに外傾して終わっている。胴部内面は横方向のヘラ削りを施しているが、外面は磨滅しており判然としない。

74は復元口径18.2cmで、口縁部は大きく外反して、端部は水平近くまで開いている。磨滅が激しく調整は判然としない。

75は復元口径18.3cmで、口縁部は緩やかに外反している。76は復元口径19.0cm、77は復元口径16.2cmで、共に肩部はほとんど張らず、口縁部は直線的に外傾している。胴部内面は横方向のヘラ削りを施しているが外面調整は磨滅しており不明である。

78~83は丸型土錐で全長は2.2~3.0cm、最大幅は2.5~3.2cmの規模をもち、現状の重量は78が16.9g、79が18.6g、80が24.3g、81が22.8g、82が16.0g、83が19.6gである。

84は須恵器直口壺で復元口径8.4cmである。口縁部は緩やかに外傾したあと、途中から緩やかに内湾しており、器壁は極めて薄い。

85・86は土師器高杯で、85は底径9.1cmである。86は底径7.5cmで、杯部と脚部の接合の際に、外周に粘土紐を巻き付けて補強している。

87は土師器の小型壺で、復元口径は6.0cmである。器壁は薄く仕上げているが、磨滅が激しく調整は不明である。

88は土師器の手捏ね土器で、口縁部は不定形であるが口径は7.0cmである。器壁の厚さも部位により2.0cm~0.2cmの差がある。

89は水晶製の勾玉で、全体的に丁寧に研磨されているが、下半部は欠損している。残存長は1.5cmで、現状の重量は2.34gである。穿孔一方方向から行なわれており、孔径は1.5~3.5mmである。

90・91は白磁碗である。90は底径5.8cmで、内面には白褐色の釉薬が塗布されているが、底面は無釉である。91は口縁部の一部のみが残存するが、端部は外方向に摘み出して終わっている。

92・93は土師皿である。92は口縁部が欠損しているが底径は5.1cmである。胎土は緻密で明褐色白色を呈している。93は口径9.2cm、器高1.9cmで、底部には糸切り痕を残している。内面底部にはタール状の物質が付着しており、撥水性として使用された可能性が考えられる。

94・95は瓶の把手である。94は全長10.7cmで、穿孔された瓶の胴部に把手の基軸部を貫入させ、外面の接合面外周に粘土紐を巻き付けて固定させている。95は瓶本体から剥離しており、94と同様な接合方法がよく観察できる。

96~98は移動式龕である。96は廟正面の部分で、焚口に向かって左側の裾正面部と考えられる。横に開く廟は付け廟であり、前方へ向けて内湾している。

98-A・Bは同一個体の廟上部と右側の裾部と考えられる。器壁もやや薄く廟も短くなっている。

第3節 III区の調査概要

III区の立地・層序（第14・15図）

III区は平ノ闘池西岸の南から北側に伸びる標高15~32mの丘陵斜面に存在する。

調査区は中央が谷状にくびれており、2段から3段の凹みがみられ、試掘トレンチにより大量の遺物が残存する堅穴住居跡2棟以上の存在が確認された。

調査区の北側の斜面にも不自然な平坦面が存在することや、平ノ闘池の辺では広範囲に渡って土器片が採集できることから、丘陵斜面の広い範囲に渡って遺構が存在することが考えられる。

丘陵尾根部は馬の背状で平坦部は少なく、3カ所でトレンチを設定したが、遺構や遺物は確認できなかった。

III区の層序は尾根部に近い南端と北端では表土より赤褐色の地山が現れる。しかし、中央部は谷部に当たるため、赤褐色の地山土の上層に霜降り状の茶褐色土層が厚く堆積し、谷側の遺構はその面から掘削されている。

遺構の埋土は下層に暗黄褐色土が堆積した後、上層に8~9世紀の土器や木炭を含む暗茶褐色土層が堆積し、その上に淡赤褐色の表土が堆積していた。

III区上段土器滝まり1

遺構 この土器滝まりは堅穴住居跡S I 01の北西側の上方斜面から検出したが、掘り形や土層の変化などは確認できず、土坑などに伴う可能性は少ない。

遺物は径3mほどの範囲からやや散らばったように分布しており、包含層中の遺物として取り上げたため、個々の出土状況、出土位置を明確にすることはできなかった。

また、元来掘り形を伴う遺構に付属していないため転落している破片も多く、S I 01埋土上層や中段の表土中から発見される個体もあった。

遺物（第16・17図）

土器滝まりからは6世紀後半、8世紀前半、9世紀の各時期の遺物から出土している。

6世紀後半の遺物として須恵器杯蓋99、杯身100・101、高杯102、中型壺103があげられる。

99は復元口径12.2cm、器高4.1cmで、天井部は中心から後の直上まで丁寧な回転ヘラ削りを施している。稜は極めて退化しており、浅い段によって表現されている。

100は復元口径11.3cmの杯身であるが、立ち上がりはやや短く内傾している。

101は復元口径9.9cm、推定器高4.5cm、最大径12.6cmで、立ち上がりは細く内傾している。底部は丸く、口径に対して器高が高く深い器である。回転ヘラ削りは底部の2/3程度まで達している。

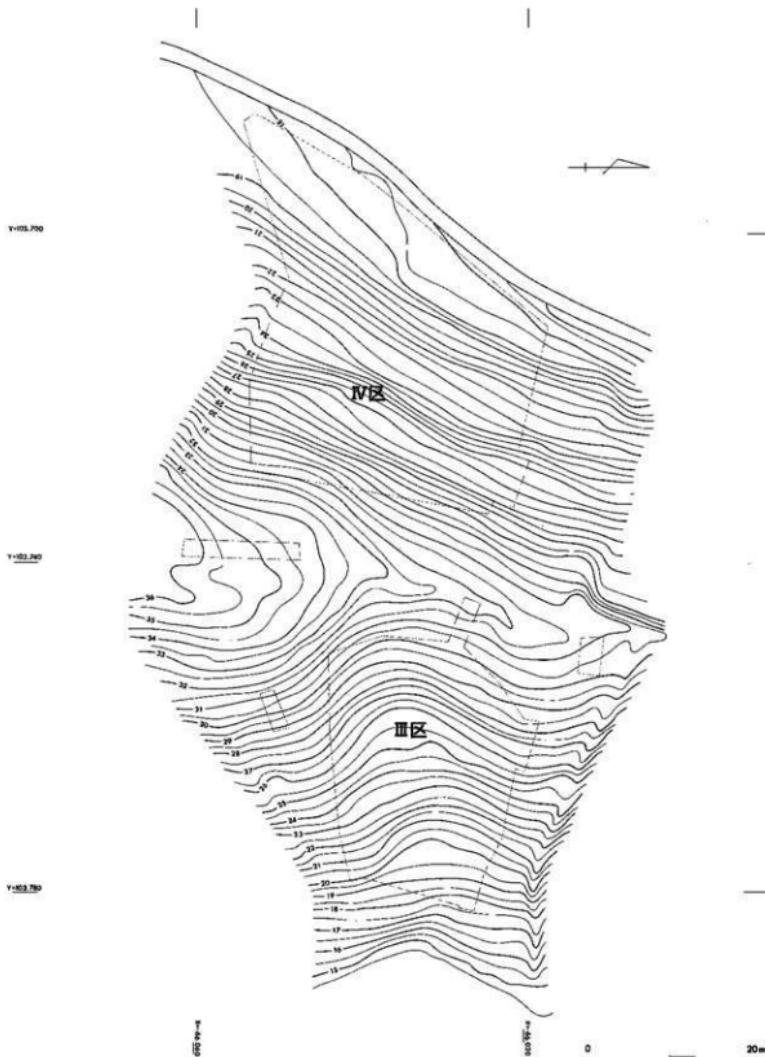
高杯102は口縁部と脚端部が欠損している。脚部には継長三角形2方向透かしが穿たれている。

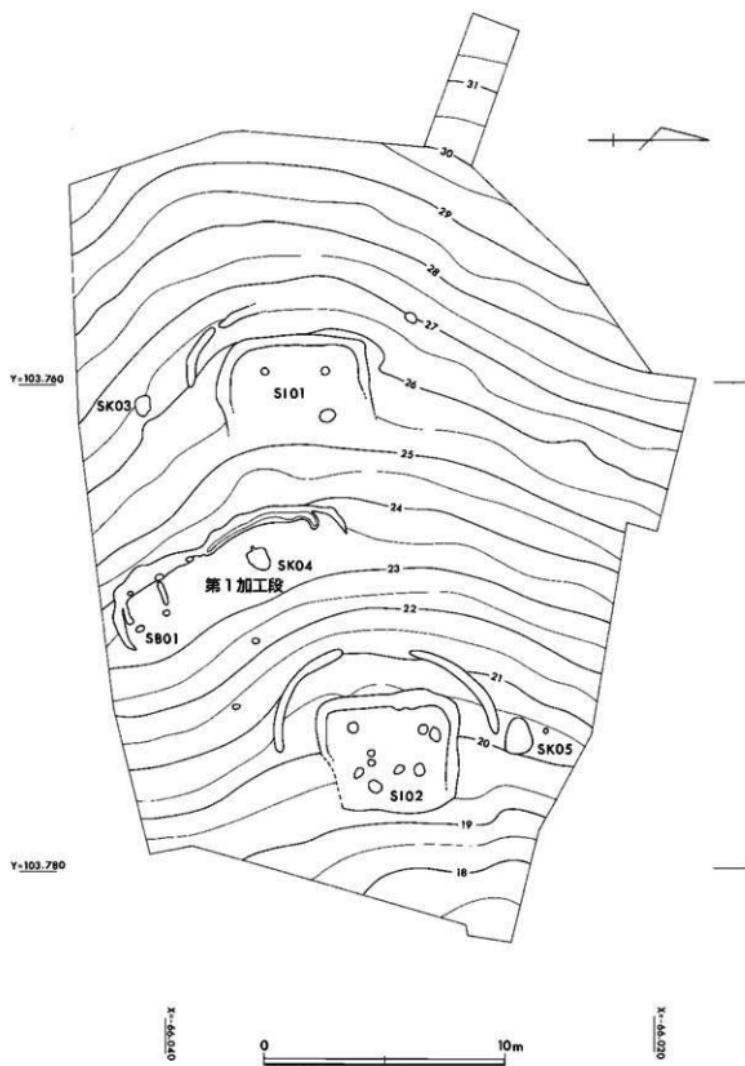
中型壺103は口径20.3cmで、胴部下半を欠損している。口縁端部は外側に折り返し、玉縁状となっている。胴部内面は確認できるだけ8重弧をもつタタキ具による同心円タタキを頭部よりやや下がった位置から施している。胴部外面は平行タタキを施した後、回転カキメ調整を行なっている。

8世紀前半と考えられる遺物としては高台付短頸壺104、高台付碗105があげられる。碗105は短頸

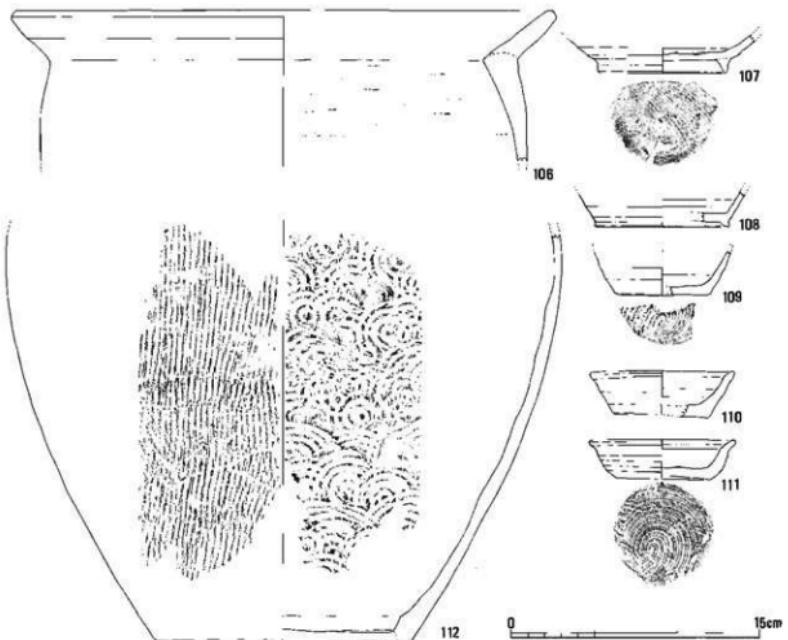
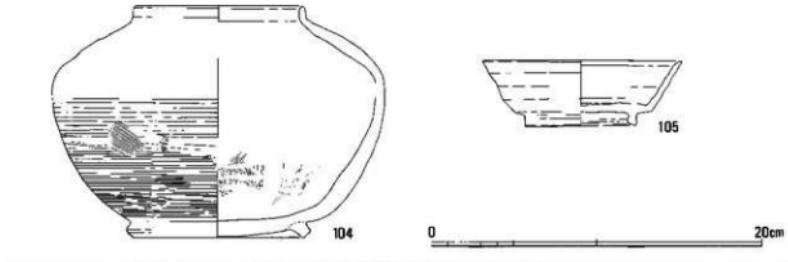
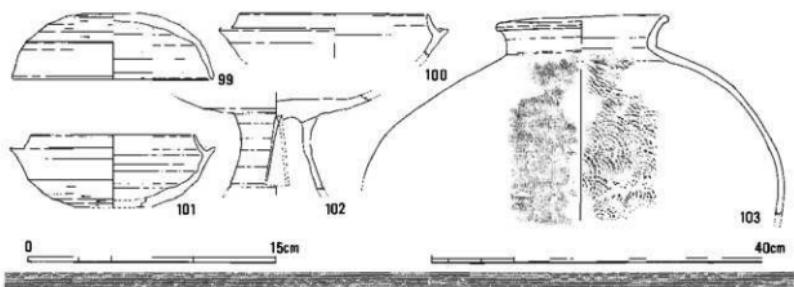
壺104の蓋として転用されていた可能性がある。

短頸壺104は口径10.1cm、器高14.2cm、底径10.4cm、最大径20.2cmで焼成は堅緻で、胴部下半は濃赤褐色に焼きあがっている。口縁部は短く、やや内傾気味に立ち上がっている。肩部はよく張っているが丸みを保ち、底部も丸底を保っている。胴部下半は平行タタキを施した後、回転カキメによって最

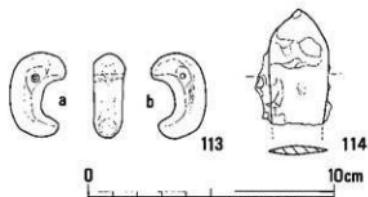




第15図 德見津遺跡III区遺構配置図 (S=1/200)



第16図 德見津遺跡Ⅲ区上段土器溜まり1出土遺物実測図 (S=1/3)



第17図 III区上段土器測まり1
出土遺物実測図2 (S=1/2)

だして終わっている。高台は杯部の立ち上がりより内側に取り付いており、真ドに伸びた後、脚端部内側に平坦面を持たせるため端部は内外共に肥厚している。全体的に作りがシャープで丁寧な印象を受ける。

9世紀の遺物としては土師器大型壺106、土師器碗109、須恵器高台付碗107・108、須恵器小型皿110・111、須恵器中型平底壺112などがあげられる。

土師器大型壺106は復元口径32.5cmで、肩部はほとんど張らず、口縁部は大きく外傾し直線的に伸びている。頸部直下より丁寧なヘラ削りが施されているため、口縁部との境界はシャープに仕上がっている。口縁部は非常に丁寧なヨコナデによって平滑に整えられている。

土師器碗109は口縁部は欠損しているが底径5.2cmで、底部は回転糸切りにより切り離している。

高台付碗107は口縁部が欠損しているが底径7.6cmで、高台は断面長三角形を呈している。底部は静止糸切りにより切り離され、その後軽くヨコナデされている。

高台付碗108は口縁部が欠損しているが底径8.0cmで、高台は小さく、杯部の立ち上がりの傾斜変更点に直接取り付いている。底部の切離しは回転糸切りにより行なわれている。

須恵器小型皿110は口径8.6cm、器高2.7cm、底径5.7cmである。底部は回転糸切りによって切り離し、口縁部は直線的に外傾して立ち上がった後、端部内面に平坦面を持たせ、外側に若干つまみ出して終わっている。S I 0 1 埋土上層での検出である。

須恵器小型皿111は口径8.7cm、底径5.7cm、器高2.4cmで、底部は回転糸切りにより切り離している。口縁部は内湾気味に外傾して立ち上がり、口縁罐部は外側に大きくつまみ出しており、そのため口縁端部内面には平坦面が形成されている。

須恵器中型平底壺112は底径14.8cm、最大径33.8cmで、肩部はあまり張っていない。肩部外面は1cm当たり3条のタテ方向の平行タタキ、内面は直径約5cmで5重同心円の当て具によるタタキを施している。底部内面はユビナデにより仕上げているが、底部外面は平行タタキを施した後、ユビナデによりタタキ痕を半分程度消している。底部の形成は円盤状の底部を作り出した後、その外周から粘土紐を積み上げた様子が確認できる。

碧玉製勾玉113は6世紀後半のものと考えられる。最大長は3.45cm、厚さ2.25cm、重量10.59gで、コの字形の形態を持っており、上下のバランスが均等に近くなっている。穿孔はa面側からb面側に一方方向に行なわれており、b面側貫通の際に衝撃でb面の孔周辺が凹状に剥離している。a面側の孔周辺にも剥離跡が見られるが、両面とも丁寧に研磨され平滑に美しく仕上げられている。

広根三角形鉄鎌114は鎌身関部以下が欠損しており、残存長4.7cm、現重量12.6gである。

豎穴住居跡 S I 0 1

遺構（第18・19図）豎穴住居跡 S I 0 1 は標高24.8m前後のレベルに床面を作り出している。住居跡は西側背後に丘陵尾根部を背負い、東側は平ノ関池側に開け、急斜面へとつながっている。

住居跡の規模は上場で南北6.15m、東西は谷側が流出しているため定かではないが、現状で4.20m以上である。壁体溝の内側からの床面幅は南北5.26m×東西4.0m以上であるが、現在残存している北西と南西のコーナーはいずれも隅丸方形を呈しており、床面積は20m²前後と推定される。

建物は4本柱構造が想定されるが、南東側のものは試掘トレンチにより破壊されている。現状の柱間はP 1～P 2間が1.8m、P 2～P 3間が2.44mであることから、隅丸長方形の平面プランを取っていると考えられる。

壁体溝は住居の西側半分はきれいに廻っているが、東側では自然に消失している。また、南側の壁体溝を跨ぐようにして、全長38cmの石が据えられているおり、住居入口の踏み石の可能性を考えられるが、明確な機能は不明である。なお、この住居跡からは火廻を示すものは検出できなかった。

豎穴住居全体の構造としては、急傾斜地に立地することから、山側は深く地面を掘り下げなければならないが、谷側は地面を大きく加工することなく使用している可能性が高い。つまり山側だけを掘り下げていると考えられることからS I 0 1 は「半豎穴住居」とでもいうべき構造をとっている。

そして、急傾斜地に立地しているため山側からの雨水などの侵入に備え、南西側コーナーの上方には全長4.2m以上、最大幅36cm、深さ20cmの三日月形の溝S D 0 1 が掘削されている。本來はS I 0 2などと同様に北西側のコーナーの上方にも排水溝があったと考えられるが、ここでは検出することができなかった。

埋土の堆積状況は床面直上に暗黄褐色土系の土が堆積しているが、この層によってこの住居が廃絶した前後の時期の遺物は完全にパックされている。その後、多量の木炭を含む暗茶褐色土層が堆積するが、層中には8・9世紀の遺物を含んでいる。

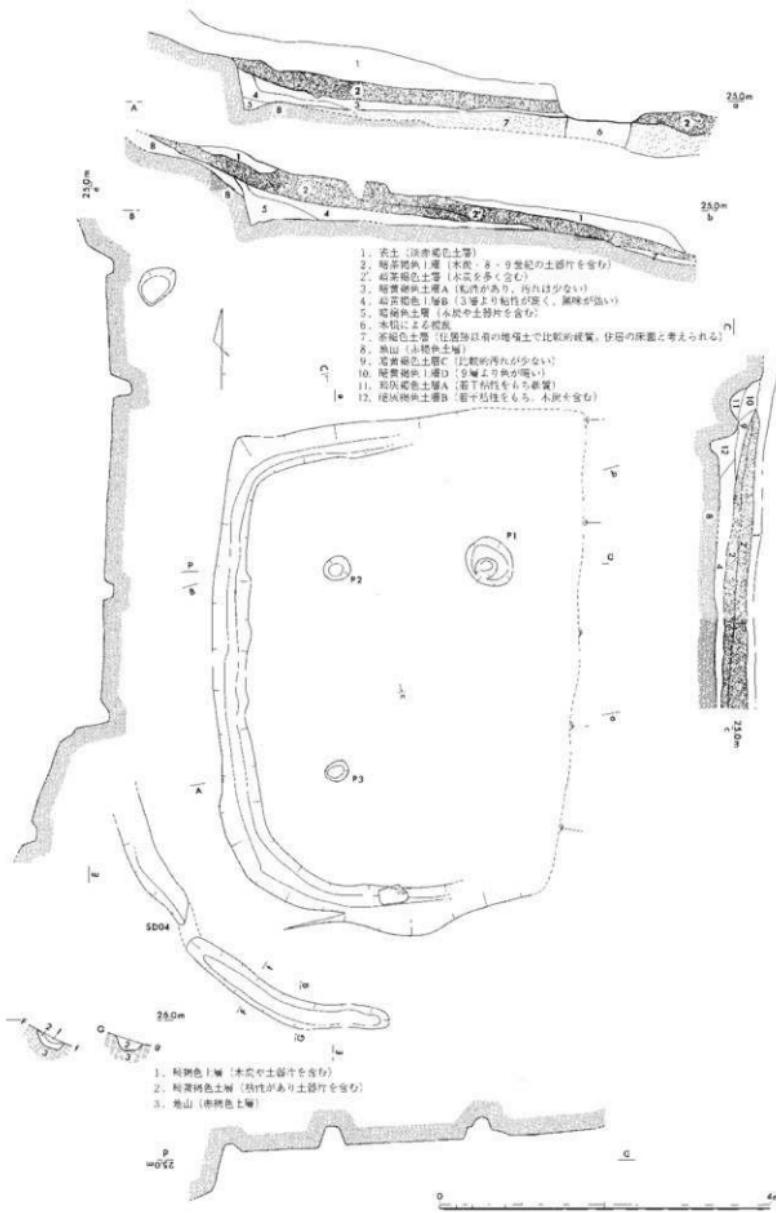
また、住居の床面には貼床をしておらず、地山を削り込んだ北側や西側は地山の赤褐色土をそのまま床面にしている。そして谷の中央に位置するA-a断面付近では住居建設以前に堆積していた茶褐色土を床面としている。

遺物出土状況（第19図）S I 0 1 では床面直上から16個体以上の遺物が出土している。内訳は須恵器14個体、砥石1個、鉄製品1個であり、土師器は確認できなかった。

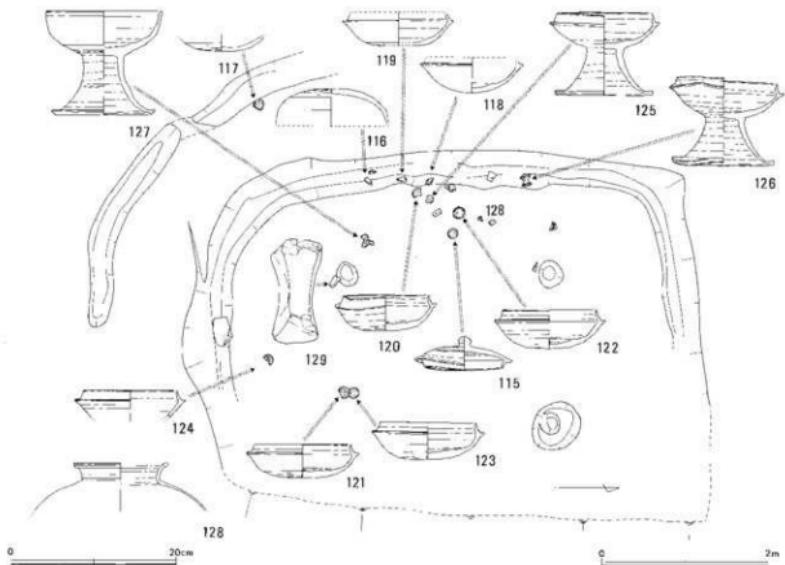
遺物は西側中央部から壁体溝内に集中しており、上方から転落している個体も含まれる可能性がある。しかし、杯身121と123などは南東側の床面に並列して置かれており、原位置を保っていると考えられる。ミニチュア鉄斧130は岡化できずに取り上げたため厳密な位置を示すことができないが、P 2横のC-c間セクションベルト下から出土している。

土坑S K 0 3

遺構（第20図）土坑S K 0 3 は豎穴住居跡 S I 0 1 の南方に存在し、長軸90cm×短軸62cm、深さ10～22cmの規模をもっているが、その性格は不明である。土坑の上面には20cm前後の偏平な石や須恵器

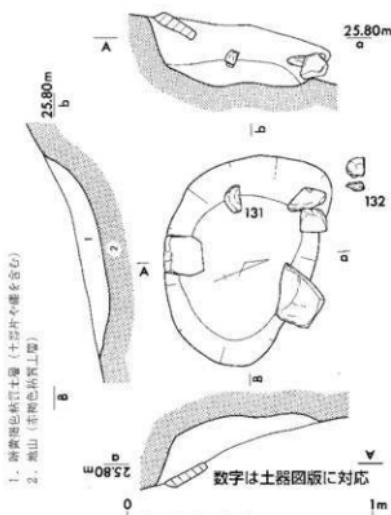


第18図 德見津遺跡III区SI01・SD04実測図 (S=1/60)



第19図 徳見津遺跡S101・SD04遺物出土状況図
(遺構S=1/60・遺物S=1/6)

の杯身131・132が出土している。



第20図 III区土坑SK03実測図 (S=1/20)

豊穴住居S101床面・溝状遺構SD04
4・土坑SK03出土遺物 (第21図)

豊穴住居S101床面直上からは須恵器蓋115、杯蓋116、杯身118～124、有蓋高杯125・126、無蓋高杯127、中型甕128、砥石129、ミニチュア鉄斧130が出土している。

115はやや偏平な円形つまみを持つ蓋である。口径9.5cm、器高4.3cm、最大径12.0cmで、全体的に焼き歪みが見られる。蓋の上面には2本の沈線で区画した中に、先端が6条に分かれた櫛状工具による連続刺突文が施されている。この蓋は通常の杯身とセットになるものではないが、セットになると考えられる他器種も調査区内からは出土しなかった。

杯蓋116は推定口径13.5cm、推定器高4.6cmで、焼成が著しく悪く土師質で調査中か

ら調査後にかけて損壊が進んでいる。天井部の2/3は回転ヘラ削り調整を施しているが、後部には特にアクセントをつけていない。

杯身118は出土時には2/3程度残存していたが、焼成が極めて悪く軟質で、調査途中から水洗中に破損が進み現状では口縁部の復元は困難である。最大径は12.6cmであるが著しく磨滅しているため調整は不明である。

杯身119も焼成が極めて悪く、器壁の剥離が進んでいる。口縁端部は欠損しているが推定口径11.5cm、推定器高4.1cm、最大径13.4cmで、底部の1/2程度を回転ヘラ削りしている。

杯身120は口径10.4cm、器高4.5cmで、底部外面の2/3を回転ヘラ削りしている。口径に比べてやや器の深い個体である。焼成は比較的良好が、外面は焼きムラがあり口縁には焼き歪みが見られる。

杯身121はほぼ完形の個体で口径11.6cm、器高4.2cmで、底部は中心部から約2/3程度回転ヘラ削りを施している。焼成は概ね良好で、淡灰色を呈している。

杯身122は口径11.6cm、器高4.8cmで、底部は1/2程度まで回転ヘラ削りしている。焼成はやや不良で、淡褐色を呈している。

杯身123は口径11.6cm、器高4.6cmで、底部の回転ヘラ削りは1/2程度まで達している。立ち上がりは一端内傾した後、直立気味に伸びている。焼成は概ね良好で、色調は淡褐色～淡灰色を呈している。

杯身124は口径11.4cm、最大径13.7cmで、底部は欠損している。焼成はやや不良で色調は淡褐色を呈している。

有蓋高杯125は口径11.6cm、底径11.7cm、器高10.2cmで、杯部に焼き歪みが見られる。脚部は大きくラッパ状に開き、端部外面にはヨコナデによる凹面が生じている。

有蓋高杯126は口径12.2cm、底径12.1cm、器高11.0cmで、全体的に焼き歪みや焼成時の付着物が見られる。特に受部には重ね焼きにした際に蓋の口縁端部が貼り付いたままになっている。また、125と同様に脚部は大きくラッパ状に開き、端部にはヨコナデによる凹面をもっている。杯部基底は回転ヘラ削りが見られ、完全にはナデ消されていない。

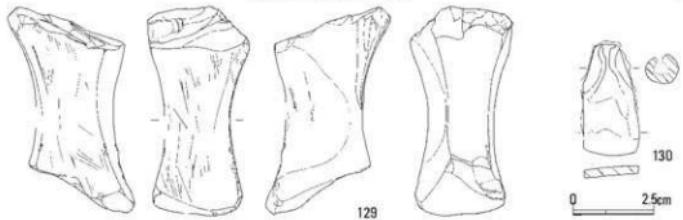
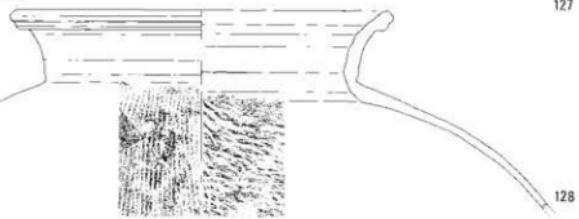
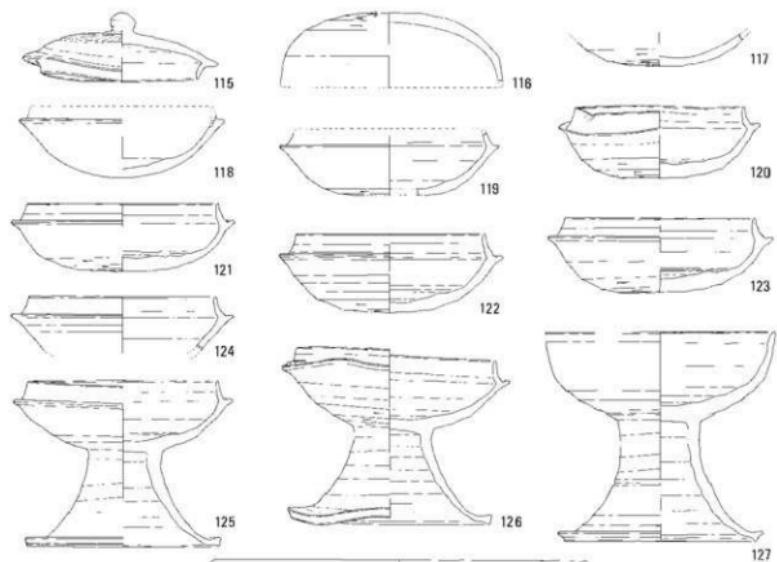
無蓋高杯127は口径14.0cm、底径11.7cm、器高12.9cmで、杯部は比較的深く、口縁端部内面には平坦面を持っている。脚部は1/2程度まではあまり開かないが、途中からからは大きくラッパ状に開いている。脚端部には強いユビナデとつまみ出しによって凹面が作られ、その両端はシャープにつまみ出されている。

砥石129は断面台形で、側面の4面全てを研磨面として利用している。全長は12.8cm、重量は472.22gで、本遺跡内では最大の砥石である。石材は砂粒などが肉眼で確認できず、明るい黄白色を呈することから堆積岩系のものと考えられる。

ミニチュア鉄斧130は全長3.5cm、刃部幅1.6cm、厚さ0.2cm、現状での重量4.49gである。袋部の断面は円形を志向しており、その径は1cm前後になっている。

溝状遺構S D 0 4からは杯身117が出土している。117は検出時には2/3以上が残存していたが、焼成が極めて悪いため劣化が激しく、取り上げ・水洗時に受部以上の部位が剥離崩壊した。色調は淡褐色を呈している。

土坑SK03からは杯蓋131、杯身132が出土している。



第21図 德見津遺跡Ⅲ区SI01床面・SK05出土遺物実測図
(130はS=2/3その他はS=1/3)

131は口径13.7cm、器高4.6cmで、天井部の約2/3程度まで比較的丁寧な回転ヘラ削りがおよんでいる。肩部には1条の沈線が施され、稜を表現している。口縁端部内面にはやや広めの平坦面を作り出している。

S I 0 1 墓土中の遺物（第22図）

堅穴住居跡S I 0 1下層埴土中からは須恵器杯蓋133～143、蓋144、杯身145～151、鉢152、横瓶153、中型壺154・155、土師器高杯156などが出土している。

有蓋高杯の蓋133は口縁端部が欠損しているが、推定口径は13.0cmで、天井中央には中央が凹んだ円盤形のつまみが付いている。つまみの接合のため回転ヘラ削りはナデ消されており、肩部には1条の沈線を施すことによって稜を表現している。

杯蓋134は口径13.3cm、器高4.5cmで、天井部の1/2程度に回転ヘラ削りを施しているが、削り残しもあり、やや雰然としている。肩部には強いアクセントは見られない。

杯蓋135は口径12.7cm、器高4.0cmで、天井部の2/3程度まで回転ヘラ削りを施している。稜部を表す沈線などは見られないが、屈曲が急なため稜状の変化点となっている。

杯蓋136は口径13.8cm、器高4.4cmで、天井部は約2/3の範囲に渡って丁寧な回転ヘラ削りを施している。肩部には1条の深い沈線を巡らせ稜を表現している。

杯蓋137は口径12.6cm、器高4.1cmで、天井中心部の調整は回転ヘラ削り後ナデ調整を行なっており、その外周は回転ヘラ削りが肩部近くまで達している。肩部には稜の表現は見られない。

杯蓋138は復元口径12.3cm、器高4.0cmで、天井部の約1/2程度が回転ヘラ削りされている。肩部にはごく浅い沈線が施されている。

杯蓋139は復元口径12.5cm、器高5.1で、口径に比べて天井が高くなっている。天井部の1/2程度までは丁寧な回転ヘラ削りが施され、肩部には深い沈線が巡らされている。また、口縁端部内面には極めて痕跡的な沈線が施されている。

杯蓋140は口縁端部が欠損しており、推定口径は13.1cmで、天井の約1/2程度を回転ヘラ削りしている。肩部には深い沈線が施されている。焼成はやや不良である。

杯蓋141は天井部が欠損するが、口径は13.8で、肩部に深い沈線を施している。

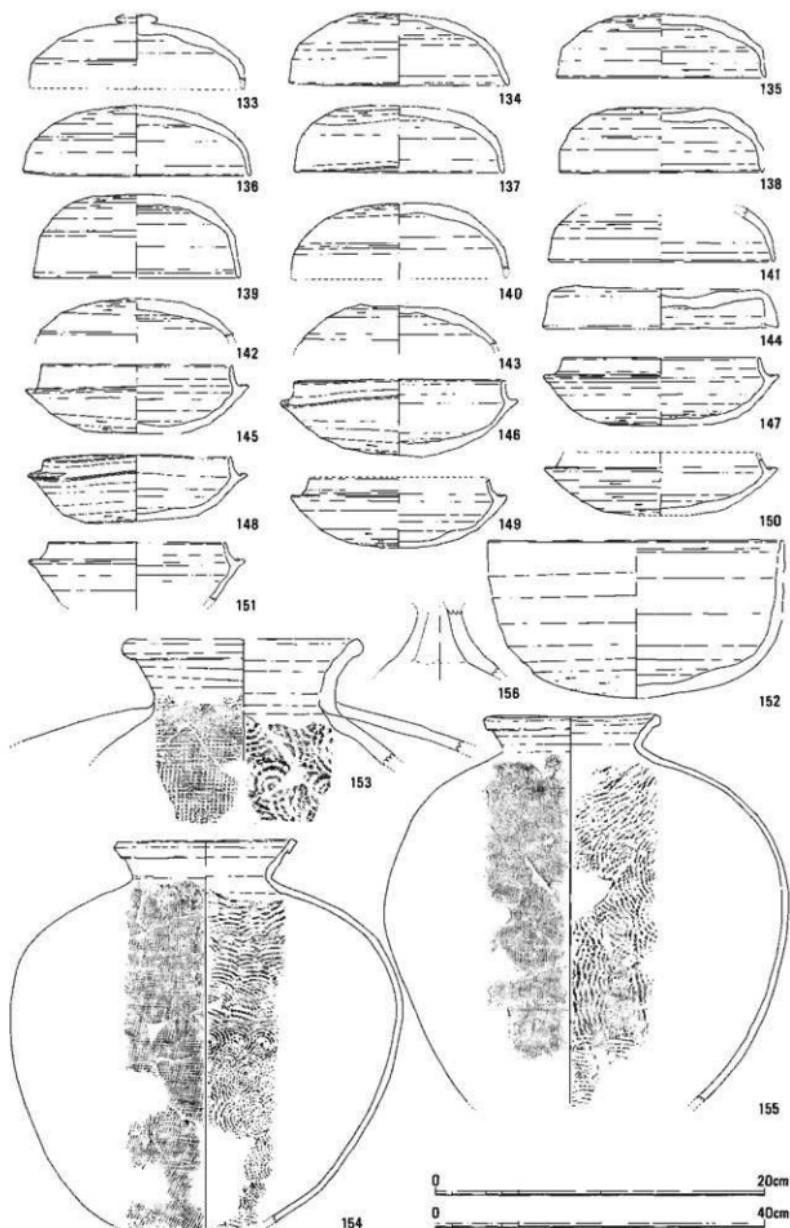
杯蓋142・143は共に口縁部が欠損したもので、稜の近くまで回転ヘラ削りしているが、稜は深い沈線によって施されている。共に焼成はやや不良である。

蓋144は口径14.2cm、器高2.6cmで、天井部は焼き歪みにより陥没してヒビ割れている。天井部は回転ヘラ切りの後、乱雑なナデ調整を行なっている。口縁端部はやや内傾する広い平坦面を作り出している。この蓋に対応する器種は調査区内には見当らないが、形状から短頸壺などとセットになると考えられる。

杯身145は口径11.6cm、器高4.3cmで、底部の2/3程度まで回転ヘラ削り調整がおよんでいる。立ち上がりは直立気味に内傾して、比較的長く伸びている。

杯身146は口径11.1～12.7cm、器高4.8cmで、焼き歪みのため平面形は梢円形を呈している。底部の回転ヘラ削りは1/2程度までしかよんでもないが、中心部まで丁寧に削られている。

杯身147は口径12.0cm、器高4.2cmで、器壁がやや薄い。天井部は回転ヘラ切りのままで削りはその



第22図 德見津遺跡III区S101埋土中出土遺物実測図
(154・155はS=1/6・その他のS=1/3)

外周にしか及んでいない。焼成はやや甘く、色調は明灰色を呈している。

杯身148は口径11.3cm、器高4.3cmで、全体的に緩やかな焼き歪みが見られる。さらに重ね焼きの際に上に乗っていた蓋の口縁端部が接着したり、胴部の一部に焼成時に5mm程度の穴が貫通しているなど粗い造作が目に付く個体である。

杯身149は口縁端部が欠損しているが、推定口径は10.8cm、推定器高4.3cmで、天井部の中心2cmあまりは削り残している。焼成はやや不良で、色調は淡灰色である。

杯身150は口縁端部が欠損しているが、推定口径は11.8cm、推定器高3.9cmで、天井部の回転ヘラ削りは3/4程度まで達している。

杯身151は底部が欠損しているが、復元口径10.8cmである。

須恵器鉢152は口径18.0cm、器高9.6cmで、底部は回転ヘラ削りを施した後、軽いヨコナデをおこなっているが、ヘラ削りの砂粒の動きを完全には消し去ってはいない。底部は丸底であり、胴部から口縁部にかけてはやや外輪気味に直線的に立ち上がっている。口縁端部内面には浅い段が巡らされている。焼成は堅緻で全体的に淡褐灰色を呈している。

横瓶153は口縁部のみ残存している。口径13.9cm、頸部最小径11.0cmで、口縁部の内外面は回転ヨコナデ調整を施し、口縁端部外面は玉縁状に肥厚している。胴部外面には1cmあたり4条の平行タタキを横方向に施した後、タテ方向に回転カキメ調整を行なっている。胴部内面は頸部下より同心円文タタキを行なっている。焼成は内側がやや脆く、外面は淡灰色、内面は淡褐灰色を呈している。

須恵器中型壺154は口径21.0cm、残存高47.0cm、最大径48.0cmである。口縁部は外傾して直線的に伸び、口縁端部は外側に折り返し、上面と外面に平坦面をもつ玉縁状口縁に仕上げている。

胴部は肩が張って、ややすの詰まった倒卵形を呈しており、最大径は底部から2/3上がった部位に来ると考えられる。

胴部内面は頸部下を同心円文タタキで調整しているが、頸部直下から肩部までは必然的にタタキ具の外縁を使って調整することになり、同心円ではなく青海波文と称すべき文様となることが観察できる。そして、肩部内面から約20cm下がった胴部内面まではタタキ具の正面を使用して調整しており、同心円文が施されている。さらに下がった底部付近では再び青海波文が現れている。

胴部外面は1cmあたり3条のタテ方向のタタキを施した後、回転カキメを施しているが、胴部下半の1/4はカキメ調整が行なわれていない。

須恵器中型壺155は口径20.6cm、残存高47.7cm、最大径49.2cmで、口縁部は若干外湾しながら外傾していくが、あまり長くは伸びていない。口縁端部は上面と外面に平坦面を持つ玉縁状になっており、断面は略四角形となっている。胴部はやや肩が張った倒卵形を呈しているが、最大径は器高の1/2付近にきている。

胴部内面は頸部よりやや下がった位置から同心円文をもつ当て具によって調整されているが、当て具の外縁を使用してタタキを施しており、全体的に文様は青海波文となっている。

胴部外面上半は1cmあたり3~4条のタテ方向平行タタキを施した後、1cmあたり7条程度の回転カキメ調整を行なっている。胴部下半は平行タタキのみでカキメは施されてはいない。

土師器高杯156は杯部と脚端部を欠損している。全体的に磨滅しており調整などは判然としないが、外面にタテ方向の平坦面が認められ、面取りをしている可能性が考えられる。

豎穴住居跡 S I 0 2

造構（第23図）豎穴住居跡 S I 0 2 は標高19.4m付近のレベルに床面を持ち、Ⅲ区の中では最も標高の低い位置に立地している。住居の背後は急傾斜の斜面が立ち上がり、東側は平ノ池のある谷部に向かって急激に落ち込んでいる。

住居跡の規模は上場で南北5.80m、東西は谷側が流失しているため定かではないが、現状で4.80m以上である。壁体溝の内側肩からの床面幅は南北5.30m×東西4.35m以上であるが、現在残存している北西側と南西側のコーナーはいずれも隅丸方形を呈し、さらに、南北の壁体溝が谷側へ行くににしたがって中央に接近しており、住居の平面形態はわずかながら台形になるものと考えられる。

建物はP 1～P 4 を主柱穴とする4本柱構造になるものと考えられ、P 1～P 2 間は1.8m、P 2～P 3 間は2.95m、P 3～P 4 間は1.80m、P 1～P 4 間は2.35mの柱間を取っている。この4本の主柱穴を結んだラインも台形状を呈している。

壁体溝は西・南・北側の各辺をコの字状に巡っているが、南側及び北側の壁体溝は東側の辺に通り込まずにそのまま谷側に向けて途切れていった。壁体溝の下場幅は12～15cm、床面からの深さは10～15cmであった。

住居跡床面のP 1～P 4 を結んだラインのやや内側にドーナツ状の焼土を検出したが、焼き締まっておらず、恒久的な地床炉として機能していた可能性は低いと思われる。

住居跡の層序としては、住居建設以前にかなりの堆積土がたまっていたり、S I 0 1 のように床面に岩盤が現れるなどではなく、橙褐色粘質土や暗灰褐色土などが床面になっている。

床面近くの埋土下層には茶褐色土が堆積しており、住居廃絶前の土器をパックしている。そして、その上層には木炭などを多く含む暗灰褐色土層が堆積しており、上方から転落してきた土器などが多く含まれている。

住居の山手側外周には三日月形の溝 S D 0 6 が南北に分かれて配置されている。検出時には中央部は途切れていたが、元来周溝が半円形に巡っている可能性は否定できない。S D 0 6 は北側の残りの良いE-e断面では上場幅46cm、下場幅23cm、深さ40cmの規模を持っていた。

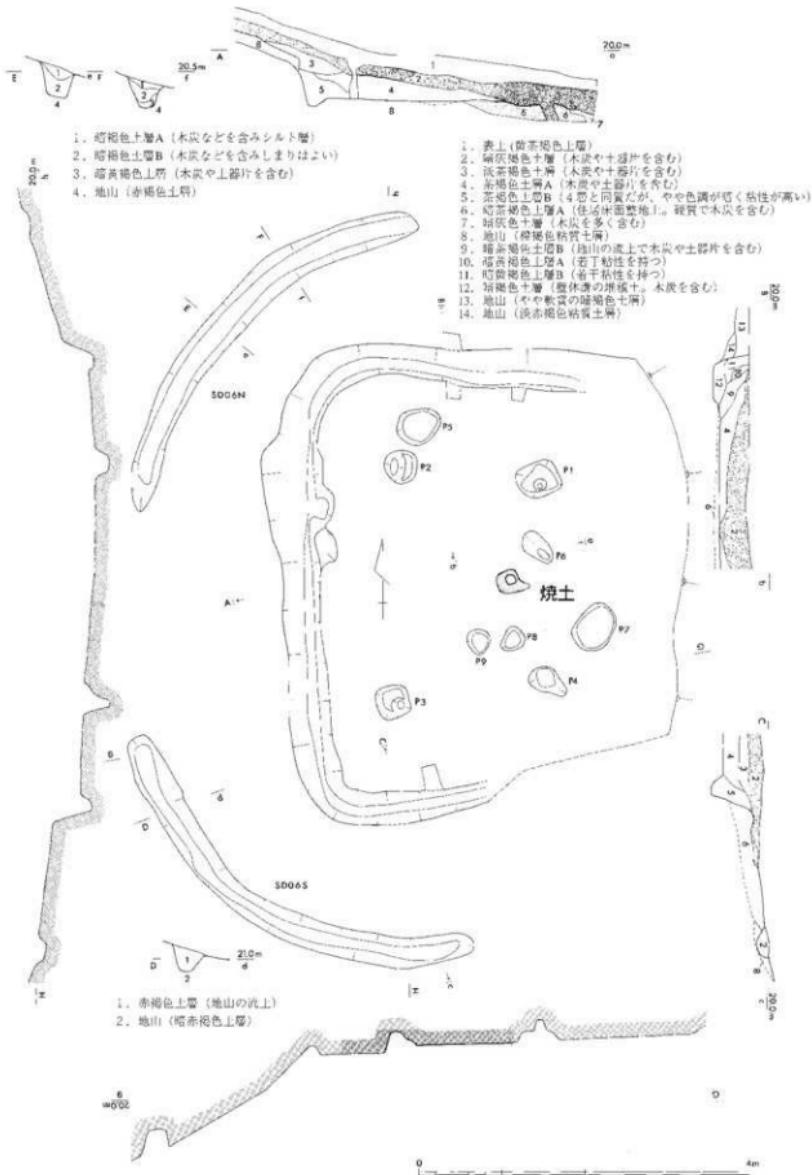
なお、S D 0 6 N の埋土は地山より淡色のものであるが、S D 0 6 S の埋土は地山基盤層の赤褐色土であり、溝の上方に存在する第1加工段の掘削と関係があると考えられる。

S D 0 6 N の南西には東西1.33m×南北1.06m、深さ16cmの土坑 S K 0 5 が存在するが、遺物などは出土しなかった。

S I 0 2 は細部に違いはあるものの、規模や平面プラン、周溝の形態などがS I 0 1 と極めて近似しており、共通して設計プランが存在したと考えられる。

遺物出土状況（第24図）S I 0 2 では床面や壁体溝内から9個体以上、S D 0 6 N から3個体以下、S D 0 6 S から7個体以上の須恵器が出土しているが、土師器は出土していない。そして、S D 0 6 S などは上方から転落した状況のものが多く、全体的に住居廃絶時の原位置を保つものは少ないと考えられる。また、杯蓋などのセット関係も造構内だけで捉えることは難しい状況である。

須恵器中型壺128などはS I 0 1 床面で検出した破片とS D 0 6 S 出土の個体が接合するなど、標



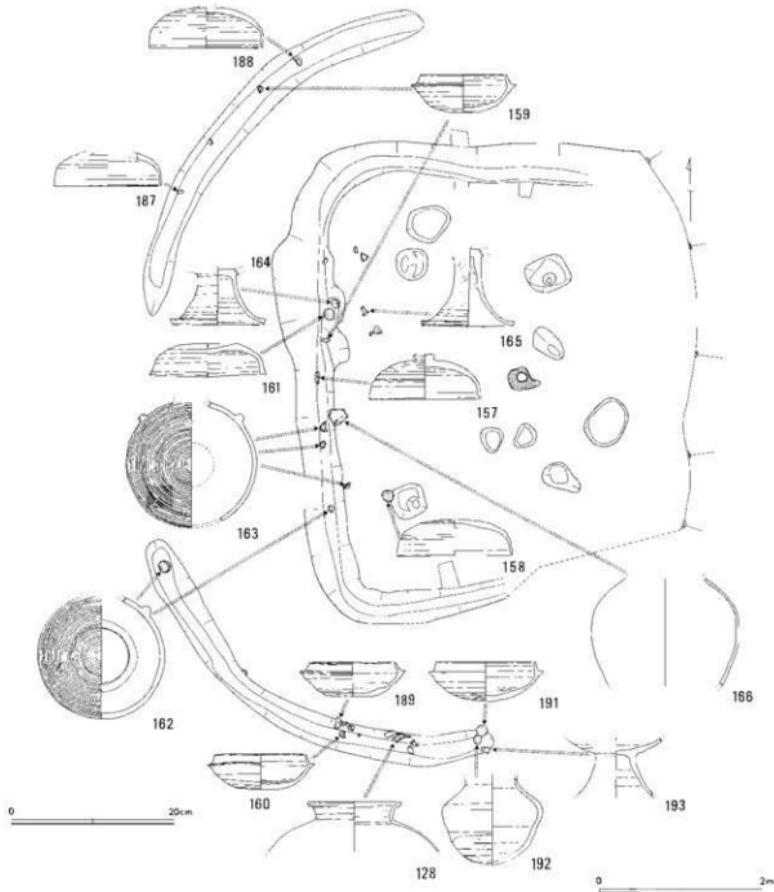
第23図 徳見津遺跡III区S102・SD06実測図 (S=1/60)

高いS I 02・SD 06は上方から遺物が転落しやすい状況下にある。

竪穴住居跡 S I 02・満状遺構 SD 06 出土遺物（第25・26図）

S I 02からは杯蓋157・158、蓋161、杯身159・160、提瓶162・163、高杯164・165、中型壺166が出土している。

有蓋高杯の蓋157は口径13.7cm、器高5.7cmで、天井部中央には径2.7cmの中央が凹んだ円盤状のつまみが取り付けられている。天井部の回転ヘラ削りは縁の近くまで達しているが、削りは浅くナデのような調整になっている。肩部には1条の深い沈線を巡らせ稜を表現している。口縁端部内面にはやや凹み気味の広い平坦面を作り出している。焼成はやや不良で、淡灰色を呈している。



第24図 德見津遺跡III区S I 02・SD 06遺物出土状況図
(遺構S=1/60・遺物S=1/6)

杯蓋158は口径13.7cm、器高4.6cmで、天井部外面の1/2程度を回転ヘラ削りしている。肩部にはやや幅広の浅い凹線が巡り、口縁端部は細く、途中から若干外傾している。焼成は著しく悪く、表面は粉が浮いたようになっている。色調は明褐色である。

杯身159は復元口径10.6cm、器高4.7cmで、底部外面は1/2程度の範囲を回転ヘラ削りしている。立ち上がりは内傾して、若干外反しながら伸びている。焼成はやや不良で、白灰色を呈している。

杯身160はS I 0 2出土の破片とSD 0 6 S出土のものが接合している。復元口径11.2cm、器高4.4cmで、わずかな焼き歪みが見られる。底部外面は1/2程度の範囲に回転ヘラ削りが施されるが、中心の径3cmの範囲は削りが及んでいない。焼成はほぼ良好で、淡灰色を呈している。

蓋161は口径14.2cm、器高4.2cmで、天井部は円形に凹んでおり、表面には板状工具による擦痕が認められる。胴部外面から口縁部内外面にかけては回転ヨコナデが施されている。口縁端部は下端に幅広の半坦面を持っており、外側に向かって若干肥厚している。焼成は堅緻で内面は淡白灰色を呈している。この蓋にセットになるような個体は調査区からは出土していないが短頸壺などの蓋になる可能性がある。S I 0 1 墓土中の144やS I 0 2 墓土中の172が同様の型式である。

提瓶162はS I 0 2の壁体溝とSD 0 6 Sから破片が出土している。口縁部は欠損しているが、胴部径は13.0~15.8cmで、あまり偏平ではなく丸みがある。外面には最終調整として1cmあたり7条程度の回転カキメ調整を施しており、カキメ原体で付けられた刺突文も2カ所で確認できる。

最初の胴部形成時に使用されていた孔は径6.8cmで、胴部形成終了時に外面から円形の粘土板で閉じられている。肩部の把手は痕跡的な小突起状になっている。

提瓶163は壁体溝内から細片化して出土したもので、口頸部と胴部の1/3以上は欠損している。復元胴部径は11.6~16.0cmで、162よりは胴部がやや偏平である。胴部外面は1cmあたり7条の回転カキメが施されている。把手は痕跡的な小突起になっているが、先端はやや下垂志向があり、把手の名残りを留めている。

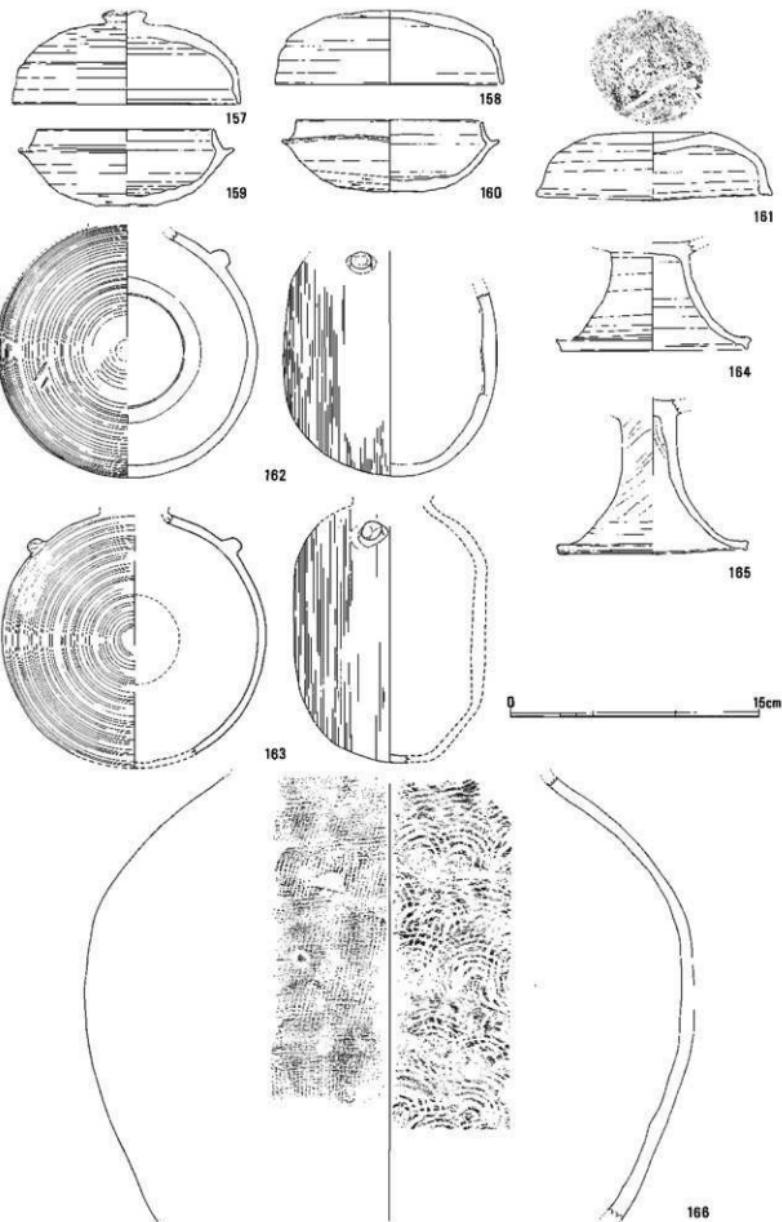
高杯164は杯部は完全に欠損しているが、底径11.2cm、脚高5.8cmの規模を持つ。脚部は全て回転ヨコナデにより仕上げているが、特に脚端部は下方に強くつまみ出しているため、先端は極めて細くシャープに仕上がり、内外面には強い凹面が形成されている。焼成は良好堅緻である。

高杯165は杯部は完全に欠損しているが、長い脚部を持つ高杯であり、底径は11.2cm、脚高8.4cmである。脚部上半は反時計周りに絞り上げた痕跡が内外面で確認できる。脚端部は側面に沈線を施し、若干上下に肥厚している。焼成は良好で明灰色を呈している。

中型壺166は口頸部と底部を欠損しているが、残存高27.0cm、復元最大幅37.0cmの大きさを持っている。胴部外面は1cmあたり3~4条の平行タタキをタテ方向に施し、その後に回転ヨコナデを粗く施し、タタキ目を1/3程度ナデ消している。胴部内面は径7.3cm以上の直径を持つ当て具によって、同心円文が打ち出されている。この当て具には少なくとも9重の同心円が彫り込まれていることが確認できる。

中型壺128はS I 0 1床面出土のものとSD 0 6 S出土の個体が接合したものであるが、肩部以下は欠損している。同一個体と考えられる破片はS I 0 1から下方の斜面では調査区の東限まで分布しており、S I 0 1付近で破碎したものが転落しているものと考えられる。

口径22.8cm、頸部最小径19.1cmで、肩部は強く張り、器壁の厚さは5mm前後の薄い作りになっている



第25図 德見津遺跡III区S 102床面出土遺物実測図 (S=1/3)

る。頸部は外傾して口縁端部に行くにしたがって外湾している。そして、口縁部は玉縁状に整えられ、上面には平坦面があり、外面には凹面が巡らされている。

胴部外面にはタテ方向の平行タタキが施され、胴部内面は同心円文当て其の外縁を使用して青海波文が打ち出されている。

豊穴住居跡 S I 0 2 墓土出土遺物（第26図）

S I 0 2 墓土からは杯蓋167～171、蓋172、杯身173～177、高杯178～183、紡錘車184、須恵質の把手185が出土しており、土師器で図示できる資料はなかった。

杯蓋167は大きく焼き歪んでおり、口径は8.4～12.4cm、器高は5.0cmである。天井部外面の1/2を回転ヘラ削りしている。肩部に稜の表現は見られず丸く收められている。

杯蓋168は口径12.4cm、器高4.3cmで、天井部外面の2/3程度は回転ヘラ削り調整を施している。天井部から口縁部に移り変わる位置に強い屈曲点があり稜線となっている。焼成はやや不良で、淡灰色を呈している。

杯蓋169は口径12.6cm、器高4.3cmで、天井部の約2/3を回転ヘラ削りしている。肩部に1条の浅い沈線を巡らせることによって稜を表現している。焼成は概ね良好で、外面は黒灰色を呈している。

杯蓋170は口径12.6cm、器高3.7cmで、やや器高の低い個体である。天井部は約2/3の範囲に回転ヘラ削りを施している。肩部には2条の浅い沈線を施すことによって稜を表現している。

杯蓋171は口径12.8cm、器高4.4cmで、天井部の2/3程度の範囲で回転ヘラ削りが行われている。肩部には浅い沈線を巡らせ稜を表現している。口縁部は薄くシャープに仕上げている。

蓋172は口径14.9cm、器高4.1cmで、天井部はやや凹んでおり不定方向ナデが施されている。肩部には狭い幅ながらヘラ削りが施されるが、口縁部周辺は全て回転ヨコナデである。口縁端部には広い平坦面を作り出しており、やや外側に肥厚している。この個体も短頸轍などの蓋の可能性が考えられるが、調査区内ではセットになる資料が得られなかった。

杯身173は口径11.0cm、器高4.1cmで、底部外面は約1/2程度を回転ヘラ削りしている。立ち上がりは一端内傾した後、途中から直立気味に伸びている。焼成は概ね良好であるが内面はやや甘い。

杯身174は復元口径11.8cm、器高4.4cmで、底部外面の約1/2は回転ヘラ削りを施している。焼成は概ね良く、内面は淡灰色、外面は濃灰色を呈している。

杯身175は復元口径12.2cmで、立ち上がりは基部が太く、内傾して伸びている。焼成はやや不良で淡褐色を呈している。

杯身176は口径11.5cm、器高13.7cmで、全体的に器壁が薄く、底部の厚さも4.5mm程度しかない。底部外面は約2/3の範囲で回転ヘラ削りしており、中心部も丁寧に削っている。立ち上がりは強く内傾した後、途中から傾斜を緩めて伸びている。焼成は若干甘く、色調は淡褐色を呈している。

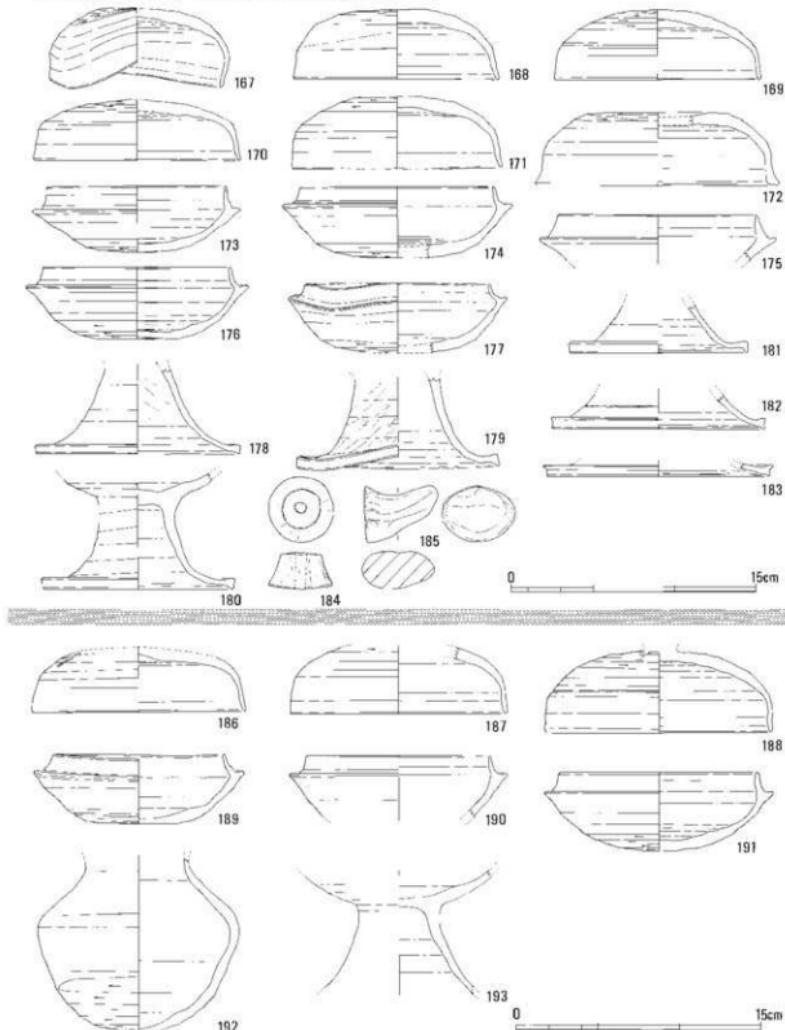
杯身177は口径11.3cm、器高14.4cmで、全体的に緩やかな焼き歪みが見られる。天井部は約1/2程度を回転ヘラ削りしていると考えられる。外面は焼成時の火勢が強く影響しており、器壁が粗れて自然釉が黒灰色に変色している。内面は暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。

高杯178は脚部しか残存していないが、復元底径12.4cmで、全体的に器壁が薄く、脚端部は下方に向かってわずかにつまみ出しているため、外面と内面には凹面をもっている。脚部内面には反時計周

りに絞り上げた痕跡が見られる。

高杯179も脚部しか残存していないが、復元底径12.3cmで、若干焼き歪みが見られ、器壁は薄い。脚端部は斜め下方に強く引き出しており、内外面に凹面が作り出されている。脚部外面には反時計回りに絞り上げた痕跡が観察できる。

高杯180は口縁部は欠損しているが、復元底径11.6cm、残存高7.2cmで、脚端部は強く下方につまみ出されているため、内外面に凹面が形成されている。



第26図 德見津遺跡Ⅲ区SI02埋土中・SD06出土遺物実測図 (S=1/3)

高杯181は脚端部のみ残存しているが、復元底径10.9cmで、脚端部は下方に引き出され、細くシャープな形状を呈している。全体的に器壁が薄く丁寧な作りである。

高杯182は脚部下半のみ残存しており、復元底径は13.0cmである。脚端部は下方に細く引き出されシャープな形状に仕上がってている。

高杯183は脚部下半の一部のみ残存しており、復元底径は13.6cmである。脚端部外面は強いヨコナデにより上方に強く突出した稜を作り出している。また、下方につまみ出された端部もシャープな形状を呈している。

須恵質の紡錘車184は高さ2.2cm、底径3.9cm、口径2.5cm、現状での重量34.2gである。焼成は良好堅緻で淡灰色を呈しており、表面は全体的に平滑に仕上げられ、外見状は石製紡錘車を強く意識したものである。孔は直径6.5～7mmであり、正円形ではない。側面はタテ方向の細かいミガキのような調整で平滑に仕上げられており、斜面は若干内側に向かって湾曲気味になっている。底部は逆に外側に向かって緩やかに弧を描いて張り出している。この紡錘車は住居南西側コーナー付近の上層埋土から出土している。

須恵質の把手185は鉢などに付属していたものと考えられるが、調査区内からは接合できる破片は出土しなかった。全長は4.6cmで、断面形は上面中央が凹む偏平な楕円形である。剥離面は平滑で、胴部本体の器壁にそのまま接合し、あまり周囲の補強をしていなかったようである。焼成はやや不良で、瓦質になっており表面は暗灰色を呈している。

S D 0 6 N からは須恵器杯蓋187・188、杯身159が出土している。

杯蓋187は天井部が欠落するが、口径13.3cmで、肩部には沈線の名残りの痕跡的な凹線が見られる。口縁端部は器壁が薄く、細く緩やかに外反している。

有蓋高杯の蓋188はつまみが剥離しているが、口径13.8cm、現状の器高5.1cmで、つまみは157などと同様の中央がやや凹んだ円盤状のものであると考えられる。天井部の回転ヘラ削りは約1/2程度の範囲に施されている。肩部には1条の沈線が施されアクセントになっている。

S D 0 6 S からは杯蓋186、杯身189～191、短頸壺192、高杯193が出土している。

杯蓋186は天井部が広範圍に渡って薄く剥離しており、外面につまみ、或いは脚部が取り付く可能性がある。口径は13.0cmで、器壁は薄く、口縁端部はやや外反している。

杯身189は全体的に緩やかな焼き亞みが見られる。口径10.4cm、器高4.3cmで、底部の1/2程度を回転ヘラ削りしている。焼成は良好で内面は淡灰色、外面は淡褐色を呈している。

杯身190は底部が欠損しているが、口径11.3cm、最大径13.5cmで、色調は淡灰色を呈している。

杯身191は口径12.1cm、器高4.9cmで、底部は丸みがあり、1/2程度の範囲に回転ヘラ削りが施されている。立ち上がりは一端内傾した後、途中から直立気味に立ち上がっている。焼成はやや不良で表面は淡灰色を呈している。

短頸壺192は口縁端部が欠損しているが、残存高10.3cm、胴部最大径12.3cmで、底部は回転ヘラ削りを施し、丸底に仕上げている。外面には自然釉が付着し、その状態から倒立して焼成されたことが確認でき、肩部には他個体の一部が付着していた。焼成は良好堅緻である。

高杯193は口縁部と脚端部が欠損する。脚部最小径が大きく、脚高が低いことから有蓋高杯になる可能性もある。焼成は極めて不良軟質で、淡黄褐色を呈している。

第1加工段・掘立柱建物 S B 0 1

造構（第27図）

第1加工段は標高23.0m付近に床面を持つ、平坦なスペースで、レベル的にはS I 0 1とS I 0 2の中間に位置している。

加工段の掘り込みは標高24m付近から行われており、最も山側の部分では約1mの掘削が行われている。この加工段は一連のものに見えるが、S B 0 1の存在する南半部と鍛冶造構の存在する北半部とに分けることができ、西壁際の周溝も中央部で一端途切れている。

加工段の規模は床面幅で長軸9.80m、北半部の短軸は2.90m、南半部の短軸は2.56mで、壁際には周溝が巡っており、北半部の溝S D 0 5 Nは下場幅で20cm、南半部の溝S D 0 5 Sは下場幅10cm前後の規模を持っている。南半部と北半部では床面に段差はなく、レベル差もほとんど見られない。

掘立柱建物 S B 0 1（第27図）

第1加工段南半部に位置し、桁行2間×梁間1間の規模を持つ。各柱間の距離はP 1～P 2間が1.48m、P 2～P 3間が1.36m、P 3～P 4間が1.56m、P 4～P 5間が1.24mで、ややばらつきがあり、柱穴も24～32cmと小さいことから、小規模で企画性を欠いた建物と考えられる。

P 1に対応する谷側の柱穴は確認できなかった。建物の平面プランを見ると、長方形を呈しておらず、谷側の柱が約20度南西側にずれた平行四辺形プランをとっている。

P 1～P 3の柱穴は周溝S D 0 5 Sの中に設置されており、さらに、この溝は加工段の途中で止まっていることから、排水機能を重視したものではないと考えられる。

また、P 2～P 5間には間仕切りと考えられる溝が掘られているが、それぞれの柱穴とは連続していない。溝の規模は106cm、幅16cm、深さ12cmである。

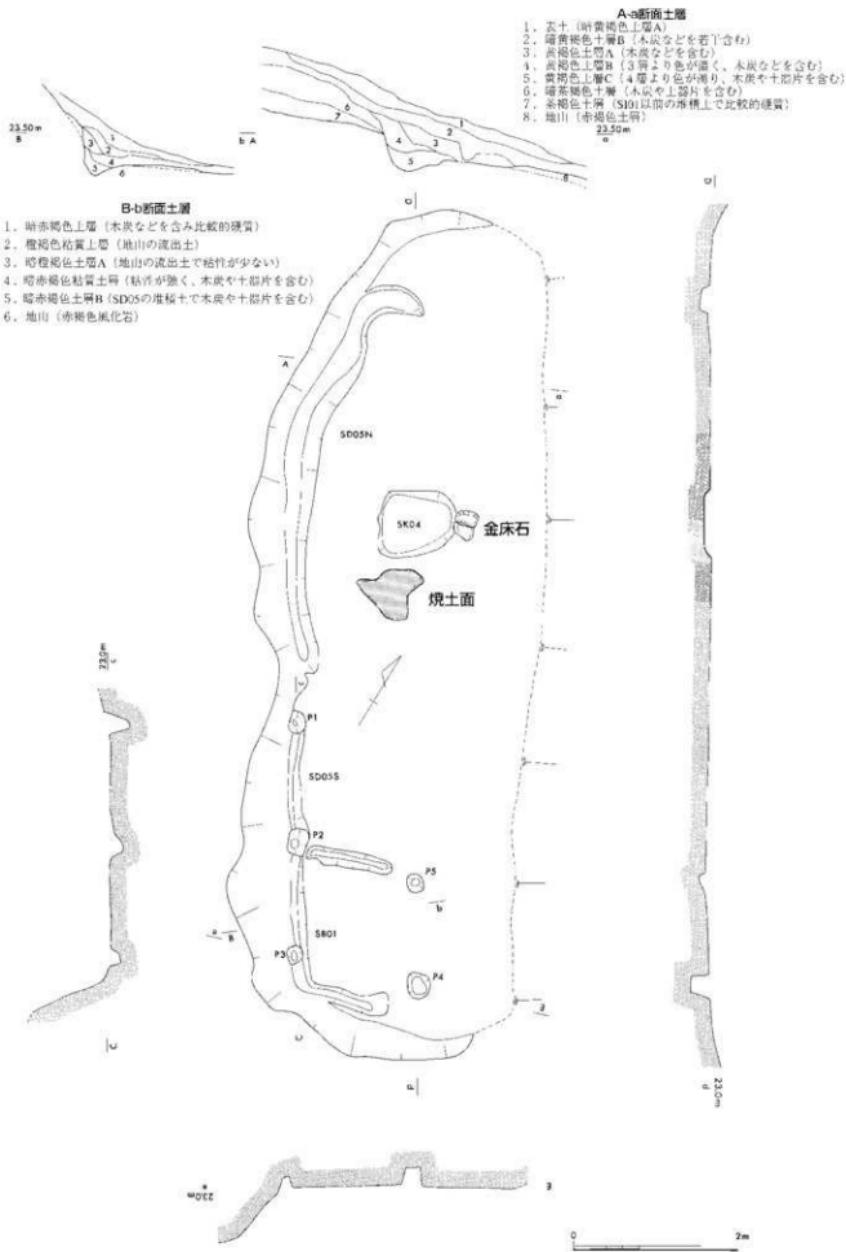
鍛冶造構（第29図）

第1加工段北半部に存在し、鍛冶炉基底部と考えられる焼土面と金床石、それに接している土坑S K 0 4で構成されている。

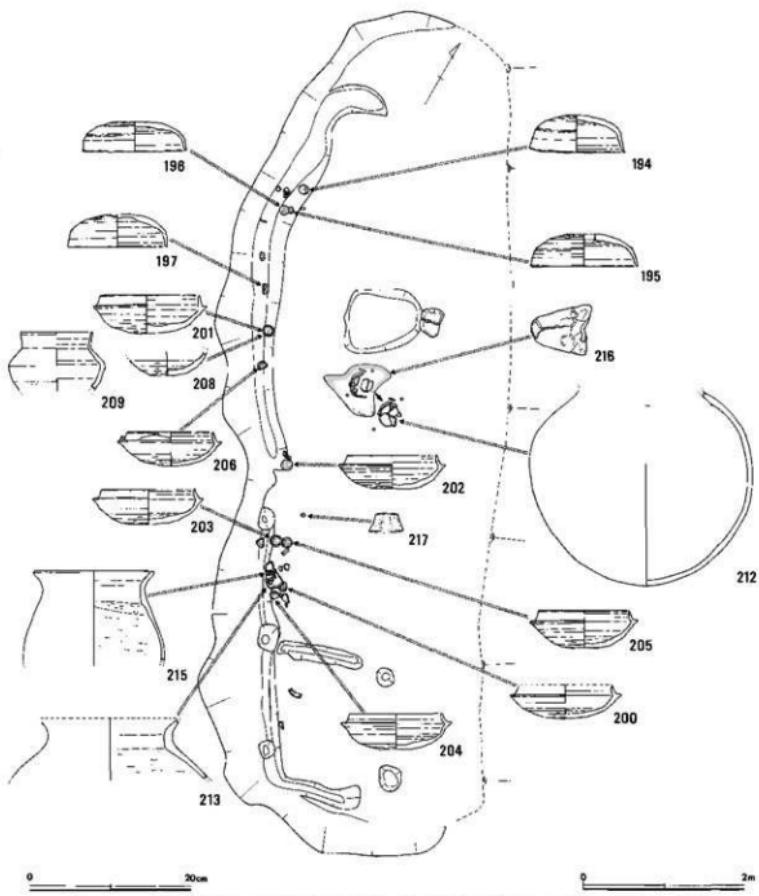
鍛冶造構が存在する北半分は丘陵斜面の谷部にあたり、鍛冶造構付近は堆積層を削り出した面に直接造構が営まれている。しかし、鍛冶造構より北側の範囲は加工段掘削以前に堆積した土層を平坦に整え、その上に南半部などを掘削した際に堆積した土層の赤褐色風化土を3～4cmの厚さで盛って整地を行ない、南側との床面レベルを調整している。

鍛冶造構を覆う建物の柱穴などの痕跡は一切確認できなかったが、水気を嫌う鍛冶施設に覆屋がないのは不自然なため、柱穴を掘削しないものか、柱穴があっても極めて浅い掘り形で建設しうる構造の建物があった可能性が考えられる。

焼土面 焼土面は東西75cm、南北67cmの規模を持ち、不整形な三角形を呈している。焼土面は平坦で明赤褐色に強く焼く締まっている。焼土面直上に須恵器小型壺212が土圧で破碎された状態で出土し、その下から縁の羽口216が出土している。この小壺が鍛冶炉の操業に関わるのか、鍛冶炉廃棄



第27図 德見津遺跡III区第1加工段実測図 (S=1/60)

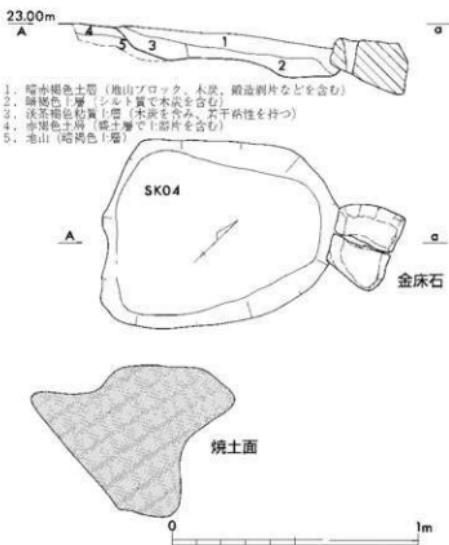


第28図 德見津遺跡III区第1加工段遺物出土状況図(遺構S=1/60・遺物S=1/6)

後の祭祀などに関わるものかは明確にし難い。

金床石 (218) 錫冶炉の北側70cmの位置に幅33.2×29.4cm、厚さ21.0cm、重量30.6kgの花崗岩を使用した金床石が埋め込まれて固定され、右の上面のヨコ20.5×タテ18.0cmの不規則な長方形を呈する範囲を鍛打面として使用している。

鍛打面は砥石のように平滑に磨耗しており、地石の色調は淡褐色であるが、鍛打面は淡く赤褐色に変色している。さらに、この金床石は激しい鍛打により、中央部で真二つに破断しているが、その後も使用を続けたらしく、破断した石の隙間に鍛造剥片が落ち込み、3ヶ所で接着して錆化している。



第29図 III区第1加工段鍛冶遺構実測図 (S=1/20)

鍛造剥片は最大のものが一辺 9 mm の大きさで、黒灰色を呈しており表面は鈍い光沢をもっている。SK04 の性格は現状では決め手に欠けるが、鉄滓などが見られないことから排涙土坑ではなく、鍛造剥片が作業者側に多量に飛ぶことを考えれば、作業場的な土坑と考えることもできよう。

第1加工段遺物出土状況（第28図）

第1加工段床面からは須恵器19個体以上、土師器3個体、櫛の羽口1個体、須恵質鉤車1個体が出士している。周溝内や鍛冶が周辺で出土したものが多く、完形品が多いのが特徴である。

加工段南部ではP1～P2間の周溝内で集中的に検出しており、土師器甕などもこの部位から出土している。

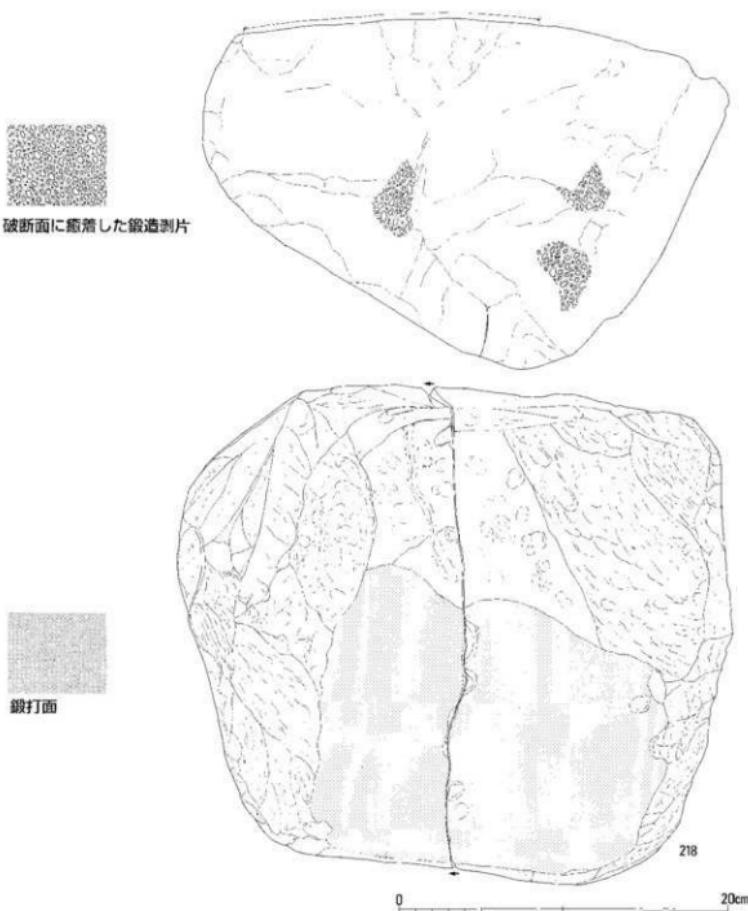
加工段北半部では周溝内から散在して須恵器杯蓋・杯身が出土している。また、出土箇所は特定できないが腕形洋402をはじめ、有磁性鉄滓が149.2g、無磁性鉄滓が24.3g 出土している。

土坑SK04 金床石に北東側に接している存在する土坑で、長軸94cm×短軸76cm、深さ14cmの平面プランが長台形を呈している。埋土中には焼土や大型の鉄滓は含まれていない。

しかし、SK04を4分割し、埋土をサンプリングして水洗したところ鍛造剥片や砂鉄などが含まれていればいることが判明した。

各区画の採土量は26×38cmのビニール袋2杯分で、土坑の北西側をA、北東側をB、南東側をC、南西側をDとして取り上げた。

その結果、A区からは11.6g、B区から40.6g、C区からは23.1g、D区から7.3gの鍛造剥片、砂鉄等が出土しており、金床石にちかいB・C区に分布の中心があることが判明した。



第30図 德見津遺跡Ⅲ区鍛冶遺構金床石実測図 (S=1/3)

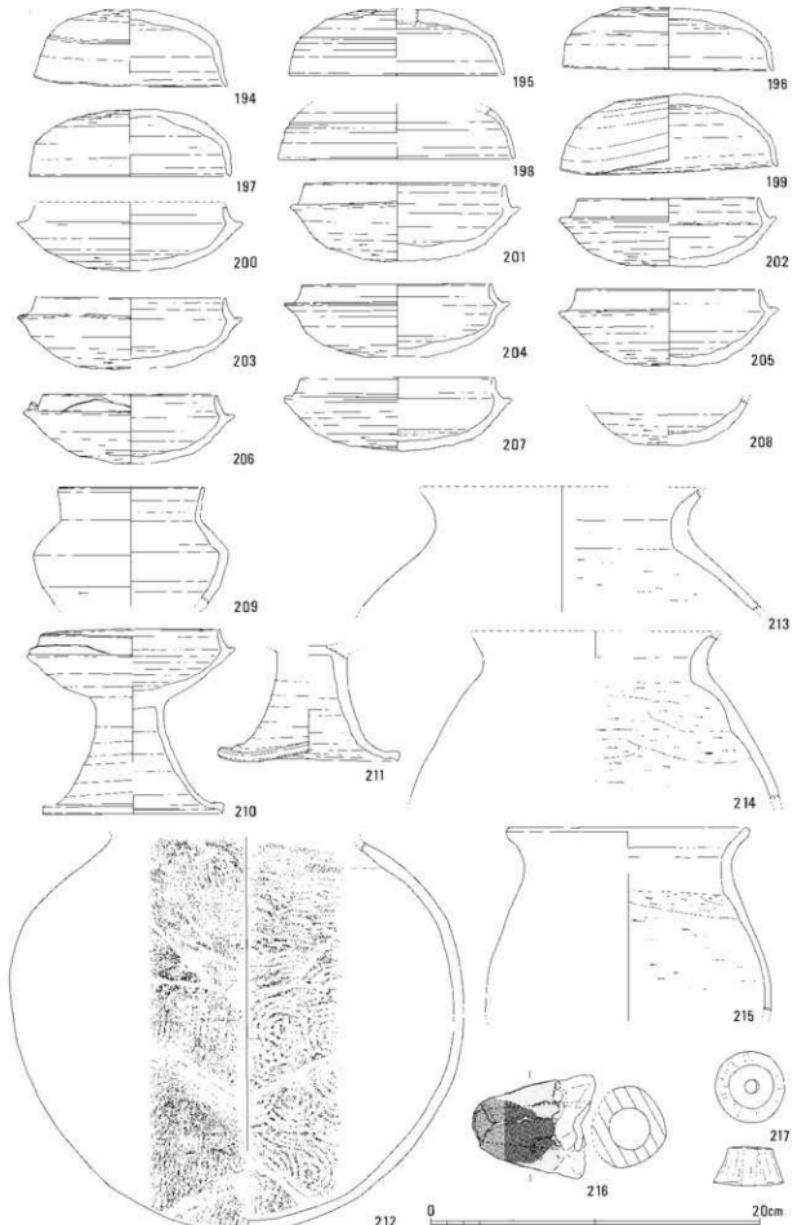
第1加工段出土遺物（第31図）

第1加工段床面からは杯蓋194～199、杯身200～207、短頸壺208・209、有蓋高杯210・211、小型甕212、土師器壺213～215、蘿羽口216、須恵質紡錘車217が出土している。

杯蓋194は口径11.8cm、器高4.8cmで、若干口縁部に焼き歪みがあるが焼成は良好である。天井部外面は約2/3程度の範囲で回転ヘラ削りを施している。肩部には沈線が巡らされ稜を表現している。

杯蓋195は復元口径13.1cm、器高4.0cmで、天井部の1/2強を回転ヘラ削りしている。肩部にはやや深めの沈線が施され、明瞭な稜を表現している。焼成はやや不良で外面は淡褐色、内面は明灰色を呈している。

杯蓋196は口径12.8cm、器高4.8cmで、天井部の2/3程度の範囲を回転ヘラ削りしている。肩部には



第31図 德見津遺跡Ⅲ区第1加工段出土遺物実測図 (S=1/3)

浅い沈線が巡らされている。口縁部に焼き歪みが見られるが焼成は良く、外面には自然釉が付着し黒灰色を呈している。

杯蓋197は口径12.2cm、器高4.1cmで、天井部の約2/3は回転ヘラ削りされており、肩部にはアクセントが見られない。外面の焼成は良く淡灰色を呈すが、内面はやや焼きが甘く白灰色である。

杯蓋198は天井部が欠損しているが、復元口径14.4cmで、肩部には沈線が巡らされ稜を表現している。焼成は良く、器壁は薄く仕上げられている。外面は暗灰色、内面は明灰色を呈している。

杯蓋199は全体的に焼き歪みがあり、焼成ムラもあり、火のあたりの悪い1/3程度の範囲は焼成不良になっている。口径は13.2cm、器高4.9cmで、天井部中央の4cm程度の範囲は回転ヘラ削りを施す以前に板状工具でナデ調整されるのみで、削りは及んでいない。肩部にアクセントは無く、全体的に丸みが強い。

杯身200は極めて焼成の悪い個体で、表面は粉化し、淡黄褐色を呈して。推定口径11.4cm、推定器高4.2cmで、底部外周の2/3程度は回転ヘラ削り調整されている。

杯身201は口径12.2cm、器高4.9cmで、底部の2/3程度の範囲に深い回転ヘラ削りを施している。立ち上がりはわずかに内傾しているが、ほぼ直立気味に伸びている。焼成は概ね良いが、内面はやや甘く、淡白灰色を呈している。

杯身202は焼き歪みがあり、平面形は緩やかな隅丸三角形を呈している。口径は11.1cm、器高4.2cmで、底部の約2/3の範囲は浅い回転ヘラ削りを施している。焼成は良好で淡褐灰色を呈している。

杯身203は口縁部付近で焼き歪みが見られるが、焼成は良好で全体的に淡灰色を呈している。口径は11.5cm、器高4.3cmで、底部の約2/3程度の範囲を回転ヘラ削りしている。

杯身204は復元口径11.5cm、器高4.5cmで、器が深く、底部の約1/2程度の範囲には回転ヘラ削り調整が施されている。焼成は良好であり、淡灰色を呈している。

杯身205は口径11.2cm、器高4.7cmで、底部の約1/2の範囲に回転ヘラ削りを施している。立ち上がりは一端内傾して伸びた後、やや傾斜をゆるめ、直立気味にシャープに伸びている。焼成は良好で内面は白灰色、外面は淡黄灰色を呈している。

杯身206は焼成時に重ね焼きをしており、受部にはセットになる杯蓋の口縁端部が半周以上に渡って破断して癒着し、一部には焼き歪みも見られる。口径は10.5cm、器高4.3cmで、底部の約2/3程度の範囲には回転ヘラ削り調整が施されている。焼成は良好で外面は淡褐灰色、内面は淡灰色である。

杯身207は口径11.7cm、器高4.5cmで、底部の約1/2の範囲に回転ヘラ削りを施している。立ち上がりは一端内傾した後、途中から直立して上に伸びている。焼成はやや不良で、外面は淡黄灰色、内面は淡灰色を呈している。

208は底部しか残存していないが、短頸壺などの底部と考えられる。底部は回転ヘラ削りが施され、丸底に仕上げられている。焼成は良好で淡灰色を呈している。

短頸壺209は底部が欠損しているが、復元口径8.7cm、肩部径11.9cmで、口縁部は若干外傾しながら2cmほど立ち上がっている。肩部はよく張っており、胴部下半は回転ヘラ削りを施している。

有蓋高杯210は口径10.9cm、器高11.3cm、底径11.0cmで、焼成時には蓋をした状態で、倒立して重ね焼きされており、受部には広範囲に渡って、蓋の口縁端部が破断して付着している。

杯底部は回転ヘラ削りの後、脚部の接合のためヨコナデが施されている。脚部の器壁は薄く仕上げ

られ、脚端部の下方へのつまみ出しが極めてシャープである。焼成は良好で硬く焼き締まっている。高杯211は脚部のみ残存しており、杯部の形態は不明である。底径は10.9cmで、脚端部には焼き歪みが見られ、先端のつまみ出しありも丸みがありシャープではない。焼成は概ね良好であるが、断面は白褐色を呈し、やや粉化している。外面は明灰色～淡灰色を呈している。

須恵器小型甕212は鍛冶炉上面で破碎していたもので、口縁部のみが当初から欠損していた。胴部最大径は27.6cm、残存高23.9cmで、全体的に肩がよく張った球胴であり、現状では胴部の下方から2／3付近に最大径がきている。全面的に著しい焼成不良で粉化も激しいが、元来焼成不良であるのか、鍛冶炉との関わりで2次焼成を受けたものか判然としない。

磨滅が激しく不明瞭になっているが、外面はタテ方向の平行タタキ、内面は同心円文当て具によるタタキが施されている。

土師器甕213は口縁端部は欠損し、器壁に雨に打たれたような小孔が多数見られる。推定口径は17.2cmで肩部は張り気味である。口縁部は一端直立した後、途中から外傾している。外面調整は磨滅のため判然としないが、内面は反時計回りのヘラ削りを施している。外面は暗黄褐色、内面は橙褐色を呈している。

土師器甕214も口縁端部は欠損し、器壁に雨に打たれたような小孔が多数見られる。推定口径15.0cmで、肩部はあまり張っておらず、なだらかに落ちている。口縁部は一端直立した後、途中から外反している。外面調整は磨滅のため判然としないが、内面は時計回りの丁寧なヘラ削りを施している。

色調は外面が橙褐色、内面が暗褐色で、胎土中には3mm以下の砂粒を含んでいる。

土師器甕215は復元口径14.6cmで、胴部最大径は17.4cmで、肩部はあまり張らずに緩やかに落ちている。形態的には重心が低く下がった、寸胴なプロポーションが想定できる。口部は頸部が長く内傾して、その後口縁部は緩やかに外反している。胴部内面は反時計回りのヘラ削りを施しているが、外面調整は磨滅のため不明である。外面には一部黒斑があるが、それ以外の範囲は黄褐色で、内面は明黄褐色を呈している。焼成は概ね良好であるが、磨滅が激しく、器壁の保存状態は悪い。

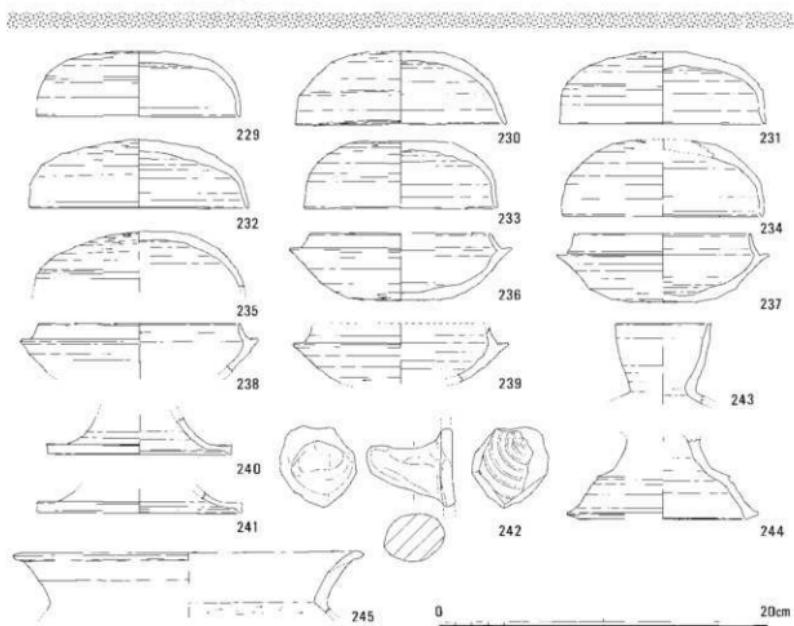
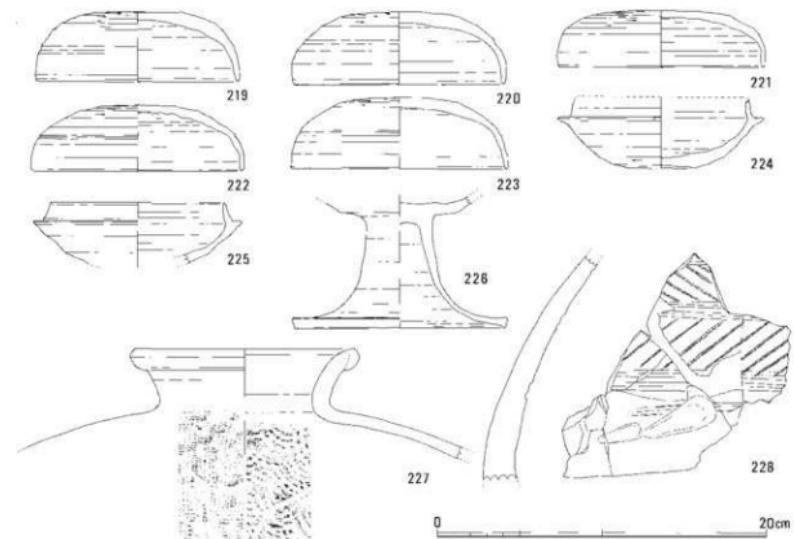
繩羽口216は基部が欠損しているが、残存長は7.5cm、最大幅6.3cm、孔径2.1～3.0cmで、やや基部の方が広がっている。全体の断面形は正円ではなく不整円形であるが、孔の断面形態はほぼ正円形である。内外面共に鍛冶炉の送風による被熱のため、内面は淡橙褐色に変色し、外面は先端ほど黒褐色化が進んでいる。繩羽口216は須恵器小型甕212の取り上げ後、同所の清掃中に出土しており、鍛冶炉内での厳密な出土位置を押さえることはできなかった。

須恵質紡錘車217は高さ2.4cm、下端径4.3cm、上端径2.7cm、孔径9mm、現状での重量42.3gである。焼成は良好堅緻で白灰色を呈しており、表面は全体的に平滑に仕上げられ、外見上は右製紡錘車を強く意識したものである。側面はタテ方向の細かいミガキで丁寧に整えられている。

217はS102埋土から出土している紡錘車184より、一回り大きいが、形態や成形・調整技法がが同一であり、同一人物もしくは同一の工房で製作されたものと考えられる。

III区中段・下段包含層出土遺物（第32回）

III区中段（標高21～25m付近）包含層からは須恵器杯蓋219～223、杯身224～225、高杯226、横瓶227、大甕頭部228などが出土している。また、図示できなかったが提瓶3個体分の破片が出土してお



第32図 徳見津遺跡Ⅲ区中・下段包含層出土遺物実測図 (S=1/3)

り、162・163と合わせてⅢ区内で5個体の提瓶が出土している。

杯蓋219は復元口径12.3cm、器高4.3cmで、天井部の中央5.5cmの範囲では回転ヘラ削りを施していない。肩部には痕跡的な凹線が巡らされ稜を表現している。焼成は良好で、色調は淡灰色である。

杯蓋220は復元口径12.8cm、器高4.4cmで、天井部外面の2/3程度は回転ヘラ削りを施し、その後部分的にハケ原体でナデている。肩部には幅広の浅い凹線が施され、口縁部わずかに内湾している。焼成は良好で、外面は黒灰色、内面は淡灰色を呈している。

杯蓋221は復元口径12.3cm、器高3.5cmで、天井部外面は肩部まで丁寧な回転ヘラ削りを施している。全体的に器壁が薄く、口縁は若干内湾している。焼成は良好で表面は明灰色を呈している。

杯蓋222は復元口径12.7cm、器高4.1cmで、天井部は一端2/3程度の範囲まで回転ヘラ削りを行なった後、中心部の径4cmの幅を残して、削り痕をナデ消している。肩部には幅は細いが明瞭な沈線を施し稜を表現している。焼成は良好で外面は暗灰色～淡灰色、内面は淡褐色を呈している。

杯蓋223は復元口径13.1cm、器高4.4cmで、天井部の1/2程度の範囲に回転ヘラ削り調整を施している。肩部には浅い沈線を巡らせ稜を表現している。焼成は不良で表面はかなり磨滅している。外面は暗灰色で、内面は淡褐色を呈している。

杯身224は口縁端部が欠損するが、推定口径10.4cm、推定器高4.4cmで、底部の約1/2程度の範囲を回転ヘラ削りしている。焼成は不良で、内面は淡灰白色で、外面は灰褐色を呈している。

杯身225は底部が欠損するが、復元口径10.5cmで、残存する範囲では削りは確認できない。焼成は概ね良好だが内面はやや甘く、淡灰色を呈している。外面は淡褐色である。

高杯226は杯部が欠損しているが、脚端部は大きく広がり底径12.3cmの大きさをもっている。脚部の器壁は薄く、脚端部のつまみ出しあやや頬が下方にシャープに突出している。焼成は良好で表面は淡灰色を呈している。

横瓶227は胴部はほとんど欠損しているが、復元口径13.4cmで、口縁は緩やかに外反し、端部は外側に折り返して玉縁状にしている。胴部外面は平行タタキを施した後、回転カキメを施している。胴部内面は同心円当て具によるタタキを施している。焼成はやや不良で、内面は淡白褐色、外面は淡灰色を呈している。

大壺頭部228は頭部のごく一部の破片しか残存していない。下端は平坦面な剥離面であるため頭部の基底になると考えられる。確認できるだけで2条一組みの沈線を3段に渡って巡らせ、その間を下段では右上がりの斜行刺突文で充填し、沈線帯を挟んで上段には左上がりの斜行刺突文を施し、有輪羽状文としている。基部の器壁は1.9cmで、残存部の湾曲が小さいことからかなりの大型品と考えられる。焼成は良好堅密で内面は暗褐色、外面は暗灰色を呈している。

Ⅲ区下段（標高17~21m付近）包含層中からは須恵器杯蓋229~235、杯身236~239、高杯240、241、須恵質把手242、平瓶243、脚台付長頸壺244、土師器壺245が出土している。

杯蓋229は復元口径12.4cm、器高4.0cmで、天井部の外面の約2/3程度を回転ヘラ削りしているが、中央部の直径3cmあまりの範囲は削り残している。肩部には退化した沈線が巡り、稜線を表現している。焼成はやや不良で表面は灰黄白色を呈している。

杯蓋230は復元口径13.8cm、器高4.5cmで、天井部外面の約1/2程度の範囲を回転ヘラ削りした後、中央部の直径3.5cmの範囲をナデ消している。肩部はやや低い位置に浅い沈線を施し、稜線を表現し

ている。内面や断面は焼成がやや甘く、内面は淡黄褐灰色、外面は暗灰褐色を呈している。

杯蓋231は復元口径12.5cm、器高4.5cmで、天井部の回転ヘラ削りは1/2程度で、中心部は削りきってはいない。肩部には明瞭な沈線を施し稜を表している。外面は自然釉が付着し焼成も良好だが、断面などは淡褐灰色を呈しやや焼成が甘い。

杯蓋232は口径13.2cm、器高4.2cmで、天井部外面の回転ヘラ削りは肩部近くまで及んでいる。肩部にはアクセントが無く、緩やかに口縁部につながっている。焼成は良好で内面は淡灰色、外面は自然釉が付着し濃灰色を呈している。

杯蓋233は復元口径11.7cm、器高4.1cmで、天井部外面の約2/3程度の範囲は丁寧な回転ヘラ削りを施している。肩部にはごく浅い凹線を施し、稜線を表現している。焼成は良好で外面は黒灰色、内面は淡灰色を呈している。

杯蓋234は復元口径12.1cm、推定器高4.7cmで、天井部外面の約1/2程度の範囲を回転ヘラ削りしている。肩部に稜線を表現したアクセントは見られない。焼成は良好で表面は淡褐灰色を呈す。

杯蓋235は口縁部を完全に欠損する。天井部外面の2/3程度の範囲を回転ヘラ削り調整している。焼成は良好で外面は淡褐灰色、内面は褐灰色を呈している。

杯身236は復元口径11.0cm、器高4.1cmで、底部の1/2程度に丁寧な回転ヘラ削りを施している。焼成は概ね良好で内面は暗灰褐色、外面は明茶褐色を呈している。

杯身237は復元口径10.7cm、器高4.2cmで、底部外面の約1/2 強の範囲に丁寧な回転ヘラ削りを施している。焼成は若干甘く、外面は淡褐灰色、内面は淡黄白色を呈している。

杯身238は底部が欠損するが復元口径12.3cmの大きさをもつ。焼成は良好で外面は暗灰色、内面は淡黄灰色を呈している。

杯身239は口縁端部と底部を欠損する。焼成は良好で外面は暗灰色、内面は湯灰色を呈している。

高杯240は脚端部のみ残存しているが、復元底径11.2で、端部は下方へ細くシャープにつまみ出され、内外面には凹面が形成されている。焼成は良好で表面は黒灰色を呈している。

高杯241は脚端部のみ残存し、復元底径12.4cmで、端部は下方に強くつまみ出されシャープな形状を呈している。焼成は良好で外面は淡褐灰色、内面は自然釉が付着し暗緑灰色を呈している。

須恵質把手242は鉢の把手と考えられ、全長5.2cmで、断面形はやや横方向につぶれた梢円形を呈し、端部は若干上向きに上がっている。外面はユビナデ調整であるが、内面は同心円文当て具の痕跡が残存している。焼成は概ね良好で、表面は暗褐灰色、断面は淡灰色を呈している。

243は口頭部しか残存していないが、形態から平瓶と考えられ、口径は5.7で、口縁部は内湾気味に立ち上がっている。焼成は良好で外面は光沢があり淡灰色を、内面は淡褐灰色を呈している。

244は長頸壺もしくは龜の脚部と考えられ、底径10.2cmの大きさをもつ。脚部は二段に形成され、最初の段の外面には深い沈線を施して明確な稜を表現する。端部は幅広な平坦面をもち、外方に向かって肥厚している。このような形状の脚台は出雲部では希少で、近畿・瀬戸内の影響が考えられる。

土師器壺245は肩部以下が完全に欠損しているが、口径20.4cmの大きさをもつ。口縁部は外傾して端部に行くほど外反し、端部は水平気味に外方に引き出している。口縁部はヨコナデ調整であるが、胴部内面は頭部直下から時計回りのヘラ削りを施している。焼成は良好で外面は淡黄褐色、内面は暗褐色を呈している。

第4節 IV区の調査概要

IVの立地・層序（第14・33図）

IVはIII区から標高33m前後の尾根頂部を越えた西側斜面に立地している。IV区調査区の最低レベルは標高17.50m前後で、西側には目廻上池・目廻下池の存在する南北に長い谷があり、対岸の丘陵上には目廻遺跡が存在している。

IV区は丘陵斜面を3段に削り出した加工段が主な遺構であるが、この加工段は調査区内ではおさまらず、第3加工段は南側用地外に約40m、第4加工段は約25m伸びていることが表面観察により確認できる。北側調査区外については、現在果樹園になっており地形改変されているため地表からの観察は難しいが、第3・4加工段は遺構の状態からさに北側に伸びていくものと考えられる。

北側の様子が定かではないが、復元すると第3加工段は南北80m以上、第4加工段は南北70m以上の規模を持っていると想定できる。

また、現在IV区の西端に接して農業用道路が南北に通じているが、その西側は急斜面となって水田面まで落ちており、さらに下段の加工段が存在した可能性も考えられる。

層序としては掘削された加工段の山側は赤褐色粘質土や赤褐色風化層などの岩盤起源の地山であるが、加工段の谷側は基盤まで掘削が達しておらず、加工段掘削以前に堆積した無遺物の暗褐色土層を床面としていると考えられる。

床面直上には地山流土の暗褐色土が堆積し、その後木炭を多く含む黒褐色土層や暗褐色土層が堆積し、その上に表土が被っている。

加工段は堅穴住居のような閉鎖された遺構ではなく、谷側に向かって開かれた空間であるため、遺物が転落しやすく、各層中には多くの遺物を包含していた。

第2加工段（第34・38図）

第2加工段は丘陵西側斜面の標高25～28m付近を全長29.8mの長さに渡って削り、平坦面を作り出したもので、平坦面上からは5棟の掘立柱建物が検出された。床面レベルはSB02の25.90mを最低として、SB06では27.5m付近まで上昇しており、各建物ごとに標高差が見られる。

また、第2加工段は調査区内で完結しており、調査区外の南側丘陵では加工段などの痕跡はうかがえない。

掘立柱建物SB02（第34図）

SB02は第2加工段の最北端に位置し、床面レベルは25.9mで、27.0m付近から掘削が開始されている。柱間は桁行2間×梁間1間でP1～P3間は3.4m、P4～P6間は3.5m、梁間は2.3～2.4mの規模を持っており、比較的整った建物といえる。

山側は柱穴は赤褐色風化岩を掘削して穿たれており、規模もP3が深さ47cmと深く安定しているが、谷側の柱穴P4～P6はやや軟質の暗褐色堆積土に掘り込まれており、上部が流出して浅くなっている。なお、P4～P6の埋土は地山流土の赤褐色土であった。

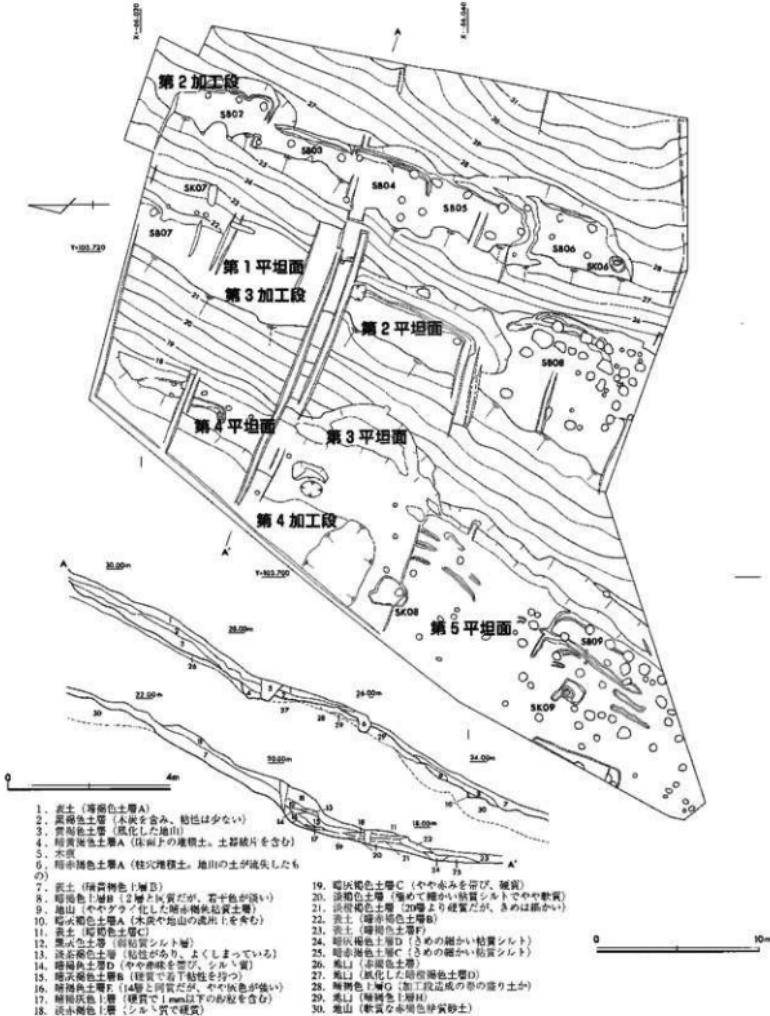
P1～P3の山側には幅12～36cm、深さ7cmの排水溝SD07が逆L字形に巡っているが、P2～

P 3 間で一部が西側に張り出し、やや幅が狭くなっている。

出土遺物としては須恵器杯蓋246・247が床面直上の暗褐色土層Bから出土したほか、有磁性鉄滓を12.1 g 検出している。

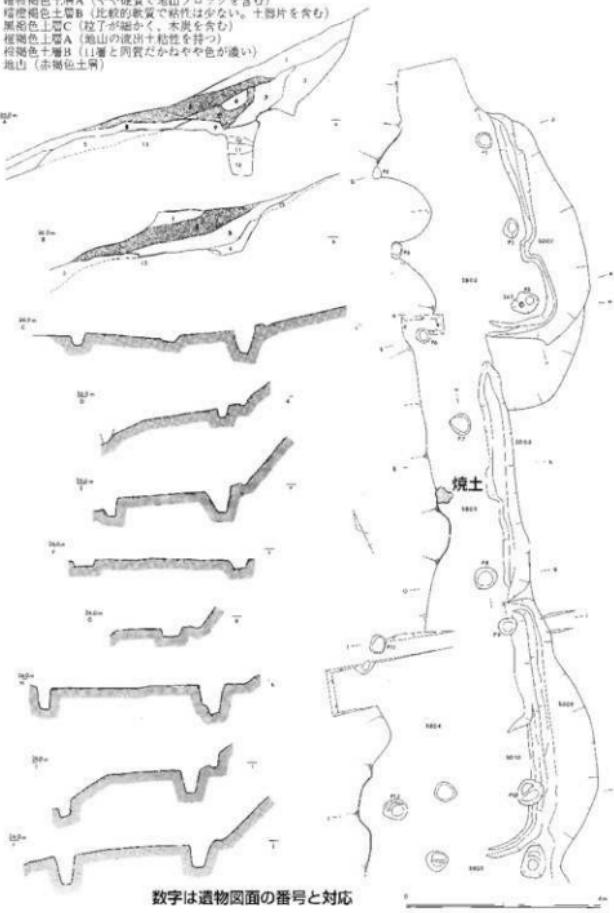
据立柱建物 S B 0 2 出土遺物 (第36図)

杯蓋246は口径8.7m、器高2.3cmのかえりが残存するタイプのもので、天井部外面中央には、やや退化した擬宝珠形のつまみがつけられている。天井部外面の3/4程度の範囲まで浅い回転ヘラ削り



第33図 德見津遺跡IV区構造配置図 (平面S=1/300・断面S=1/120)

- 表上（暗褐色土層）
- 黒褐色土層A（粘性は少なく、木炭を含む）
- 黒褐色土層B（2層と同質だが、やや色が濃い）
- 暗褐色土層A（汚れは少ないが、土鱗片を含む）
- 暗黃褐色土層B（3層より色が濃く、池山ブロックを含む）
- 暗赤褐色土層A（この層の上面が加工段の床面）
- 暗灰褐色土層A（粘性を持ち、木炭や上器片を含む）
- 暗灰褐色土層B（6層と同質だが、やや色が淡い）
- 暗青褐色土層A（やや硬質で池山ブロックを含む）
- 暗青褐色土層B（比較的軟質で粘性は少ない。土鱗片を含む）
- 褐褐色土層A（粒子が細かく、木炭を含む）
- 褐褐色土層B（1層と同質だかねやや色が濃い）
- 地山（赤褐色土層）



第34図 德見津遺跡IV区第2加工段北半部実測図 (S=1/80)

が施されている。焼成は良好で表面は濃灰色を呈している。

杯身247は246とセットになるもので、口径9.4cm、器高3.1cmの規模をもち、底部外面は回転ヘラ削りの後、不定方向ナデを施している。焼成は良好で外面は褐色、内面は濃灰色を呈している。

掘立柱建物 S B 0 3 (第34図)

S B 0 3 は S B 0 2 の南1.9mに位置しているが、柱穴は山側のP 7・P 8 しか残在しておらず、正確な梁間は不明であるが、恐らく1間×1間規模の掘立柱建物になると考えられるが、柱穴は共に深さ20cmと浅く、それほど強固な建物ではないと考えられる。

P 7～P 8 間は3.2mで、柱穴の山側にはS B 0 3 と並行に直線的に伸びる幅60cm、深さ7cmの排水溝S D 0 8 が存在する。S B 0 3 の床面レベルは標高25.8m前後で、P 7～P 8 を結んだラインよりやや谷側に径18cm前後の平面が不整円形で上面が平らな鍛冶が存在する。残存するのは基底部の一部とみられ、赤く被熱している。S B 0 3 周辺からは有磁性鉄滓が1573.1gと多量に出土し、砥石なども出土している。また、B-b断面の床面からは碧玉製の管玉なども出土している。

掘立柱建物 S B 0 3 出土遺物 (第35図)

須恵器杯蓋248・250、杯身249、土師器壺251、砥石252、碧玉製管玉253などが出土している。

杯蓋248は口径11.2cm、器高4.2cmで、天井部はヘラ切り後に軽いナデ調整を行なっている。肩部などにアクセントは無く、全体適に丸みのある形状を呈している。焼成は良好で外面は淡黄褐色、内面は黄褐色を呈している。

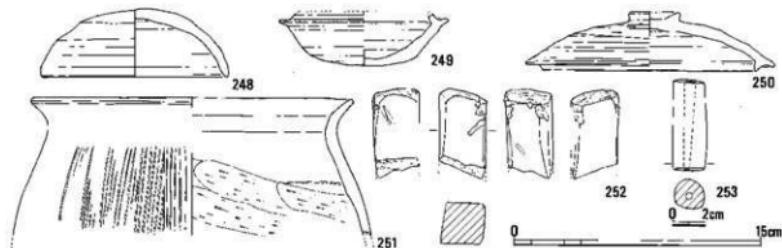
杯身249は口縁端部は欠損しているが、推定口径8.0cm、推定器高3.3cmで、底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施している。やや器壁が厚く鈍重な印象を与えるものであるが、焼成は良好で全面淡黃褐色を呈している。

杯蓋250は口径13.0cm、器高3.6cmで、かえりが残存しているが、天井部外面には直径3.1mの輪状つまみをついている。天井部外面は1/2程度の範囲まで回転ヘラ削りを施している。焼成は良好で外面は暗黄褐色、内面は淡黄褐色を呈している。

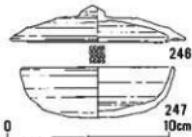
土師器壺251は胴部下半が欠落するが、口径19.5cmで、肩部はあまり張らず緩やかに落ち、口縁部は緩やかに外反している。胴部外面は1cmあたり4条程度のタテ方向のハケ調整で、胴部内面は頸部からやや降りた位置から反時計回りのヘラ削りを施している。焼成は良好で外面は煤が付着し暗褐色で、内面は淡橙褐色を呈している。

砥石252は端部が破断しており、正確な長さがわからないが、現状で長さ5.5cm、幅2.8～2.9cm、重量52.7gの四角柱状を呈している。研磨面は個面4面であるが研磨の度合いはそれぞれ異なっており、両面右側が最もよく研磨され平滑に仕上がっているが、右から2番目の面は多少手触りが粗くなっている。一方は小さいかとから穿孔は一方方向から行われたと考えられる。表面の研磨は丁寧で小口側も滑らかに仕上げられている。色調は白褐色で泥岩に近い砂岩を使用している。

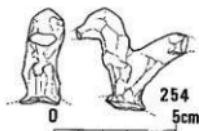
碧玉製管玉253は全長2.8cm、直径1.05cm、孔径2～3.5mm、重量6.0gで、断面形は正円形では無くやや梢円形を呈し、側面形は中央がやや脹らんだエンタシス形を呈している。孔の大きさが片側が大きく、一方は小さいかとから穿孔は一方方向から行われたと考えられる。表面の研磨は丁寧で小口側も滑らかに仕上げられている。色調は濃緑色で質の良い碧玉を使用している。



第35図 德見津遺跡IV区SBO3出土遺物実測図 (253は2/3、その他はS=1/3)



第36図 SB02出土遺物実測図 (S=1/3)



第37図 IV区SBO4出土遺物実測図 (S=1/2)

掘立柱建物 S B 0 4 (第34図)

S B 0 4 は S B 0 3 の 1.1m 南方に存在し、規模は 1 間 × 1 間で、P 9 ~ P 10 は 3.5m、P 11 ~ P 12 は 3.4m、P 9 ~ P 11・P 10 ~ P 12 は共に 2.7m で、柱穴の深さは P 9 が最も深く 60cm である。

床面のレベルは標高 25.8m 前後で、山側の壁際には手前に排水溝 S D 10 があり、奥に S D 0 9 が存在している。S D 0 9・1 0 は平行しているが食い違っており、建物の建て替えなどにより、再掘削された可能性もある。また、P 9 ~ P 10 を結んだライン上に S D 1 0 を切った段状の施設があるが性格は不明である。

S B 0 4 からは装飾付須恵器の肖像部分 254 が床面で出土しているほか、有磁性鉄滓 214.9 g が出土している。

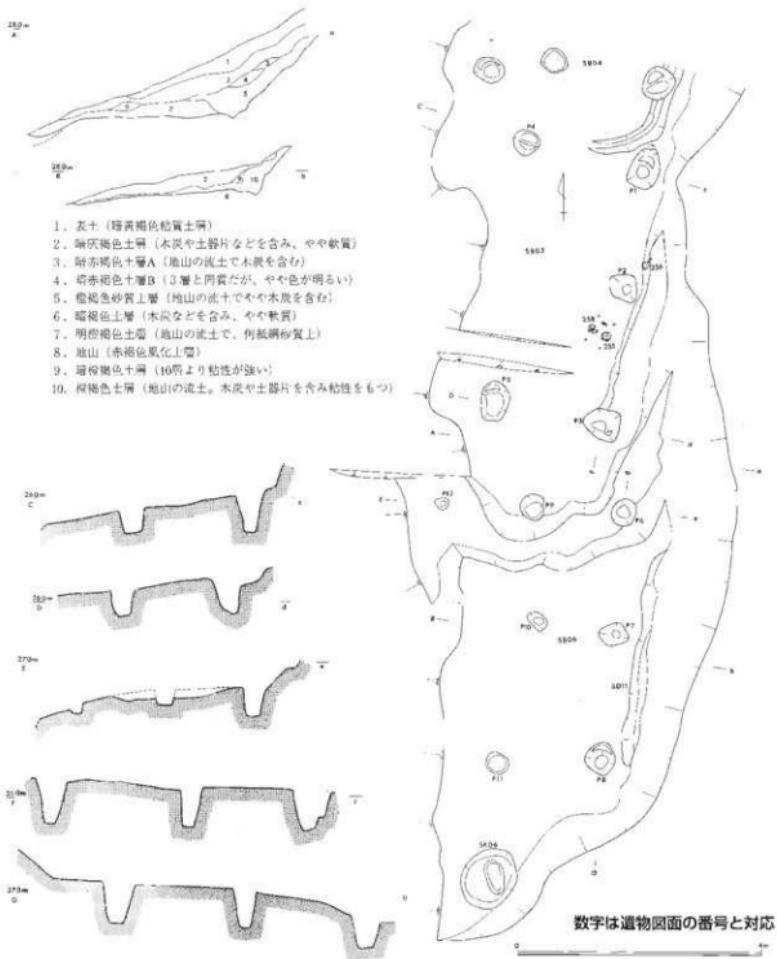
掘立柱建物 S B 0 4 出土遺物 (第37図)

装飾付須恵器の鳥形肖像 254 は現存高 4.0m で、全体的にユビナデ調整で仕上げられ、顔面にも目などの表現は見られず、上から見ると全体的に左の方に曲っている。嘴の先端と尾の先端は欠損しているが、稚拙ながら水鳥形はよく表現されている。焼成は良好で表面は暗灰色を呈している。

掘立柱建物 S B 0 5 (第38図)

S B 0 5 は S B 0 4 の南側 1.4m に位置し、床面レベルは 26.0m 前後である。柱間は桁行 2 間 × 桁間 1 間と考えられるが、P 2 に対応する谷側の柱穴が存在すると予想された範囲には岩盤が露呈しており、柱穴は確認できなかった。恐らく岩盤の上に直接柱を据えていたか、最初から柱を用いない構造を取っていた可能性もある。

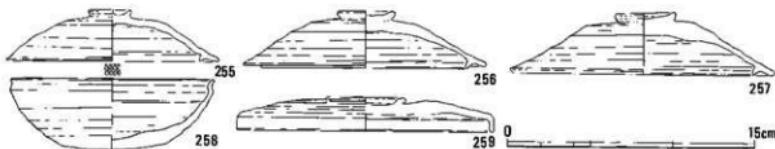
P 1 ~ P 2 ~ P 3 間の距離は 2.0m と 2.3m、P 1 ~ P 4 間は 1.9m、P 3 ~ P 5 間は 1.8m で、若干ばらつきがあるが、P 3 は深さ 51cm、P 5 が深さ 44cm の規模を持つなど、岩盤に比較的深い柱穴を掘削しているため安定した建物であったと考えられる。



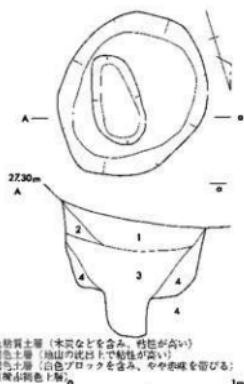
第38図 德見津遺跡IV区第2加工段南半部実測図 (S=1/80)

S B 0 5 の山手側には段状の空間が見られるが排水溝は確認できず、この段状遺構は加工段の掘り直しなどの際に形成されたものであろう。

この掘立柱建物のP 2 ~ P 3 間の床面からは須恵器杯蓋・杯身255・258のセットが土圧で潰れた状態で出土している。また、P 2 の北側床面から杯蓋256が出土している。鉄滓は建物周辺から有磁性的のものが268.2 g 出土している。



第39図 德見津遺跡IV区第2加工段SB05出土遺物実測図 (S=1/3)



第40図 IV区SK06実測図 (S=1/3)

掘立柱建物 S B 0 5 出土遺物 (第39図)

杯蓋255は口径10.6cm、器高3.2cmで、天井部外面の中央には直径2.6cmの径が小さい輪状つまみを取り付けている。立ち上がりとかえりの高さは等しくなっており、かえり径は12.9cmである。器壁は薄く丁寧な作りで、外側の大半には緑灰色の自然釉がかかつておらず、良い仕上がりになっている。焼成は良好で内面は濃灰色を呈している。

杯蓋256は口径12.4cm、器高3.5cmで、天井部外面の約1/2程度の範囲を回転ヘラ削りした後、天井中央部に径3.6cmの輪状つまみを取り付けており、立ち上がりの高さがかえりの高さをわずかに上回っている。焼成は良好で外面は暗褐色、内面は淡灰色を呈している。

杯蓋257は口径15.8cm、器高3.9cmで、天井部外面の約1/2程度を回転ヘラ削りした後、中心部に直径3.6cmの輪状つまみを取り付けている。天井部は平坦で、断面形は笠形を呈し、かえりと立ち上がりの高さは揃っている。焼成は良好で外面は暗褐色、内面は淡灰色を呈している。

杯身258は口径12.3cm、器高4.4cmで、底部は回転ヘラ切りの後に軽いナデを施しており、底部全体は丸みを持っている。口縁部は緩やかに外傾し、端部近くで一端短く内傾した後に再び外側につまみ出して外反させている。口縁部は回転ヨコナデ調整で、内面底部は回転ヨコナデ後に不定方向ナデを施している。焼成は良好で全面淡灰色を呈する。258と同型式の杯蓋は調査区内からは出土しておらず、セット関係を知る上で貴重な資料である。

杯蓋259は復元口径15.5cm、器高2.1cmで、かなり偏平な形態になっている。口縁端部は下方に垂直に降りており、かえりは消失している。天井部外側は約1/2程度の範囲に回転ヘラ削りを施した後、直径5.0cmの輪状つまみを取り付けている。焼成は良好で外面は暗褐色、内面は濃灰色を呈している。

掘立柱建物 S B 0 6 (第38図)

S B 0 6 は第2加工段の最南端に位置し、また最も標高の高い場所に建てられており、床面レベルは27.6m前後で、第2加工段北端のS B 0 2との比高差は1.7mである。

S B 0 6 の柱穴のうち、P 6 や P 9 などは先行する加工段を地山削土の赤褐色土で整地して床面レベルを揃えた後に掘削されている。建物は現状で桁行2間×梁間1間で、P 6 ~ P 7 ~ P 8 間は2.0

mと2.1mで、P 6～P 9間は1.5m、P 7～P 10間は1.3m、P 8～P 11間は1.7mである。なお、P 9の1.5m西側にP 12が存在し、P 12から南方に柱穴が並び2間×2間の総柱建物になる可能性もあるが、床面が流出しており確認できなかった。

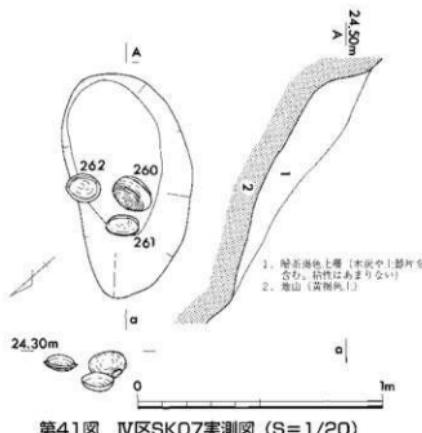
柱穴の深さはP 7が45cm、P 8が40cmと比較的深く、断面の柱痕は径12cm前後の規模を持っており比較的安定した建物であったと考えられる。

床面東端には溝S D 1 1が直線的に掘削されているが、断面V字形の浅いもので、S B 0 6の遺構外には伸びておらず、排水機能を持つものではないであろう。

S B 0 6からは土器類は出土していないが、有磁性鉄滓が255.4g出土している。

土坑SK 0 6（第40図）

第2加工段の南端に存在する土坑で、平面は86×104cmの楕円形で、深さ68cmの規模を持つ。中心部は2段掘りになっているが、その性格は不明である。



第41図 IV区SK07実測図 (S=1/20)

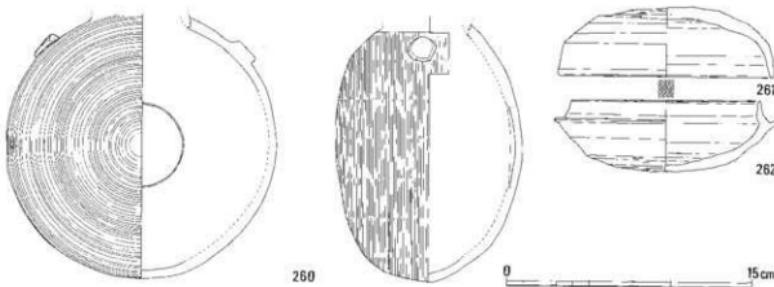
土坑SK 0 7（第41図）

SK 0 7は掘立柱建物 S B 0 2の下方、第2加工段と第3加工段の中間に位置している。規模は長軸92cm×短軸50cm、深さ18cmで、平面は楕円形を呈している。斜面に掘削されているため、上場は標高24.6～24.0mで推移している。

土坑内からは完形の須恵器杯蓋261・杯身262、頸部を欠いた提瓶260が出土している。出土状況に規則性は見出し難いが、祭祀などに伴いセットで埋納された可能性が考えられる。

土坑SK 0 7出土遺物（第42図）

提瓶260は頸部を欠損しているが、胴部径11.5～16.5cm、残存高16.1cmで、胴部外面は1cmあた



第42図 德見津遺跡IV区SK07出土遺物実測図 (S=1/3)

り4～5条の回転カキメにより最終調整をしている。肩部には把手の退化した径1.7cm前後の不整円形を呈する円形浮文状の粘土が付けられ、上面は平坦面を持っている。

当初の胴部形成に使われた作業孔は、5cm前後の大きさで、作業終了後に円形の粘土板で閉じられている。焼成は良好で内外面共に淡青灰色を呈している。

杯蓋261は口径13.0cm、器高4.3cmで、天井部外面の約1/2程度の範囲を回転ヘラ削りしている。肩部や口縁端部には沈線などのアクセントが付けられていない。器壁は窯内の火回りの差のため1/2の範囲が焼成不良となっており淡灰色を呈している。焼成良好の範囲は淡青灰色である。

杯身262は261とセットになるもので、口径11.5cm、器高4.4cmの大きさをもつ。底部の1/2程度の範囲に回転ヘラ削りが施されている。立ち上がりは一端内傾した後、途中から直立して上方に伸びている。焼成は概ね良く、外側は淡灰色、内側は淡黄灰色を呈している。

第3加工段（第44・46図）

第3加工段はIV区調査区の標高21.5～23.5m前後のレベルに平坦面を連続的に作り出したもので、調査区内では33m分を検出しているが、さらに南北に展開していると考えられる。

第3加工段内には北側から掘立柱建物S B 0 7、柱穴は存在しないが溝状遺構のある第1平坦面、コの字型の排水溝を持つ柱穴が並ばない第2平坦面、2回以上の建て替えを行なっている掘立柱建物S B 0 8が存在している。これらの遺構は北側のものが床面の標高が低く、南に行くに従って標高が高くなっている。

掘立柱建物S B 0 7（第33図）

S B 0 7は第2加工段の最北端にわずかに深さ65cmの柱穴1所と背後の削り込みが確認できるだけで、その大部分は調査区外になっている。

第1平坦面（第33図）

第1平坦面は東西5m、南北11m程度のフラットな空間であるが、顕著な遺構は見られず、唯一幅53cm、深さ20cmの溝状遺構S D 1 4が1.6mほど残存するのみであった。

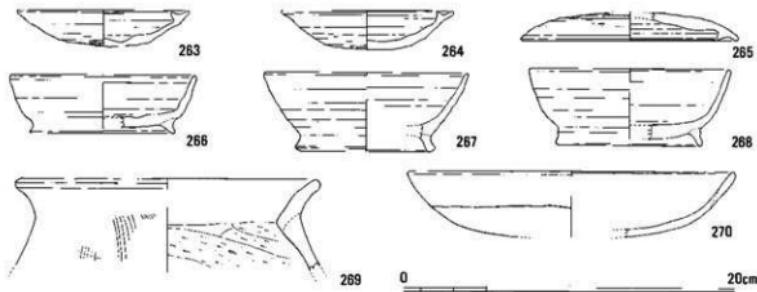
出土遺物としては須恵器杯身263・264、杯蓋265、高台付椀266～268、土師器壺269、土師器皿270などが見つかっているほか、有磁性鉄滓294.6g、無磁性鉄滓329.9gを検出している。

第1平坦面出土遺物（第43図）

杯蓋263は立ち上がりよくかえりが高くなったもので、口径8.4cm、かえり口径10.5cm、器高2.2cmで、底部の約2/3の範囲には丁寧な回転ヘラ削りが施されている。焼成は良好で表面は淡褐色を呈している。

杯蓋264はかえりと立ち上がりの高さが等しいもので、口径8.5cm、器高2.4cmの大きさを持っている。底部外側の2/3程度は回転ヘラ削りしている。立ち上がりはわずかに内傾する小突起状にまで退化している。焼成は良好で外側は暗黃灰色、内側は淡紫灰色を呈している。

263・264はセット関係が明確に捉えられないため杯蓋になる可能性もある。



第43図 德見津遺跡IV区第3加工段第1平坦面出土遺物実測図 (S=1/3)

杯蓋265は立ち上がりよりかえりが高くなつたもので、かえり径13.0cm、口径10.6cm、残存高1.7cmで、天井部外面は3/4近くまで回転ヘラ削りされているが、頂部近くは回転ヨコナデ調整が施されており、恐らく欠損している中央部にはつまみがついていたものと考えられる。

高台付椀266は復元口径11.2cm、底径8.7cm、器高3.6cmで、全体的に回転ヨコナデ調整を施しているが、底部は回転ヘラ削りしている。高台は外側に伸びて踏張るものである。

高台付椀267は復元口径12.3cm、底径7.8cm、器高4.9cmで、残存部は全て回転ヨコナデ調整で、口縁部は内湾しながら外側に立ち上がっていいる。高台は外側に踏張るもので、端部にわずかな平坦面を持つている。

高台付椀268は復元口径12.0cm、器高4.7cm、底径8.6cmで、全体的にヨコナデ調整を施し、内面底部のみ不定方向ナデで最終調整をしている。底部から口縁部かけての立ち上がりは緩やかにカーブしており、口縁部は直線的に外傾している。高台はやや外向きに長く伸び、先端は丸く收めている。

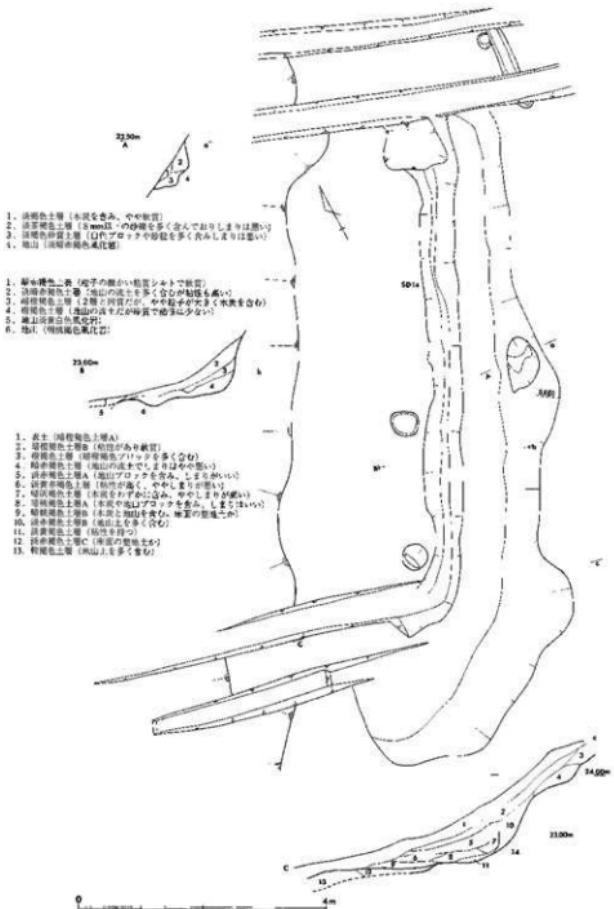
土師器壺269は復元口径17.9cm、口縁部は大きく外傾しているが比較的短く、端部は丸く收めている。口縁部は内外面とも回転ヨコナデ、胴部外面は1cmあたり3~4条のタテハケを施しているが部分的にナデ消されている。胴部内面は頸部直下から反時計回りのヘラ削りを施す。外面は煤が付着し、暗茶褐色を呈している。

土師器壺270は復元口径19.7cmのものであるが、底部中央は欠損しえいる。口縁部下の外面には粘土紐の接合痕が明瞭に残っているが、表面の調整は磨滅が進んでおり確認できない。胎土には2mm以下の砂粒をやや多く含んでおり精製品ではない。焼成もやや悪く表面は橙褐色を呈している。

第2平坦面（第44図）

第2平坦面はIV区のほぼ中央に位置し、床面レベルは22.6m前後で、平坦面の掘削は23.7m付近から行なっている。平坦面の規模は長軸9.9m、短軸3.7mで、排水溝は平坦面の最奥から70cm間隔を開けた内側に掘削され、幅60cm、深さ12cm、内側の全長約7.8mで両端は谷側に向かってコの字形に折れている。

平坦面上には浅いピットが2つあるのみで柱穴は確認できなかった。また、斜面を削り込んだ山側の壁面にS X 01とした縦90cm、横80cm、深さ28cmの土坑状の穴が穿たれていますが、遺物も無く、その性格も不明である。



1. 淡褐色土層（本質を含む、やや軟質）
 2. 淡褐色土層（本質を多く含んでおりしまさは無い）
 3. 淡褐色土層（本質を多く含むが、多少は無い）
 4. 淡褐色土層（本質（陶器質）を多く含む）
 5. 地山（淡褐色土層化）
1. 褐色土層（本質の含むが、やや軟質）
 2. 淡褐色土層（地山の底まで多く含むが、堅い）
 3. 淡褐色土層（本質と同質だが、やや粘りが大きく本質を含む）
 4. 地山（底の含むが、質で含みは少ない）
 5. 地山（淡褐色土層化）
1. 表土（褐色細粒土層）
 2. 淡褐色土層（褐色細粒土層があらわす）
 3. 淡褐色土層（褐色細粒土層が多く含む）
 4. 淡褐色土層（地山の底まで多く含む）
 5. 淡褐色土層（本質を多く含むが、やや粘りが大きい）
 6. 淡褐色土層（本質を多く含む）
 7. 淡褐色土層（本質を多く含む、やや粘りが大きい）
 8. 淡褐色土層（本質を多く含む）
 9. 淡褐色土層（本質を多く含む）
 10. 淡褐色土層（本質を多く含む）
 11. 淡褐色土層（本質を多く含む）
 12. 淡褐色土層（本質の質地土層）
 13. 淡褐色土層（地山上に多く含む）

第44図 德見津遺跡第3加工段第2平坦面実測図 (S=1/80)

が、口縁部は緩やかに外傾して大きく開き、口縁端部は若干内湾して終わっている。高台は高く大きく外側に突出し、端部は丸く收めている。全面的に最終調整は回転ヨコナデを施している。

甕274は口頸部のみ残存しており、中央よりやや下方に1条の沈線を巡らせている。口縁部に向けて大きく開き始めており、稜はあまり明確ではない。

小型高杯275は底径6.5cm、脚高4.8cmあまりの小型品で杯部は完全に欠損している。透し孔は3方向に施されるが、内面まで貫通しておらず器壁の1/2程度の所までしか達していない。

また、裾部近くに一筆書きで螺旋状に外周を2周する沈線が巡らされているほか、脚端部外面にも沈線が施されている。

甕276は底部のみ残存しており、外面は回転ヘラ削りを施しているが、底部外面のみ削りの後にナデ調整を行なっている。

須恵器小型甕277は復元口径15.8cmで、外面と口縁部内面には焼成時に自然釉や砂粒が付着して器

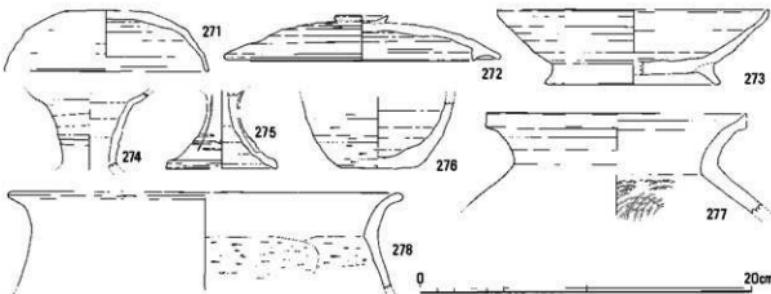
出土遺物としては須恵器杯甕271・272、高台付椀273、甕274・276、小型高杯275、小型甕277、土師器甕278のほか、有磁性鉄滓が340.0g、無磁性鉄滓が35.2g出土している。

第2平坦面出土遺物 (第45図)

杯甕271は復元口径12.2cm、器高3.8cmで、天井部は回転ヘラ切りの後にナデ調整している。肩部は張らず全体的に丸みがあり、肩部や口縁端部にもアクセントはつけられていない。

杯甕272は口径13.5cm、器高3.8cmで、天井部外面の約1/2程度を回転ヘラ削りした後、中央に直径3.3cmの輪状つまみを取り付けている。つまみの断面形は外方に細く突き出した三角形で、シャープな印象を与えるものである。

高台付椀273は器高4.6cm、復元口径16.4cm、底径10.3cmで、底部は比較的平坦である



第45図 德見津遺跡第3加工段第2平坦面出土遺物実測図(S=1/3)

壁表面を覆っている。胸部内面は円心円文当て具によるタタキ調整を行なっている。口縁部は外傾しており端部は外側に平坦面を持ち、若干上方に向かって肥厚している。

土師器甕278は復元口径23.3cmで、肩部はほとんど張らずなだらかに落ちている。口縁部は端部に行くほど大きく外反して、最後は水平気味になっている。胸部内面は頸部直下から反時計回りのヘラ削りを施している。口縁部外面は回転ヨコナデであるが、胸部外面は磨滅が激しく調整不明である。

掘立柱建物 S B 0 8 (第46図)

S B 0 8 は第3加工段の最南端に存在し、床面の標高は23.50m前後で S B 0 7 床面より1.3mほど床面レベルが高くなっている。

S B 0 8 は柱穴の並びが判然としておらず、建物の規模や柱間を特定できないが、P 5 ~ P 10 に至る柱筋のラインと排水溝 S D 1 5 が対応関係にあり、その掘立柱建物を取り壊し、敷地を山側に拡張した後の建物がP 1 ~ P 4 に至る柱筋をとっており、それと対応関係にある排水溝が S D 1 6 と考えられる。S D 1 5 が溝状を呈しているのは北端の1.6m程度だがP 5 より南では段状になっており、平面形は弓なりに弧を描いている。全長は直線で6.2m、北端での上場幅66cmである。

S D 1 6 も平面形はやや弧を描いたもので、全長は直線で4.6m、幅52cmで、S D 1 5 より一回り小さくなっている。

S B 0 8 の各柱穴はIV区内でも最も大きく深いものが多く、P 5 は幅95cm、深さ49cmで、P 15 が幅57cm、深さ68cm、P 10 は幅61cm、深さ56cmの規模を持ち、断面の柱痕は径17cm以上である。

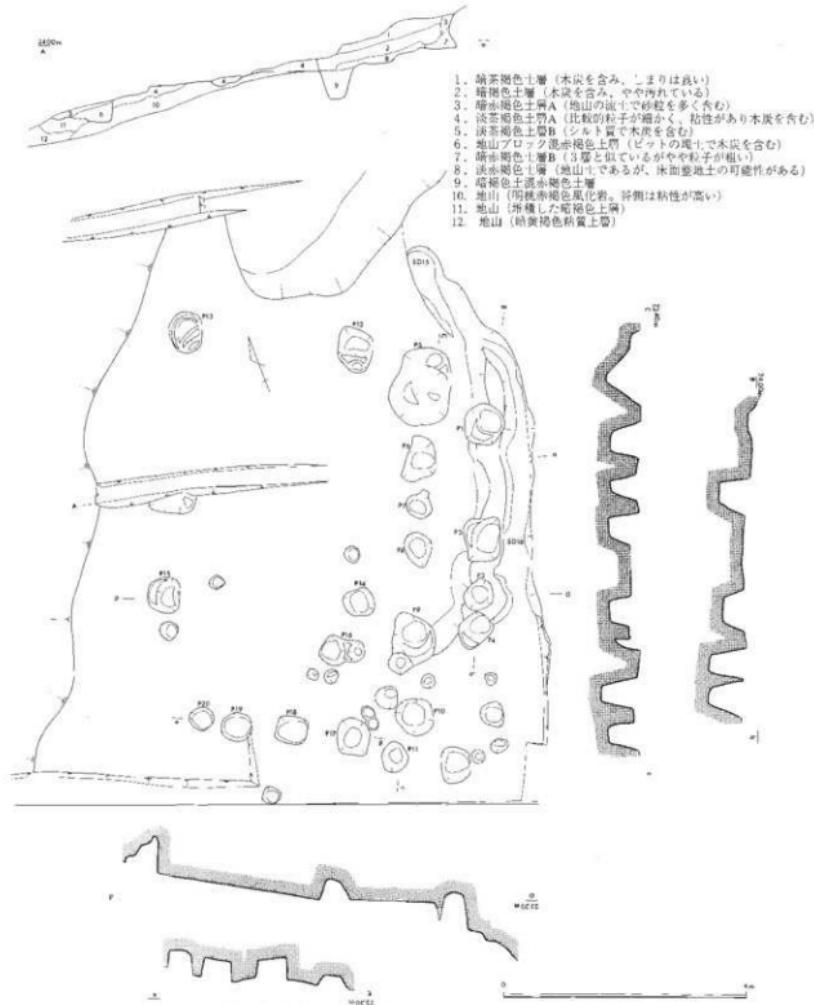
このように S B 0 8 として捉えたこの遺構には、掘立柱建物が建っていた要素が多く見られるが、プランとして構造が復元できなかった。排水溝が弧を描くことなどから長方形・正方形ではない可能性が考えられるほか、調査区南側にさらに建物が連続している可能性が高いと思われる。

遺物は須恵器杯蓋279~281高台付椀282、土師器甕283、土師器高台付椀284などのほか、有磁性鉄滓414.7gが出土している。

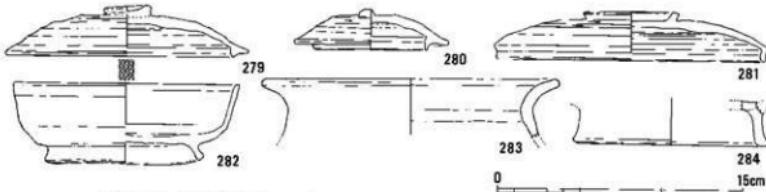
S B 0 8 出土遺物（第47図）

杯蓋279は口径12.8cm、器高3.2cmで、天井部外面の1/2程度の範囲を回転ヘラ削りした後、中央に直径2.9cmの輪状つまみを取り付けている。立ち上がりは退化し、断面が正三角形に近くなっている。焼成は良好で外面は暗黄灰色、内面は濃灰色を呈している。

杯蓋280は口径6.9cm、器高2.5cmで、天井部外面は1/2強の範囲を回転ヘラ削りした後、中央に直径1.0cmの小突起状のつまみを取り付けている。立ち上がりはやや高く、一端内傾した後で途中から



第46図 德見津遺跡IV区第3加工段SB08付近実測図(S=1/80)



第47図 德見津遺跡IV区第3加工段SBO8出土遺物実測図 (S=1/3)

垂直に落ちている。

杯蓋281は復元口径16.4cm、器高3.0cmで、天井部外面の2/3程度を回転ヘラ削りした後、中央に直径5.8cmの幅広な輪状つまみを取り付けている。口縁端部のかえりは消失し、端部は下方につまみ出している。胎土は緻密で色調は淡黄灰色を呈している。

高台付椀282は口径13.7cm、器高5.0cm、底径9.0cmで、底部は平坦であるが、口縁部への立ち上がりはやや急なカーブを描いた後、直線的に外傾して伸びている。高台は底部と口縁部立ち上がりの変化点より内側に取り付き、外方に向かって長く伸びて踏張るもので、端部に平坦面を持っている。

279と282はP15近くから重なって出土し、口径も合うことからセット関係であると考えられる。

土師器壺283は復元口径17.7cmで、口縁部は大きく外反して端部は丸く収めている。胴部内面は横方向のヘラ削り、外面は縱方向のハケ調整と考えられるが磨滅のため判然としない。

土師器高台付椀284は高台の一部のみが残存し、復元底径11.4cmである。高台の高さは2.2cmと高く、椀底部から垂直に伸びた後、端部はやや外方に向かって肥厚してながら丸く収めている。表面の残存状態はあまり良くないが、一部に丹塗りが見られる。

第4加工段（第33図）

第4加工段はIV区調査区の標高17.5~18.0m前後のレベルに平坦面を連続的に作り出したもので、調査区内では南西から北東にかけて約45m分を検出した。第2・3加工段より南北のレベル差が小さい特徴が見られる。

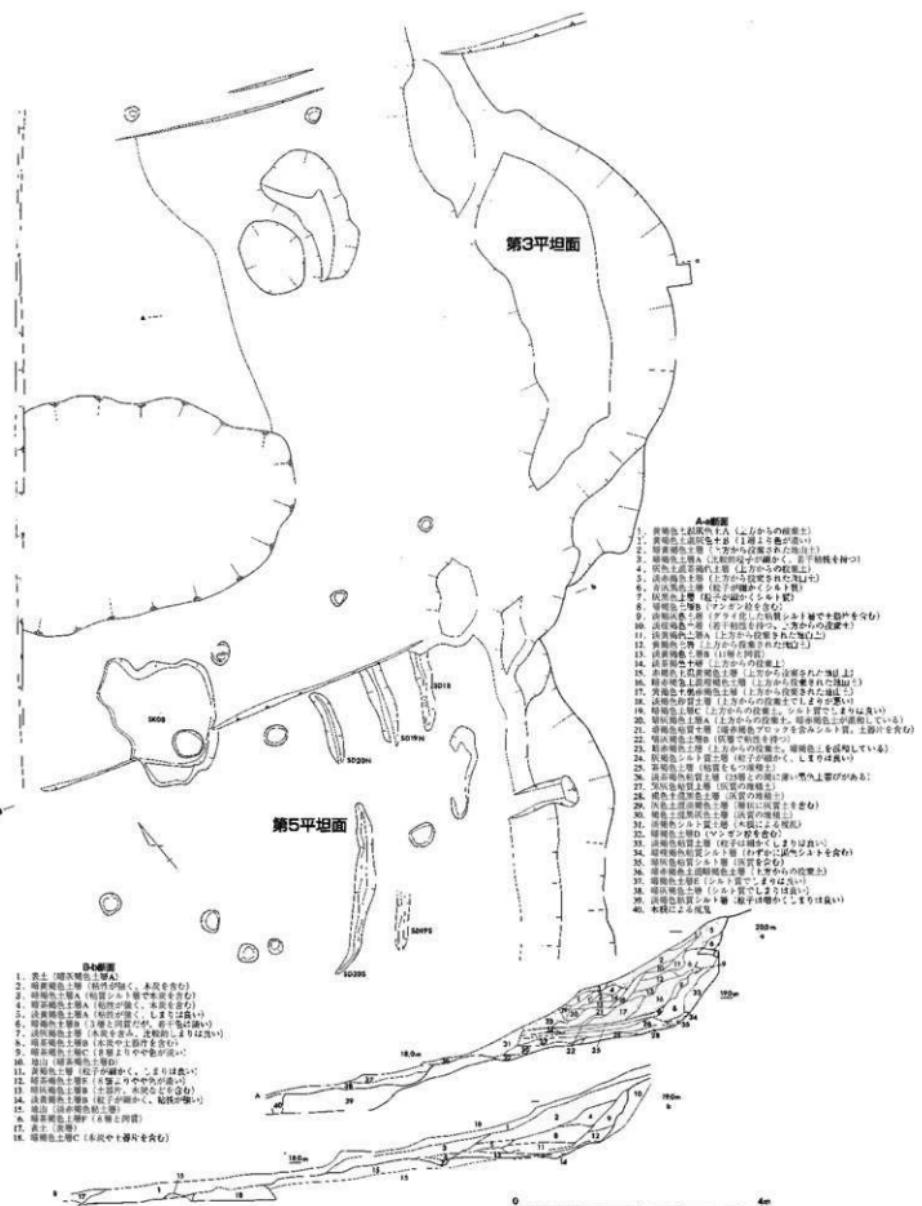
第4加工段には北から第4平坦面、第3平坦面、第5平坦面、掘立柱建物S B 0 9が連続的に連なっている。また、平坦面の幅が11m以上あり、調査区内の加工段では最大の規模を持っている。

第3平坦面（第48図）

第3平坦面は第2平坦面の下方に位置し、第4加工段の中では最も山側に食い込んで、深く掘削されているものである。平坦面のレベルは18.3m前後であるがフラットではなく若干、谷側に傾斜している。加工段の掘削は標高20.2m付近を最高所として行われており、上方の第2平坦面のレベルからは2.4mの比高差しかない。

平坦面は長軸5.57m、短軸1.8mで、平面形態は不整形な三日月型であるが、上面に頗る著な遺構は存在していない。

第3平坦面の特徴として、特異な埋没過程が挙げられる。床面から30cmあまりは暗褐色土系の堆積土が13層あまり自然堆積しているが、その上面には最大で1.3mに渡って、地山と同質の赤褐色土・



第48図 徳見津遺跡IV区第4加工段第3・5平坦面実測図 (S=1/80)

黄褐色土が細かなブロック単位で堆積している。これは第3平坦面が第9層まで自然堆積により埋没した後の凹地に、上方の第2平坦面を掘削した時の排土を落としたことに起因し、土層のブロックは廃棄単位と関連すると考えられる。

上層の廃棄土からは須恵器杯蓋285、杯身286・287、高杯288・289、ミニチュア直口壺290、土師器壺291、土製支脚292、砥石293が出土している。

また、下層堆積土中からは須恵器杯蓋294・295杯身296～299、横瓶301、土師器壺300が出土している。その他に第2平坦面と第3平坦面の中間斜面より有磁性鉄滓200.0 gが、第3加工段上層廃棄土中より有磁性鉄滓が21.1 g出土している。

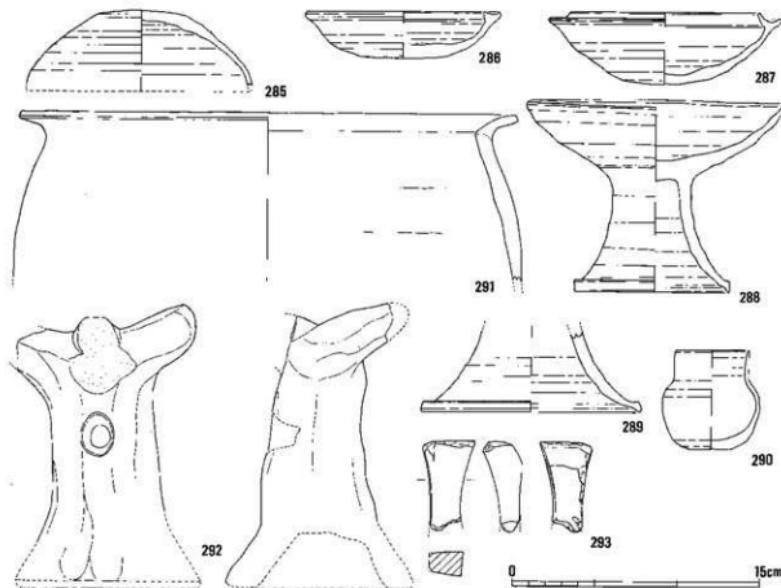
第3平坦面出土遺物（第49・50図）

杯蓋285は口縁端部が欠損しているが、復元推定口径13.7cmで、大井部外面はヘラ起こしの後、軽いナデ調整を施している。全体的に丸みの強い器形で、肩部はフラットでほとんどアクセントは見られない。焼成は概ね良好で外面は淡紫灰色、内面は暗紫褐色を呈している。

杯身286はかえりと立ち上がりの高さが同じで、口径10.0cm、器高2.9cmである。底部はヘラ起こし後、粗いナデ調整を行なっている。焼成はやや不良で表面は淡褐灰色を呈している。

杯身287は口径11.4cm、器高4.4cmで、底部はヘラ切りの後に軽いナデを施している。立ち上がりはやや短く内傾している。焼成は良好で外面は淡褐灰色、内面は淡灰色を呈している。

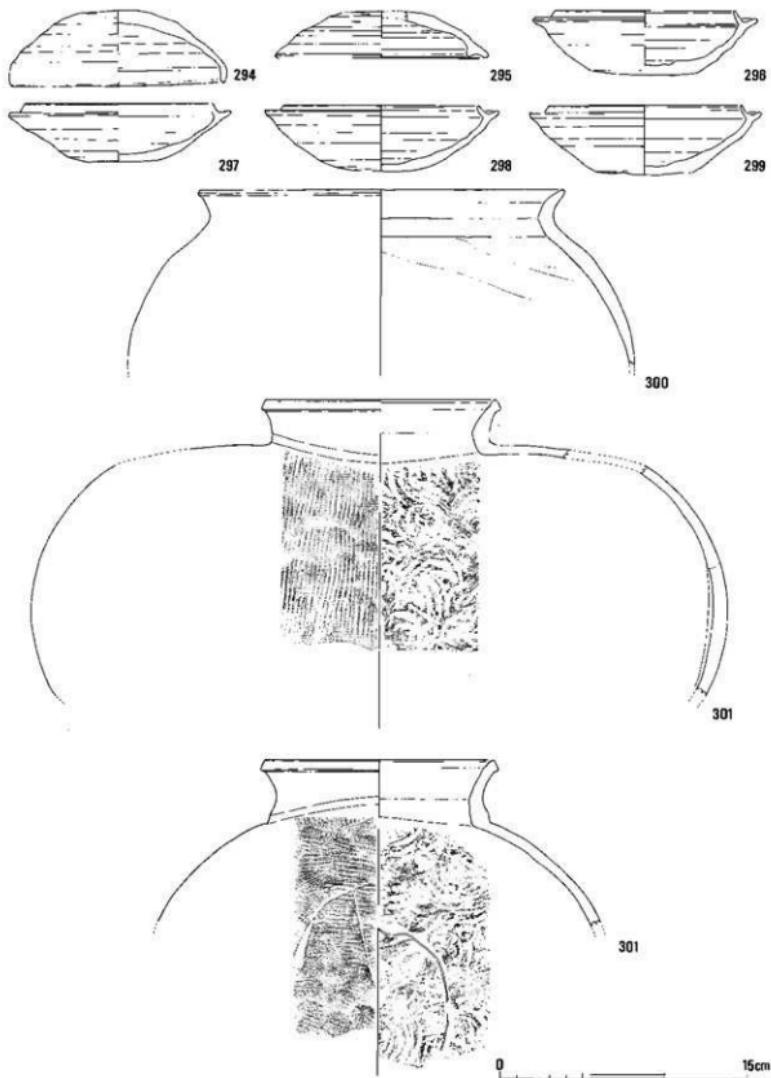
高杯288は口径15.8cm、器高、11.8cm、底径9.4cmで、杯部は若干内湾気味ではあるが直線的に外傾して大きく開き、逆に脚部は緩やかに外反するが、あまり開かずに終わっている。脚端部は下方につ



第49図 徳見津遺跡IV区第4加工段第3平坦面埋土上層中出土遺物実測図 (S=1/3)

まみ出されており、外面はには平坦面が形成されている。焼成はやや不良で表面は淡褐灰色を呈している。

高杯289は脚裾部のみ残存しており、復元底径13.3cmで、全面回転ヨコナデ調整されている。脚端部は丸く收められているが、端部上面はやや肥厚し、シャープな稜を形成している。



第50図 德見津遺跡IV区第4加工段第3平坦面埋土下層中出土遺物実測図 (S=1/3)

ミニチュア直口壺290は復元口径4.4cm、器高6.1cmで、底部は回転ヘラ切りの後、軽いナデ調整により径2.4cmの平底を形成している。胴部や口縁部の器壁は薄くシャープな仕上げで、焼成も良好である。外面は淡黄褐色、内面は淡灰色を呈している。

土師器甕291は復元口径30.1cmで、肩部はほとんど張っていない。口縁部は強く外傾し、水平に近い角度になるが、長くは伸びていない。胴部内面には横方向のヘラ削り、外面はハケメと考えられるが磨滅のため詳細は不明である。胴部外面には煤が付着している。

土製支脚292は高さ17.5cm、推定底径10.8cmで、安来地域で通例見られる形態である。第IV調査区からは他に数個体分の土製支脚は破片が出土しているが図化はできなかった。

砥石293は端部が欠損しているが、全長5.5cm、最大幅3.3cm、最小幅1.8cm、現状での重量23.2gである。研磨面は側面の4面で、各面ともよく研磨され内側に湾曲している。色調は白褐色で材質は粒子の細かい砂岩である。

杯蓋294は口径12.8cm、器高4.7cmで、天井部外面は回転ヘラ切りの後、軽いナデ調整を施している。口縁端部は若干内傾して、全体として丸みを持った形態を取っている。焼成はやや不良で外面は淡褐色、内面は濃灰色を呈している。

杯蓋295は立ち上がりよりかえりが高くなっている、口径10.6cm、かえり径12.5cmである。天井部外面の1/2程度の範囲に浅い回転ヘラ削り調整を施した後、中央部をヨコナデしていることから、現在欠損している部分には本来つまみが取り付けてあったと考えられる。

杯身296は口径10.9cm、器高4.0cmで、底部は回転ヘラ切りの後、ナデ調整を施している。立ち上がりは強く内傾しているが、器壁は薄くシャープである。焼成はやや不良で外面は白灰色、内面は淡灰色を呈している。

杯身297は口径11.3cm、器高3.6cmで、底部外面は回転ヘラ切り後、軽いナデ調整をしている。器全体がやや偏平で、器壁も薄く形成されている。立ち上がりは一端内傾した後、途中から直立気味になるが短く終わっている。

杯身298は復元口径11.7cm、器高4.1cmで、底部外面は回転ヘラ切りの後、軽いナデ調整を行なっている。底部はなだらかな丸底になり深みがあるが、立ち上がりは強く内傾して終わっている。

杯身299は復元口径11.7cm、器高4.3cmで、底部外面は回転ヘラ切りの後、ナデ調整を施して底部を平底気味に仕上げている。立ち上がりは強く内傾するものだが、細くシャープな仕上がりである。

土師器甕300は復元口径22.0cmで、肩部は比較的よく張っている。口縁部は一端内傾した後、途中から大きく外反するものであるが、その長さは短い。胴部内面はヘラ削りを施しているが、磨滅しているため方向は不明である。

横瓶301は全体の1/4程度が残存しており、口径は13.8cmである。胴頂部には胴部形成時に使用された作業孔が見られるが、作業孔を粘土板で充填した後、同心円文であて具によるタタキを内面全体に施している。胴部外面は1cmあたり3~4条の平行タタキを行なった後、間隔の開いた軽い回転カキメを施している。

第4平坦面（第51図）

第4平坦面は第4加工段の北端に位置し、標高17.5m前後のレベルに平坦面を作り出している。平坦面は南側が不明瞭になっており正確な規模が分からぬが、長軸9m以上、短軸2.4mの規模を持つている。

中央部には全長2.2m、幅42cm、深さ22cmの平面逆L字形を呈する溝状遺構SD17が存在するが、それ以外にはピットが確認されるだけで顯著な遺構は検出できなかった。

遺物の出土状況としては杯蓋304・305がSD07の溝内とその肩から出土しているほか、SD17の南1.7mの地点から杯蓋302・303が出土している。いずれも原位置のものが土圧で潰れた状態で検出された。その他にこの付近から有磁性鉄滓15.0g、無磁性鉄滓236.1gを検出している。

第4平坦面出土遺物（第52図）

杯身302は口径11.3cm、器高4.2cmで、底部外面は回転ヘラ切りの後、不定方向の軽いナデ調整を行なっている。立ち上がりは短く内傾し、途中から直立気味になっている。器壁はやや厚く、全体的に

丸味が強い。焼成は良好で表面は黄褐灰色を呈している。

杯身303は口径11.3cm、器高3.8cmで、底部外面は回転ヘラ切りの後、軽いナデ調整を行なっている。立ち上がりは直線的に短く内傾している。

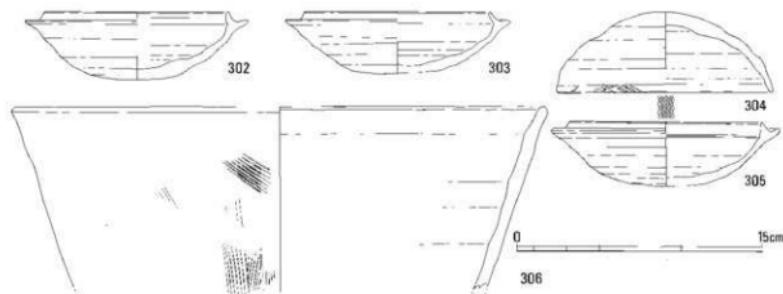
杯蓋304は口径13.1cm、器高5.0cmで、天井部外面は回転ヘラ切りの後、丁寧なナデ調整を行なっている。全体的に丸味の強い形態で、肩部もなだらかに降りておりアクセントなどは見られない。

口縁端部外面にはクシ状工具が不規則に接したような擦痕が見られる。



数字は土器図版の番号に対応

第51図 德見津遺跡IV区第4加工段第4平坦面実測図 (S=1/80)



第52図 德見津遺跡IV区第4加工段第4平坦面出土遺物実測図 (S=1/3)

杯身305は口径11.8cm、器高4.0cmで、底部外面は回転ヘラ切り後に、丁寧なナデ調整を施しており底部は緩やかにならん底になっている。立ち上がりの断面は二等辺三角形状になって若干内傾している。焼成は不良で外面は淡灰色、内面は淡黄灰色を呈している。304と305は出土地点も近く、口径なども合っているためセットとして用いられたと考えられる。

土師器瓶306は大きく開いた口縁部のみ残存しており、復元口径32.4cmの大きさをもつ。外面は1cmあたり5条の縦方向を基調としたハケ調整を行ない、内面は横方向のユビナデを施している。焼成は良好で外面は明白褐色、内面は明褐色を呈している。

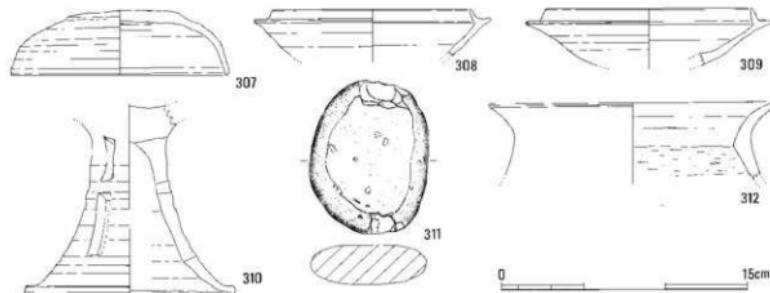
第3平坦面下方出土遺物（第53図）

第3平坦面西側のフラットな面から杯蓋307、杯身308・309、高杯310、石錘311、土師器壺312が出土しているほか、有磁性鉄滓134.9g、無磁性鉄滓54.1gを検出した。

杯蓋307は口径13.2cm、器高4.0cmで、天井部外面は回転ヘラ切りの後、軽いナデ調整を施している。肩部から口縁部にかけて回転ヨコナデ調整で、口縁端部内面には浅い凹線が巡っている。

杯身308は底部が欠落しているが、口径12.1cmで、残存部は全て回転ヨコナデ調整である。

杯身309は全体の1/5程度が残存しており、復元口径12.7cmで、底部外面は回転ヘラ切りした後にナデ調整を施している。焼成は良好で黒灰色を呈している。



第53図 德見津遺跡IV区第4加工段第3平坦面下方出土遺物実測図 (S=1/3)

長脚二段高杯310は杯部を欠損しているが、復元底径12.7cm、脚高10.5cmの規模を持つ。透し孔は上下段とも3方向長方形透しで、脚部中央には2本の沈線が退化した浅い凹線が巡らされている。

脚端部は丸く、やや下方に肥厚している。

石鍤311は白褐色を呈する多孔質の石を使用した全長9.5cm、幅9.5cm、厚さ2.5cm、重量240.0gの製品で、両端部は浅く打ち欠かれている。

土師器壺312は復元口径17.5cmで、口縁は先端に行くほど大きく外反している。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で、外面には煤が付着している。胴部内面は反時計回りのヘラ削りを施している。

第5平坦面（第48図）

第5平坦面は第4平坦面の西側に位置し、標高17.5~18.0m前後の比較的フラットなスペースである。平坦面の規模は、他の遺構との境界が明瞭でないため判然としないが、遺構の配置状況を考えると約8m×8.4m以上の空間を有している。

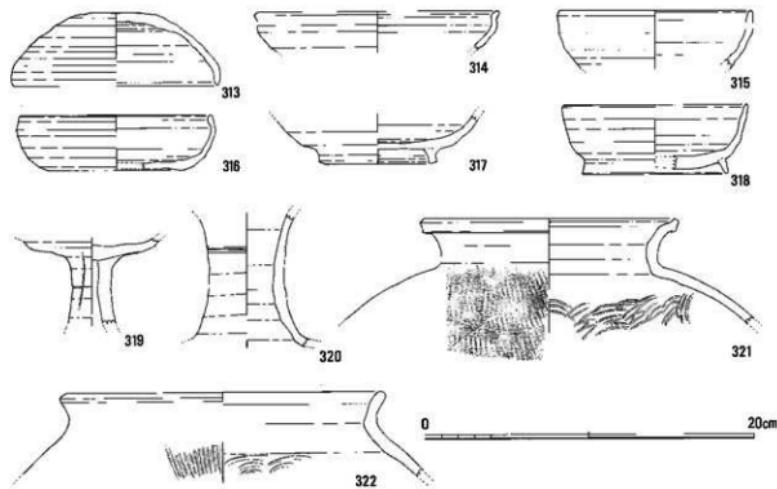
主な遺構としては溝状遺構SD18・19・20と土坑SK08があるが、いずれも削平されており、残存状況は良くなかった。

溝状遺構SD18（第48図）

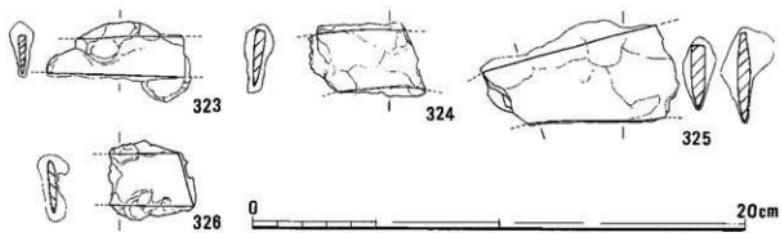
SD18は現状で1.4m残存しており、幅26cm、深さ10cmあまりが残存している。

溝状遺構SD19（第48図）

SD19はSD18から50cmの間隔を開けて並列するかたちで存在し、現状で4.7m残存しているが、中間の2.4mほどが削平されている。溝の幅は36cm、深さ18cmで、B-b断面からSD18が完



第54図 德見津遺跡IV区第4加工段第5平坦面出土遺物実測図1 (S=1/3)



第55図 德見津遺跡IV区第4加工段第5平坦面出土遺物実測図2 (S=1/2)

全に埋没した後、その埋土を再掘削してSD19を設置していることが確認できる。

溝状造構 SD20 (第48図)

SD20はSD19と並行する形で掘削されており、残存長4.6m、幅34cm、深さ8cmの規模をもつている。土層断面からSD19に後出すると考えられる。

いずれの溝状造構も緩やかに弧を描いており、その規模から建物に伴う排水溝か作業空間を区画する溝と考えられる。

土坑SK08 (第48図)

SD20の北西に存在する不定形の土坑であり、規模は直径1.7~2.4m、深さ24cmの規模をもっている。須恵器の小片が出土しているが、時期が特定できる遺物は検出できなかった。

第5平坦面出土遺物 (第54・55図)

遺構に伴う遺物は無く、包含層中の遺物を図示した。土器類では杯蓋313、杯身314~316、高台付椀317・318、高杯319、長頸蓋320、須恵器小型甕321・322などがあり、鉄製品では刀子と考えられる323や曲刃鎌324~326が出土している。

また、有磁性鉄滓56.1g、無磁性鉄滓102.9gを検出している。

杯蓋313は復元口径12.4cm、器高4.5cmで、天井部外面は回転ヘラ切りの後、軽いナデを施している。その他の部分は全て回転ヨコナデであり、口縁端部は若干内傾して終わっている。

杯身314は復元口径14.6cmで、底部は完全に欠損している。口縁端部は直立した後、外側に肥厚させ丸く收めている。調整は全面回転ヨコナデで、焼成は良好である。

杯身315は復元口径11.6cmで、残存部分は回転ヨコナデ調整を施している。胴部は緩やかに外反し、口縁部は直立気味に立ち上がっている。焼成は良好で表面は暗灰色である。

杯身316は復元口径11.5cm、器高3.4cm、底径3.4cmで、底部は回転糸切りのままであるが、他の部分は回転ヨコナデを施している。口縁は大きく内傾して立ち上がり、口縁端部では内傾している。

高台付椀317は口縁部は完全に欠損しているが、底径6.4cmで、器壁は比較的薄い。底部から口縁部への変化点は比較的緩やかに外傾しており、高台は変化点よりやや内側に取り付けられ、若干外方に向かって下降して、端部に平坦面を作り出している。

高台付碗318は口径11.2cm、器高4.3cm、底径8.7cmで、底部から口縁部への変化点は緩やかな弧を描いて立ち上がり、口縁は直線的に外傾している。高台は若干外側に向かって伸びるが、極めて細く高いもので、端部は丸く收めている。

高杯319は口縁部と脚端部を欠損した小型品で、脚部上半には3方向に刀子状工具によって線状の透し孔が開けられている。焼成は良好で外面は暗灰色、内面は明灰色を呈している。

長頸壺320は頸部のみ残存しており、上部に2条の浅い沈線を粗雑に施している。焼成は極めて良く、外面は暗茶褐色、内面は淡灰色を呈し備前焼などの焼き色に近い。

須恵器小型壺321は肩部以下は欠損しているが、復元口径15.4cmで、口縁部は大きく外反して壺部は外面に平坦面を作り出しており、さらに上に肥厚している。胴部外面は1cmあたり3条の平行タキを施し、胴部内面は同心円文あて具によるタタキを施している。

須恵器小型壺322は復元口径19.1cmで、口縁部は短く外傾して端部を丸く收めて終わっている。胴部外面は縦方向の平行タキを施し、胴部内面は同心円文あて具によるタタキを施している。

刀子状鉄製品323は基部と切先部が欠損しているが、長さ5.7cmほどが残存しており、幅は1.6~1.7cm、厚さ3cmである。

鎌状鉄製品324は両端が欠損し、刃部の一部しか残っていないが、存長4.0cm、幅2.5cm、厚さ4cmの大きさで、全体的にわずかなカーブを描いている。

鎌状鉄製品325は切先部と基部が欠損し、刃部の一部しか残存していないが、背部残存長7.4cm、刃部残存長5.7cm、幅は2.6~3.8cm、厚さ6cmの大型品である。324と325は形状や大きさから同一製品となる可能性がある。

326は刃を持つ鉄製品で、残存長3.4cm、幅2.2cm、厚さ3cmである。X線撮影でも端部の確認は明確にはできなかった。

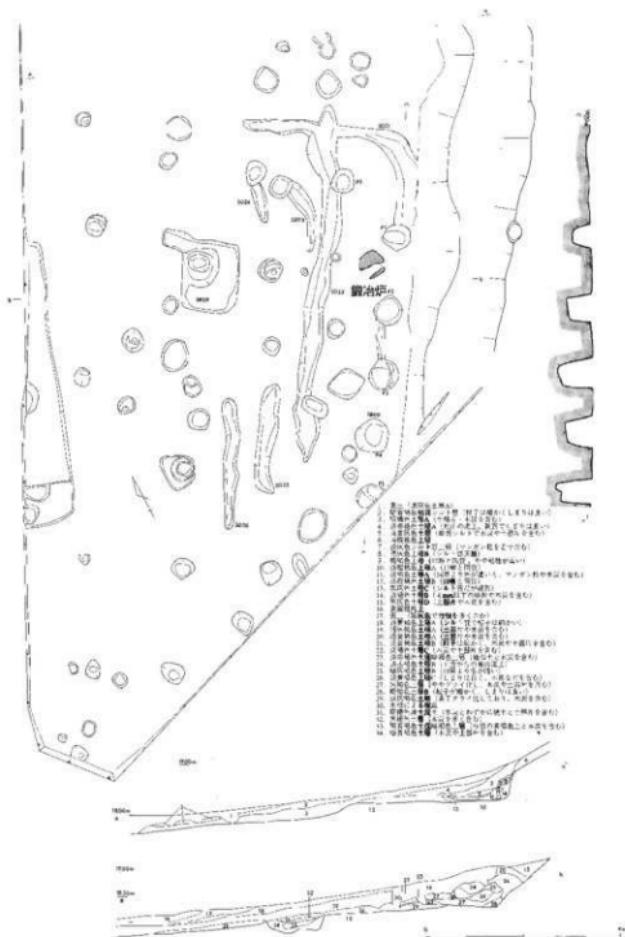
振立柱建物S B 0 9 及び周辺遺構 (第56図)

遺構 S B 0 9は第4加工段の南端に位置し、標高17.7~18.3m前後に床面を作り出している。建物の柱間はP 1~P 5による梁間4間分しか確認できず、P 1~P 5に正確に対応する西側の柱列は検出できなかった。柱穴を見てもP 1~P 5は幅52~65cm、深さ47~62cmと規模が大きいが、それ以外の柱穴は深さ30cm以内の浅いものが多い。各柱穴の間隔はP 1~P 2が1.5m、P 2~P 3が1.3m、P 3~P 4が1.4m、P 4~P 5が1.2mである。調査区外の南方にも平坦面は連続しているため、さらに柱列は南に伸びる可能性がある。

建物が存在したと考えられる空間には多数の柱穴や溝状遺構、土坑、鋳冶炉などが散在しているが、同時に存在したものではなく複数の時期に分かれると考えられる。

溝状遺構はS D 2 1~2 6が存在するが、S D 2 3~2 6は削平されており痕跡的にしか残存していない。S D 2 3は残存長1.4m、幅34cm、深さ11cmの規模を持ち、S D 2 4は残存長80cm、幅26cm、深さ9cmで、S D 2 5は残存長2.2m、幅40cm、深さ10cmで、S D 2 6は残存長2.7m、幅30cm、深さ8cmである。削平以前はS D 2 3はS D 2 5と、S D 2 4はS D 2 6と連続した一体の溝であった可能性が考えられる。

S D 2 2は残存長7.3m、幅40cm、深さ13cmで、直線的に北東から南西に伸びている。S D 2 1は



第56図 德見津遺跡IV区第4加工段SB09付近実測図 (S=1/80)

S D 2 2 の北端部と直交した後、加工段の傾斜変換点で P 1 の背後に取り付くように回り込み、消滅している。S D 2 1 は S D 2 2 を切って掘削されており、B-b 断面からも山手側に建物が拡張されていることが確認できる。

これらの溝は等高線や P 1 ~ P 5 の柱列に平行しており、深さも浅いことから掘立柱建物の雨落ち溝か排水溝と考えられる。

P 1 ~ P 2 間には鍛冶炉と考えられる直径52cmあまりの円形の焼上が残存していた。焼上はやや軟質であるが赤褐色に変色しており、周囲からは鰐の羽口388や多量の鉄滓が出土している。

出土遺物はIV区調査区の中では最も多量に出土しており、図化できたものだけで須恵器49個体、土師器7個体、砥石2個体、磨石1個体、棒状土錘3個体、鰐の羽口1個体、鉄製品4個体を出土しており、さらに有磁性鉄滓5666.9g、無磁性鉄滓326.6gを検出した。

このように S B 0 9 は鍛冶を伴うもので、遺物も多量に出土している。そして、溝の在り方などから複数回に渡って建物の建て替えが行なわれているが、掘立柱建物として明確なプランを抽出することができなかった。これは柱穴が削平されているか、もしくは未検出である可能性もあるが、建物の構造が通常の掘立柱建物と異なる可能性を検討する必要もあるであろう。

S B 0 9 及び周辺遺構出土遺物（第57~60図）

杯蓋327は口径13.1cm、器高4.0cmで、天井部は回転ヘラ切りの後、不定方向のナデ調整を施している。全体的に丸味のある器形で、口縁端部は内傾している。

蓋328は復元口径8.9cm、器高2.1cmで、天井中央には擬宝珠形のつまみが付けられている。口縁端部は下方に細く引き出され、全体的に器壁が薄くシャープな仕上げである。焼成は良好で表面は褐灰色を呈している。セットになる個体は明確ではないが長頸蓋などの蓋になるであろう。

蓋329は口径7.4cmで、天井は回転ヘラ切りの後、中央につまみを付けているが現在は剥離している。天井外側以外は全て回転ヨコナデ調整で、立ち上がりは口径に比してやや長い。

杯蓋330は復元口径16.3cm、立ち上がり径14.6cm、器高14.6cmで、天井部外側の1/2程度の範囲を回転ヘラ削りした後、直径5.0cmの輪状つまみを取り付けている。立ち上がりは断面正三角形になり小さく退化している。焼成は良好で外面は暗灰色、内面は暗褐色を呈している。

杯蓋331は復元口径14.9cmで天井部は欠損している。恐らく天井中央に輪状つまみの付くタイプであろう。焼成は良好で外面は暗灰色、内面は黄灰色を呈している。

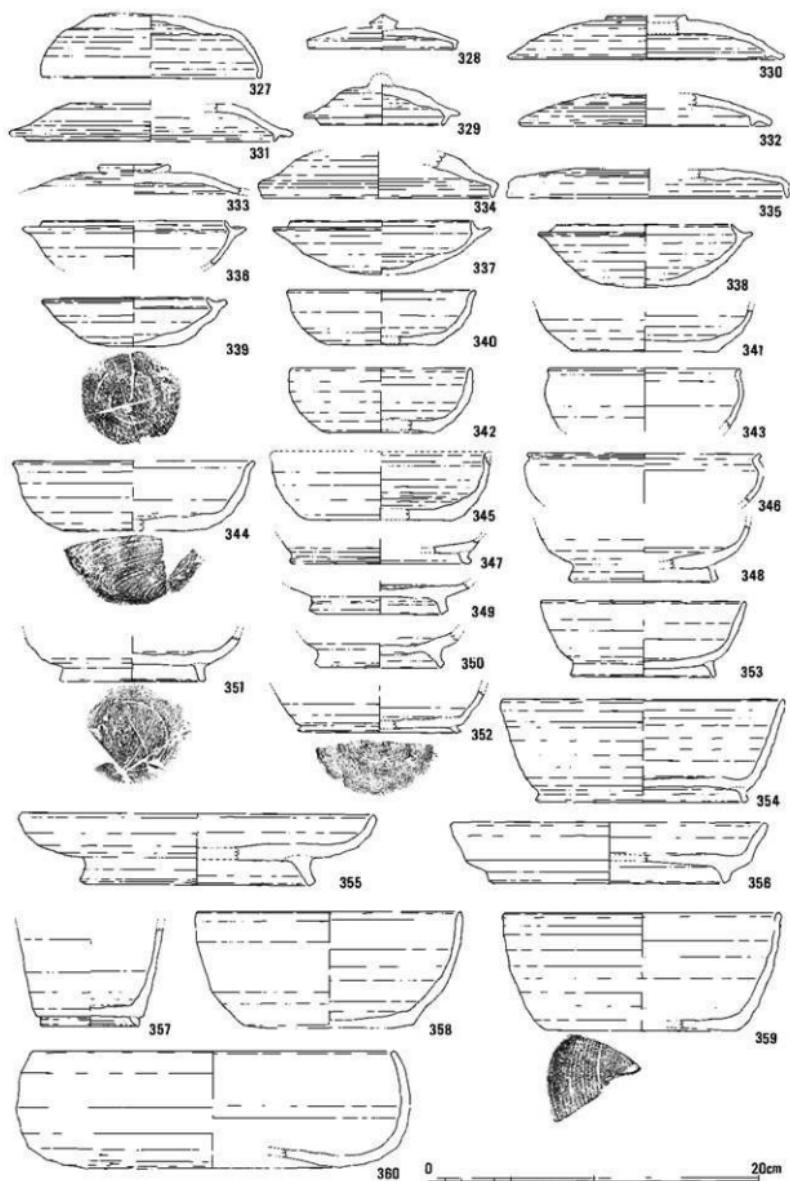
杯蓋332は復元口径13.1cmで、かえりと立ち上がりの高さは等しくなっている。焼成は良好で外面は淡黄灰色、内面は淡褐色を呈している。

杯蓋333は口縁部完全に欠損している。輪状つまみの直径は4.4cmで、つまみの外周天井部は回転ヘラ削りを施している。

杯蓋334は復元口径14.0cmで、かえりは消失して口縁端部は下方に伸びている。焼成は良好で外面は淡褐色、内面は暗灰色を呈している。

杯蓋335は復元口径17.0cmで、口縁端部は下方に折れた後、若干外反しながら伸びている。

杯身336は復元口径11.1cmで、天井部は欠損しているが、それ以外の範囲は回転ヨコナデ調整している。立ち上がりは短く内傾している。



第57図 德見津遺跡IV区第4加工段SB09付近出土遺物実測図1 (S=1/3)

杯身337は復元口径11.1cm、器高3.3cmで、底部外面は回転ヘラ切りの後、軽いナデ調整を施している。立ち上がりは短く内傾している。

杯身338は復元口径13.1cm、器高3.8cmで、底部外面は回転ヘラ切りの後、軽い不定方向ナデを施している。底部は丸味の強い形状で、立ち上がりは短いが急な角度で内傾している。

杯身339は口径8.9cm、器高3.0cmで、底部外面は回転ヘラ起こしこのまままで、その他の部分は回転ヨコナデ調整を行なっている。焼成は良好で表面は淡褐灰色を呈し、底部外面には「×」状のヘラ記号が焼成前に付けられている。

杯身340は復元口径11.3cm、器高3.4cm、底径6.5cmの平底の器で、底部の切り離しは回転糸切りによっている。側面は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は若干外傾して丸く収めている。胎土はやや粗く4mm以下の石英・長石などをやや多く含んでいる。

杯身341は底部付近の1/3程度が残存しており、復元底径は8.9cmで、底部は回転糸切りによって切り離している。焼成は良好で内面は濃灰色、明褐灰色を呈している。

杯身342は復元口径10.9cm、器高3.9cmで、底部は回転糸切りの後に軽いユビナテ調整を行なっている。口縁は内湾気味に立ち上がり、端部付近ではほぼ直立して、端部は丸細く収めている。

杯身343は復元口径11.5cmで、口縁部は内湾して端部近くで小さく外反している。器壁は薄く、焼成は良好で、外面は暗褐灰色を呈している。

杯身344は復元口径14.5cm、器高4.3cm、底径8.8cmで、底部は静止糸切りで切り離している。口縁は緩やかに内湾しながら外傾し、端部は外側につまみ出されて上面に平坦面を持っている。

杯身345は口縁端部は欠損しているが、復元底径は8.7cmで、344より口縁部の内湾が強く、端部は内側に肥厚した後、外反すると考えられる。

杯身346は底部は完全に欠損するが、口縁部は外傾して立ち上がった後、強く内湾して、口縁端部近くでは内傾して端部は外側につまみ出している。焼成は概ね良好で表面は淡褐灰色を呈する。

土師器高台付椀347は高台部しか残存していないが、高台は垂直に落ちた後、外傾しており断面は猫足状を呈している。表面には若干丹塗りが残り濃橙褐色を呈している。復元底径は10.8cmである。

高台付椀348は口縁部完全に欠損しており、復元底径8.5cmである。高台は杯部との接着面から器壁が薄く、わずかに外傾しており端部には小さな平坦面が形成されている。

高台付椀349は底部のみ残存しており、底径7.6cmで、高台はやや外側に伸びて端部には平坦面を作り出している。焼成は良好で表面は淡黄灰色を呈している。

高台付椀350は形態的には349と同じであるが、高台はより外方向に向かって踏張っており、底径7.4cmである。焼成は良好で表面は淡灰色を呈している。

高台付椀351は底径8.6cmで、底部中央には「×」状のヘラ記号が焼成前に線刻されている。高台は若干外方向に張り出しているが、端部は丸く収めている。

高台付椀352は底部から口縁部への変化点が明瞭で、屈曲した後に直線的に外傾して立ち上がってている。高台はその変化点から4mmほど内側に取り付けられているが、低く短いもので大きく外方向に踏張っている。脚端部は鋭い稜をもち、器壁も薄いことからシャープな印象を与えるものである。

高台付椀353は復元口径12.4cm、器高4.7cm、底径8.7cmで、底部から口縁部への変化点は緩やかに立ち上がっており、その後は直線的に外傾している。高台は細くシャープなもので、底部は回転ヘラ削

りの後で軽いナデ調整を施している。

高台付椀354は復元口径17.0cm、器高9.3cm、底径12.5cmで法量が大きく、底部は回転糸切りの後に軽いナデ調整を行なっている。高台は底部と立ち上がりの接点近くに取り付けあり、若干外方向に傾きながら下降して、端部は若干肥厚するが丸く仕上げられている。

高台付皿355は復元口径21.9cm、器高4.3cm、底径13.7cm、高台高1.5cmで、高台は外傾して端部は若干平坦面を持つている。皿部は偏平で口縁部は内傾気味に立ち上がり、端部は細く丸く仕上げている。表面は磨滅しているがほぼ全面回転ヨコナデ調整している。

高台付皿356は復元口径19.0cm、器高3.7cm、底径14.0cmで、高台は端部に平坦面を持っているが、断面が三角形に近い鈍重なものである。口縁部への立ち上がりは底部から急激に外傾気味に立ち上がった後、途中で傾斜を緩めている。焼成はやや不良で表面は淡褐色を呈している。

357は用途不明器種で、底径は5.9cmである。底部は平坦で、胴部への立ち上がりは急で、直線的に外傾して胴部を形成している。高台は外側に張り出しているが外面に平坦面を持ち、端部は細く仕上げられている。焼成は良好で外面は淡褐色、内面は淡黄灰色を呈している。

椀358は復元口径16.0cm、器高7.1cm、底径10.2cmで、底部は静止糸切りの後で回転ナデを施している。口縁部は回転ヨコナデで、底部内面は回転ヨコナデ後に不定方向ナデを施している。

椀359は復元口径16.6cm、器高7.2cm、底径11.6cmで、358と同一形態であるが、底部は糸切りのままである。焼成は若干不良で外面は濃灰色、内面は淡褐色を呈している。

鉢360は復元口径21.8cm、器高7.1cmで、底部は焼き歪みのため若干上げ底になっているが、口縁部は大きく内湾し、口縁端部は内傾している。底部は浅い回転ヘラ削りを施しているが、それ以外の部分は回転ヨコナデ調整である。焼成は良好で外面は濃灰色、内面は暗灰色を呈している。

361は底部のみ残存しており、上部の形態は不明である。退化した高台を取り付けているが、底部中央が設置しており機能はしていない。底径は12.6cmである。底部外面には風車状にハケ原体でナデしている。焼成はやや不良で、内面は淡灰色、外面は淡褐色を呈している。

皿362は口径13.5cm、器高2.7cmで、底部は回転糸切りにより切り離している。口縁部の立ち上がりは急で、直立に近く口縁端部では外傾して、内側には平坦面を持つが端部は丸く収めている。焼成は良好で、表面は黄褐色を呈している。

皿363は、復元口径14.3cm、器高2.4cm、底径2.4cmで、底部外面は回転糸切りで切り離しているが、わずかに凸レンズ状に外面に張り出している。口縁部は全面回転ヨコナデ調整で、短く外傾して端部は丸く収めている。焼成は良好で表面は黄褐色を呈している。

皿364は復元口径15.9cm、器高2.2cm、底径11.8cmで、底部は回転糸切りによって切り離しているが、やや上げ底状になっている。口縁部は緩やかに外反して端部は丸く収めている。焼成は概ね良好で器壁表面は淡褐色を呈している。

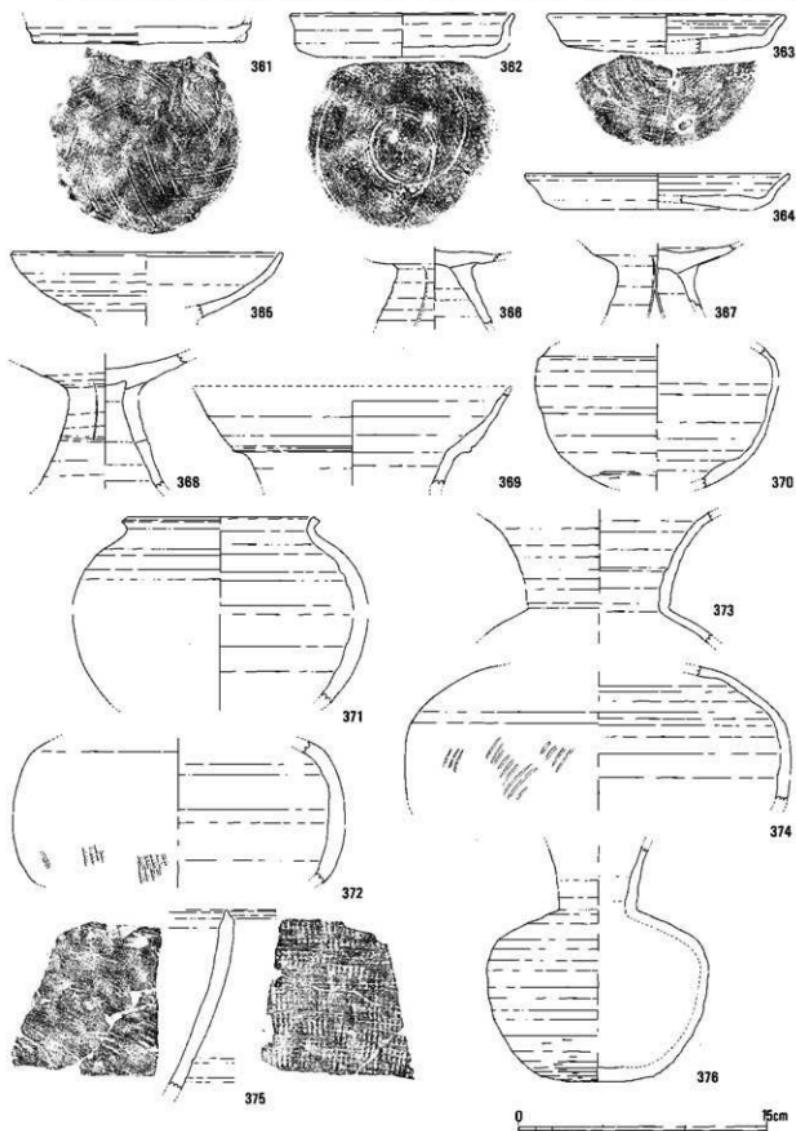
高杯365は口縁部の一部のみ残存しており、杯部は若干内湾しながら大きく開き、復元口径は16.4cmの大きさを持つ。内外面とも回転ヨコナデ調整で、口縁端部は丸く収めている。

高杯366は口縁部と脚端部を欠損しているが、脚部には2方向に線状の透し孔を貫通させている。

高杯367は口縁部と脚端部を欠損し、脚部には2方向に長三角形状の透し孔を貫通させている。焼成は良好で外面は暗褐色、内面は淡灰色を呈している。

高杯368も口縁部と脚端部を欠損し、脚部上半に退化した線状の透し孔を2方向に入れている。脚部下半には透し孔を入れるスペースはあるが、回転ヨコナデ調整のままである。

369は小型の壺の口縁部と考えられる個体で端部は欠損しているが、推定口径19.1cmで、複合口縁



第58図 德見津遺跡IV区第4加工段SB09付近出土遺物実測図2 (S=1/3)

状を呈している。内外面とも回転ヨコナデ調整で稜部は上端に沈線を巡らせることによって突出を表現している。胎土は緻密で焼成は良く、外面は暗灰色、内面は濃灰色を呈している。

370は長頸壺の胴部と考えられるもので、復元最大径14.8cmで、内外面の大半は回転ヨコナデ調整だか、下半部は回転ヘラ削りを施している。焼成は良好で器壁表面は濃灰色を呈している。

短頸壺371は復元口径11.4cm、胴部最大径18.0cmで、口縁部は短く外反して、端部に平坦面を形成している。内面から胴部上半外面は回転ヨコナデ調整であるが、外面下半はユビナデ調整である。

372は小型壺の胴部で復元最大径は20.3cmで、胴部下半は平行タタキを施した後に軽いヨコナデ調整を行なっており、タタキ目は消えかかっている。焼成は良好で器壁表面は暗灰色を呈している。

373・374は同一個体の広口壺と考えられ、復元胴部最大径は23.5cmである。胴部下半は平行タタキで形成を行なった後に、軽いヨコナデが加えられ一部のタタキ目はナデ消されている。

375は大型の鉢と考えられるが、内湾気味に立ち上がる口縁部の一部しか残存していない。外面は平行タタキ形成を行なった後、回転カキメを施している。内面は同心円文であて具によるタタキ形成を行なった後、タタキ目を8割以上スリ消している。口縁端部は上方に向かって細くつまみ出されている。焼成は良好で内面は淡茶褐色、外面は暗褐色を呈している。

長頸壺376は口縁端部を欠損するが、胴部最大径13.5cmで、肩部や底部が丸味を持つものである。胴部下半は回転ヘラ削り調整で、その他の部分は回転ヨコナデ調整である。

土師器甕377は復元口径19.7cmで、肩部はあまり張らずなだらかに下降している。口縁部は外傾外反して端部は丸く收めている。口縁部は内外面とも回転ヨコナデ調整であるが、胴部については磨滅が激しく調整は不明である。頸部下方には細い2条の沈線が巡らされている。

土師器甕378は復元口径23.1cmで、肩部はあまり大きく張らずになだらかな弧を描いて下降している。口縁部は直線的に外傾して、口縁端部は若干内側に肥厚している。外面は全域に渡って煤が付着しており調整は確認できないが、内面は反時計回りのヘラ削りを施している。

土師器甕379は復元口径24.7cmで、肩部には張りが見られず、口縁部はゆるやかに外反して端部は丸く收めている。口縁部内外面は回転ヨコナデ調整で、胴部外面は1cmあたり4～5条のタテハケを施すが、内面調整は磨滅が激しく判然としない。

土師器甕380は復元口径27.6cmで、口縁部は回転ヨコナデ調整で外面には煤が付着している。

土師器甕381は復元口径29.4cmで、口縁部は短く外傾しており、内面は平坦になっている。胴部は直線的に下降して、内面は横方向のヘラ削りを施している。

土師器甕382は大きく外反する口縁部のみ残存しており、復元口径32.2cmである。

383は砂岩製の砥石で、側面の1面とも研磨面として利用されており平滑になっている。各面の丁寧に研磨されているが正面の右側の面は若干ざらつきがあり研磨の度合いが少ないと考えられる。

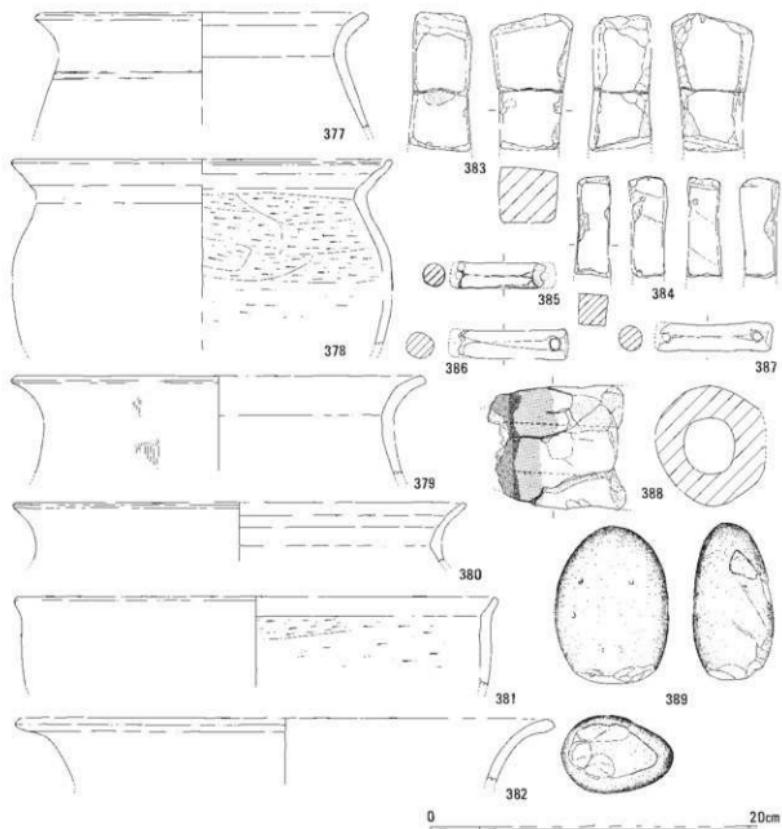
残存長8.4cm、幅3.7～5.0cm、現重量251.4gでVII区出土の砥石では最大のものである。

384は白褐色を呈する砂岩製の砥石で、残存長6.2cm、幅1.9～2.4cm、現重量38.3gの大きさを持っている。断面形態は正方形に近く、4側面とも研磨され平滑になっている。

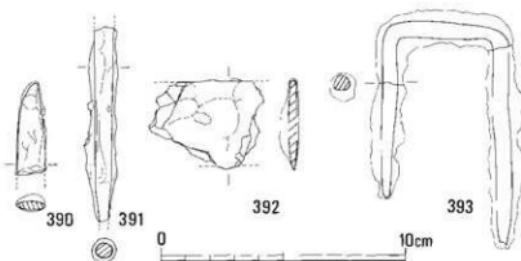
385～387は棒状土錘で圓化のできない6個体と合わせて9個体がIV区から出土している。

385は両端が欠損しているが現状で13.1gで、断面形は正円に近いものである。

386は片側の孔部付近から欠損しているが、推定全長7.5cm、厚さ1.7cm、孔径7mm、現状での重量



第59図 德見津遺跡IV区第4加工段SBO9付近出土遺物実測図3 (S=1/3)



第60図 德見津遺跡IV区第4加工段SBO9付近出土遺物実測図4 (S=1/2)

22.9 g で、中央部の断面形態は不整円形で、孔部の断面は梢円形を呈している。

387も片側の孔部付近から欠損しているが、推定全長7.8cm、厚さ1.5~1.8cm、孔径5.5mm、現状での重量19.5 g である。

棒状土錐は波の穏やかな瀬戸内海周辺で普遍的に刺し網漁などに使用されるものであるが、山陰地方では鳥取市の秋里遺跡や出雲市・上長浜貝塚などで出土しているだけである。恐らく遺跡の眼前の中海で使用されたものであろう。

輪羽口388は鍛冶炉の近辺から出土しているが、先端と基部を欠損している。残存長8.5cm、最大径7.7cm、器壁の厚さ1.6~1.9cm、孔径3.1~3.4cmで送風口の直径は先端から基部まで大きな変化は無く直線的である。

先端部は被熱のため黒化しており付着物も見られる。内面は淡橙褐色、外面基部は淡褐色に変色しており、器壁は脆くなっている。

磨り石389は全長9.7cm、幅6.9cm、厚さ4.9cm、重量434.0 g で、梢円形の自然石を利用して、その端部を打撃面として利用している。打撃面は磨り減ってはいるが、あまり平滑ではない。石質は長石などの粒子を含んだ泥岩質でややキメの粗いものである。

掘立柱建物 S B 0 9 周辺出土鉄製品（第60図）

S B 0 9 周辺では数点の小型の利器や農耕具などの鉄製品が出土しているが、いずれも鏽化が激しいえに、破損して全形が不明なものが多い。

390は刀子の切先と考えられる鉄製品で、刃部の途中から折れているが残存長3.8cm、最大幅1.2cm、厚さ3.5mmである。

391用途不明の棒状の鉄製品で両端は欠損し、全形はうかがえない。断面形は円形で直径4~8mmで、一方の端は細いがもう一方の端に行くにつれて太さを増していく。

392は破損のため現状では鉄片になっているが、下方に刃部があるため鎌になる可能性がある。残存している部分で幅3.6cm、厚さ4mmの大きさを持っている。

393はかすがい状鉄製品であるが、先端部は2cmあまり長さが食い違っている。全長9.3cm、厚さ7mm、幅5.3cmで、断面は不定形な円形である。

土坑 S K 0 9 （第61図）

S K 0 9 は掘立柱建物 S B 0 9 の西側に存在するが、S B 0 9 の梁間の規模によっては建物の床面内に含まれる可能性もある。土坑の性格や建物との関係は現状では不明である。

土坑は一辺1.17m×1.48mの隅丸長方形プランであるが、北西側のコーナーは約55cm程度突出している。深さは33cm程度であるが、北西側のコーナーに近い部分は円形の3段掘りになっており、深さ50cmの規模になっている。

層序は最下層に木炭や土器片を少量含んだ地山出土が堆積しているが、中層には多量の木炭を含んだ炭混暗褐色土層が堆積していた。

遺物は北西側の3段掘りになったすり鉢状の部分から多く出土しているが、土器類は土坑の堆積過程で落ち込んで来たものと考えられる。U字形鋤先400は床面近くの西壁に貼り付くようにして出土

している。

土坑SK09出土遺物（第62・63図）

杯身394は口径11.3cm、器高3.9cm、底径8.2cmで、底部は回転糸切りによって切り離しを行なっている。底部からの立ち上がりは最初に外傾した後、途中から内湾し口縁端部では内傾して内側に平坦面を作り出している。焼成は良好で表面は暗紫灰色から暗灰色を呈している。

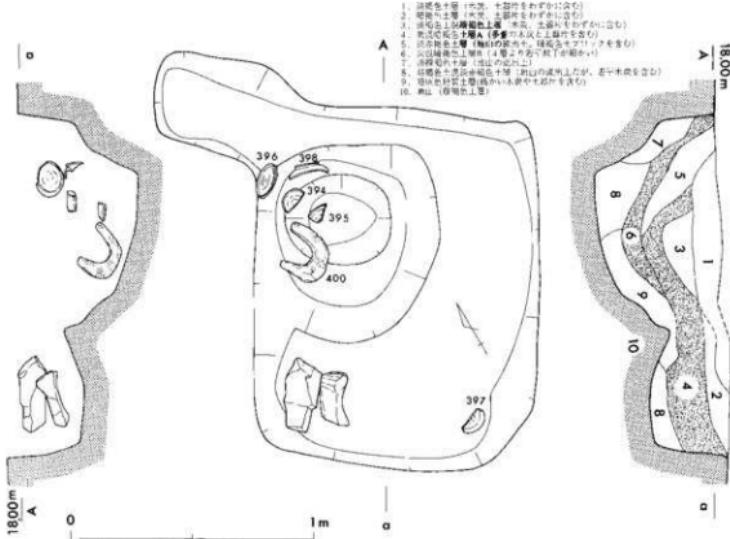
杯身395は復元口径13.7cm、器高4.2cm、底径9.3cmで、底部は回転糸切りのままである。底部から最初は外傾して立ち上がった後、途中から内湾して口縁端部では直立する。

皿396は口径13.9cm、器高2.5cm、底径8.7cmで、底部は回転糸切りによって切り離しているが、若干上げ底になっている。口縁部の立ち上がりは短く外傾して、内面には平坦面を作り出している。

皿397は396とはほぼ同一の形態であるが、口径12.9cm、器高3.0cm、底径9.0cmと若干径が小さく器が深い。底部は回転糸切りの後、軽いナデ調整を行なっており、わずかに凸レンズ状の形態を呈している。底部からの立ち上がりは、当初浅い角度で外傾した後に途中からよ強く外傾している。

398は高台付の短頸壺と考えられる個体で、底径9.9cmの規模を持つ。底部は内面を同心円文であつて具によって、外面を平行タタキ具によってタタキ形成され、その後に回転カキメが施される。胴部は回転横ナデ調整によりタタキ痕の一部をナデ消している。高台は外方向に向かって長く張り出しており、端部に平坦面を形成してシャープな稜を作り出している。

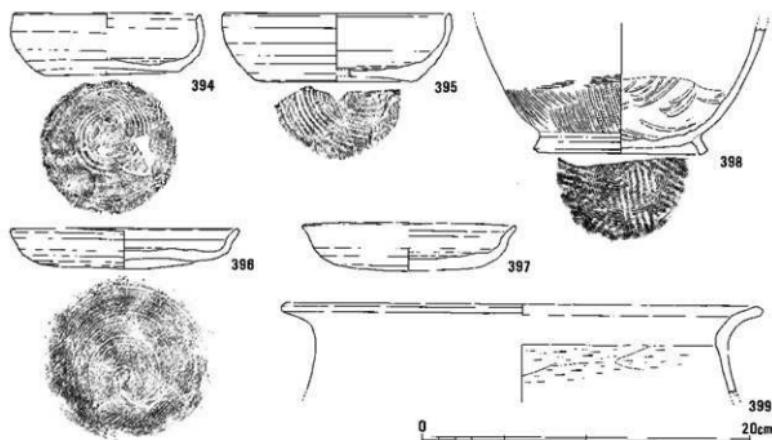
土師器甕399は復元口径28.8cmで、肩が張らずに口縁部が大きく外反するものである。外面には全体的に煤が付着している。焼成は概ね良好で淡褐色を呈している。



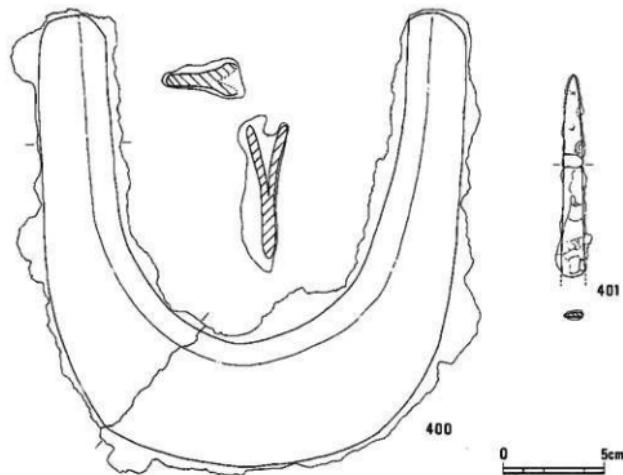
第61図 德見津遺跡IV区第4加工段SK09実測図 (S=1/20)

U字形鋤先400は全長22.8cm、最大幅21.5cm、刃部横断長2.9~6.2cm、厚さ6mmで、表面は著しく錯化している。形態は隅丸方形に近く、全長に対して幅の広い大型品である。破断している断面の観察では刃先は丸味を帯びて、あまりシャープではなく未製品の可能性も考えられる。

刀子401は鋤先の真下から出土したもので、残存長10.1cm、幅1.2cmの大きさを持っている。



第62図 德見津遺跡IV区第4加工段SK09出土遺物実測図1 (S=1/3)



第63図 德見津遺跡IV区第4加工段SK09出土遺物実測図2 (S=1/2)

第5節 鉄滓の出土状況について

徳見津遺跡ではⅢ区から有磁性鉄滓161.4g、無磁性鉄滓24.3gが出土し、尾根頂部を挟んで西斜前に立地するⅣ区からは有磁性鉄滓9887.4g、無磁性鉄滓1435.6gを検出した。

Ⅲ区では明確な鍛冶遺構を検出することができたが、出土した鉄滓はわずかであった。その中でも楕形滓402は直径8.7cm余り、厚さ2.2cm、現重量148.3gの大きさを持ち、Ⅲ区出土鉄滓の約80%の重量を占めている。鉄滓の少なさなどからⅢ区では製品加工や修理などの鍛練鍛冶が行われた可能性が高いと思われるが、今後の冶金学的な分析を踏まえて再考したいと思う。

また、上段土器溜まり1からも鉄滓が出土しており、祭祀に関わる供獻品と考えられる。

Ⅳ区では各加工段から多量の鉄滓が出土しているが、SB02や第3平坦面・第4平坦面では出土量が少なく、直接的に鍛冶に関わらない空間であったことが考えられる。

鍛冶遺構が現存しない掘立柱建物や平坦面でも鉄滓は出土しているが、これは痕跡が残らないほど鍛冶遺構が破壊・削平されている可能性が考えられる。あるいは、鍛冶遺構と有機的な関連がある作業場、資材保管施設、工房などが付設されていたため、鉄滓が運ばれた可能性も考えられる。

楕形滓403は第1平坦面から出土しているが、第1平坦面には鍛冶に関わる遺構・遺物が少ないことから、鍛冶炉と考えられる焼土面を持つSB03から転落したものと考えられる。全長9.8cm、厚さ1.9cm、現重量195.1gの規模を持つものである。

また、SB03から出土している鉄滓の中には1個体で全長約18cm、現重量1418.4gの大きさを持つ個体があり、SB03での鍛冶操業を裏付けている。

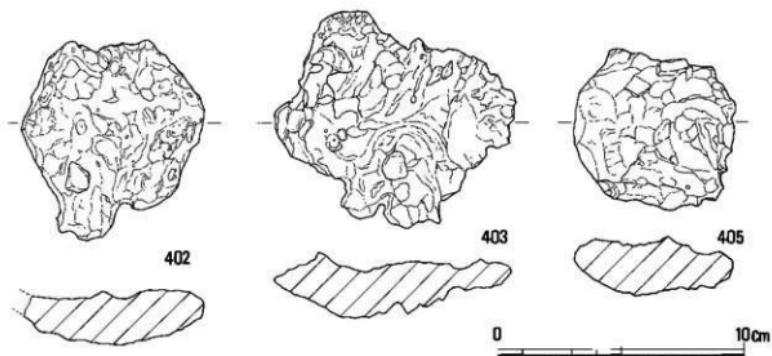
楕形滓404は第3加工段南端のSB08から出土しており、全長6.6cm、厚さ2.2cm、現状での重量147.4gである。

Ⅳ区の中で鉄滓が集中的に出土しているのはSB09周辺で、有磁性のものと無磁性のものを合わせると5993.5gの鉄滓が出土している。SB09では鍛冶炉や櫓の羽口も見つかっており、集中的に鍛冶生産が行われていたことがうかがわれるが、楕形滓は出土しなかった。

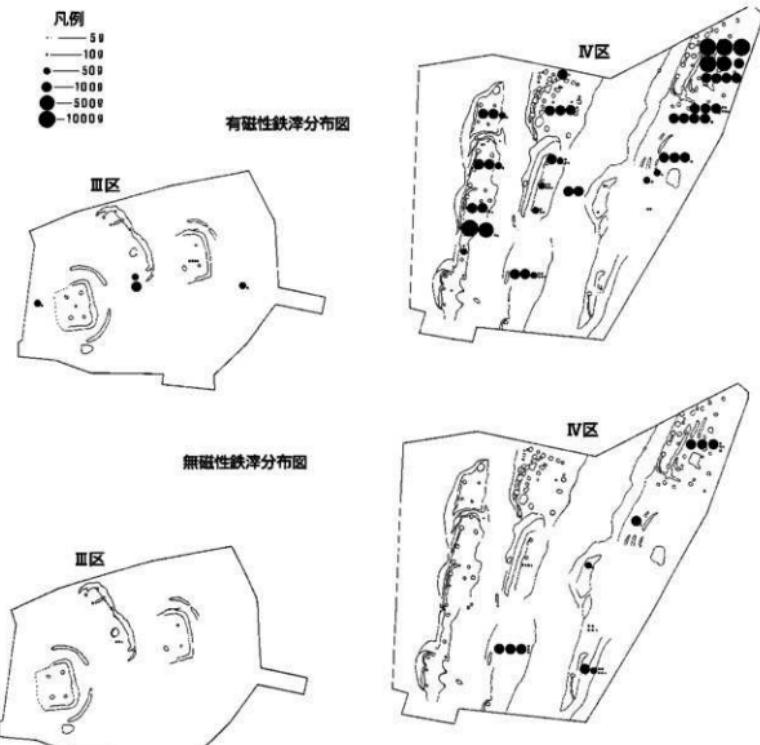
SB09付近の鉄滓は大きいものでも全長5cm前後で、大部分は直径3cm前後の不整円形を呈した個体である。

このように、徳見津遺跡Ⅲ区では1m²あたり0.3g、Ⅳ区では約10.0gの鉄滓が出土している。しかし、実際に鍛冶工程のどの部分を行なっていたのかは、今後の冶金学的な分析を待たなければならぬであろう。

SB09などでは約6cmの鉄滓が出土していることから、かなりの長期間に渡って、製品加工や修理などの鍛練鍛冶を行なっているか、もしくは包丁鉄程度の鉄素材を加工している可能性なども考えられるであろう。



第64図 德見津遺跡III・IV区出土鐵滓実測図 (S=1/3)



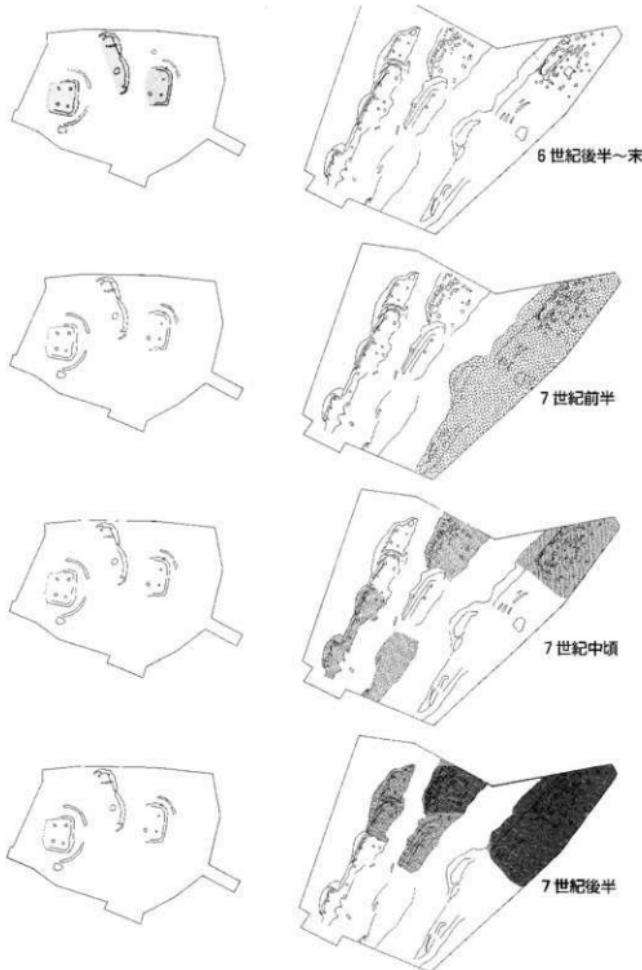
第65図 德見津遺跡III・IV区出土鐵滓分布図

第6節 小 結

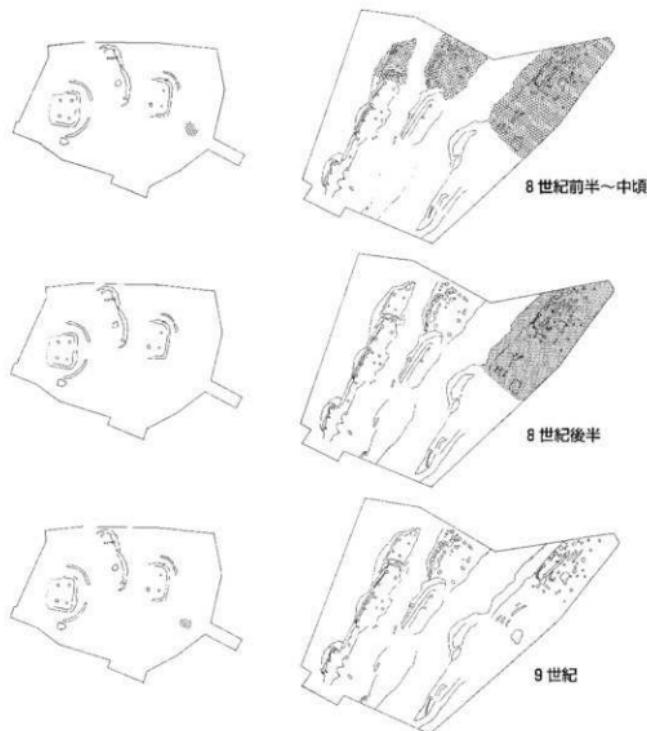
前節まで記してきたように、徳見津遺跡では6世紀後半から9世紀にかけての集落遺跡を検出することができた。以下、今回の調査成果について簡単にまとめてみたい。

集落の変遷（第66・67図）

徳見津遺跡の集落は同一箇所に繰り返し建て替えて行なうことは少なく、比較的短期間に内に移動



第66図 徳見津遺跡III・IV区遺構変遷図1



第67図 徳見津遺跡Ⅲ・Ⅳ区遺構変遷図2

を繰り返していることが特徴である。遺構・遺物の検討から集落の様相を6世紀後半のTK43併行期から9世紀までの間で7時期に区分することが可能である。

6世紀後半（TK43併行期）にはII区のSD03・SK02などと、III区の遺構群などが成立し、鍛冶生産が行われている。それ以前の遺構や遺物は未確認であることから、初めて遺跡内に人々が定着したことがうかがわれる。

IV区では祭祀に関わる遺構と考えられる土坑SK07で、当該期の須恵器類が出土している。

7世紀前半にはII・III区の集落は廃絶して、代わって尾根を越えたIV区の最下段の第4加工段に集落が移動している。しかし、TK43期に集落が存在するIII区からTK217（飛鳥I期）⁽⁴⁾期に併行するIV区第4加工段に集落が出現するのであるが、その間のTK209期に併行する時期に集落の空白期間があり、この集落移動が同一集團によってなされたものかは不明である。

7世紀中頃（飛鳥II期併行）にはIV区の第2～4加工段に建物が分散し、SB02・03・08・09・第1平坦面などで当該期の遺物が出土している。

なお、SB03では鍛冶炉と考えられる焼土、砥石、多量の鉄滓が出土しており、この頃から再び鍛冶生産が行われたと考えられる。

7世紀後半（飛鳥III・IV期併行）にはIV区第2～4加工段の南半部に生活域が移動し、SB05・06・08・09、第2・5平坦面で当該期の遺物が出土している。

この時期には明確な鍛冶遺構は検出していないが、各遺構から鉄滓が出土しているため、鍛冶生産を継続して行なっていたと考えられる。

8世紀前半～中頃（平城宮I～III期併行）には前代と同様IV区第2～4加工段の南半部に生活域が集中しているが、SB05と第2平坦面は廃絶し、より南半部へ集落が移動する傾向がある。

また、III区の土器溜まり1に薬莢形の魁頭壺などが据えられており、祭祀を行なっていると考えられる。

8世紀後半（平城宮IV～VI期）には生活域が第4加工段南端のSB09、第5平坦面付近に集約されるが、須恵器をはじめ、鉄製品などの出土も多い。

9世紀に入るとIV区の集落も廃絶して、III区土器溜まり1で須恵器甕、皿などを供獻した祭祀が行われている以外には人々の活動の痕跡は存在しない。その後、現代に至るまで約1100年間以上に渡って生活空間として利用されること無かったと考えられる。

III区集落の特異性 德見津遺跡III区の須恵器類は大谷晃二氏の出雲編年⁽³⁾と照らし合わせて見ても、東部出雲には普遍的ではない器種が存在したり、調整技法が東部出雲のものとは異なるものが多く、直接大谷編年を適用することは困難である。

例えば、杯蓋についても大谷編年の出雲3・4期に特徴的な肩部の2本沈線と口縁備部内面の沈線を持つ個体が少なく、杯身も同時期の東部出雲のものより口径が小さく、器が深いという特徴が見られる。また、高杯の脚端部も極めてシャープに下方に引き出される点も相違点として挙げられる。

そして、短脚で透し穴のない有蓋高杯や、244のように畿内的な長頸壺の脚部、144・161・172などの蓋と考えられる個体などは東部出雲では類例がない。

これは、須恵器の供給元が松江市・大井古窯跡群ではなく、それ以外の窯からの供給であることを示しているといえよう。

また、III区内で出土した6世紀の土器は國化できたものだけで、須恵器128個体に対して、土師器はわずかに5個体で、土器全体に対する土師器の割合はわずかに3.8%である。煮沸具である甕・瓶・土製支脚などはほとんど存在せず、竪穴住居跡内にも地床炉などの火処は認められない。

そして、出土している須恵器の内、51個体は焼成不良や焼き歪みを持つなどの不良品であることも特徴的である。

このように、不良品を多く含んだ須恵器群が出土土器の大半を占めるという現象は、極めて特異で類例に乏しいものである。さらにIII区では通常の集落遺跡ではあまり見られない、提瓶5個体・横瓶2個体なども出土している。

この集落の性格を考える際には、このような須恵器をはじめとした土器群の様相と現在、島根県内でも最古の部類に入る鍛冶遺構の存在を考慮せねばならないであろう。

解釈としては鍛冶工人と須恵器工人の結び付きにより、相互の產品を流通しあうシステムがあり、

そのシステムの管理者たる豪族などの有力者によって、工人の地位や立場は保証されると同時に、生産品の供出などの規制があったと考えられる。その結果、工人には生活の場とは異なる鍛冶専用の生産空間が与えられ、専業的に鍛冶に従事したことが予想される。徳見津遺跡Ⅲ区はそのような鍛冶専業集団の作業場の一角として位置付けることができよう。

雲伯国境の鍛冶生産 徳見津遺跡の周辺の安来市東部から米子市西部の陰田・新山地区には製鉄・鍛冶遺構を伴う遺跡群が多数展開しており、その中で徳見津遺跡の性格を見直さねばならない。

安来市東部で鍛冶遺構・遺物が調査されているのは島田南遺跡³⁷・五反田遺跡³⁸・岩黒山遺跡³⁹などがあるが、大部分が7世紀初頭から8世紀末にかけて、加工段上の平坦地に掘立柱建物を建て、その内側で操業を行なっている。

米子市西部の陰田・新山地区でも7世紀前半から9世紀にかけて、大規模な加工段群をにより形成された掘立柱建物主体の集落で製鉄・鍛冶工房が営まれている。

両地域で遺跡の立地・規模・時期などは類似しており、マクロ的には一体の鉄製品生産地帯を形成しているが、陰田・新山遺跡群では掘立柱建物の掘り形が方形のものが多く存在し、遺物に墨書き器や円面鏡を含むなど、より公的性格が強いと考えられる。

それに対して安来東部地域の鍛冶遺跡は公的性格を示す遺物は少なく、掘立柱建物の掘り形は大規模なものが多いが、方形のものは五反田遺跡の一部にあるだけであり、より村方鍛冶的な傾向が見られる。

徳見津遺跡Ⅳ区の鍛冶遺構は安来東部や米子西部地域の鍛冶遺跡と加工段の構造や掘立柱建物の規模・生産時期などが一致しており、一連の生産体制下にあると考えられる。

しかし、徳見津遺跡Ⅲ区の鍛冶遺構は近隣では最古のものであり、覆屋に掘立柱建物を用いないことや、大型の金床石を備え付けている点など7世紀以降の鍛冶遺跡と様相を異にする。また、7世紀以降の鍛冶集落が比較的、通常の集落と近似した土器様式を持っているのに比べ、ここでは土師器類などの煮沸具が欠落した、生活臭の無い土器様式を持っていることも特筆すべき点である。

徳見津遺跡Ⅲ区の鍛冶遺構はこの地域で鍛冶生産を開始した際の、試行錯誤的なもので、その技術や生産体制は直接的には7世紀以降の鉄生産に続かないと考えられよう。

安来東部から米子西部の鉄生産に関しては、その開始時期や生産体制、生産技術など解明すべき点が多く、今後の調査研究の進展に期待したい。

参考文献

- 1・江浦 洋 1993「現地説明会は夢の架け橋」「大阪文化財研究」第4号 など

島根県埋蔵文化財調査センターの行なう現地説明会でも近年は、遺跡に関わる劇や実際の調査の過程を公開したり、火起こしや古代食の試食などイベント性の高いものも実施されるようになってきた。また、説明会の資料も実測図を極力使用せず、遺跡の復原図や古代人の生活の様子を描いたイラストを多用した一般の方々に分かり易いものになってきている。

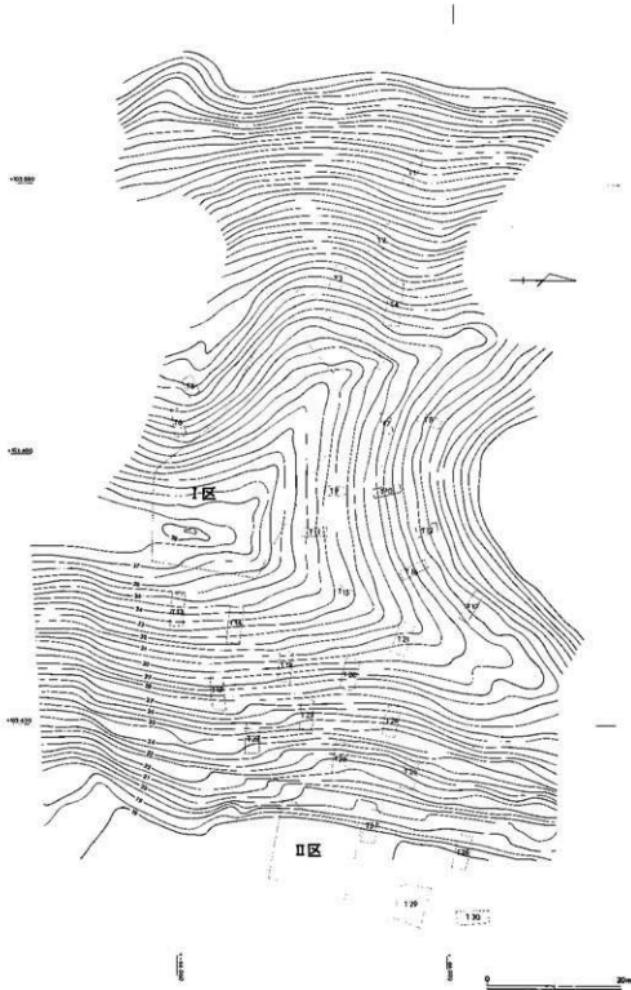
現地説明会は一般の方が遺跡の現景にふれる数少ない機会だけに、少しでも多くの情報を感じ取ってもらうためにも、調査主体側からの積極的なアプローチが今後とも重要になってくるであろう。

- 2・山田邦和 1989「装飾付須恵器の分類と編年（上・下）—装飾付須恵器の基礎的研究1・2—」
「古代文化」第41巻第8・9号
- 山田邦和 1992「装飾付須恵器総覧—装飾付須恵器の基礎的研究3—」「古代学研究所研究紀要」
第2輯 財團法人 古代學協會
- 3・大野左千夫 1980「有孔土鍾について」「古代学研究」93
大野左千夫 1995「有孔土鍾再考 一紀伊半島から東海へー」「地方史研究」第45巻第4号
山陰市、上長浜貝塚出土品については山陰市教育委員会・川上稔氏から御教示を得た。
- 4・古代の土器研究会 1992「古代の土器1 都城の土器集成」
- 5・人谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」「島根考古学会誌」第11集
- 6・田中義昭ほか 1992「古代金属生産の地域的特性に関する研究—山陰地方の銅・鉄を中心にしてー」
- 7・島根県教育委員会 1992「島田南遺跡」
- 8・島根県埋蔵文化財調査センター 1994「島根県埋蔵文化財調査センターニュース」10号
- 9・島根県教育委員会 1995「岩屋山南遺跡」
- 10・米子市教育委員会・国道180号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団 1991「新山 山山古墳群・
山田遺跡・研石山遺跡調査概報」
米子市教育委員会・国道180号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団 1992「陰山 夜坂谷遺跡・
隠れが谷遺跡調査概報」
財團法人米子市教育文化事業団 1993「新山遺跡群・奥陰山遺跡群調査概報」
財團法人米子市教育文化事業団 1994「奥陰山遺跡群調査概要」

第5章 目廻遺跡の調査

第1節 I区の調査概要

I区は標高37m程度の丘陵に設定した約750m²の調査区である。南から北に向かって伸びる舌状の丘陵の一部であるが、調査区は東西に馬背状になっており東は急斜面、西は緩斜面である。また、

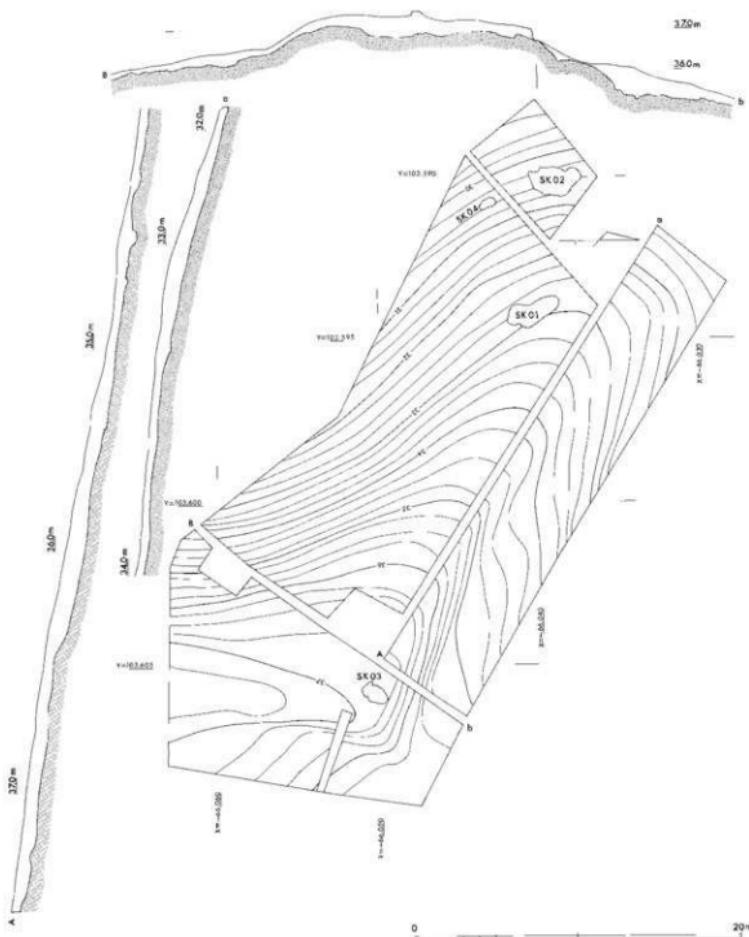


第68図 目廻遺跡調査区配置図

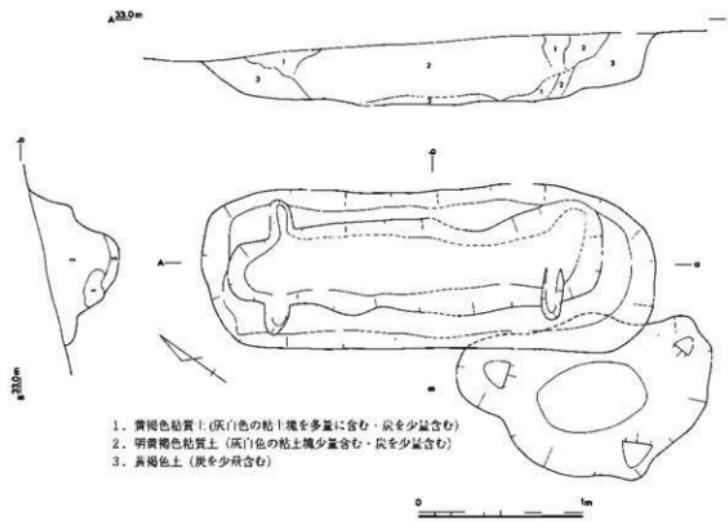
北側斜面は梨畑造成のためかなりの削平をうけていた。

試掘調査の結果、落し穴状土坑があったため本調査を実施した。調査区の表土は全体的には薄く、厚いところで50cm程度、薄いところで10cm程度である。層序は単純で、黄褐色の表土を掘り下げるところ地山に達した。遺物については表土の浅い地点から須恵器片が1点出土したが小片であり、遺構との関連性も認められなかった。

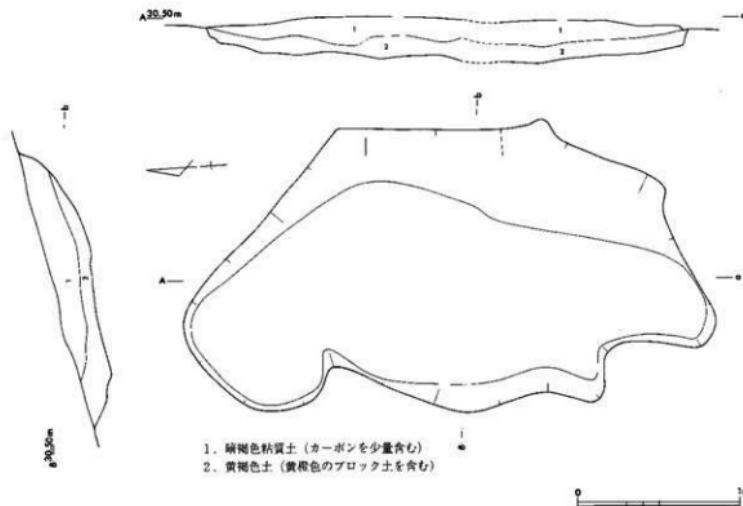
遺構としては木棺墓（SK01）、性格不明の皿状土坑（SK02）、落し穴状土坑（SK03, SK04）を検出した。



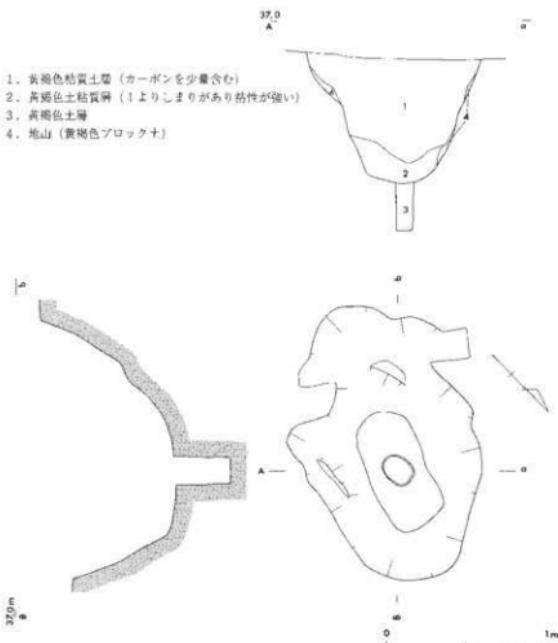
第69図 目廻遺跡I区遺構配置図



第70図 目廻遺跡 I 区SKO1実測図



第71図 目廻遺跡 I 区SKO2実測図



第72図 目廻遺跡I区SK03実測図

東側が3cmほど高い。

埋土は黄褐色の土が中央に向かって落ち込んでいる様子が観察された。また、灰白色の粘土を多く含む明灰褐色土が小口側を中心に認められ、木棺の目張り粘土であると考える。二段目は両小口側に突出部分があり、長さ0.7mの小口板を差し込んでいたと考えられる。棺の内法は1.65mと推定される。隣接する浅い土坑を切って掘り込まれている様子がうかがえるが、2つの遺構の関連性はないものと考える。遺構に伴う遺物がないため、時代は特定できないが、弥生～古墳時代のものと考えておきた。

SK02（第71図）

調査区西側に位置する皿状の深い土坑である。長軸3.2m、短軸1.7m、深さ20cmの不整形な梢円形を呈している。土層はカーボンを少量含んだ暗褐色粘質土（1層）とオレンジ色のブロック土を含んだ黄褐色土（2層）からなっている。遺物はなく時期は特定できない。また、性格も不明である。

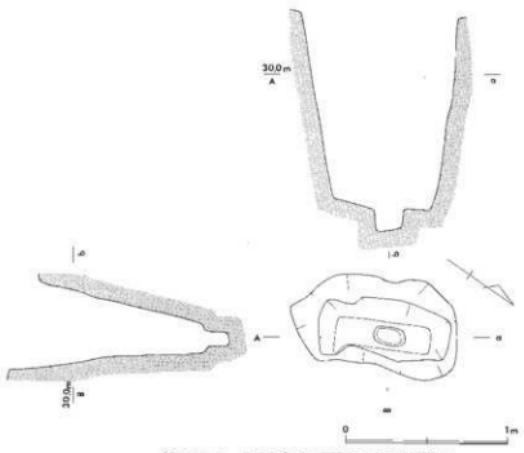
SK03（第72図）

丘陵東側の頂上部に位置する長径1.6m、短径1.0m、深さ1.0mの落し穴状土坑である。卵型に近い平面形を呈しているが、南側にくびれ部分がある。底面は長径75cm、短径35cmを測り、中央には杭を立てるために掘ったとみられる直径20cm、深さ30cmのピットがある。断面は漏斗状の落ち込みを呈している。土層は黄褐色粘質土を基本としているが、粘性やカーボンの量にわずかの違いのある3層に分かれている。

SK01（第70図）

調査区やや西側で検出された木棺墓で、尾根頂部よりわずかに下がった緩やかな斜面に位置している。墓壙は二段掘りで、下段断面は弧状を呈している。また、長軸2.5m、短軸1.0m、深さ0.45mを測り、主軸はN-36°-Wで、斜面に平行している。

一段日の掘り形のテラスは6cmから20cmの幅で巡っている。2段目の掘り形は長軸2.25m 短軸0.45mを測る。底面は狭く



第73図 目録遺跡I区SKO4実測図

色粘質土と赤褐色粘質土からなっている。

第2節

II区の調査概要

II区では谷部の遺物包含層を調査した。近年埋め立てられた黄褐色砂質土の下に、遺物を含む暗茶褐色土や暗灰色土が存在する。いずれの土層も耕作上であり、土器も層位的には出土していない。犁畑造成のため重機による削平が行なわれ遺構は検出できなかった。しかし、遺物は古墳時代後期の須恵器・土師器がかなり出土していることから谷部近くの斜面には住居跡などの遺構が存在していたと考えられる。

出土遺物（第74図・第75図）

出土遺物はいずれもII区あるいはII区付近のトレンチから出土したものである。須恵器（1から13と22）と土師器（14から20）が中心で、いずれも包含層からの出土で遺構に伴うものではない。

杯蓋1は復元口径12.2cm、器高4.0cmで天井部外面の1/2程度は回転ヘラ削り後、ナデ調整が施してある。肩部は痕跡的な沈線が施してあるが後はあまり。焼成は良好で内面は淡灰色で外側は明灰色を呈している。

杯蓋2は復元口径13.3cm、器高3.9cmで天井部の2/3程度に回転ヘラ削りが施してある。肩には浅い沈線がめぐり稜を表現している。焼成は良好であるが若干焼き歪みがある。外側は明灰色で内面は褐灰色を呈している。

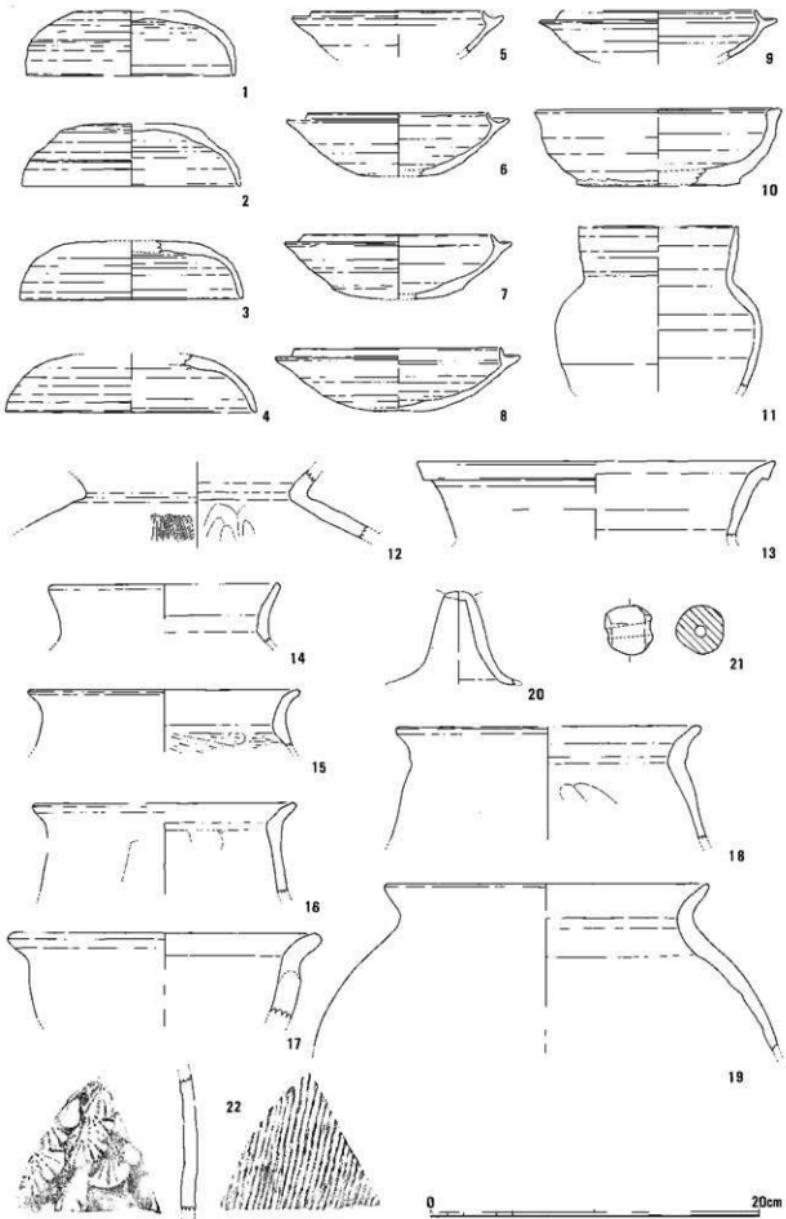
杯蓋3は復元口径13.5cm、器高3.6cmで天井部の2/3程度に回転ヘラ削りが施してある。焼成は良好で外側は暗褐色、内面は淡褐灰色である。

杯蓋4は復元口径15.25cm、器高3.6cmであるが天井部の1/2程度は欠損している。外側は暗灰色内面は淡褐色を呈している。

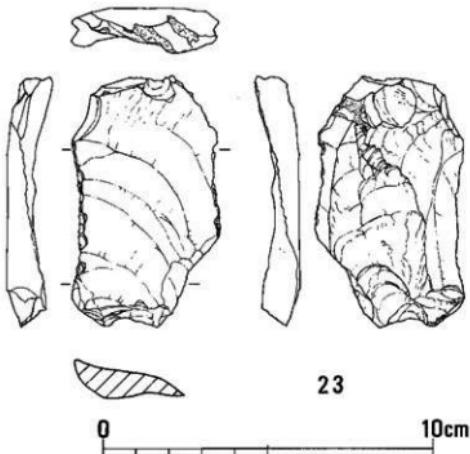
杯身5は復元口径10.4cm、最大径12.9cmである。口縁部の1/8程度しか残存しないので器高は不明である。焼成は良好で内面は淡灰色、外側は淡褐灰色を呈している。

SK04（第73図）

丘陵西側の斜面を下った所に位置する長径1.0m、短径0.5m、深さ1.2mの落し穴状土坑である。底面は縦60cm、横17cmの長方形に近い形をしている。その中央に長径19cm、短径10cm、深さ15cmの楕円形のピットがある。断面はほぼ直角に落ち込んでいる。トレンチで3分の2が掘られていて土層ははっきりしながら、暗褐色



第74図 目廻遺跡II区包含層出土遺物実測図1



第75図 目廻遺跡II区包含層出土遺物実測図2 (S=2/3)

杯身9は口縁部の1/6程度しか残存していないが、復元口径11.8cm、器高3.9cm、最大径14.6cmと考えられる。焼成は良好で内面、外面とも淡灰色を呈している。

碗10は復元口径14.7cm、器高4.8cm、底径10.0cmで底面は切り離したままで調整が施されていない。焼成は良好で外面は黒灰色、内面は明灰色を呈している。

短頸壺11は上半部の1/3程度しか残存していないが、口径9.6cm、最大径12.6cmを測る。焼成は良好で外面は自然釉が付着した淡灰色で、内面は濃灰色を呈している。

中型壺12は口縁の一部しか残存していないが、頭径は13.5cmと考えられる。焼成は良好で内外面とも淡灰色を呈している。

壺13も口縁の一部しか残存していないが、口径21.5cmを測る。焼成は良好で内面は暗灰色、外面は黒灰色もしくは暗褐色を呈している。

壺14は復元口径13.8cmを測り、調整は磨滅がはげしく不明である。焼成はやや不良で色調は全面暗茶褐色を呈している。

壺15は復元口径16.3cmを測り、頭部はやや肥厚している。焼成は普通で内面は湯燈褐色、外面は燈褐色を呈している。

壺16は復元口径15.8cmを測り、頭部から胴部にかけて板状工具で押されたような平坦面がみられ頭部はやや肥厚している。焼成は良好で内外面とも暗燈褐色を呈している。

壺17は復元口径18.3cmを測り、外表面にはほぼ全面に煤が付着痕跡がみられた。焼成は普通で内面は白褐色、外面は暗茶褐色を呈している。

壺18は復元口径18.2cmを測り、頭部から口縁にかけて、ユビナデの調整が施されている。焼成は良好で内外面とも明燈褐色を呈している。

壺19は復元口径19.6cmを測り、頭部から口縁にかけては回転ヨコナデの調整が施されている。焼成は普通で内外面とも明褐色を呈している。

杯身6は復元口径10.9cm、器高3.9cm、最大径13.6cmで底部の1/2程度に回転ヘラ削りがほどこしてある。焼成は良好で内面は濃灰色、外面は淡褐灰色を呈している。

杯身7は復元口径11.4cm、器高4.0cm、最大径13.9cmで底部の1/2程度に回転ヘラ削りが施されている。焼成は内面は明灰色、外面は淡灰色を呈している。

杯身8は復元口径12.6cm、器高3.9cm、最大径14.9cmで底面の1/3程度に回転ヘラ削りが施されている。焼成は良好で内面は淡褐灰色、外面は暗褐灰色を呈している。

高杯20は脚筒部のみ残存しており、残高は5.8cmを測る。焼成は普通で全面明暈褐色を呈している
21は土錐である。全長2.7cm、厚さ2.95cmで重さは20.72gである。焼成は普通で全面淡橙褐色を呈し
ている。

22は大甕の胴部片である。外面は平行タタキを施し、淡灰色を呈している。内面は放射状タタキを
施し、淡灰色を呈している。

23は安山岩製の削器である。主要な面に小さな剥離面がたくさんあり比較的風化が少ない。

第3節 小 結

目廻遺跡は全体的に後世の削平をかなりうけており、消滅した遺構もかなりあったと考えられる。
特にⅡ区は遺物がかなりの量あったことから、谷部近くの斜面には住居跡などの遺構があったことが
考えられる。遺物は隣接する徳見津遺跡と同時期のものであることから、目廻遺跡のⅡ区は徳見津遺
跡と一連のものと考えるのが妥当であろう。

Ⅰ区は時期不明確な土坑等が検出されたが、徳見津遺跡と同時期の遺構は全く存在していない。こ
のことは徳見津遺跡とほぼ同時期の五反田遺跡との間にひとつの空白地帯が存在することを意味して
いるのではないだろうか。

第6章 陽徳寺遺跡の調査

第1節 調査の経過と概要

陽徳寺遺跡は、安来市門生町と吉佐町との境にそびえる、山頂において弥生時代後期の高地性集落がみつかった陽徳遺跡の存在する標高約80mの丘陵から、西側に向かって伸びる尾根と尾根との間にさまれた谷間の奥に位置している。そのため、遺跡は西側をのぞく三方を丘陵に囲まれた様相を呈する。

昭和63年度に実施された分布調査では、付近より五輪塔が検出されたため、中世の墓域の可能性があると判断され、当初は『陽徳古墓』という遺跡名であった。しかし平成5年度行われた確認調査では、平坦部より中・近世の陶磁器片や建物跡と思われる柱穴群が検出され、また『雲陽誌』に門生にはかつて「陽得寺」なる寺院が存在していたことが記されており、現在はこの遺跡部分に字名として「陽徳」が存在していることから、この遺跡が「陽得寺」であった可能性が強いと考え、遺跡名を「陽徳寺遺跡」と改めた。

本調査は平成6年4月より開始した。当初は寺院が存在していたと思われる平坦部（1区）を調査するにとどまっていたが、調査がすすむにつれ、この谷間にはかつて堤があったとみられる土層の堆積が確認された。つまり、この平坦部は堤が埋まった後、盛土や整地が行われて基壇状に平坦が構築されたものであることが明らかになったのである。しかし平坦部の上部は近年までの開墾等により削平されており、いくつかのピットや溝状遺構が検出されたのみで、寺院の規模などは判別できなかつたが、周辺よりおよそ14世紀から17世紀にかけての陶磁器等が出土している。

その後、堤の範囲を確認するため西側に調査区を新たに設定した（2区）。堤は、谷の底に約1mの厚さで黒色粘土が堆積していることから推測されたが、その黒色粘土層より奈良時代から平安時代にかけての須恵器・土師器の他、黒色土器、土鍾、埴輪片、叩石等の石器、漆器碗等の木製品、布目の軒丸瓦片など多種にわたる遺物が出土している。黒色粘土層は幅20m以上、長さ30m以上に渡って堆積しており、谷を利用した人工的な堤の可能性が考えられるが、縁堤は確認できなかった。

また、その堤部より文様が敦賀寺跡から出土したものと同文とみられる軒丸瓦片が出土したことから、付近に瓦窯跡の存在が推測されるため三方の丘陵の斜面に調査区を設けた。南側の斜面（3区）より埴輪片が出土したが、窯跡は検出できなかった。

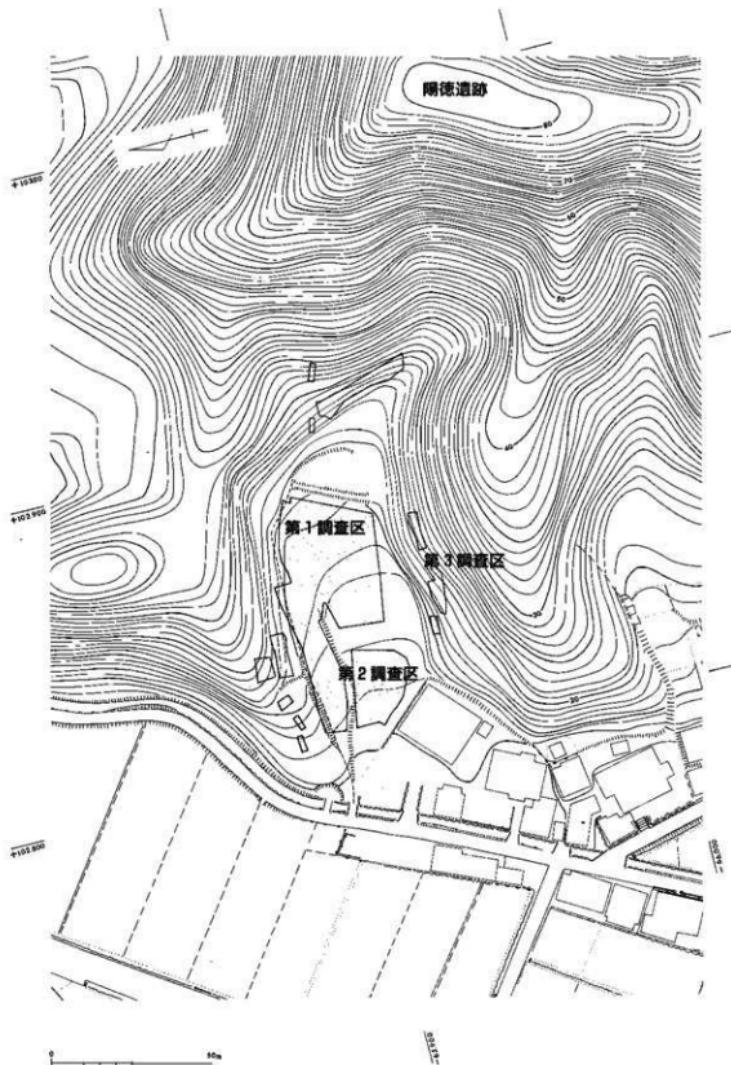
調査は同年12月をもって終了した。



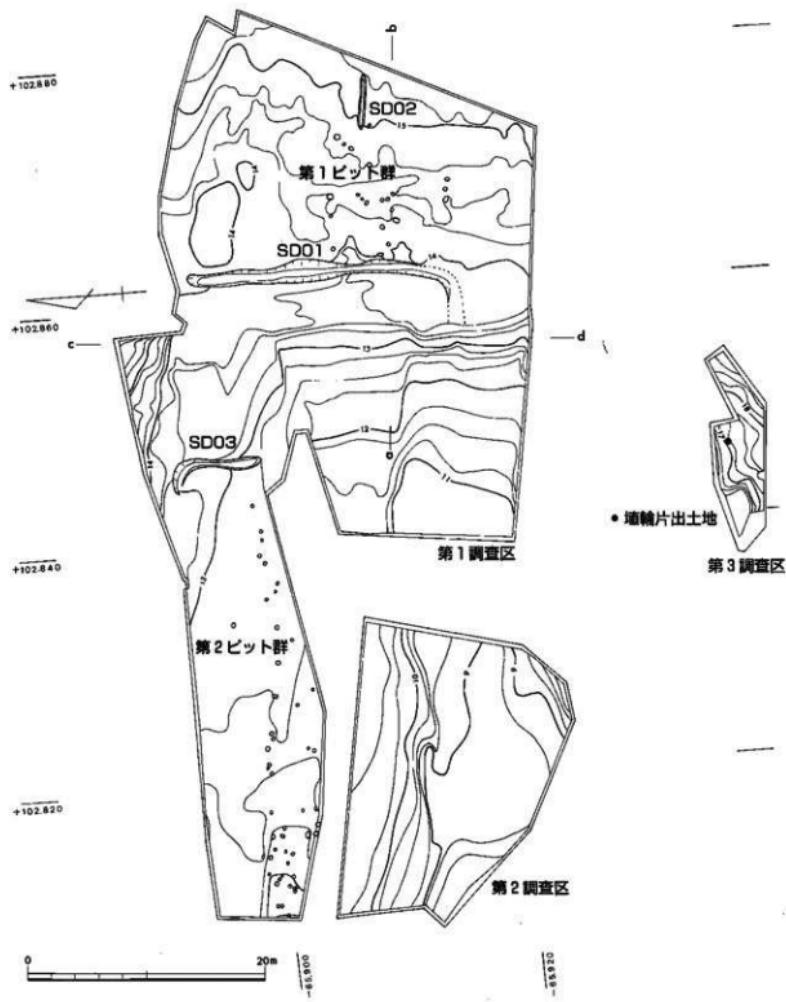
陽徳遺跡より見た陽徳寺遺跡

第2節 I区の調査概要

I区は、尾根と尾根に挟まれた谷間の奥に立地している。この谷間は近年まで田畠として（谷の最奥には農業用の堤がある）利用されていたが、地形をみると谷の奥まったところに約30m四方に渡つ



第76図 陽徳寺遺跡調査前測量図・調査区配置図 (S=1/500)

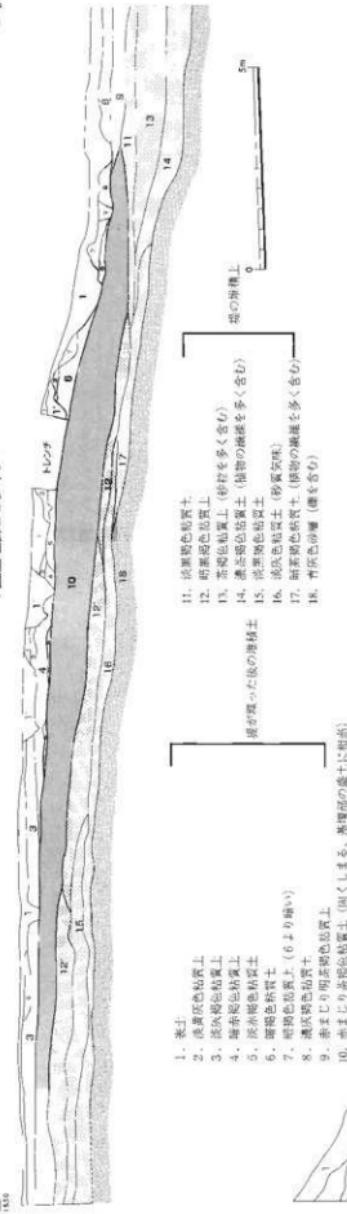


第77図 陽徳寺遺跡調査後測量図及び遺構配置図 (S=1/400)

て平坦部が広がっており、途中から谷の西側の出口に向かって緩やかに傾斜している様相を呈していた。また、北側の斜面沿いはその出畠や周辺の梨畠に向かうための作業道があり、真っすぐな平坦面が続いていた。

調査は、まず奥の平坦部から行った。やはり開墾のためかなり削平された様相であった。調査の結

1区基壇部a-bライン



e-135

e-1439



1. 土
2. 淡灰褐色粘質土 (根の根付十)、あらゆる十が生じる
3. 淡灰褐色粘質土 (根付)、
4. 淡灰褐色粘質土
5. 中等褐色粘質土 (やや砂質)
6. 低褐色粘質土 (根よりも多い)
7. 黄褐色土 (5と同上)
8. 淡褐色土
9. 中褐色土 (根の根付)、
10. 淡灰褐色粘質土 (根の根付十)
11. 淡褐色土 (a-bラインの6に相当する)
12. 淡灰褐色土
13. 淡褐色粘質土 (種々な上砂を含み、西くしまる。基壇部の盛土に相当。a-bラインの10)

第78図 陽徳寺遺跡1区基壇部土層堆積図 (S=1/120)

果、平坦面の北側付近は地山を削り出して平坦部が形成されていたが、中央付近は地山ではなく、様々な土砂により埋め立てられたものであることが明らかになり、さらにその盛土の下には黒色の粘土層があることが確認された（この盛土は谷の奥にも広がる形跡をみせるが、堤がありかなり擾乱された状態であるため拡張できなかった）。遺構については、明確なものは検出できなかったが、平坦部中央付近より十数個のピット群（第1ピット群）や溝状遺構が検出され、中・近世の陶磁器類等が出土した。

その後、調査区を西側に拡張したところ、平坦部を形成していた盛土は、途中で南北方向に平行して段状に途切れており、さらにその途切れた地点には、まるで土砂の土止めのように段に平行して杭列が検出された（第81図参照）。そのため、この平坦部はあたかも基壇状に構築されたように見受けられる。この基壇の端部は、調査区の範囲内で長さ約20mを測る。また、盛土が途切れた後は同レベルで黒色粘土層が谷の出口に向かって続いており、広い範囲で黒色粘土層が広がっていることが確認された（第78図参照）。なお、その黒色粘土層より上層の堆積土からは、平坦部から流れ込んだと思われる陶磁器などが検出されている。

また、基壇状平坦部の北側斜面付近は、前述したように地山を削り出しての平坦面が形成されていて、調査区を西方に拡張した結果、北側斜面沿いは同じく地山を削り出した長さ約40m、幅約10mの細長い平坦面が続いている。遺構は明確でないが、数十個のピット群が検出された（第2ピット群）。またこの平坦部も途中で段差がみられ、その段に沿うような形で溝状遺構が検出されている。

以上のように1区は3つに大別することができる。基壇状平坦部を1区-1、北側斜面沿いの細長い平坦部を1区-2、基壇部下の黒色粘土層部を1区-3とし、それぞれの遺構・遺物について記していくことにする。

1区-1

I区-1は、前述したように谷の奥の基壇状平坦部にあたり、標高にして13~15mを測る。遺構は調査区中央付近にピット群、西側と東側にピット群を挟むようにして溝状遺構（SD01・SD02）が検出された。これらの遺構は一定の方向性を感じられ、相互に関連している可能性が強いと思われる。以下順に記載する。

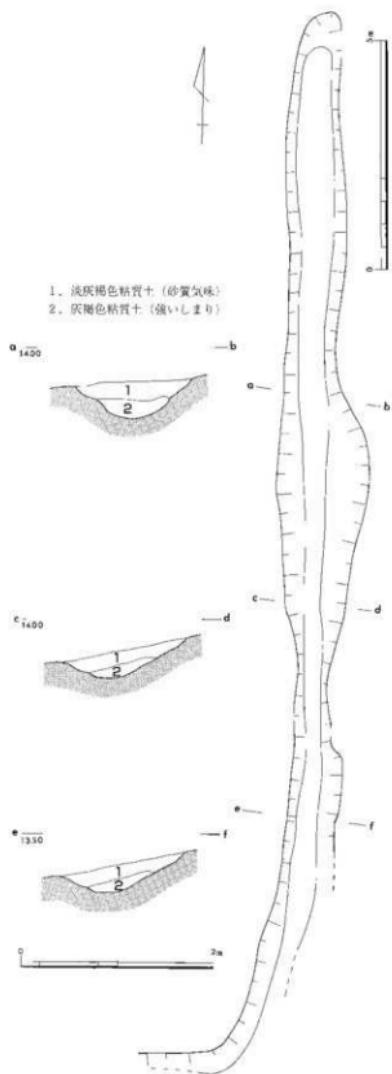
第1ピット群（第81図）

1区-1平坦部の中央から、やや南側に寄ったあたりにまとまった形で検出された。ピットは全部で24個を数える。いずれのピットも幅30~40cmで、深さは20cm程度のものから50cmを越えるしっかり掘り込まれたものまでみられる。しかしこの平坦部の上部はかなり削平されていると思われ、ピットの並び方や規模などは訛然せず、建物を復元するのは難しい。ただ、方位を意識した配列が感じられ、何らかの建築物があったことは想定される。

ピット内や周辺より、中・近世の陶磁器類や瓦質土器などが出土している。

溝状遺構

SD01（第79図） 調査区の西方、基壇部西側の斜面付近より、南北方向に平行する状況で検出さ



第79図 陽徳寺遺跡1区SD01実測図
(S=1/100) (土層図はS=1/5)

も底部のみの残存で、櫛状工具による七条の摺り目が施されている。

第83図は瓦質の土製品であり、いずれも灰黒色に焼成されている。1・2は、全形がわからないの

れた。調査区の北端より真っすぐ南方に伸び、調査区の中央付近を過ぎたあたりではほぼ直角に西側に折れ、(この周りは搅乱が著しいか)基壇部西側斜面に沿うような形で消える様相を呈している。

全長は約20mを測り、幅1~2m、深さは最深部で約40cmを測る。

溝内堆積土より青磁碗(第82図-1)が一片出土している。

SD02(第80図) 調査区の東方より検出された。東西方向に平行して伸びており、SD01とはほぼ直角に角度を進める様相を呈する。全長約4m、幅約40cm、深さ約30cmの小規模な溝である。遺物は出土しておらず時期や性格は不明だが、その検出状況をみると他の遺構と大差ないものと推定される。

出土遺物(第82~85図) 基壇部のピット群周辺より少量ではあるが、様々な遺物が出土している。この他にも、基壇部堆積土より須恵器・土師器片が出土しているが、いずれも小片で摩滅が著しく、周辺からの流れ込みの可能性が強いので図化はしていない。

第82図1は、SD01内より出土した龍泉窯系の青磁碗である。外反する口縁を持ち、14世紀後半から15世紀中頃のものと思われる。

第82図2~5は第1ピット群周辺より出土したものである。2は美濃系の摺り鉢である。口縁部のみの残存であり、復元口径は約17cmを測るが実際はもっと大きいと思われる。摺り目が一条ほど確認できる。外面は施釉されていないが、内面は口縁部下2cmの範囲で淡緑色の灰釉が施されている。

3も美濃系の筒型陶器である。復元口径は約15cmを測り、内外面とも淡緑色の灰釉が施されている。4・5はともに備前系の摺り鉢である。両者と



第80図 陽徳寺遺跡1区
SD02実測図 ($S=1/60$)

第84図は青磁の碗の底部である。釉染は内面のみ施され、外面や高台には施されていないが、焼成が不十分なのが釉の発色は黄灰色である。削り出された高台は厚く、1.5cmを測る。内面には陰刻で唐草文が描かれている。

第85図は陶磁器の破片である。いずれも小片であるため図化はしていない。

1～4は龍泉窯系の青磁碗の破片である。1は碗の底部付近である。内外面とも施釉され、外面に蓮弁文を有する。2は口縁部である。口縁端部は外反しており、暗緑色の釉薬が施されている。3は碗の底部である。底部は約1.5cmと厚く、高台の断面は四角形を呈するが、高台の先端部の外側は面とりが施されている。4は口縁部であり、端部は丸くおさまっている。やや黄色味の交った淡緑色の釉薬が施されている。いずれも14世紀後半から15世紀中頃に相当すると思われる。

5・6は景德鎮産の染付で、共に小杯の口縁部である。5は先端が鋭く尖り、草花文が施されている。6は先端が外反し尖っており、同じく草花文が施されている。いずれも16世紀末から17世紀初頭のものと思われる。

7～12は国産の陶磁器である。7は唐津系の灰釉陶器の皿の底部である。暗緑色の釉薬が施されている。16世紀末から17世紀初頭のものと思われる。

8は唐津系の碗の口縁部である。端部は丸くおさまり、外面に網目文が施されている。17世紀後半のものと思われる。

9は肥前系の白磁であろうか。内面は施釉されておらず、ハケメ状の条痕が施されている。18世紀以降のものであろう。

10・11は肥前系の染付である。10は碗で、18世紀末から19世紀初頭のものと思われる。11は小型の壺の頭部にある。内面は施釉されていない。17世紀後半から18世紀前半のものと思われる。

12は国産の陶器碗の口縁部である。暗緑色の釉薬が施されている。小片であるため詳細は不明だが、およそ近世の範囲に留まるものであろう。

で器種についてはなんともいえないが、大型の壺か甕の類いであろうか。両者とも復元口径25cm以上を測り、肩部が大きく張る様相をみせる。頭部は短く直立し、口縁端部は平らにおさめている。厚さが1.5cmあまりある頭部には、1はひょうたん型のスカシが、2には格子状の浮き掘りが施されており、内外面にはナデや指頭圧による調整が見られる。

3についても、全形がわからないので具体的な器種については明確でない。一見すると1・2の底部のような形態であるが、底にあたる部分の直径は6cmあまりと大型の壺の底部としては非常に小さい。また、甕の底部ならば、円形の底から胴部にかけて同心円状に広がっていくのに対し、この遺物は偏平に広がる形態をなし(図版49参照)、容器とは考えがたい形態を示している。

以上のような特徴から、3は道具瓦の一種である鳥巣の可能性も考えられる。また、1・2についても、瓦と考えた場合には伏鉢である可能性が想定される。

第84図 陽徳寺遺跡1区

SD02実測図 ($S=1/60$)

第84図は青磁の碗の底部である。釉染は内面のみ施され、外面や高台には施されていないが、焼成が不十分なのが釉の発色は黄灰色である。削り出された高台は厚く、1.5cmを測る。内面には陰刻で唐草文が描かれている。

第85図は陶磁器の破片である。いずれも小片であるため図化はしていない。

1～4は龍泉窯系の青磁碗の破片である。1は碗の底部付近である。内外面とも施釉され、外面に蓮弁文を有する。2は口縁部である。口縁端部は外反しており、暗緑色の釉薬が施されている。3は碗の底部である。底部は約1.5cmと厚く、高台の断面は四角形を呈するが、高台の先端部の外側は面とりが施されている。4は口縁部であり、端部は丸くおさまっている。やや黄色味の交った淡緑色の釉薬が施されている。いずれも14世紀後半から15世紀中頃に相当すると思われる。

5・6は景德鎮産の染付で、共に小杯の口縁部である。5は先端が鋭く尖り、草花文が施されている。6は先端が外反し尖っており、同じく草花文が施されている。いずれも16世紀末から17世紀初頭のものと思われる。

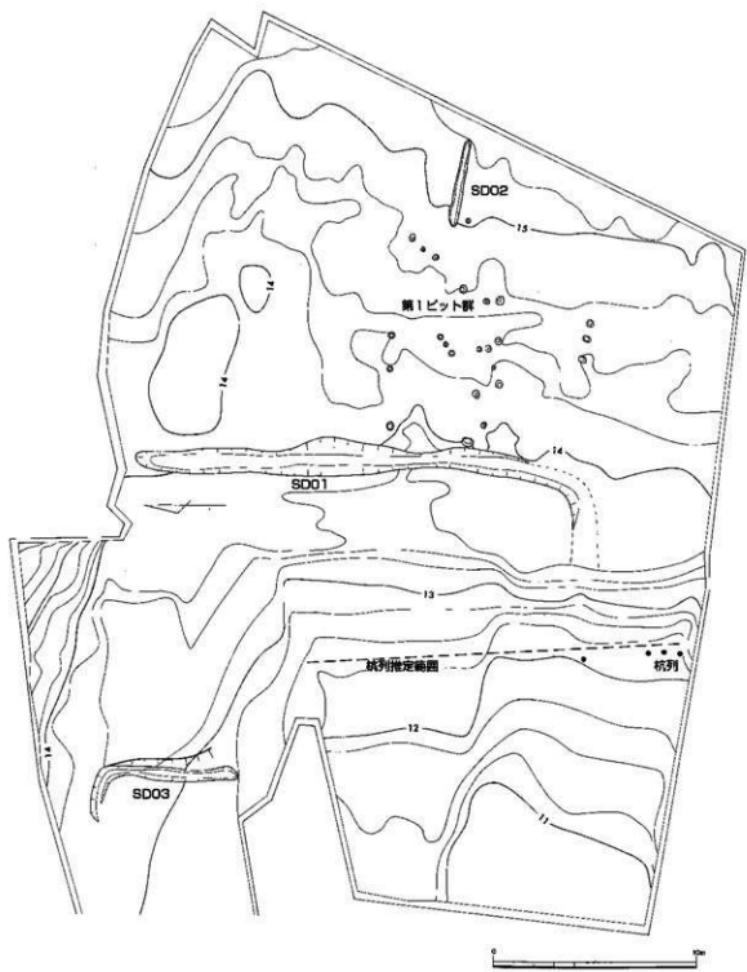
7～12は国産の陶磁器である。7は唐津系の灰釉陶器の皿の底部である。暗緑色の釉薬が施されている。16世紀末から17世紀初頭のものと思われる。

8は唐津系の碗の口縁部である。端部は丸くおさまり、外面に網目文が施されている。17世紀後半のものと思われる。

9は肥前系の白磁であろうか。内面は施釉されておらず、ハケメ状の条痕が施されている。18世紀以降のものであろう。

10・11は肥前系の染付である。10は碗で、18世紀末から19世紀初頭のものと思われる。11は小型の壺の頭部にある。内面は施釉されていない。17世紀後半から18世紀前半のものと思われる。

12は国産の陶器碗の口縁部である。暗緑色の釉薬が施されている。小片であるため詳細は不明だが、およそ近世の範囲に留まるものであろう。



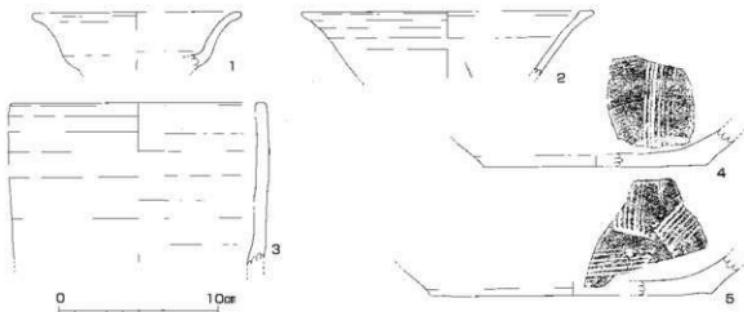
第81図 陽徳寺遺跡1区基壇部遺構配置図

1区-2

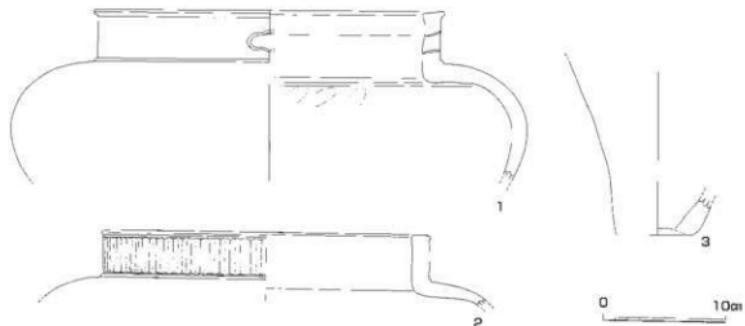
1区-2は、1区-1より北側斜面沿いに西方に向かって伸びる細長い平坦部にある。標高は12~14mを測る。遺構は、調査区の南側に数十個のピット群（第2ピット群）が、東側に溝状遺構（SD03）が検出された。以下詳細を述べる。

第2ピット群（第87図）

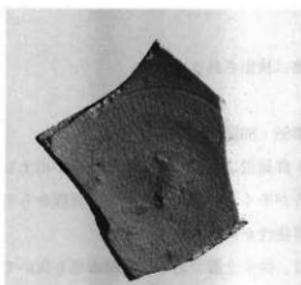
調査区の南側半分に検出され、東西方向にずらりと並列する様相を呈する。ピットは全部で43個を数えるが、上方は削平されていると思われ深さはいずれも20cm前後でしかない。そのため建物など



第82図 陽徳寺遺跡1区SD01内及び第1ピット群周辺出土遺物実測図 (S=1/3)
(1···SD01, 2~5···第1ピット群周辺)



第83図 陽徳寺遺跡1区第1ピット群周辺出土瓦質土器実測図 (S=1/4)

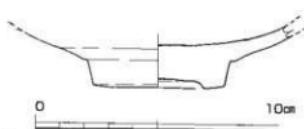


を復元するのは難しいが、よくよく観察してみるとピット群は東側と西側に分けることができそうである。東側では、東西に平行して約3m間隔の4個の柱穴を一列復元してみた。西側も一定の間隔の柱穴が何列か復元できそうな気配がなんなく見受けられようか。

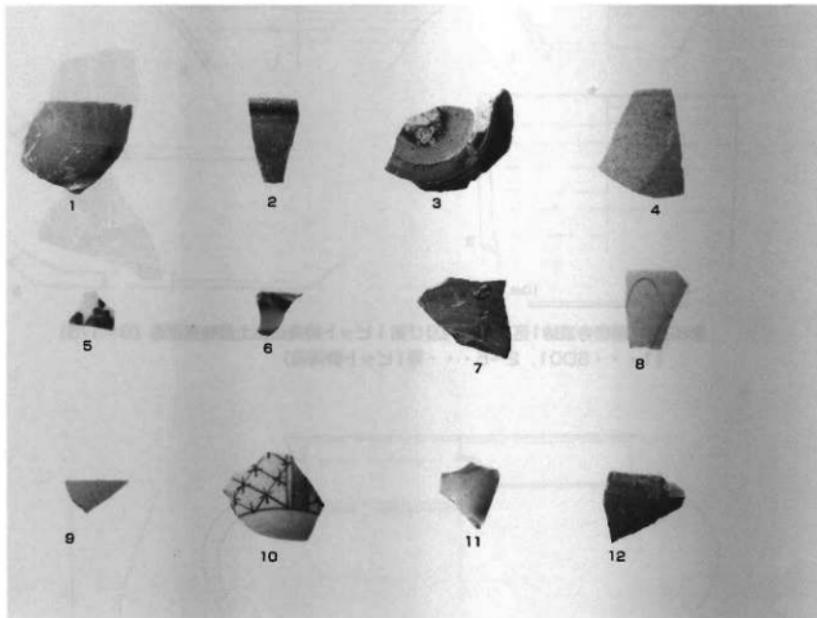
溝状遺構

SD03 (第86図) 調査区の東側に南北に平行する形で検出されている。当初は西から東に向かって伸びるが、2mばかり進んだところではほぼ90度くねり、南方に約5m伸びている。幅は約60cm、深さは最も深いところで約25cmを測る。

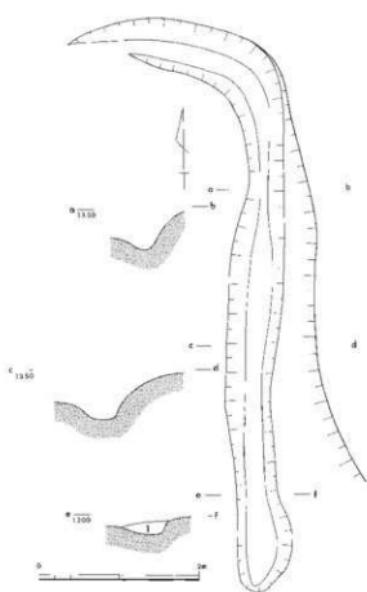
この細長い平坦部は、SD03を境にして段差がある。1区-1の基壇状平坦部は前述しているように、埋め立て



第84図 陽徳寺遺跡1区
第1ピット群周辺出土青磁器実測図 (S=1/2)



第85図 開徳寺遺跡1区第1ピット群周辺出土陶磁器 (S=1/1)



第86図 開徳寺遺跡1区SD03実測図 (S=1/60)

て造成されているが、その埋め立てはSD03の手前まで及び、その後基壇状に構築されているように見受けられる。この基壇部先端の下の地山にSD03は掘り込まれている（図版44参照）。この基壇先端部は南側が削平されているが、現状で40cm程の高さがある。

また、遺物は検出されなかった。

出土遺物（第88・89図）

第2ピット群周辺より様々な時期の遺物が出土している。小片が多く、その状況を見るに周囲からの流れ込みの可能性が高いと思われる。

第88図1は、弥生土器である。口縁端部を欠いており、摩滅も著しい。口縁内部にナデ調整、頸部外面にはハケメが施されているのが微かに確認できる。弥生時代後期前葉のものと思われる。

2は上器部の甕の口縁部である。体部外面にはハケメ、内面はヘラケズリが施されている。古墳時代後期以降のものであろう。

3～4は須恵器である。3・6は壺である。6は外面に格子タタキの後カキメが、内面には同心円タタキが施されている。古墳時代後期以降のものであろうか。4・5は高台の付く杯身である。7～9世紀代のものであろう。

7・8・10は指り鉢である。7・8は備前系の指り鉢の口縁で、直立かやや内傾気味に端部を上方に伸ばしている。8は外面に凹線が施されている。10は地元産の陶器であろう。分厚い高台が付き、内面は暗紫色の上薙が施されている。

9も陶器であるが、器種についてははつきりしない。角張った口縁を持ち、頸部は短く、直角気味に曲がる気配をみせる。火鉢かなにかの類いであろうか。



11は灰釉陶器の壺である。内面に淡緑色の灰釉が施されているが、施釉後、同心円状に釉薙を剥いでいるように見受けられる。外面は高台周辺には施釉されていない。地元産のものと思われ、時期は18～19世紀の範囲と推定される。

第89図は備前系の染付の鉢の破片である。内外面に文様が施されており、19世紀中頃のものと思われる。

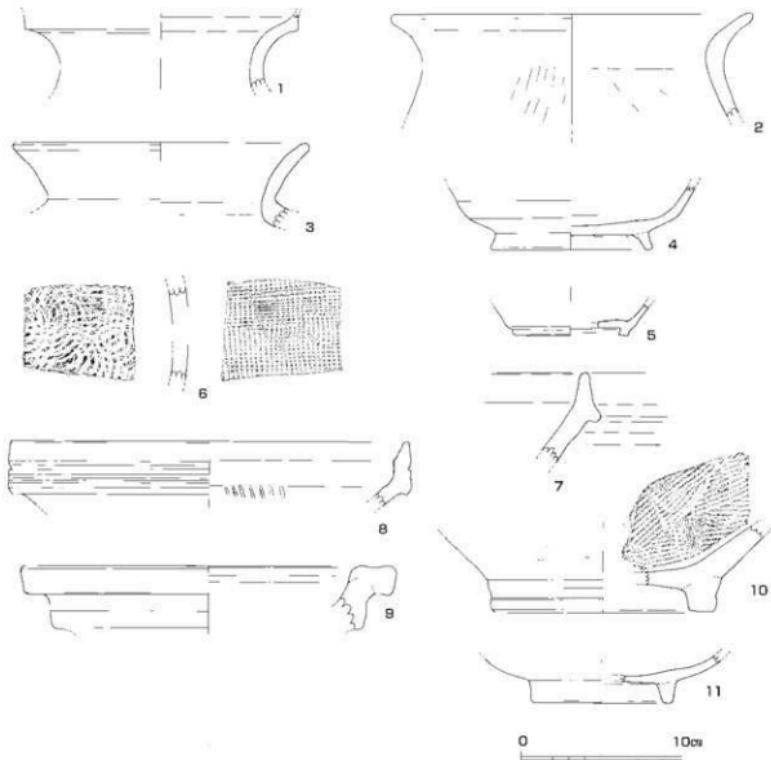
1区-3

1区-3は、1区-1の平坦部から西側に拡張した範囲である。その平坦部を形成している盛土が基壇状に途切れてから先の部分にあたり、平坦部より約1mの段差がある。

前述したように基壇状平坦部の下には、黒色粘土層が50cm～2mの厚さで堆積している。この粘土層は平坦部が途切れた後も谷の出口に向かって延々と堆積しており、平坦部が形成された当時の地形を伺うことができる。この黒色粘土層の上面から、南北方向に沿って杭列が検出された。

杭は全部で4本ほど見つかった。現状では調査区の南側に約90cmの間隔で3本、それから3m50cmほど離れて1本検出されているが、位置的にみて基壇部と黒色粘土層のちょうど境目に打ち込まれており、また基壇にはほぼ平行しているように見受け

第87図 阳徳寺遺跡1区第2ピット群実測図 (S=1/150)



第88図 陽徳寺遺跡1区第2ピット群周辺出土遺物実測図 (S=1/3)

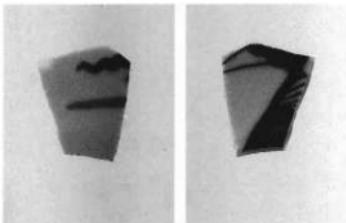
られることから、当時は等間隔に列をなしていたと推定され、盛土の土止め等の役割を担っていたと思われる（第81図参照）。

出土遺物（第90・91・92・93図）

黒色粘土層より上方の堆積土より様々な遺物が出土した。いずれも周囲からの流れ込みだが、平坦部にあったであろう建築物に関連する遺物が多いと思われ、その性格を伺うことができよう。

第90図1は李朝系の陶器碗である。口縁部を欠いているが、体部の途中から立ち上がりがきつくなっていく。内面底部と高台の5ヶ所に砂目当痕がみられる。淡い灰色の釉薬が全体に施されている。15～16世紀のものと思われる。

2・4は龍泉窯系の青磁である。2は皿の高台部である。薄緑色の釉薬が底部外面を除いて施され



第89図 陽徳寺遺跡1区第2ピット群周辺出土磁器 (S=1/1)

ている。高台は断面は内側に向かって尖り気味の四角形を呈する。4は碗の口縁部分の破片である。外面に劍先型蓮弁文を有し、薄緑色の釉薬が施されている。2は14世紀後半から15世紀中頃、4は15世紀中頃から16世紀前半のものと思われる。

3は唐津系の陶器碗である。器形は、内面に段があり、その段より口縁部にかけて大きく外反し、先端は溝状になっている。また口縁外面にも緩やかな凹線が施されている。胎土目当痕がみられる。17~18世紀のものであろう。

5は備前系の摺り鉢の底部である。内面に7本単位の条線が施されている。

6は洪武通宝である。径2.18cm、現重量2.32gをはかる。この他にもう1点古錢が出土しているが、摩滅が著しく種類の判別はできなかった。

7は安山岩製の石巖である。全長1.87cm、幅1.2cm、厚さ0.28cm、重量0.58gをはかる。

8・9は円筒埴輪片である。8は胴部で、外面にナナメ方向のハケメが、内面にはタテ方向のハケメが微かに確認できる。9は口縁部で、復元口径約22cmをはかる。外面にはナナメ方向のハケメ、内面はヨコ方向のハケメが施されている。およそ古墳時代後期のものであろうか。

第91図は陶磁器の破片である。小片であるため図化はしていない。

1は染付碗の口縁部である。先端は細く尖っており、外面には花卉が描かれている。地元産のものと思われ、時期は19世紀中頃のものと推定される。

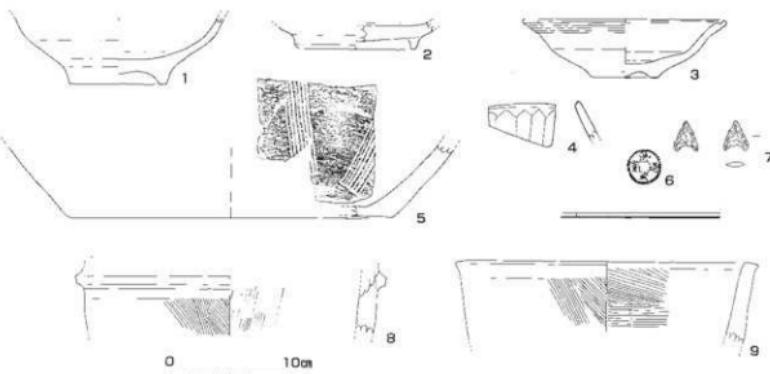
2・3は肥前系の染付である。2は碗の破片である。3は鉢の口縁部であり、先端は四角くおさめている。ともに19世紀代のものと思われる。

4は龍泉窯系の青磁碗の口縁部である。外面にヘラ描きによる蓮弁文が施されている。14世紀後半から15世紀中頃のものと思われる。

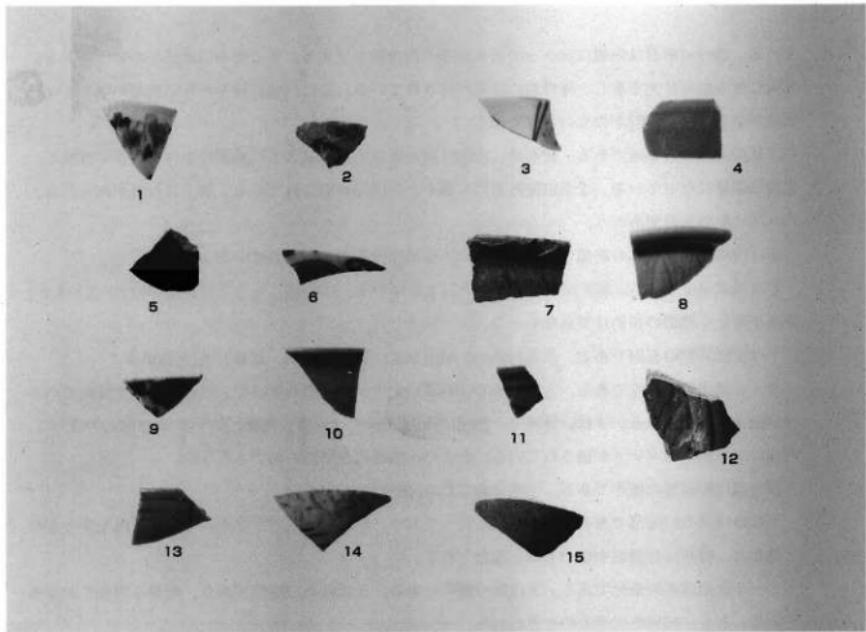
5・7は地元産の陶器と思われる。5は火入れの類であろうか。18~19世紀のものと推定される。

7は碗の口縁部であろうか。先端部は外側に折り曲がり、平坦面をつくっている濃緑色の灰釉が施されている。詳細は不明だが、近世の範囲に収まるものではある。

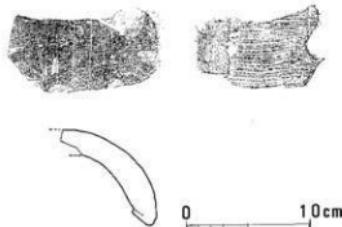
6は景德鎮産の染付碗である。16世紀後半から17世紀初頭のものと思われる。



第90図 陽徳寺遺跡1・2区堤埋後堆積土出土遺物 (S=1/3) (8・9はS=1/4)



第91図 陽徳寺遺跡1・2区堤埋後堆積土出土陶磁器 (S=1/1)



第92図 陽徳寺遺跡2区堤埋後堆積土
出土瓦実測図 (S=1/4)

は皿の高台部である。いずれも14世紀後半から15世紀前半のものと思われる。

11・14はともに肥前系で、11は陶胎染付の火入れの口縁部である。先端は内湾気味に肥大しており、内面にはヨコ方向のハケメ状の痕跡が認められる。18世紀前半のものと思われる。14は染付の碗であろうか。17世紀後半から18世紀前半のものと思われる。

15は地元産の陶器片と思われる。時期は18～19世紀のものであろう。

第92図は丸瓦の側部の小片で、焼瓦である。^{四面}外面は工具を使用して縱方向にナデている。側縁は面取りし、丸く收めている。タキ締めは緩く、凹面のコビキ痕・粘土板の継ぎ目を明瞭に残している。胎土中には砂粒をほとんど含まない。

この瓦は近世以降のものと考えられる。この瓦の凹面に見られるコビキ痕は、コビキBであり近代

8は青磁の碗の口縁部であろうか。体部は丸みをもち内湾気味に立ち上がっているが、口縁部は鋭く外反している。外面には蓮弁文が施されている。

9は染付碗の口縁部であろう。時期は新しく明治時代以降のものと思われる。

10・12・13は龍泉窯系の青磁である。10・13は碗の口縁部である。10は縫部が外反している。13は外面にヘラ描きによる雷文が施されている。12

は外面上にハラ描きによる雷文が施されている。

まで続くものであるが、初現は天正年間（1573～1592）頃と考えられている。ただ、平坦部にあったと思われる建築物との関係は定かでない。従ってその建築物に瓦が敷かれていたかについてはよくわからない。

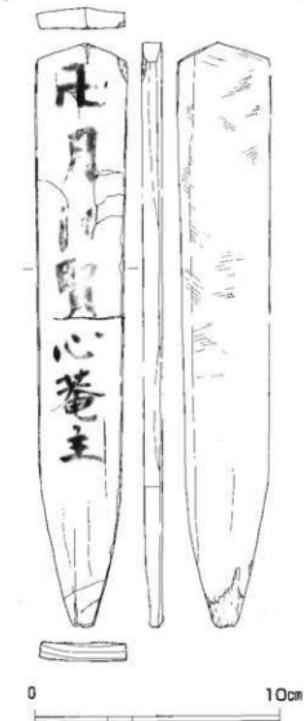
第93図は板塔婆である。長さ約24cm、幅3.5cm、厚さ8mmを測る。先端がやや欠けているが、ほぼ完形である。木取りは板目取りで短縦状に成形されている。表裏面は刀子などで削って調整した痕跡がみられ、裏面には無数のキズがみられる。上方端部は山形に、下方は側面を剣先状に削っている。

さて、問題は書かれている文字である。肉眼では識別しにくかったが、赤外線をあてると図のような文字が浮かび上がった。およそ次のように読み取れる。

「**正月口賢心菴主**」

2番目の文字が読み取れなかったが、「江」や「湖」のようにも見える。意味は別として、最後の「菴主」は、男性の戒名らしい。

このような祭祀関係の特殊な遺物が検出されたということは、この基壇状平坦部にあった遺構の性格を考える上で非常に興味深いといえる。



第93図 陽徳寺遺跡1区堤埋後堆積土
出土木製品実測図 (S=1/2)

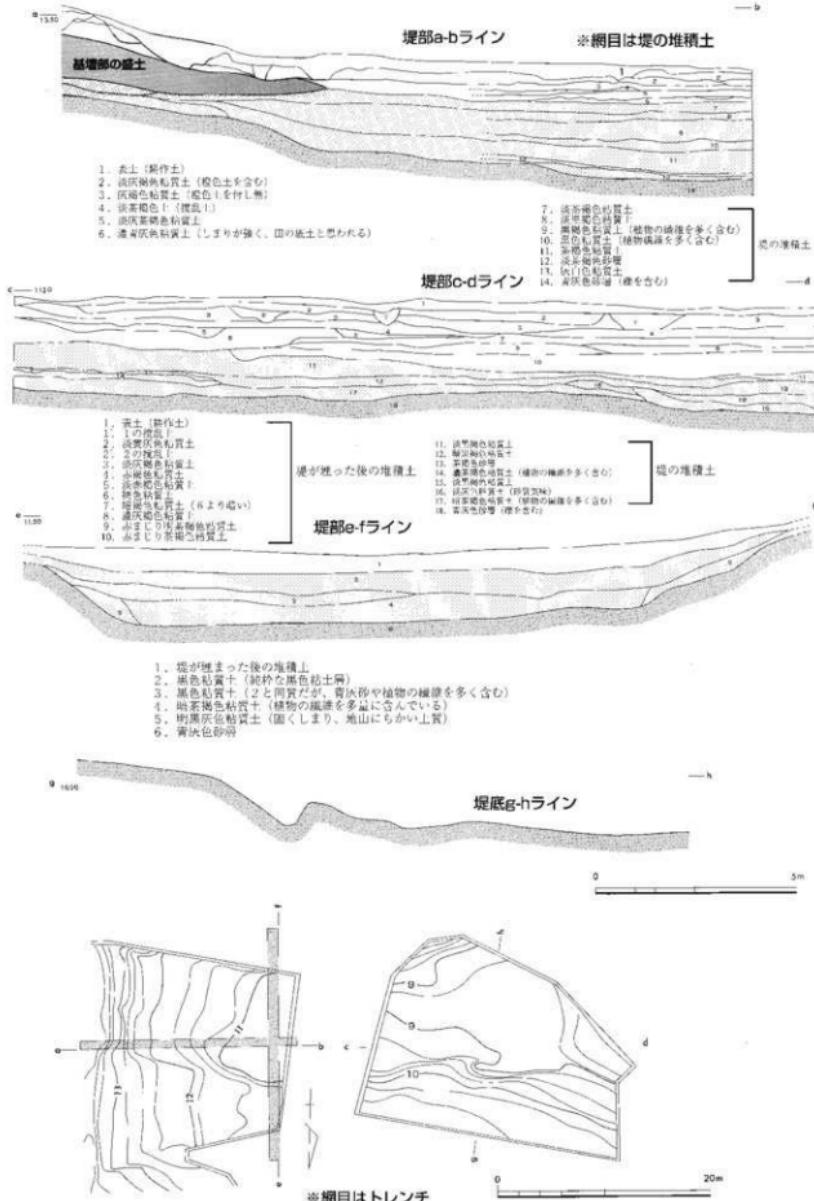
註 1区出土の陶磁器の分類・時期等については、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏にご教示をいただいた。

第3節 2区の調査概要

2区は、谷間に西側に位置する。1区平坦部の下には、通常の谷部には見られない黒色粘土層の堆積が確認されたので、新たに調査区を西側に設置した。田畠の耕作土を除去していくと、やはり同様の黒色粘土層が検出された。底部とみられる青灰色砂礫層まで掘り下げた結果、黒色粘土層は最大で約2mの深さがある。底部の中央付近にくぼみがみられるのは、水の流れの痕跡であろうか。

この黒色粘土層の広がりをみると、この谷にはかつて池があったと考えるのが自然であろう。谷間を利用した人口的な堤である可能性も考えられたが、縁堤は確認できなかった。ただ、土層をみると黒色粘土層は谷の出口に向かって途切れず続いているので、調査区外に縁堤があるかもしれない。

調査終了後、堤の範囲を確認するため縦横にトレーナーを入れた。谷の奥に向かっては、水の増減があるようで範囲がはっきりしてないが、堤の底の地形などをみるとどうやら基壇部の先端付近に1つの境があるようである（第94図a-bライン）。東西方向に向かっては、おおよその範囲がわかった



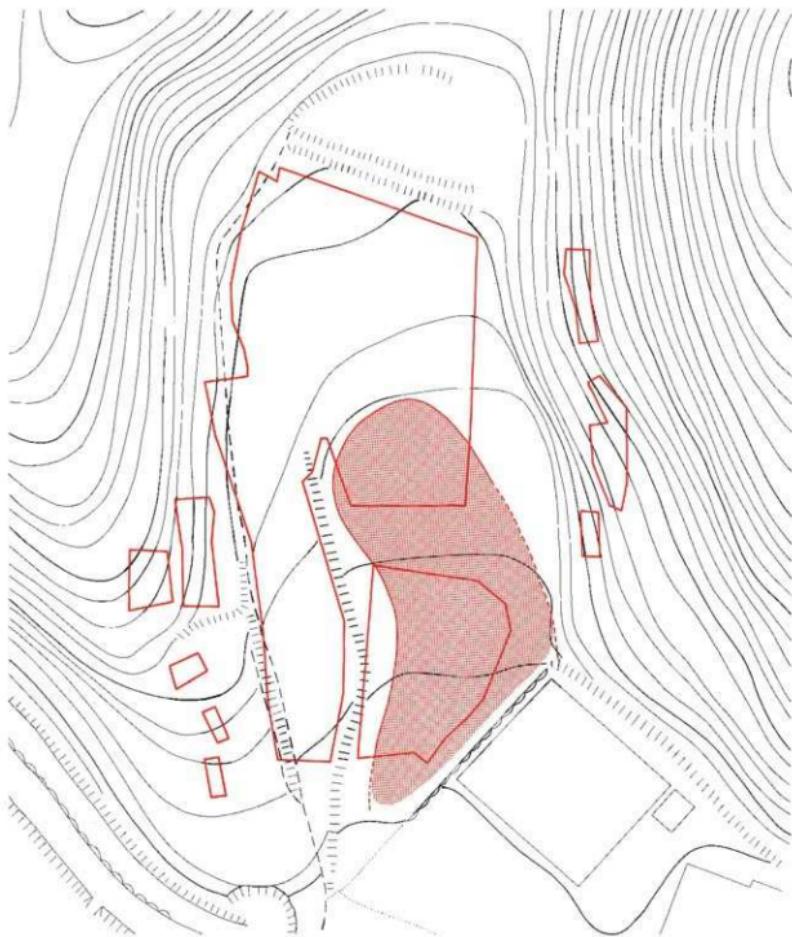
第94図 陽徳寺遺跡1・2区堤部土層堆積図及び堤底地形図（土層S=1/120）

(同e-fライン)。谷の出口に向かっては、前述したように調査区の範囲内では堤は検出できなかつた(同c-dライン)。

以上のことから堤の範囲を想定すると、現状で長さ45m以上、幅約20m、深さ最大で約2mの堤が復元できる。(第95図)

出土遺物（第96～107図）

この黒色粘土層内より、様々な種類の遺物が多量に出土している。よって、須恵・土師器などの土器類、黒色土器、石器、瓦、漆器椀、その他の木製品と分けて図化した。土器類については、層位により特に明瞭な時期差はみられなかつたが、上層・下層・底部と出土地点により3つに分類した。



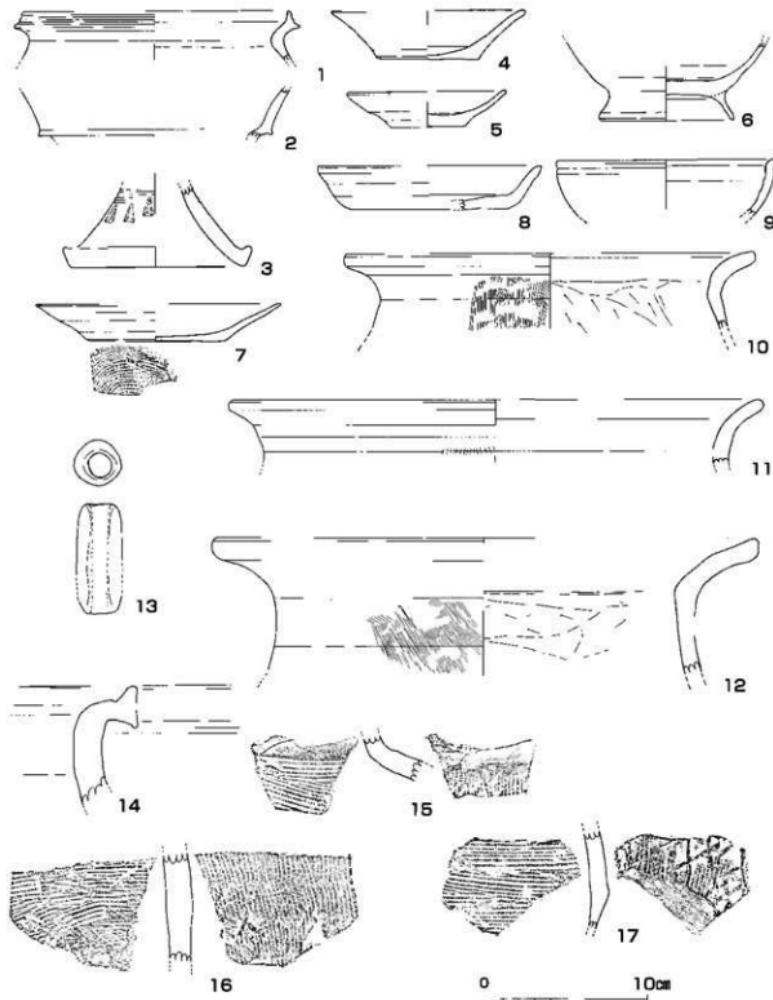
第95図 陽徳寺遺跡堤の範囲復元推定図 (S=1/600)

*網部が堤の範囲

以下順に概要を追っていく。

堤上層出土遺物（第96図） 1・2は弥生土器の甕口縁部である。1は後期前葉、2は端部を欠いているが後期末から古墳時代初頭にかけてのものであろう。3は弥生時代中期の高坏の脚部である。未貫通の三角形透し孔が入っている。

4・5は土師質土器の小皿である。4は体部がかなり外反して立ち上がっている。いずれも12世紀代のものであろうか。6は土師質土器の坏である。ハの字に開く高台をもち、口縁を欠くが、体部は



第96図 陽徳寺遺跡2区堤上層部出土遺物実測図 (S=1/3)

やや丸みをもちらながら外反気味に立ち上がる様相を示す。11世紀代のものと思われる。

7～9は8～10世紀前後の須恵器の皿・坏である。7は焼成が軟質で、口縁は外反しながら開く。8は口縁は短くやや外反し、底部に回転糸切り痕が残る。9は口縁端部がくびれしている。

10～12は復元口径25～35cmを測る土師器の壺である。いずれも口縁が大きく外反し、体部は垂直気味に垂れる様相を示す。調整は体部外面はハケメ、内面はヘラケズリである。時期はよくわからぬいが、およそ古墳時代後期以降のものであろう。

13は土鍤である。長さ6.7cm、幅2.9cmを測る。胴部は筒状で厚手である。

14は陶器壺の口縁である。端部は外反し、「T」字状に縁帯が拡張している。他の遺物と比べて時期が新しい様相を示すが、上層の出土だけに流れ込みの可能性が強いであろう。

15～17は須恵器の壺の破片であろうか。いずれも灰白色に焼成されている。15は頸部のような様相をみせており、それを基準に合わせると外面はまず格子目のタタキが施され、その後タテ方向のハケメ、内面はヨコ方向のハケメが施されている。17はさらにヘラ状工具で表面を横なぐりに削りとった痕がある。3点ほど図化したが、上層からは同様の破片が十数点出土しており、いずれも同器種のものと思われるが接合はできなかった。時期はおよそ古代末から中世初頭であろう。

堤下層出土遺物（第97～99図） 第97図は須恵器である。1～8・10～13・17は坏身であり、1～8・10～13・17は高台の付かないもので、底部は回転糸切りである。1・8は体部は湾曲し、口唇部はやや内傾するものである。特に1は器高6.4cm、口径14cmを測る大型のものである。2～4・6・7は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁にくびれをもつ。5は口縁にくびれをもたないが、細い沈線が入っている。10～13・17は体部が逆ハ字状に直線的に立ち上がるものである。時期は、1～8が8～9世紀代、10～13・17が9～10世紀前後であろうか。14は高台の付く坏身である。低い高台が底部の端についている。8世紀後半から9世紀代のものであろう。

9・15・16は皿である。9は高台の付かないもので、底部は回転糸切りである。15・16は高台が底部のやや内側に付く。いずれも8世紀後半から9世紀のものである。

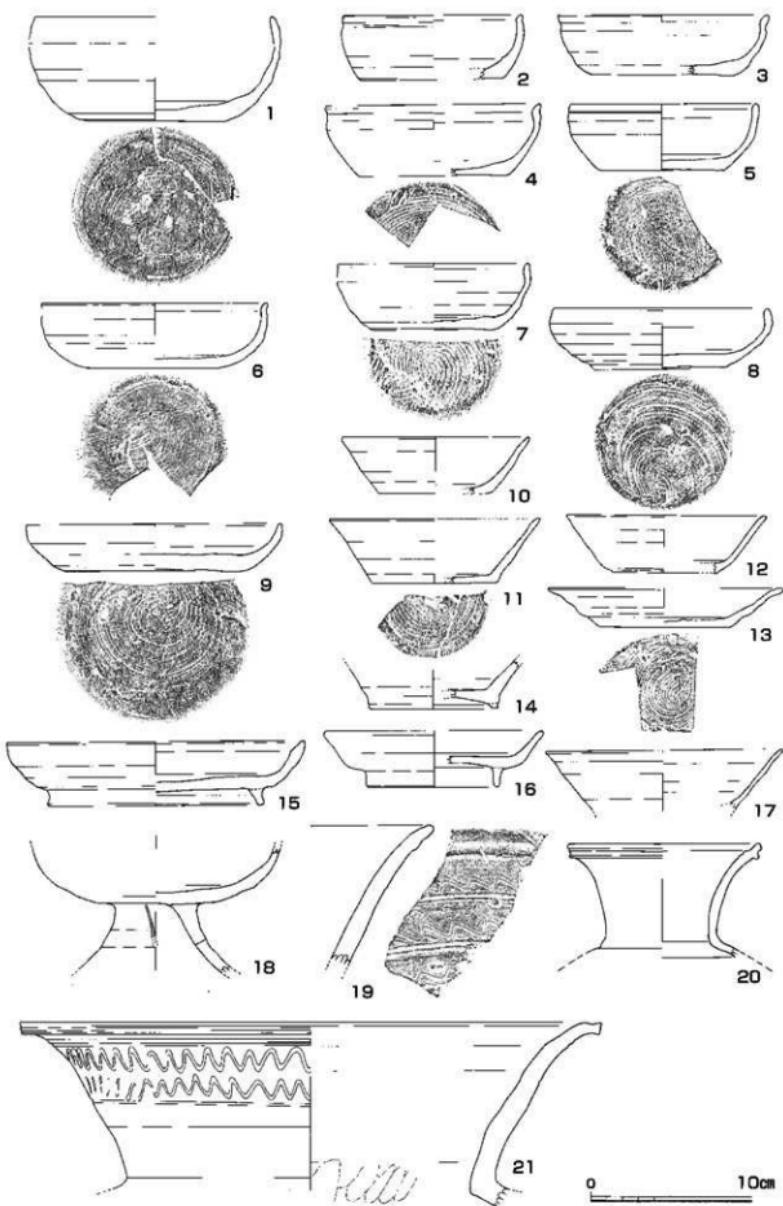
18は高坏である。細い切れ目のスカシが入る。7世紀代のものであろうか。19は壺の頸部である。波状文が施されている。20は提瓶の口縁部である。端部は外反し、面をもつように上下につまみ出している。21は復元口径35cmを測る大型の壺の口縁である。

第98図1は弥生土器の壺の口縁部である。外反しながら立ち上がり、端部は尖り気味に丸く收めている。弥生時代末のものであろう。

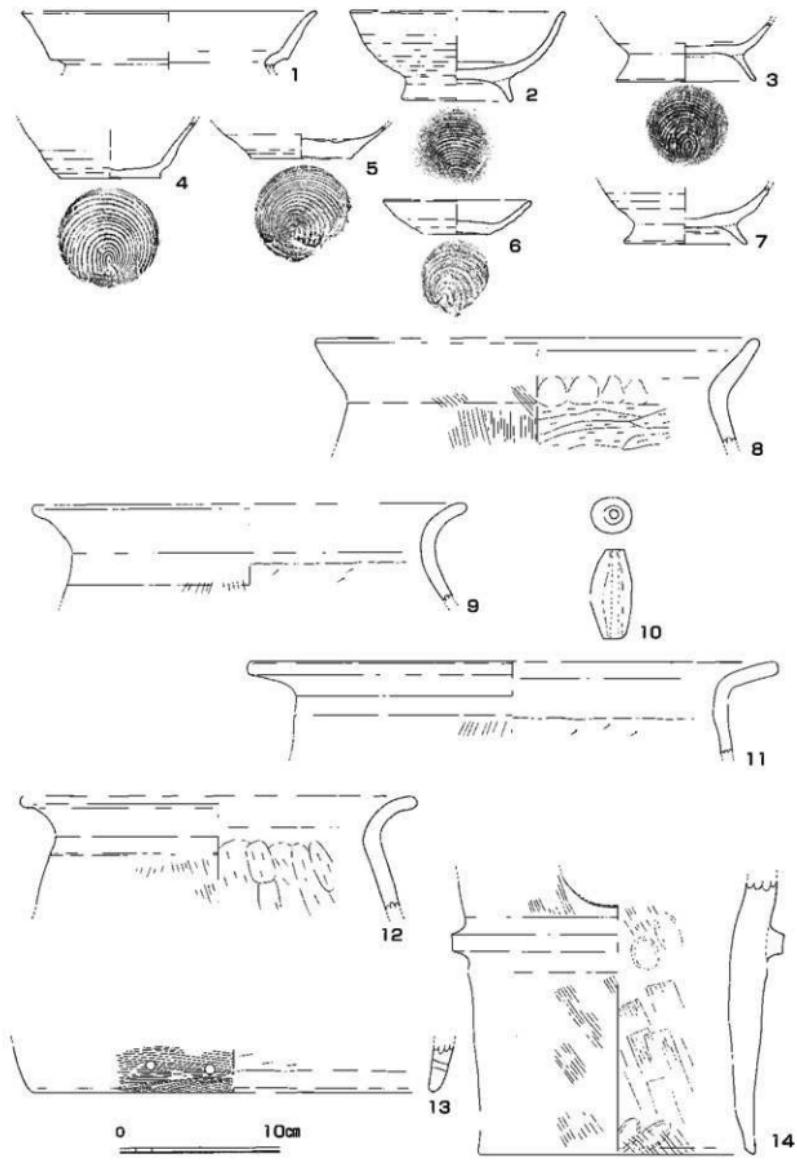
2～7は土師質土器の坏・皿である。2・3・7はハの字状に開く高台をもつ坏で、2は体部が丸みをもちらながら立ち上がり、口縁は緩やかに外反する。4・5は坏である。いずれも口縁を欠くが、4は体部が逆ハの字状に直線的に開く。6は小形の皿である。これらの土器の時期は11～12世紀代であろうか。

8・9・11・12は土師器の壺であり、口縁部に様々な形態がみられる。8は口縁が「く」の字にやや内湾気味に外反する。9・12は口縁が大きく外反する。11はさらに大きく屈曲し、直線状に伸びている。時期の特定は難しいが、古墳時代後期以降としておく。

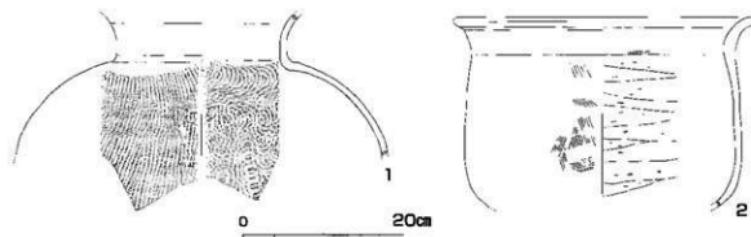
10は土鍤である。長さ5.6cm、幅2.4cmを測る。ラグビーボールの両端を切り落としたような形態である。



第97図 陽徳寺遺跡2区堤下層部出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第98図 陽徳寺遺跡2区堤下層部出土遺物実測図（2）(S=1/3)



第99図 陽徳寺遺跡2区堤下層部出土遺物実測図（3）(S=1/6)

13は壺の下端部であろう。僅かな小片であるが、丸みのある端部付近に直径5mmほどの穴があいている。おそらくこの穴に棒のようなものを差し込み、物が落ちないような工夫をしていたのではないだろうか。外面にヨコ方向の目の細かいハケメ、内面はヘラ削りが施されている。

14は円筒埴輪の底部である。摩滅が著しいが、内外面ともタテ方向のハケメがみられる。内面の端部付近には、底部調整として刻みをついた木製工具によるナナメ方向のカキナデが施され、その後先端をつまみ出したような形跡がみられる。古墳時代後期のものであろう。

第99図1は須恵器の壺である。外面は平行タタキ、内面は同心円タタキが施されている。2は復元口径34cmを測る大形の十脚器の壺である。口縁は大きく外反し、胸部は垂直気味に垂れ下がり下方が少し張っている。外面はタテ方向のハケメが、内面はヨコ方向にヘラ削りが施されている。

堤底部出土遺物（第100・101図） 第100図は須恵器である。1・2は蓋である。いずれも宝珠つまみのつくタイプである。1は内面に墨が付着しており、不定に強くナデたような搔痕がみられツルツルしている。裏返して覗として使用されていたと思われる。いずれも8世紀から9世紀代のものであろう。

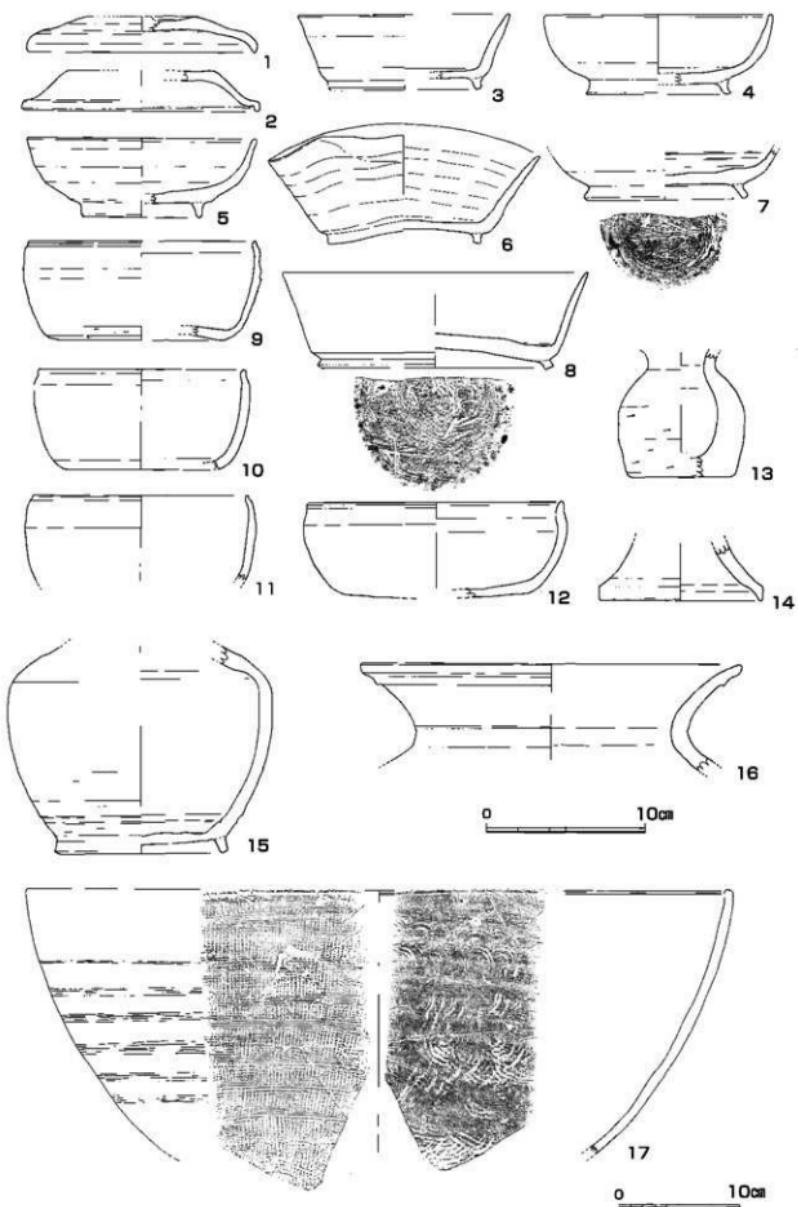
3～12は壺身である。3～8は高台の付くもので、高台を底部の内側に付け、体部が丸みをもち立ち上がるものの（4・5・7）と、高台を底部の外側につけ体部が逆ハの字状に立ち上がるものと2つに分けられる（3・6・8）。7・8には底部に「X」印のヘラ記号がある。9～12は高台はつかず、口縁部にくびれをもつものである。いずれも8世紀から9世紀代のものであろう。

13は小壺である。分厚い器壁で頸部がくびれ、口縁が大きく外反する様相を呈し、底部は平底である。平安後期の壺の小型仮器化したものであろう。類例として、陽徳寺遺跡の東側にそびえる山頂にある陽徳遺跡の平安期の山岳寺院跡からも、土師質であるがよく似た形態の小壺が出土している。

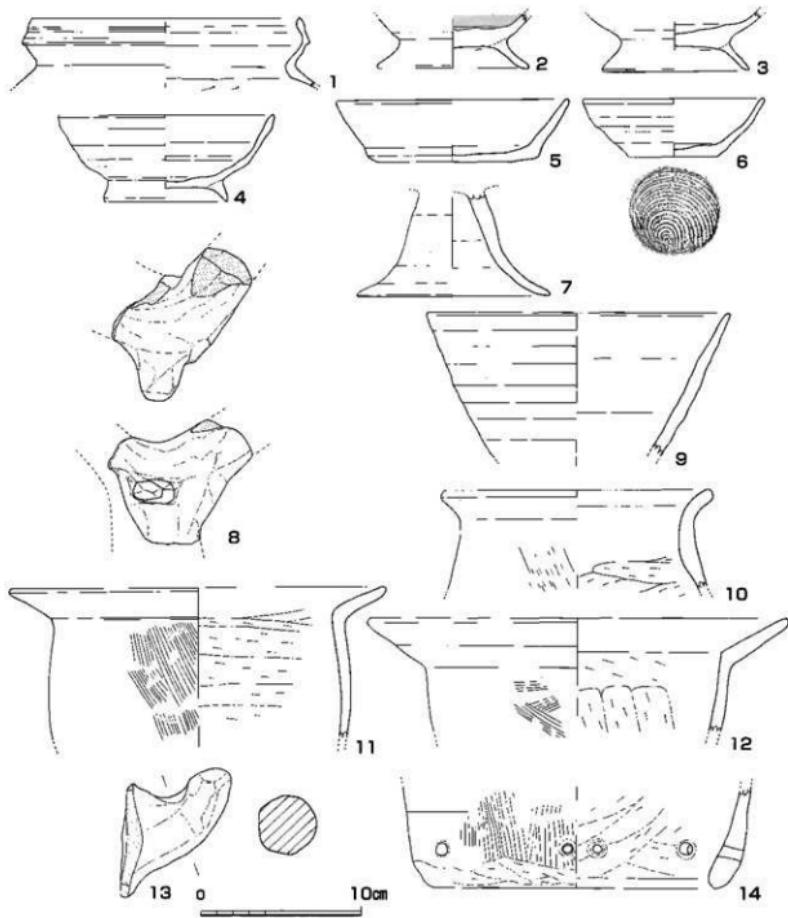
14は高杯の脚部である。15は長頸壺である。高台が付き、肩部が張り、底部は糸切りである。16は壺の口縁部である。17は壺であろうか。復元口径55cmを測る大型のもので、底部が欠けているが鉢のようなものの可能性もある。外面は平行タタキの後カキメが施され、内面は同心円タタキの後をナデ消している。

第101図1は弥生土器後期の壺の口縁である。参考までに述べると、前述した陽徳遺跡からも弥生時代後期の住居跡が検出されている。

2～6・9は土師器の壺である。高台が付くものと付かないものがある。2・3はハの字に開く長い高台をもつ。2は内面に炭素を吸着させ、黒色に処理が施されている。在地で製作された黒色土器



第100図 陽徳寺遺跡2区堤底部出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第101図 陽徳寺遺跡2区堤底部出土遺物実測図（2）(S=1/3)

であろうか。4は体部が内湾気味に立ち上がり、高台が外傾する。5は底径が口径に対しやや大きい様相を示す。6は体部はやや内湾し、底部は回転系切り痕を残す。9は壊として復元しているが、鉢の類いである可能性もある。いずれも10世紀後半から11世紀代のものと思われる。

7は土師器の高壊の脚部である。6世紀以降のものであろう。8は土製支脚である。10~13は壺である。10は口縁が短く「く」の字に外反するタイプで、11・12は大きく水平にちかく屈曲するタイプである。

13・14は瓶である。13は把手で、14は底部である。第98図13と同様に一定の間隔で穴が開いている。外面向にタテ方向のハケメが施され、端部は削られて尖り気味である。内面にはヘラ削りが施されている。

黒色土器（第102図） 堤内の下層・底部より5点の黒色土器の坏が検出された。いずれも内面のみ黒色処理されており、田中琢氏の分類する黒色土器A類に相当する。^{註記} 内外面とも綿密にヘラ磨きが施され、特に黒色処理された内面は銀色に光っている。4以外は口縁部の破片のみの残存で、口径は13～15 cmを測る。いずれも体部は丸みをもちらながら内湾気味に立ち上がり、1～3は口縁が外反する。4はほぼ全形が明らかな坏で、口縁が直立するように立ち上がる。底部は平底無高台で回転糸切り痕が残る。また底部と体部の側面に「×」印の浅いヘラ記号がある。

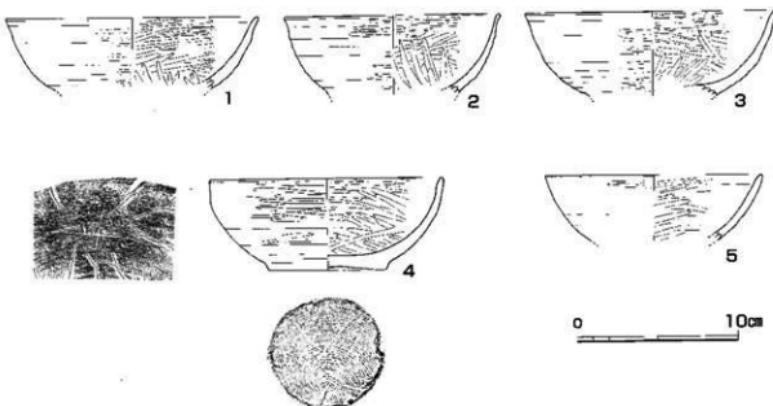
県内でこれだけまとまって黒色土器が検出された例はないが、底部に回転糸切り痕が残ることからも、これらの土器は在地で生産された可能性も考えられる。

石器（第103図） 1・2は蔽石である。1は全形は不明だが、現状で幅約12cm、厚さ約7 cmと偏平な楕円形を呈する。2は円形を呈し、幅約10cm、厚さ約5 cmを測る。両者とも、側面にぐるりと敲打痕が残る。

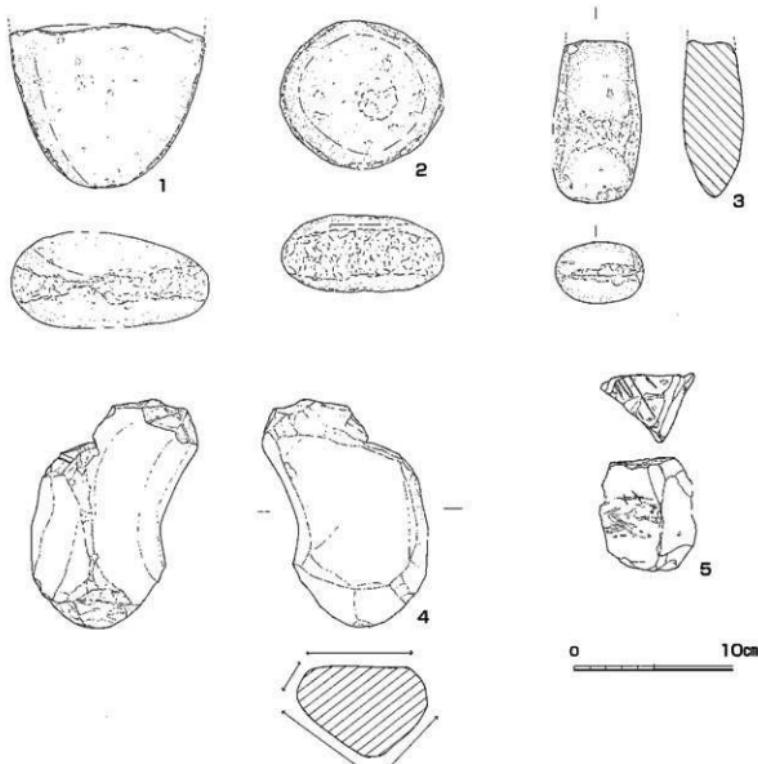
3は蛤刃石斧である。基部が欠落しているが、現状で長さ約10cm、幅約6 cm、厚さ約3.5cmを測る。両側面に石斧を形成する際の加工痕がみられる。

4・5は砂岩製の砥石である。4はほぼ全面が砥面として利用されており、側面はかなり使用されたとみえ湾曲している。5は三角柱状を呈する小型のもので、使用面はわずかに湾曲している。三角の形をした側面に、何条かの筋状の砥面が認められる。

軒丸瓦・平瓦・丸瓦（第104・105図） ^{註記} 堤内下層・底部付近より10点の瓦類が検出された。いずれも非常に硬質で還元炎焼成されており、青灰色・暗灰褐色を呈している。胎土中には白色の砂粒を含んでいる。全10点のうち丸瓦が9点で、平瓦は1点しか検出されていない。



第102図 陽徳寺遺跡2区堤部出土黒色土器実測図 (S=1/3)

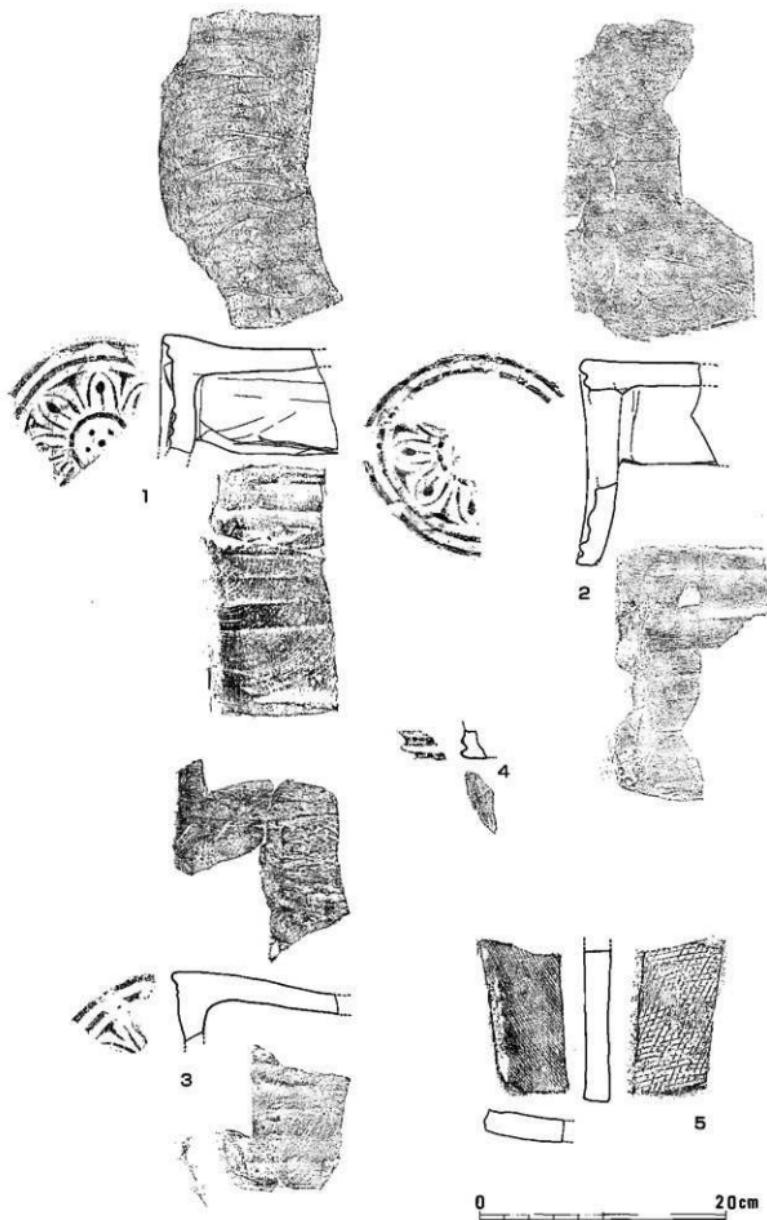


第103図 阳徳寺遺跡2区堤部出土石器実測図 (S=1/3)

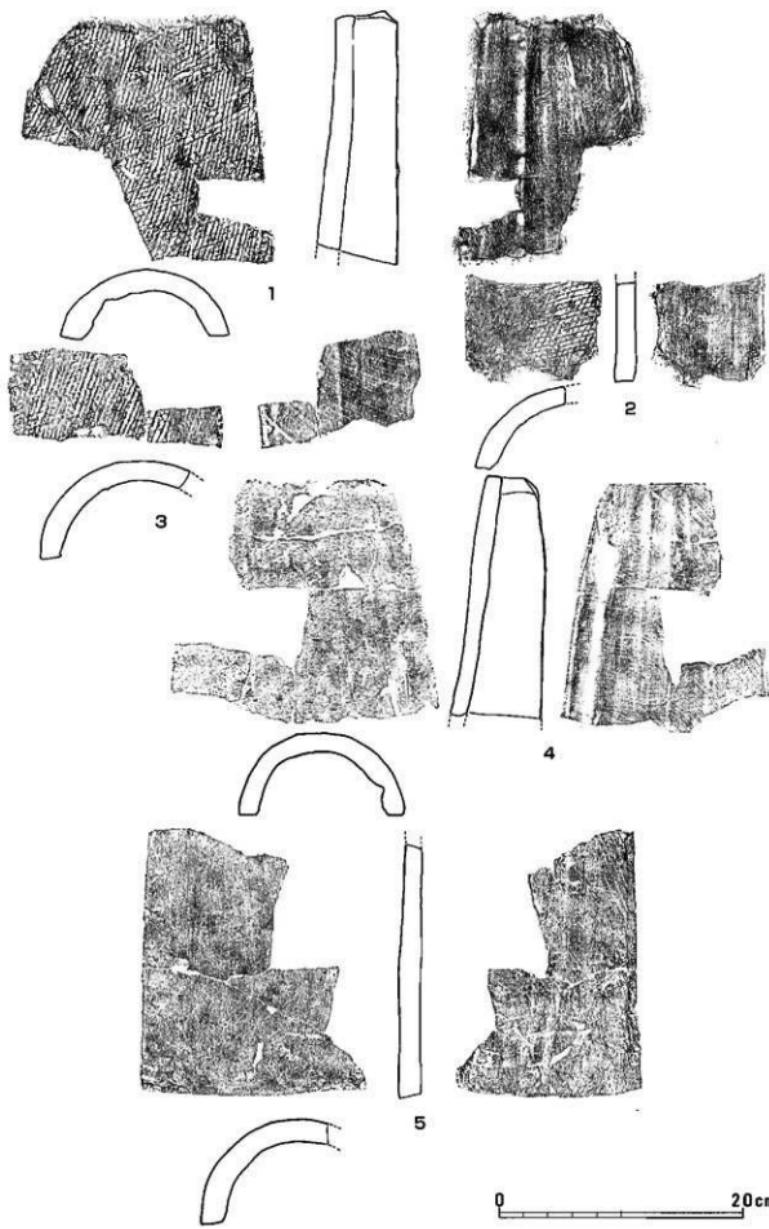
第104図1～4は軒丸瓦である。いずれも丸瓦部凹面に布目圧痕と模骨痕状の痕跡を残し、丸瓦部の成形に桶型を用いたことがわかる。丸瓦部凸面は縦方向に調整されるが、一部に斜格子タタキ痕を残している。

1は瓦当部約1/2を残す。丸瓦部で厚さ約17mm、瓦当厚約20mmを測る。丸瓦部取付位置は、上端よりやや下がり、厚く補強粘土が施されるが、側部の取付には補強を施さない。丸瓦部凸面の瓦当近くに布目圧痕、端部方向には斜格子タタキ痕を残す。2も瓦当部約1/2を残す。丸瓦部で厚さ約17mm、瓦当部厚約17mm。丸瓦取付位置は瓦当上端部には直接取り付き、補強粘土は少ない。瓦当面はやや薄造りで、焼き歪みが大きい。3は瓦当部付近の小片であり、丸瓦部の厚さ約14mm。丸瓦部取付位置は、瓦当上端部には直接取り付き、補強粘土は少ない。丸瓦部凹面の瓦当部近くにヘラ状の工具による傷がみられる。やや酸化炎焼成氣味で、暗赤褐色を呈する。4は瓦当面外区の小片である。暗赤褐色を呈する。

5は唯一の平瓦である。狭端部の小片であり、厚さ約20mmを測る。凸面に斜格子タタキ痕を、凹面に布目圧痕を明瞭に残す。凹面側部に布面の下側に紐状のものの痕跡があり、分割界線と思われる



第104図 阿波徳寺遺跡2区堤部出土軒丸瓦・平瓦実測図 (S=1/4)



第105図 陽徳寺遺跡2区堤部出土丸瓦実測図 (S=1/4)

が、非常に偏平な造りで、桶巻き造りと断定するには躊躇する。端部はケズリにより調整し、側面はケズリにより2面取りする。

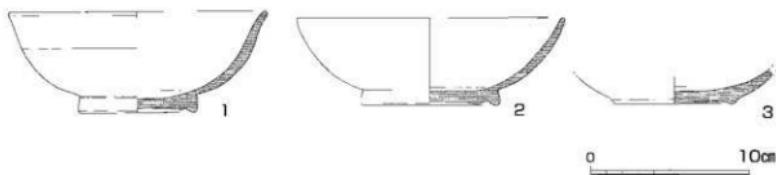
第105図6～10は丸瓦である。凸面に斜格子タタキ痕、凹面には模骨痕状の痕跡を残している。

6は行基式丸瓦の狭端側で、厚さ約15mmを測る。側面は一枚で削るが、凹面側に分割界線の痕跡を残している。7は側面を残す小片で、厚さ約15mmを測る。側面は一枚で削り、側面凹面に分割界線をわずかに残す。8は行基式丸瓦の小片であろうか。厚さ約16mmを測る。凹面に斜格子タタキ痕を残すが、端部近くはタタキ板が当たっておらず、やや盛り上がった状態で残されている。側面は、分割界線からの厚さの約2/3まで刃物をいれ、分割痕は未調整である。端部は凹面側に向て2面取りする。9は行基式丸瓦で、狭端側1/3程度を残している。凸面は縦方向にタタキ痕をナデ消し、凹面側は模骨状の痕跡を残すほか、粘土の継ぎ目と思われる窪みがみられる。側面は一枚で削るが、凹面側に分割界線が残る部分もあり、場所によっては分割界線をケズリにより調整する。端部は一枚で削るが、凹面側をわずかに調整する。10は広端側を約1/5の残している。凸面側は縦方向にタタキ痕をナデ消している。凹面側の大部分は有目疵痕を残すが、広端部近く約7cmに亘って横方向にケズリを入れる。端面はほぼ垂直に一枚で削るが、凹面・凸面ともケズリに入る。側面は一枚で削るが、凹面側に小さく面取りがみられ、分割界線を調整したものかもしれない。

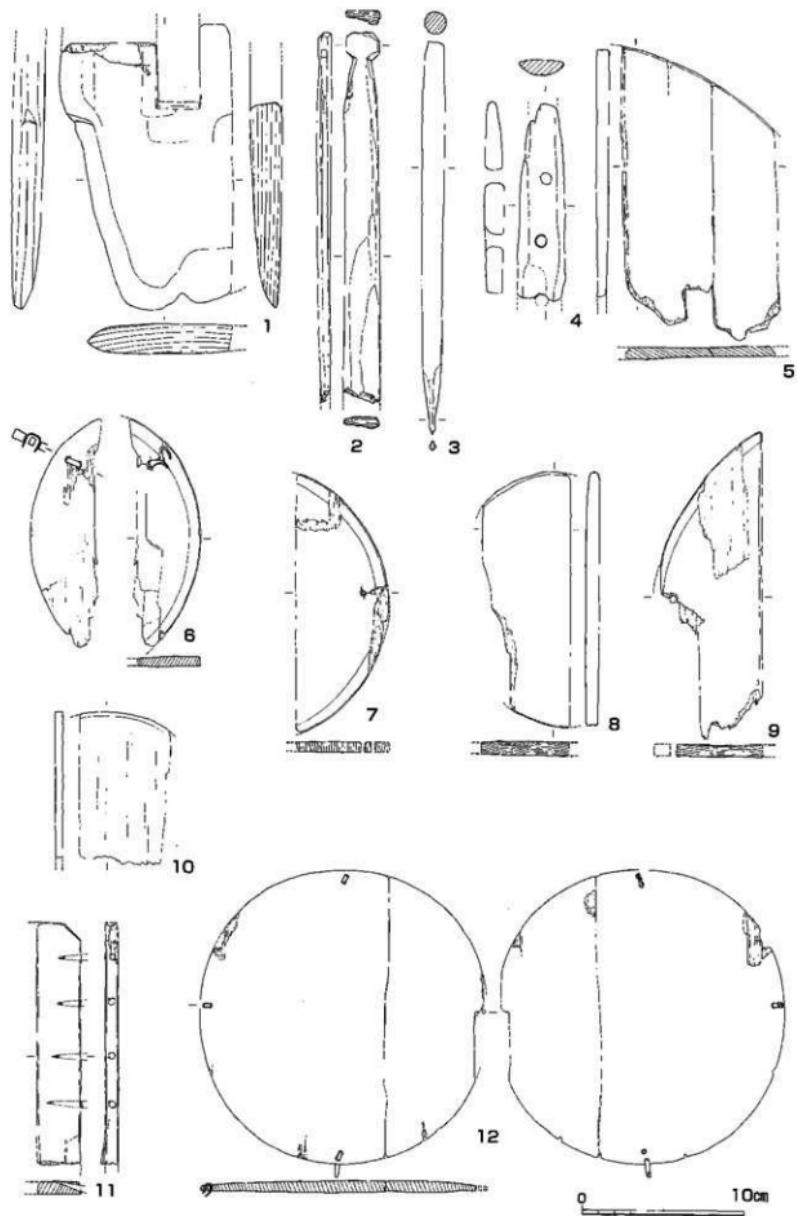
漆器 梶（第106図） 濡気の多い粘土層であるため、残存状態は比較的良好であった。いずれも高台付きの椀であるが、高台は底部の内側を溝状に凹めて作り出されており、高さはない。1・2は底部裏面には漆が塗られていないが、3は全面に塗られている。1は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁はわずかに外反している。口径15.5cm、高台径7cm、器高6.2cmを測る。2は体部から口縁部にかけ内湾気味にそのまま立ち上がる。1に比べ、器高は5.4cmと低いが、口径は16.3cm、高台径8.2cmと大きい。3は底部のみの残存である。内面は漆の剥離が著しいが、赤色漆で描かれた模様がわずかに残っていた。高台径は7.2cmを測る。この他、模様のある漆器梶のわずかな破片が4点ほど検出されている（図版64参照）。

その他の木製品（第107図） 1は鉢である。上半分と側面が欠落している。柄の装着孔は方形で、下端部から側面にかけては、鉄製の刃先を装着するため端部を尖らせている。

2～4は用途を明確にしえない加工材である。2は下端部が欠落しているため本来の長さは不明だが、現状で長さ23cm、幅2.3cm、厚さ0.6cmを測る。上端の両側面に抉りがあり、上端は方形に削り



第106図 陽徳寺遺跡2区堤部出土漆器梶実測図 (S=1/3)



第107図 陽徳寺遺跡2区堤部出土木製品実測図 (S=1/3)

出されている。類例として松江市・原の前遺跡⁶⁹の平安時代の泥層より同形態の加工材が出土している。3は棒状のもので、先端が錐のように尖っている。長さ24cm、幅1.4cm、厚さ1.5cmを測る。4は両端を欠いており全形は明らかでない。両側面を山形に削っているとみえ、幅2.8cm、厚さ1.3cmを測る。また、直径0.8cm大の貫通孔が3つほど等間隔で開いており、内側は焦げている。

5～10・12は円形曲物である。いずれも円板状の底板である。6・7・12は桜皮を用いて側板を接合しており、うち6・12には桜皮が残っている。5・8～10は木釘の痕跡もないことから、はめ殺し技法が用いられたと思われる。また、6・7・9・10は周縁に側板圧痕が明瞭にみられる。4は他のものに比べて径が大きい。梢円形曲物であろうか。9の周縁の穿孔は、側板をはめた後、さらに木釘で補強した跡にみうけられる。12はほぼ全形が残っている。径約18cm、厚さ0.7cmを測る。

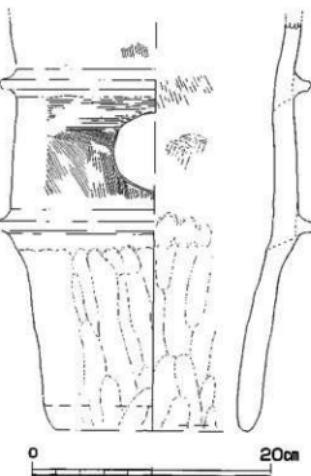
11は大部分欠落しているが、生きている側面が直線をなすことから折敷底板と思われる。側面には打ち込まれた木釘が残存している。

第4節 3区の調査概要

3区は陽徳寺遺跡の南側の丘陵の斜面に位置する。標高にして16～19mを測る。そもそも、2区の堤跡より布目の瓦片がいくつか検出されたことから、付近の斜面に瓦窯跡の存在が考えられ3方にトレチを設定したことによる。東側と北側の斜面からは結局何も検出できなかったが、南側の斜面からは、若干傾斜が平坦になった付近より円筒埴輪片が数点検出されたのであった。横穴墓の可能性を想定し、調査区を範囲ぎりぎりまで拡張したが、遺構らしいものは範囲内では検出できなかった。

この斜面の尾根は現在は開墾によりかなり削平され
ているが、かつて古墳が存在していたのかもしれない。

出土遺物（第108図） 調査区内より円筒埴輪片が
数点検出されたが、接合してみるとほぼ一個体に復元
できた。口縁部を欠くが、復元底径は18cmを測る。調
整は、外表面がタテ方向のハケメの後、ヨコ方向のハ
ケメ、内面はタテ方向のハケメが施されている。底部付
近は、内外面ともタガを指頭圧で押さえ付けた後、そ
のまま指で器体を押さえて底部をつまみ出しているよ
うに見受けられる。古墳時代後期のものであろう。



第108図 陽徳寺遺跡3区
出土円筒埴輪実測図

第5節 総括

1. 1区で検出された基壇状遺構について。

今回の調査により、この谷間の奥には盛土により構築された、基壇状の平坦部があることが確認された。平坦部は後世の開墾等により上方は削平されているが、数十個のピットや2本の溝状遺構が検出されている。これらの遺構は、第2節で論述したように一定の規則性に従い配置されている感があり、この平坦部に何らかの建築物があったことが十分に推測される。ここでは、この建築物の性格について検討してみたい。

この平坦部やその周辺からは様々な遺物が出土しているが、中世から近世にかけての陶磁器類が最も多い。しかしながら、これらの陶磁器類を通常の農村が所有していたとは考え難いといえよう。また、板塔婆など寺院的な遺物も検出されており、この平坦部が大規模な土木工事により構築されている点も併せて、この平坦部にあったであろう建築物は、極めて特殊な性格をもつものであったことが推測されるのである。

1717年成立の『雲樹誌』の能義郡門生の条に次のような記述がある。

常福寺 般宗陽徳山といふ、本尊立像の觀音、開山は末禪和尚なり、寛文九酉歳雲樹寺の臥龍菴を引來て斯所に經營す、往昔邑裡に陽得寺と號る寺あり、頽破して今はなし、故に陽徳をもつて山の號とす、寺は南向にして後は青山高く古樹鬱々たり、前には湖水遠清漣深々たり、境内薬師堂一字あり、

この「常福寺」は現在も安来市門生町の中海の海岸近くに存在しているが、記述をみると、かつてこの地域に「陽得寺」なる寺院が存在しており、寛文9年（1669年）に末禪和尚が雲樹寺の臥龍菴を引來て「常福寺」が開山した頃には「陽得寺」はすでに頽破していたが、「陽徳」をもって「常福寺」の山号としたと記されている（現在でも「常福寺」の正式名称は「臨濟宗妙心寺派 陽徳山常福寺」である）。

注目すべきことに、現在はこの陽徳寺遺跡がある所には、字名として「陽徳」が存在しているのである。また、「常福寺」が開山したのが17世紀後半として、その頃には「陽得寺」はすでに頽破していたとあり、それは平坦部周辺よりそれ以前の14～16世紀代の輸入陶磁器が数多く出土しているとの時期的に一致するといえる。以上のことから、平坦部にあったであろう建築物は「陽得寺」である可能性が極めて高いといえるのではないか。岡化はしていないが、遺跡周辺より五輪塔もいくつか検出されていることも付け加えておく。

陽徳寺遺跡は文献の記述を発掘調査により確認する上で貴重な成果をあげたといえよう。

さて、この平坦部にあった建築物の規模・配置などは、どのようなものであつただろうか。ただ、それらを明確にできるような遺構が検出されていないため、あくまでも仮説として示しておきたい。

平坦部にある遺構は、ピット群とSD01・02の3つである。建物の柱穴であろうピット群は、平坦部の中央付近にかたまって検出されている。しかしこのピット群は一定の方向性は感じられるが、並び方がはっきりしておらず、必ずしも建物の形や規模を示さない。ただ、建築物が寺院であったと考えた場合、

柱を支えるため礎石が使われていたと考えることはできる。「雲陽誌」の記述では、「常福寺」は南向きに建っていたとある。これが立地的なことなのか思想的なことと関係しているのかは不明だが、ここではこの平坦部の建築物も南向きで、礎石が使用されていたと、とりあえず仮定して遺構を見直すことにする。

そこで平坦部の平面図を観察してみると、平坦部の北側が広く空いていることがわかる。まさにこの部分に建築物、つまり寺院の本堂があったのではないだろうか。そのように考えると、このピット群が大型の建築物としての並び方を示さなくとも、門などの付属的な建物の跡として理解することができる。SD01についても、南北方向に平行して伸びていたものが途中で90度折れ曲がるのは、SD01の南側付近に入り口があったこと示しているのかもしれない。

ところで、陽徳寺遺跡の東後方の山頂にある陽徳遺跡からは、平安時代後期の山岳寺院と思われる掘立柱建物群が検出されている。「陽徳寺」を受け継いだ形の「常福寺」も密教系の流れを汲む寺院であることから、陽徳遺跡の山岳寺院と「陽徳寺」との関係が注目される（後述するが、陽徳遺跡に山岳寺院があった頃に、陽徳寺遺跡には堤があったことが明らかである）。

2. 2区・堤跡について

第3節で述べた通り、基壇状平坦部の盛土の下よりは堤跡と思われる水性堆積の上層が確認された。以下、堤の性格や時期について、また堤内からはいくつかの興味深い遺物が検出されているので、そのことについて触れてみたい。

(1) 堤跡の性格・時期について

堤の位置や規模等については、第3節で述べた通りなのでここでは多くを述べないが、黒色粘質土が厚さ最大約2m、長さ45m以上に渡って堆積している様は、やはり広範囲に水が溜まっていたものが序々に埋まっていた痕跡であると考えるのが妥当であろう。ただ、堤とは人工的な堰で出口を閉じたものであるが、そういう痕跡は調査区の範囲内では確認できなかった。しかしながら、このように平野に面した谷間の出口付近に、上記のような規模で自然地形として池が存在していたとするのも、地形的にみて逆に不自然に思えるのである。この谷には水脈があるようで、今でも谷の奥からは水が湧き出ている。近年も谷の奥には堤が造られており、当時も谷を形成している尾根と尾根との間に堰堤が造られていた可能性は十分考慮できよう。

さて、この堤の時期であるが、やはり谷部だけに様々な遺物が混雜していた。土器類をみると、古いものでは弥生土器がみられるが、数は少なく周辺からの流れ込みであろう。ただ、谷の後方の陽徳遺跡や前方の門牛黒谷Ⅲ遺跡からは弥生時代後期の集落跡がみつかっている。谷の両側の尾根上にも弥生期の集落があったことが推測される。円筒埴輪片が出土しているのも、谷の南側斜面から埴輪片が検出されたことと無関係ではないだろう。

その後、遺物は途絶えるが、奈良時代から平安時代にかけて最も量が増える。出土遺物からはまさに辺りの平野部で人々が活動していたような生活臭が感じられ、また布目瓦や、圓化はしていないが鉄鋤なども相当数検出されていることから、周囲で生産活動が活発になったことが伺える。この頃、周辺の人口が増加し、水田などの開発が盛んになり、堤が形成されるに至ったことを示しているのかもしれない。

堤からは陶磁器の類いは検出されておらず、出土土器の形態等から出土遺物の下限は11・12世紀頃と思われ、少なくとも平安時代後期には堤が存在していたといえる。また、後方の陽徳遺跡から検出された同時期の掘立柱建物群との関連は定かでないが、この堤が信仰の対象となっていたことを示すような祭記的な遺物は検出されていない。

この堤が埋まって後、土木工事が行われ基壇状平坦部が構築されたのである。

(2) 出土遺物（黒色土器・教吳寺系軒丸瓦）について

① 黒色土器

堤内より高台付きのものも含めて、黒色土器は6点検出された。これらの黒色土器の時期であるが、当地域は黒色土器生産の希薄な地域で、これまでに国府跡を除き松江市石台遺跡^{出典}・安来市大坪3号墳^{出典}・鹿島町名分塚出遺跡^{出典}の3遺跡より5点が確認されているにすぎない。これらのうち、堤内出土資料と同様の平底無高台の杯形のものは石台遺跡より出土している。森隆氏によると、この形態のものは丹後國に廣く見られ、竹原一彦氏の編年を援用して石台遺跡出土の資料を12世紀代に相当している。堤内出土資料を竹原編年に照らし合わせると、その形態を比べるに石台遺跡のものより1・2段古い様相を呈している。また行台遺跡からは白磁碗や土器類の台付き皿が出土しているが、陽徳寺遺跡堤内からは台付き皿や陶磁器の類いは出土していない。以上のことから、堤内出土資料はおよそ1世紀代と考えるのが妥当といえるのではないか。

② 教吳寺系瓦について

陽徳寺遺跡で出土した軒丸瓦は、いずれも教吳寺跡II b型式のものである。単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、教吳寺跡では瓦当面径16.7cm、径3.5~4.0cmの中房内に1+5の蓮子を置く。中房を画する圓線上には推定9個の珠文を配するが、やや不明瞭なものが多い。輪郭を突線で縁取った蓮弁は、粒状の隆起を持つ独特のもので、弁央の鑄錫と較状の隆起は一体化している。外区は二条の圓線が廻り、それぞれ推定14個の珠文が配される。

教吳寺跡出土瓦と陽徳寺遺跡出土瓦の違いについては、教吳寺跡出土のものは、ほとんどが軟質に焼成され、黒褐色を呈しているが、陽徳寺遺跡出土のものは非常に硬質に焼成され、焼き歪みが見られるものも多い。こうしたことから、陽徳寺遺跡付近には窯跡が存在した可能性が高い。

教吳寺跡II b型式との関係については、教吳寺跡II a型式軒丸瓦は、II b型式の外区の圓線を三重にしたものである。報告書では、主文様に変化が見られないため同范の可能性が高いとされている。^{出典}陽徳寺遺跡では、確認できた軒丸瓦は全てII b型式であり、仮に両者が同范だとしても時間差・工房差が存在した可能性がある。

また、上淀磨寺との関係については、陽徳寺遺跡出土軒丸瓦・丸瓦は全て凹面に模骨状の痕跡を残している。平瓦桶巻き造りのような展開ができるものではないだろうが、桶型を使用して丸瓦を形成していた事が解る。同様の技法は、教吳寺跡では確認されていないが、上淀磨寺I a類軒丸瓦に見られるものであり、上淀磨寺では「癸半年」銘瓦の存在などから、7世紀後半の年代を考えているようである。^{出典}陽徳寺遺跡でみられる教吳寺II b型式ははるかに彫りが深く、突線的な表現である事から上淀磨寺のI a類軒丸瓦から大きく後出するものである。

註

- (1) 文化財課・林健亮の教示を受けた。
- (2) 出土瓦についての報文は、文化財課林健亮の協力を得て、林が実測図・報文原案を作成し、ほぼそのまま掲載した。
- (3) 猿巒山常福寺のご住職である二本牧宗氏のご教示による。
- (4) 田中源 1987「古代・中世における手工業の発達(4)畿内」『日本の考古学Ⅳ歴史時代(上)』
- (5) 註(2)と同じ
- (6) 西尾克巳・間野大丞はか 1995「原の前遺跡」鳥根県教育委員会
- (7) 常福寺11代目の住職である二本牧宗氏によれば、この「常福寺」は建立当初よりお寺の立地場所は基本的に変わっておらず(大正8年に再建されている)。現在はお寺の前方は千拓により埋められていることを除けば、周辺の外観はほぼ記述通りで、当時の様相を忍ばせている。
- (8) 現在、国府跡からの黒色土器の出土についての普及は認められないが、森隆氏(参考文献参照)は、論文の中で、「平安時代以降の土器は、京都産・近江産縁胎陶器を始め概ねの中でも若干紹介されており、今後の整理の進展によっては黒色土器資料の存在が明らかとなる可能性もある」と述べている。
- (9) 片岡詩子 1986「石台遺跡」鳥根県教育委員会
- (10) 鳥根県教育委員会 1976「大坪古墳群」「国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘報告書」I
- (11) 鳥取市教育委員会 1987「名分塚田遺跡」「講武地区営業開拓整備事業発掘調査報告書3」
- (12) 註(2)と同じ
- (13) 安来市教育委員会 1995「教吳守」
- (14) 渋江町教育委員会 1995「古代日本海(東洋)交流シンポジウム資料」

参考文献

- 深田浩・丹羽野裕はか 1995「藤原遺跡・平良I遺跡」鳥根県教育委員会
- 丹羽野裕・岩橋孝典・深田浩はか 1994「石山遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡」鳥根県教育委員会
- 鳥根県教育委員会 1990「タテチヨウ遺跡発掘調査報告書」Ⅲ
- 広江耕史 1992「鳥根県における中世土器について」「松江考古」8
- 内田律雄・丹羽野裕 1984「富田川」鳥根県教育委員会
- 横田賢次郎・森勉 1978「大宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」「九州歴史資料館研究論集」4 九州歴史資料館
- 大谷晃二 1991「出雲地域の須恵器の編年と地域色」「鳥根県考古学会誌」第8集
- 森隆 1990「西日本の黒色土器生産」上・中・下『考古学研究』第37卷第2~4号考古学研究会

図 版

数字は図面の番号に対応

図版1 (徳見津遺跡)



1. 徳見津遺跡III・IV区全景



2. 徳見津遺跡III区全景（東より）



3. 徳見津遺跡IV区全景

図版2（徳見津遺跡）



4. 徳見津遺跡Ⅰ区全景（南より）



5. Ⅱ区SK01（北より）



6. Ⅱ区SD01・02（東より）



7. II区SK02・SD03断面
(南より)



8. II区SK02・SD03
(南より)



9. II区SD03遺物出土状況

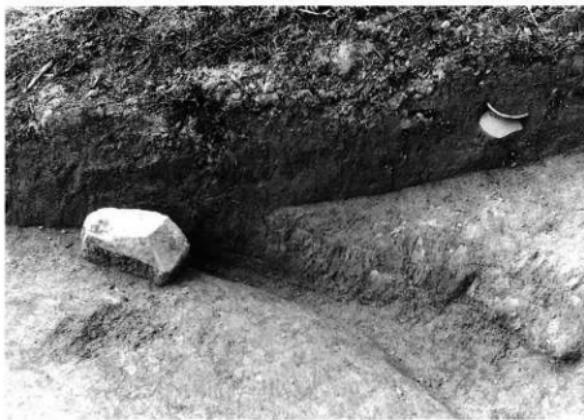
図版4 (徳見津遺跡)



10. III区全景（山頂より）



11. III区S 101 (北より)



12. III区S 101床面石



13. III区S101東西セクション



14. III区S101遺物出土状況



15. III区SK03遺物出土状況

図版6 (徳見津遺跡)



16. III区S102 (北より)



17. III区S102東西セクション



18. III区S102南北セクション



19. III区SD06N全景(南より)



20. III区SD06Nセクション

圖版8 (德見津遺跡)



21. III区第1加工段鍛冶炉上遺物出土状況



22. III区第1加工段遺物出土状況



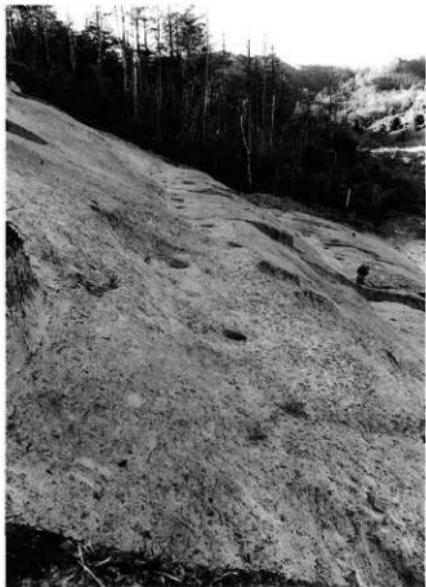
23. III区第1加工段鍛冶造構



図版10 (徳見津遺跡)



27. IV区第2加工段（南より）



28. IV区第2加工段（北より）



29. IV区第2加工段SB06
セクション



30. IV区第2加工段SB03
セクション



31. IV区第2加工段SB05
遺物出土状況

図版12 (徳見津遺跡)



32. IV区SK07遺物出土状況



33. IV区第3加工段第2平坦面



34. IV区第2平坦面セクション



35. IV区第3加工段SB08
(南より)



36. IV区第4加工段第3平坦面
セクション



37. IV区第4加工段第5平坦面
セクション

図版14 (徳見津遺跡)



38. IV区第4加工段 S B09



39. IV区第4加工段 S K09



40. IV区第4加工段 S K09
遺物出土状況



41. IV区第4加工段SK09
遺物出土状況



42. 徳見津遺跡全貌 (西より)



43. 調査参加者 (復元住居の前にて)

図版16 (徳見津遺跡)



3-3



2



5



6



7



10-17

3図



10-8



10-18



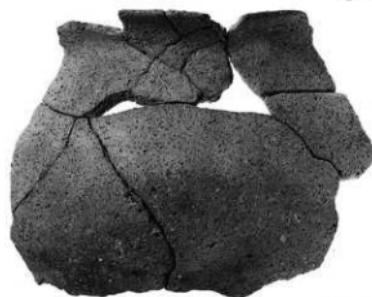
10-9



10-10



10-25



10-26

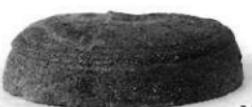


11-33

I 区出土遺物・II区 S D03出土遺物



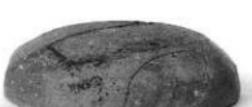
11-29



11-30



11-31



11-35



11-38



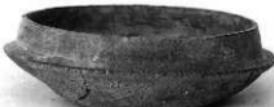
11-42



11-47



11-48



11-49



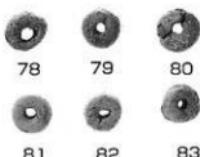
12-63



13-88



13-93



13図

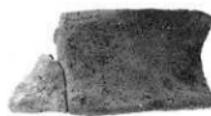
12-65



62

70

11-55



71

72

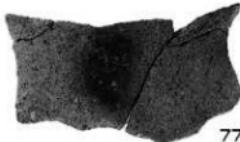


11-56



74

75



76

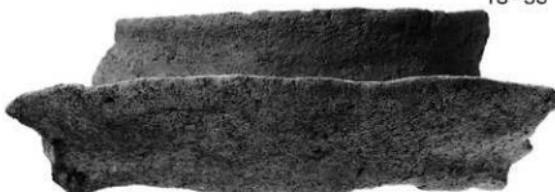
77



13-85

12図

13-96



13-86

II区包含層出土遺物



16-103



16-99



16-105



16-104



16-110



16-111



17-113



35-253



17-114

図版20 (徳見津遺跡)



21-115



22-133



22-135



22-138



22-139



22-144



21-120



21-121



21-122



21-123



21-124



21-132



22-145



22-148



21-125



22-152



21-126



21-127



22-154



22-155

図版22 (徳見津遺跡)



25-157



25-128



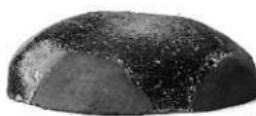
25-161



26-167



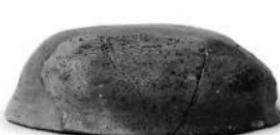
26-168



26-169



26-171



26-172



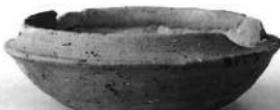
26-176



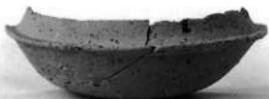
26-186



26-188



26-191



25-159



25-160



26-173



26-174



26-189



26-179



25-164



25-165



25-162



26-192

図版24 (徳見津遺跡)



31-194



31-196



31-197



31-199



31-201



31-202



31-203



31-204



31-205



31-206



31-207



31-209

III区第1加工段出土遺物

鍛造剝片



4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6

31-126



31-211



26-184



31-217



21-130



31-210



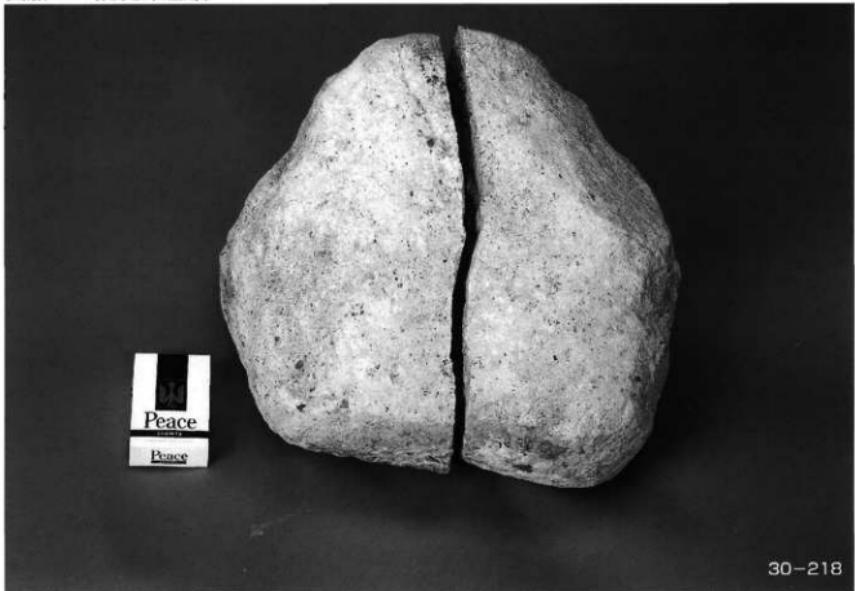
21-129



31-212



31-215



III区第1加工段 鋳冶遺構 金床石



32-223



32-229



32-230



32-231



32-221



32-232



32-227



32-245



Ⅲ区包含層



Ⅲ区包含層

Ⅲ区包含層出土遺物



36-246



35-248



36-247



35-249



35-250



39-255



39-256



39-257



39-258



37-254



39-257・258



42-261



42-262



42-260



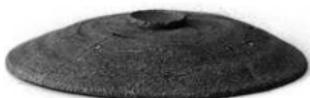
43-263



43-264



45-271



45-272



45-275



45-277



45-273

IV区SK07・第1・第2・平坦面出土遺物

図版30 (徳見津遺跡)



47-279



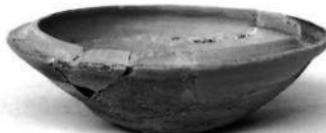
47-281



47-282



49-286



49-287



50-296



50-298



49-290



49-288



49-292

IV区SB08・第3平坦面出土遺物



50-294



50-297



53-307



52-304



52-302



52-305



52-303



54-313



53-310



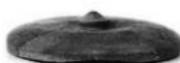
54-321

IV区第3・4・5平坦面出土遺物

図版32 (徳見津遺跡)



57-327



57-328



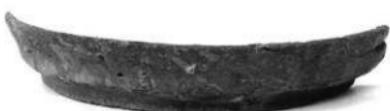
57-329



57-339



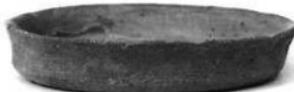
57-354



57-356



57-360



58-362



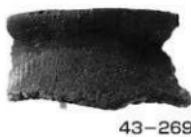
58-375

IV区S B09付近出土遺物



58-376

図版33 (徳見津遺跡)



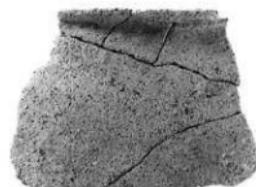
43-269



45-278



47-283



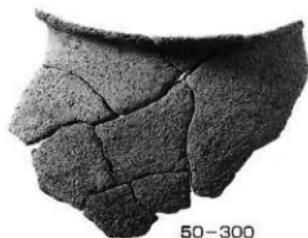
49-291



53-312



59-377



50-300



52-306



379



381



378



380

図版34 (徳見津遺跡)



62-394



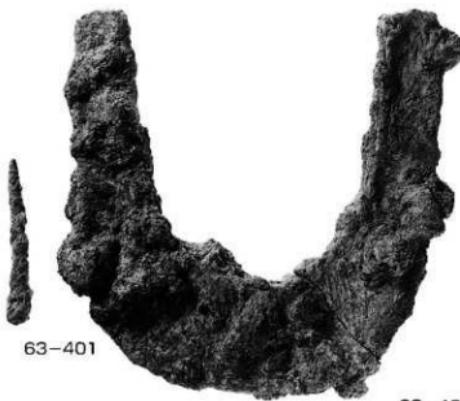
62-395



62-397



62-396



63-401

63-400



62-398



323



324



326



325



390



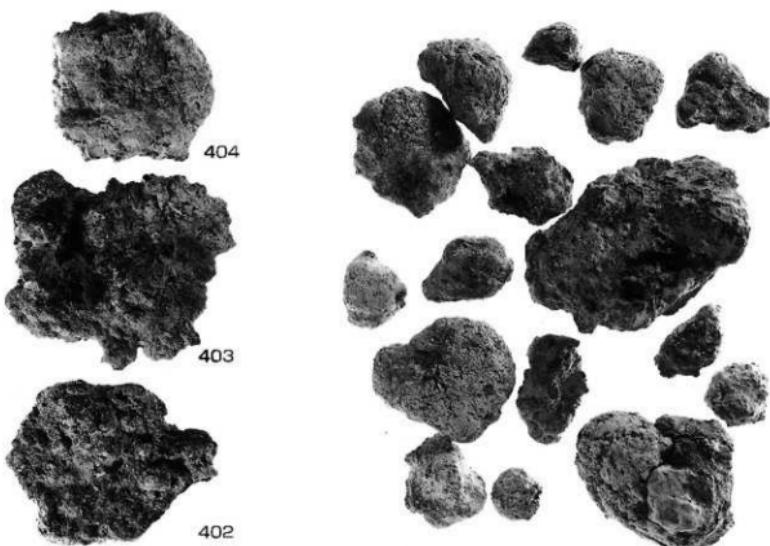
391



393



392



64図



53-311
III・IV区出土鐵滓・IV区内出土遺物



59-388

図版36 (目廻遺跡)



1. 目廻遺跡調査前状況



2. 目廻遺跡SK01木棺痕跡



3. 目廻遺跡SK01セクション